佐賀県文化財調査報告書第53集

# 柏崎遺跡群

―― 唐津市柏崎所在 ――

昭和55年3月

佐賀県教育委員会

# 柏崎遺跡群

——唐津市柏崎所在——

昭和55年3月

佐賀県教育委員会

# はじめに

この調査報告書は、佐賀県農業基盤整備事業の施行に先がけて、昭和53年度国庫補助金を得て実施した文化財確認調査の記録であります。

第II部に、弥生中期の生活址である14ヶ所の竪穴土壙（土器溜）、広峰銅鉾の鋳型等を出土した大深田遺跡をまとめ、第III部に、縄文晩期から弥生初頭にかけての土器片、木製品を出土した溝状遺構、弥生中期から後期前葉にかけての甕棺群、住居址等を確認した田島遺跡をまとめました。第IV部で、古くから学界に注目されてきた石蔵貝塚、第V部で、古墳時代の祭祀址、製塩土器等を出土した土井崎遺跡についてまとめました。このことは古代松浦の文化解明に資するものがあろうと考えます。その意味からも、本報告書がより多くの方々に御活用いただけるよう希望します。

尚、調査に関して、文化庁、県農林部をはじめ関係機関の御協力をいただき、ここに厚くお礼申し上げるとともに、本報告書の刊行にあたり、調査、整理および執筆を担当された方々の労を多といたします。

昭和55年3月31日

佐賀県教育委員会
教育長　古　藤　　浩

# 農業基盤整備事業に係る文化財調査

もくじ

1．発掘調査委員会……（2）
2．発掘調査の経過……（2）

# 佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査

## 1．発掘調査委員会

(ア) 委　員

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 古藤　浩 | 佐賀県教育委員会教育長 |
| 委　員 | 鏡山　猛 | 佐賀県文化財保護審議会委員 |
| 〃 | 木下　之治 | 〃 |
| 〃 | 岡崎　敬 | 〃 |
| 〃 | 小田富士雄 | 〃 |

(イ) 事務局

| | | | |
|---|---|---|---|
| 局　長 | 田中寿義雄 | 佐賀県教育庁文化課課長 | |
| 次　長 | 川久保松広 | 〃 | 課長補佐 |
| 庶　務 | 片渕　正美 | 〃 | 庶務係長 |
| 会　計 | 野口　茂実 | 〃 | 庶務係 |
| 〃 | 井崎　憲二 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 森　由紀子 | 〃 | 〃 |

(ウ) 発掘調査員

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査主任 | 木下　巧 | 佐賀県教育庁文化課文化財調査第二係長 | |
| 調査員 | 中島　弘之 | 〃 | 第二係 |
| 〃 | 堀川　義英 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 天本　洋一 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 七田　忠昭 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 岩永　政博 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 川崎　吉剛 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 西田　和己 | 〃 | 〃 |

協　力　文化庁、県農林部、各農林事務所、九州農政局上場農業水利事業所、関係市町村教育委員会及び開発課、各土地改良区

## 2．発掘調査の経過

農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の調査は、文化財調査第二係が担当している。

昭和54年度における農業基盤整備事業は県営、団体営の圃場整備事業や上場地帯（唐津市、東松浦郡一帯）で取り組まれている国営の総合かんがい排水事業、県営の畑地帯総合土地改良事業など、約 2,000haにも及んでいる。これらの事業によって予想される埋蔵文化財の破壊を

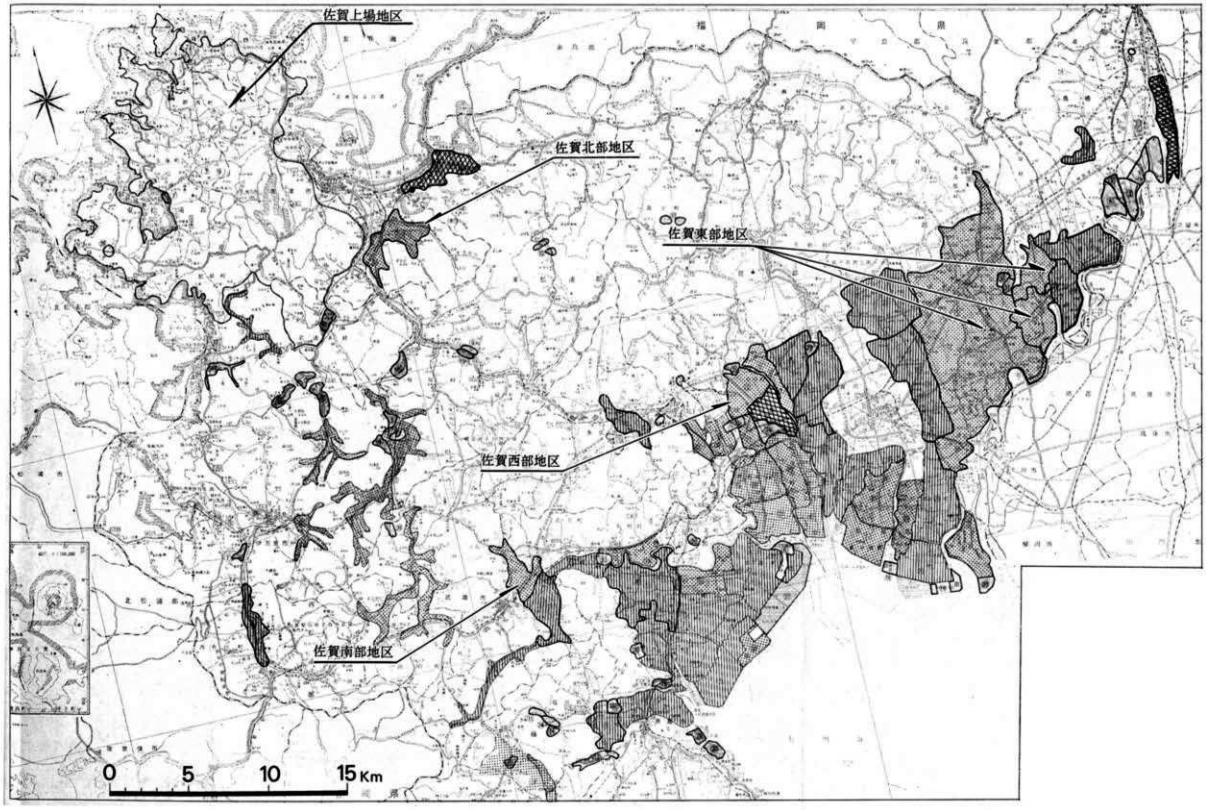
未然に防ぐため、県教育委員会は事業に先立って予備調査を実施してきた。その結果、遺跡等が確認された場合は、遺跡等の現状保存を原則とし、農林部と協議し、当該事業の設計、工事上やむを得ない部分については発掘調査を実施してきた。調査の概要は次の表の通りである。

## 昭和54年度埋蔵文化財確認調査一覧

| 地区名 | 面積 | 調査年月 | 担当者 | 結果 |
|---|---|---|---|---|
| 神埼町竹 | 40ha | 昭和54年11月 | 七田 忠昭 | 中世の集落址を確認 |
| 神埼町尾崎 | 76ha | 昭和54年11月 | 七田 忠昭 | 中世～近世の集落址を確認 |
| 神埼町朝日 | 20ha | 昭和54年11月 | 七田 忠昭 | 縄文～弥生の埋葬址を確認 |
| 神埼町野田・川寄・利田 | 5,500㎡ | 昭和54年4月～5月・8月～3月 | 岩永政博、川崎吉剛、天本洋一、西田和己、中島弘之 | 弥生時代の集落址・甕棺墓 |
| 東脊振村松ノ森 | 5,000㎡ | 昭和54年7月～55年2月 | 岩永政博、川崎吉剛、西田和己、中島弘之 | 弥生時代～古墳時代の住居址 |
| 東脊振村 | 60ha | 昭和54年4月・11月～12月 | 岩永 政博<br>七田 忠昭 | 弥生時代の集落址・古墳一基と中世の集落址を確認 |
| 三根町蔵江 他 | 93ha | 昭和54年10月～11月 | 天本 洋一 | 1,500㎡にわたり中世の集落址を確認 |
| 千代田町崎村他 | 116ha | 昭和54年11月 | 西田 和己 | 3,000㎡にわたり古墳時代の集落址を確認 |
| 千代田町崎村三本黒木 | 2,000㎡ | 昭和54年7月～8月 | 七田 忠昭<br>西田 和己 | 中世の集落址 |
| 三田川町鳥野隈 他 | 54ha | 昭和54年11月 | 天本 洋一 | 鳥野隈地区で12,900㎡にわたり弥生～中世の集落址を確認 |
| 大和町 | 68ha | 昭和54年4月 | 木下 巧 | 30,000㎡にわたり弥生時代の集落址を確認 |
| 三日月町袴田 | 3,500㎡ | 昭和54年7月～9月 | 木下 巧 | 弥生時代～古墳時代の住居址 |
| 三日月町本告 | 1,000㎡ | 昭和54年9月 | 木下 巧 | 弥生時代中期の甕棺墓 |
| 三日月町 | 89ha | 昭和54年11月～12月 | 木下 巧 | 弥生時代の集落址を確認 |
| 三日月町本告 | 1,500㎡ | 昭和55年2月～3月 | 中島 弘之 | 弥生時代の甕棺墓・土壙墓 |
| 小城町松尾他 | 11ha | 昭和54年12月 | 木下 巧 | 松尾地区で25,000㎡にわたり中世の集落址を確認 |

| 地区名 | 面積 | 調査年月 | 担当者 | 結果 |
|---|---|---|---|---|
| 芦刈町小路 | 1,500㎡ | 昭和54年9月～10月 | 七田 忠昭<br>川崎 吉剛<br>西田 和己 | 中世～近世の集落址 |
| 白石町馬洗他 | 47ha | 昭和54年11月 | 七田 忠昭<br>西田 和己 | 1,500㎡にわたり中世～近世館址を確認 |
| 有明町 | 85ha | 昭和54年11月 | 七田 忠昭<br>西田 和己 | 遺構等確認されず |
| 西有田町 | 40ha | 昭和54年7月・11月 | 岩永 政博 | 遺構等確認されず |
| 南波多村 | 30ha | 昭和54年11月 | 岩永 政博 | 遺構等確認されず |
| 山内町 | 20ha | 昭和54年11月 | 七田 忠昭<br>西田 和己 | 遺構等確認されず |
| 武雄市 | 35ha | 昭和54年11月 | 七田 忠昭<br>西田 和己 | 遺構等確認されず |
| 伊万里市上伊万里 | 17ha | 昭和54年11月 | 岩永 政博 | 遺構等確認されず |
| 唐津市久里釘山 | 500㎡ | 昭和54年10月 | 木下 巧 | 古墳時代の住居址 |
| 唐津市中原 | 50ha | 昭和54年11月 | 木下 巧 | 遺構等確認されず |
| 唐津市、肥前・玄海・鎮西町 | 216ha | (踏査)〃4月 | 堀川 義英 | 先土器時代・縄文時代・弥生時代の散布地を確認 |
| 唐津市山田 | 26,200㎡ | 昭和54年4月～5月 | 堀川 義英 | 先土器時代の包含層を確認 |
| 唐津市神田 | 3,000㎡ | 昭和54年5月～6月 | 堀川 義英 | 弥生時代中期の住居址を確認 |
| 肥前町八斗蒔 | 24,000㎡ | 昭和54年5月～6月 | 堀川 義英 | 先土器時代の包含層を確認 |
| 玄海町普恩寺 | 50,800㎡ | 昭和54年7月 | 堀川 義英<br>天本 洋一 | 縄文時代前期～後期の包含層を確認 |
| 肥前町八斗蒔川原田 | 300㎡ | 昭和54年7月 | 堀川 義英<br>川崎 吉剛<br>西田 和己 | 先土器時代の包含層を確認 |
| 唐津市、肥前・鎮西・呼子・北波多村 | 506ha | (踏査)〃7月・9月～10月 | 堀川 義英 | 先土器・縄文・弥生・古墳時代の遺物散布地を確認 |
| 北波多村山彦他 | 33ha | 昭和54年11月・55年1月 | 岩永 政博 | 古墳時代～中世の集落址を確認 |
| 肥前町入野他 | 25ha | 昭和54年10月～12月 | 堀川 義英 | 先土器時代～縄文時代の包含層を確認 |
| 唐津市梨川内他 | 16ha | 昭和54年12月～55年1月 | 堀川 義英 | 先土器時代～弥生時代の包含層を確認 |

農業基盤整備事業に係る文化財確認調査位置図



# 柏崎遺跡群

## 総もくじ

第Ⅰ部　発掘調査の経過…… 1

第Ⅱ部　柏崎大深田遺跡…… 7

第Ⅲ部　田島遺跡…… 65

第Ⅳ部　石蔵貝塚遺跡……105

第Ⅴ部　土井崎遺跡……115

第Ⅵ部　まとめ……121

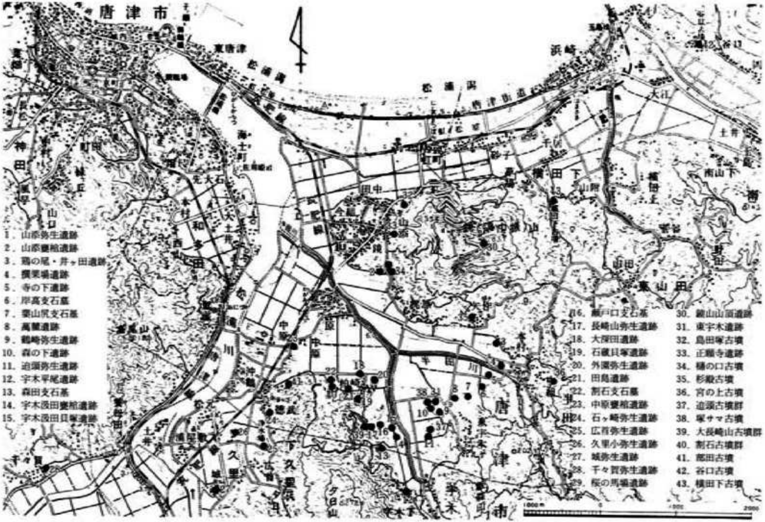
図　　版……123

# 第 I 部

# 発掘調査の経過

もくじ

(1) 歴史と環境……3
(2) 発掘調査の経過……4
1）過去における柏崎遺跡の調査
2）発掘調査の経過
3）発掘調査団



唐津市
松浦潟
東山田
1．山添弥生遺跡
2．山添甕棺遺跡
3．鶏の尾・井ヶ田遺跡
4．撰実場遺跡
5．寺の下遺跡
6．岸高支石墓
7．葉山尻支石墓
8．萬麓遺跡
9．鶴崎弥生遺跡
10．森の下遺跡
11．迫頭弥生遺跡
12．宇木平尾遺跡
13．森田支石墓
14．宇木汲田甕棺遺跡
15．宇木汲田貝塚遺跡
16．瀬戸口支石墓
17．長崎山弥生遺跡
18．大深田遺跡
19．石蔵貝塚遺跡
20．外園弥生遺跡
21．田島遺跡
22．割石支石墓
23．中原甕棺遺跡
24．石ヶ崎弥生遺跡
25．広石弥生遺跡
26．久里小弥生遺跡
27．城弥生遺跡
28．千々賀弥生遺跡
29．桜の馬場遺跡
30．鏡山山頂遺跡
31．東宇木遺跡
32．島田塚古墳
33．正願寺遺跡
34．樋の口古墳
35．杉殿古墳
36．宮の上古墳
37．迫頭古墳群
38．塚サマ古墳
39．大長崎山古墳群
40．割石古墳群
41．熊田古墳
42．谷口古墳
43．横田下古墳


唐津東部の遺跡分布図

### (1) 歴史と環境

唐津、東松浦地方は古来より大陸文化の流入地として注目されてきた所である。

魏志倭人伝には『倭人、帯方の東南大海の中にあり…旧百余国あり…始めて一海を渡ること千余里で対馬国に至る…又海に一海を渡ること千余里……一大国に至る…「又一海を渡る千余里、末盧国に至る。四千余戸有り。山海に浜うて居る。草木茂盛し、行くに前なる人を見ず。好んで魚鰒を捕え、水は深浅となく、皆沈没してこれを捕る」東南陸行五百里にして伊都国に到る』と記されていて、3世紀頃における（唐津湾周辺にあったと推定される）末盧国の様子を伝えている。

松浦川を中心として形成された沖積地である狭小な唐津平野の東部に、柏崎・宇木地区は位置する。松浦川に注ぐ半田川・宇木川は東部沖積地を貫流する。北は鏡山、東・南は作礼山系の三方山、夕日山が囲み、北西部は玄海灘海岸に砂嘴が張り出す。松浦川左岸には上場台地がせまる。玄武岩の噴出により形成された上場台地は 150m から 200m 位の準高原状を呈する。上場地方一帯には先土器から縄文時代にかけての遺跡が点在する。宇木川・半田川流域には縄文晩期から弥生中期にかけての遺跡が密集している。縄文晩期には松浦川底、宇木鶴崎遺跡などがある。弥生時代になると、半田地区の河内・岸高支石墓・葉山尻支石墓・矢作鶏尾遺跡・宇木地区の万徳・鶴崎・迫頭・森の下・平尾・瀬戸口・汲田・柏崎・中原・山添遺跡などがある。青銅器を共伴する遺跡が多いことや支石墓の多い例は、大陸との強い結びつきを物語っているといえよう。古墳時代に入ると、前期の葉山尻3号墳、迫頭1・3・5号墳、小長崎古墳、割石古墳等がある。中期には、樋の口古墳、杉殿古墳、迫頭7～14号墳、大長崎古墳群、井手口1号墳等が挙げられる。後期になると、島田塚（前方後円墳）、鬼五郎塚、宮の上古墳、葉山尻1・2号墳、ツカマサ古墳、瀬戸口1・2号墳、石蔵古墳、外園古墳、西浦古墳、小振塚、部田古墳等がある。東宇木、寺の下、森の下遺跡等の住居址は調査されている。

末盧国は奈良時代には松浦郡となり、平安時代には松浦荘と呼ばれた。肥前風土記松浦郡の条に「松浦郡、郷一拾一所、里廿六、駅伍所、烽捌所」とある。奈良時代の海岸線は鏡今村、原、中原、徳武、久里松の元を結ぶ線と推定される。条里制の遺構である坪地番は、鏡「七の坪」、原「八の坪」、「三の久」、柏崎「二の股（間）」、宇木「四の坪」「五の坪」「八の坪」等、半田「八の坪」、久里「口の坪」等の遺名が残っている。

今回調査した柏崎遺跡群はこの一角を占めているのである。

参考文献

木下　巧　「東宇木遺跡」佐賀県教育委員会　1967．3

松岡　史　「唐津市史・第二編」唐津市　1962．8

### (2) 発掘調査の経過

1）過去における柏崎遺跡の調査

唐津東松浦地方で弥生文化の中心は、松浦川、宇木川、半田川流域であろう。ことにその要衝は柏崎周辺で、魏志倭人伝にある『末盧国』は、このあたりではないかと、従来より言われてきた。青銅器、支石墓、柏崎式土器等の発見で、大陸文化の上陸地として古来より考古学界に注目されてきた所である。(1)

現在までの研究史の概略を挙げてみたい。吉村茂三郎氏は昭和5年久里4ヶ所の貝塚を紹介している。(2)現在石蔵貝塚と呼ばれているのはその第1貝塚で、貝塚の範囲は南北2間半、東西不明で、貝層の厚さ3尺。円壇土器（筒形器台）や土器の破片を発見。〈第2貝塚〉（字田島）、東西約7間、南北約6間で、厚さ約4尺の貝殻層。野猪の顎骨、鹿の角、赤貝、蛤、牡蠣等出土。〈第3貝塚〉（字田島）、第2貝塚と連絡している。〈第4貝塚〉（字木苗）、人骨を発掘。この4ヶ所一帯より土器の破片、石斧、石棒、滑石等多数が発見されている。

同じく昭和5年11月に森本六爾氏は、(3)石蔵の合口甕棺より発見された細形銅剣一口、有袋剣鉾二口、勾玉二個を紹介している。この中で茎部に造付けの柄を有する銅剣は、それがシベリアの発見品にある「触角式」柄に似ていることに注目し、中国製であろうと推定されている。

龍渓顕亮氏は、(4)柏崎貝塚が昭和3年5月6日に耕地整理中に発見したこと、昭和9年8月の再調査で、無文有文土器片、石斧、獣骨等が出土したことを紹介している。氏の採集された「柏崎式土器」の提唱を受けて、この土器究明の調査が昭和26年8月に、九州文化総合研究所、九州考古学会、日本考古学協会、県教育庁の4者で実施された。(5)この結果、下層より夜臼式土器、金海式甕棺、遠賀川式の土器、蛤刃石斧、有柄石鏃、扁平片刃石斧等、上層より須玖式甕、壺等が出土した。柏崎式土器の解明は持ち越されたが、遠賀川式と須玖式の二様式が層位的に把握できたこと、磨製石器が前期の段階で出現すること、埋葬の仕方などの成果があった。

昭和31年4月に小長崎山古墳の調査が「唐津湾周辺の古代文化の考古学的総合調査団」によって行なわれた。一号墳は二体の差違い合葬であり、小形無文鏡・丁字頭勾玉・管玉・刀子等が出土した。二号墳からは鉇・鉄剣等が出土している。古墳前期後葉の造営であることが確認された。(6)

昭和37年に松岡史氏は長崎山、石蔵、外園、田島の柏崎遺跡群と、割石遺跡について集約されている。(7)

昭和40年に宇木汲田、中原甕棺遺跡とともに柏崎貝塚が日仏合同により調査されて、より確実に把握された。貝層は、Ⅴ層の黒色土にあり、亀の甲式土器や金海式土器を含む板付Ⅱb式土器層であることが判明している。(8)

以上のように50年もの間調査研究が進められ、古代日本の解明に寄与した遺跡である。

2）発掘調査の経過

県北部の農業基盤整備事業の施行に先立って、昭和49年、53年4月に実施した予備調査により確認された埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

(A) 大深田遺跡（約 5,600㎡）　昭和53年5月25日～7月10日　西区の調査
　　〃　7月11日～8月10日　東区の調査
　　〃　11月7日～12月26日　南区の調査

(B) 田島遺跡　（約 2,370㎡）　昭和53年12月8日～54年2月7日

(C) 石蔵貝塚　（約20㎡）　昭和54年1月19日～1月24日

(D) 土井崎遺跡（約 300㎡）　昭和53年5月30日～6月5日

3）発掘調査団

担　当　佐賀県教育委員会

事務局　佐賀県教育庁文化課

調査主任　木下　巧　県教育庁文化課文化財調査第二係長

調査員　堀川義英　県教育庁文化課文化財調査第二係

調査補助　田島龍太　県教育庁文化課文化財調査第二係補助員

協　力　富樫憲次氏、河児哲司氏、唐津市教育委員会、県農林部、唐津農林事務所、柏崎区長市丸善信氏他区民の方多数、笠原建設

〈註〉

(1) 松尾禎作「佐賀県考古大観」（先史・原史時代編）祐徳博物館　1957.2

(2) 吉村茂三郎「佐賀県史蹟報告・久里貝塚・第二輯」1930.3

(3) 森本六爾「肥前松浦潟地方に於ける甕棺遺跡とその伴出遺物」考古学1巻5・6号　1930

(4) 龍渓顕亮「金石併用期における唐津地方の遺跡と遺物」松浦史料第1輯松浦史談会　1939

(5) 鏡山　猛「柏崎貝塚調査概報」佐賀県文化財調査報告書第1輯　1952

(6) 松岡　史「唐津市史」唐津市史編纂委員会　1962

(7) (6)と同じ

(8) 九州大学文学部考古学研究室「北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査」1966.

# 第 Ⅱ 部

# 大 深 田 遺 跡

唐津市柏崎字大深田1381、1383番地、字外園1311～1333番地所在

もくじ


Ⅰ　大深田遺跡の概要……8

Ⅱ　大深田遺跡の土層……17

Ⅲ　遺構と遺物……17

1．遺　構……17

2．遺　物……27

(1)　土器・土製品……27

1)夜臼・板付式土器

2)弥生前期末・中期・後期の土器、土製品

3)土　師　器

(2)　石器・石製品……52

(3)　装身具……59

# 挿図もくじ


第1図　柏崎遺跡群の分布図……9
第2図　大深田遺跡西区遺構配置図……11
第3図　大深田遺跡東区遺構配置図……13
第4図　大深田遺跡南区遺構配置図……15
第5図　大深田遺跡西区土層断面図……17
第6図　第1号竪穴……18
第7図　第2号竪穴……19
第8図　第3号竪穴……19
第9図　第4号竪穴……20
第10図　第5号竪穴……20
第11図　第6号竪穴……21
第12図　第7号竪穴……21
第13図　第8号竪穴……22
第14図　第7号土壙……24
第15図　第30号土壙……24
第16図　第126号土壙……25
第17図　第129号土壙……25
第18図　第1号柵列……27
第19図　夜臼・板付式土器実測図(1)……28
第20図　夜臼・板付式土器実測図(2)……29
第21図　夜臼・板付式土器実測図(3)……30
第22図　夜臼・板付式土器実測図(4)……31
第23図　小形甕形土器実測図(1)……34
第24図　小形甕形土器実測図(2)……35
第25図　大型甕形土器実測図……38
第26図　壺形土器実測図……39
第27図　鉢形土器実測図……41
第28図　高坏形土器実測図……43
第29図　蓋形土器実測図……45
第30図　器台形土器実測図……47
第31図　筒形器台実測図……49
第32図　支脚形土製品実測図……50
第33図　土製品・土師器実測図……51
第34図　打製石鏃・磨製鏃・石錐実測図…53
第35図　掻器・管玉・其の他実測図……58
第36図　銅鉇鋳型実測図……59
第37図　銅鉇鋳型模式図……59
第38図　石庖丁・石錘・石剣・石戈実測図……60
第39図　石斧実測図……61
第40図　凹石・磨石実測図……62
第41図　砥石・其の他実測図……63

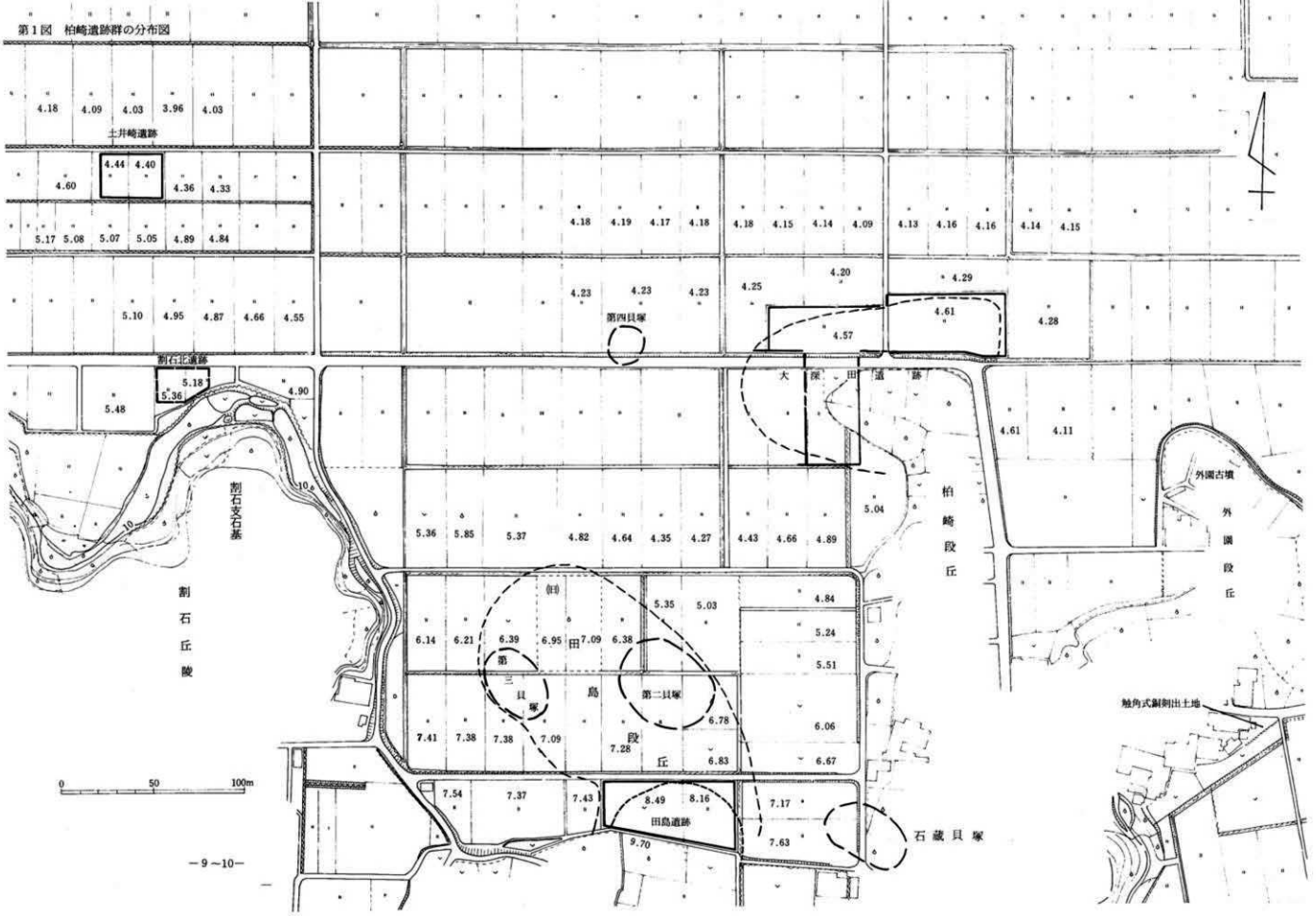

# 図表もくじ


第1表　打製石鏃一覧表……54
第2表　掻器一覧表……56
第3表　石錐一覧表……56
第4表　石斧一覧表……56
第5表　凹石・磨石一覧表……57

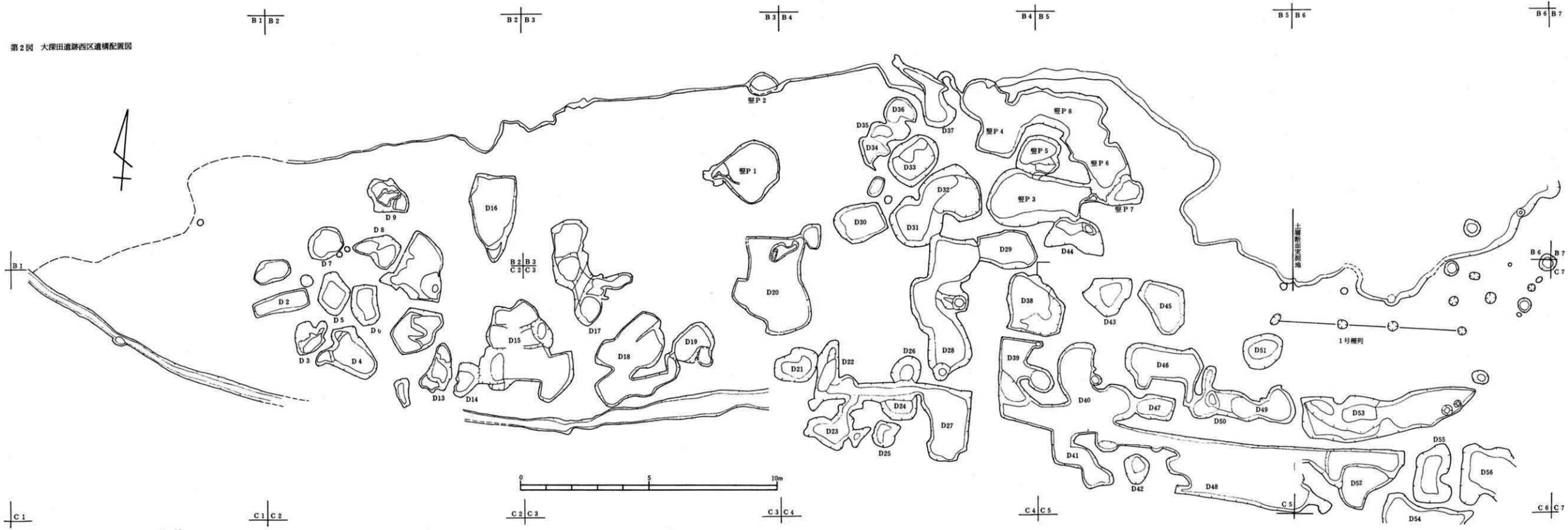

## Ⅰ．大深田遺跡の概要

夕日山（海抜 272.9m）北麓の低丘陵上に柏崎部落はあり、この低丘陵は舌状段丘として北方になだらかに延びる。この段丘の最先端部の4～5m等高線に大深田遺跡は位置する。この段丘の東北西の三方には圃場が広がる。遺跡の東 300m に宇木川、北 600m に半田川が北流する。大深田遺跡は柏崎遺跡群の北辺中央部を占め、弥生時代は河川の流域沿いに位置していた

第1図　柏崎遺跡群の分布図

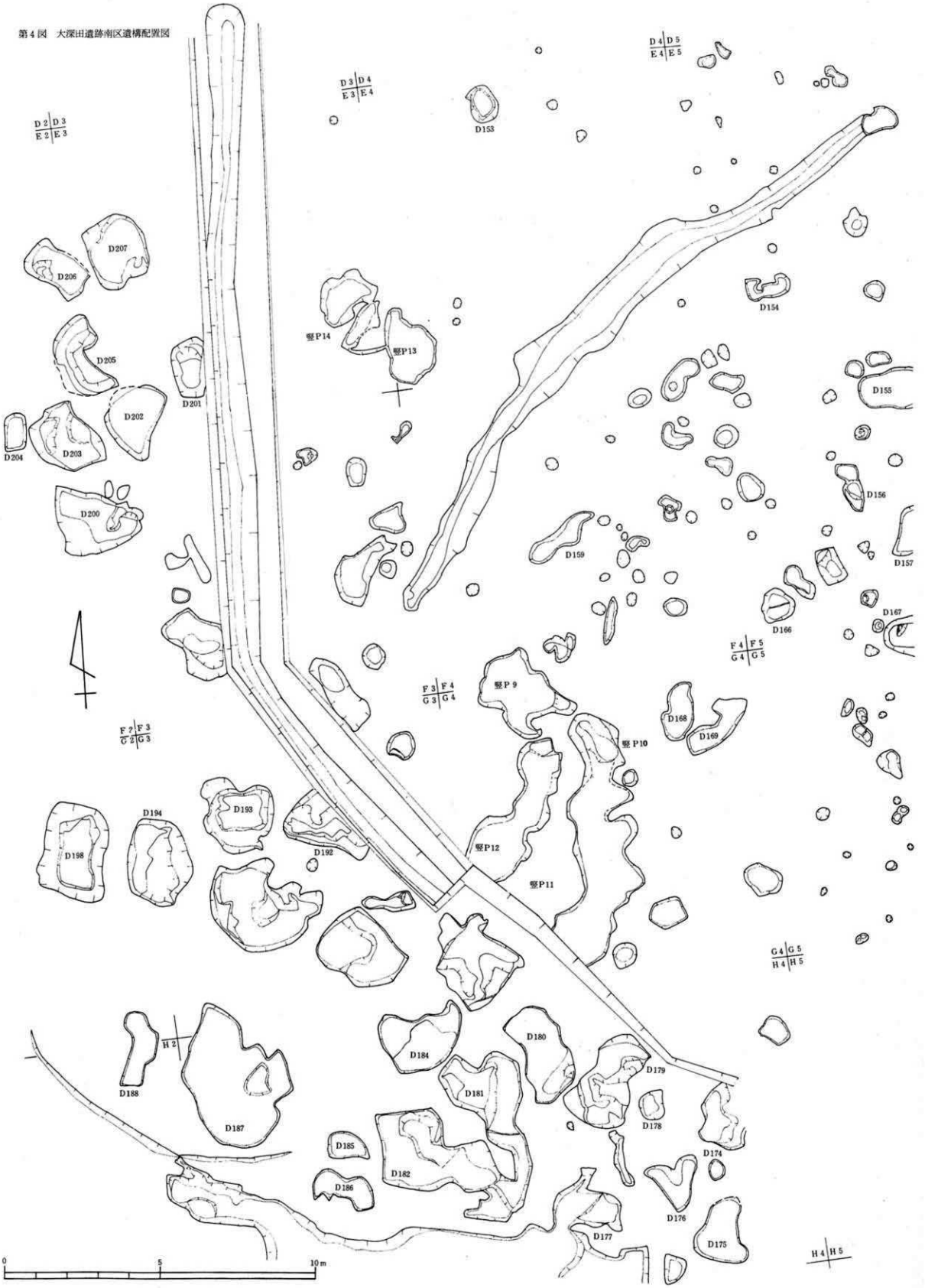


第２図　大深田遺跡西区遺構配置図



第３図　大深田遺跡東区遺構配置図

第4図　大深田遺跡南区遺構配置図



と推定される。昭和５年の耕地整理で破壊した「久里第４貝塚」は、大深田遺跡の西約 100m 付近にあったものと思われる。

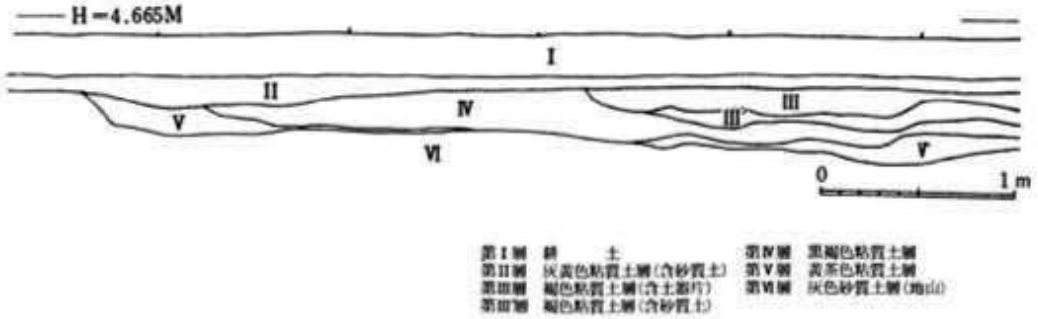
大深田遺跡は、従来より遺物の表採は行われていたが注目されることなく今日に至っている。昭和49年度の圃場整備事業に伴う文化財予備調査で遺跡の範囲が確認され、今回の調査を実施した。今回の調査で、竪穴住居址、貝塚は検出できなかったが、段丘周縁の生活跡、14基の土器溜（竪穴遺構）を中心とするピット群を検出した。最も繁栄していたのは弥生中期であったことが推察されるが、先土器時代から古墳時代に至る生活の舞台であったことも確認された。

予備調査の結果、割石丘陵の北側直下の水田より高杯、鉢形土器等の土師器が出土し、古墳時代初頭の祭祀遺跡であることを確認したが、農林部との協議で埋土保存にした。

## Ⅱ　大深田遺跡の土層

大深田遺跡中央部の土層（南北線）は第５図の通りである。遺構は第Ⅵ層の灰色砂質土層（地山）に掘り込まれている。広い範囲にわたってⅥ層は耕地整理等で削平されていた。Ⅱ層からⅥ層へ落ち込んでいるラインが川沼との汀線だったと推定される。Ⅳ層に土師器の土壙が検出されたことから、Ⅴ層とⅣ層は短期間のうちに埋土したと考えられる。汀線外のⅤ層下Ⅵ層からは遺構の確認はされなかった。

第５図　大深田西区土層断面図



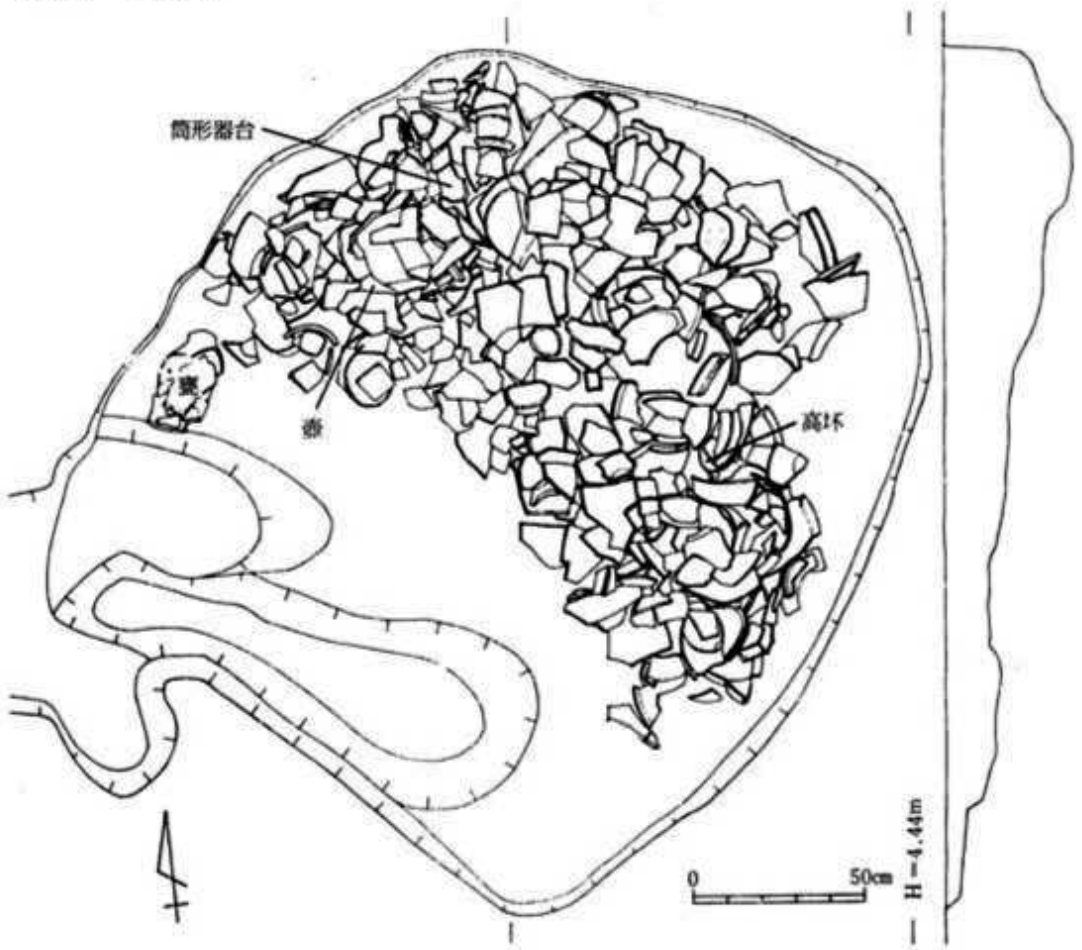

## Ⅲ　遺構と遺物

### １．遺　構

**①１号竪穴**（土器溜）〔第６図〕

１～８号は西区にある。１号溜は、土器溜群から西の方へやや離れて位置する。径は 210～220cmの隅丸方形を呈し最深部で約40cmを測る。西南部には遺物は検出されなかった。出土遺物は、小形甕形土器1010、1013、大形甕形土器1040、高坏1091、1095、鉢形土器1082、蓋形土

第6図　1号竪穴




器1115、1117、器台形土器1213、筒形器台1230、壺形土器、石斧2096、黒曜石製剥片等である。中期後半に比定されよう。

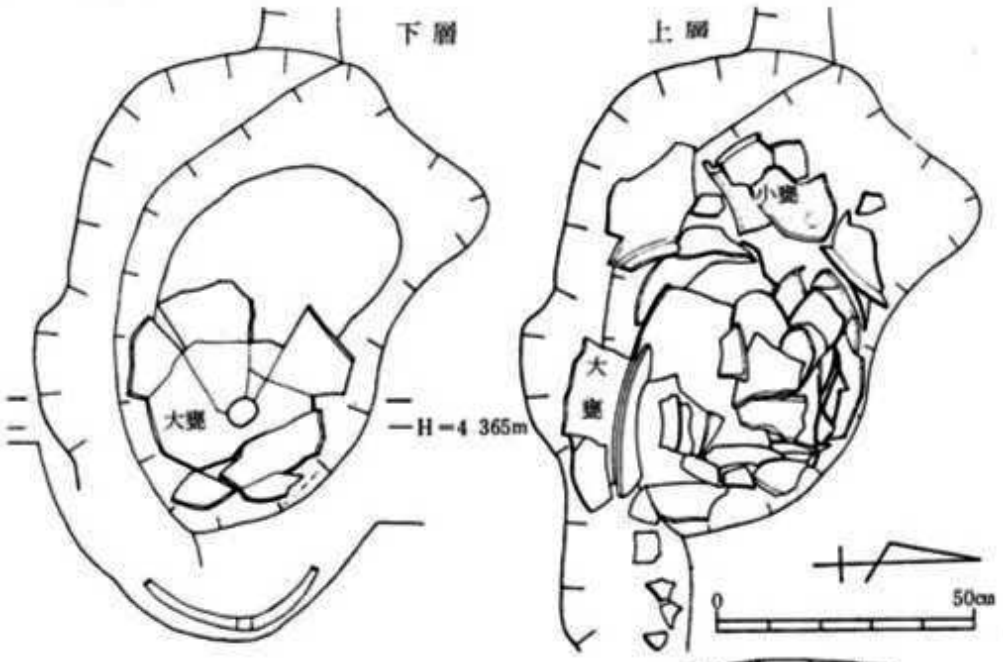
**②2号竪穴**（土器溜）〔第7図〕

B3区にあり、1号土器溜の北に位置し、汀線際に沿い、現状で長径 120cm、短径90cmの楕円形を呈する。壺形土器1053、甕形土器、黒曜石剥片等が出土した。遺構底に、底面を穿孔した大甕1041が据えられた状態で検出されたのは注目される。

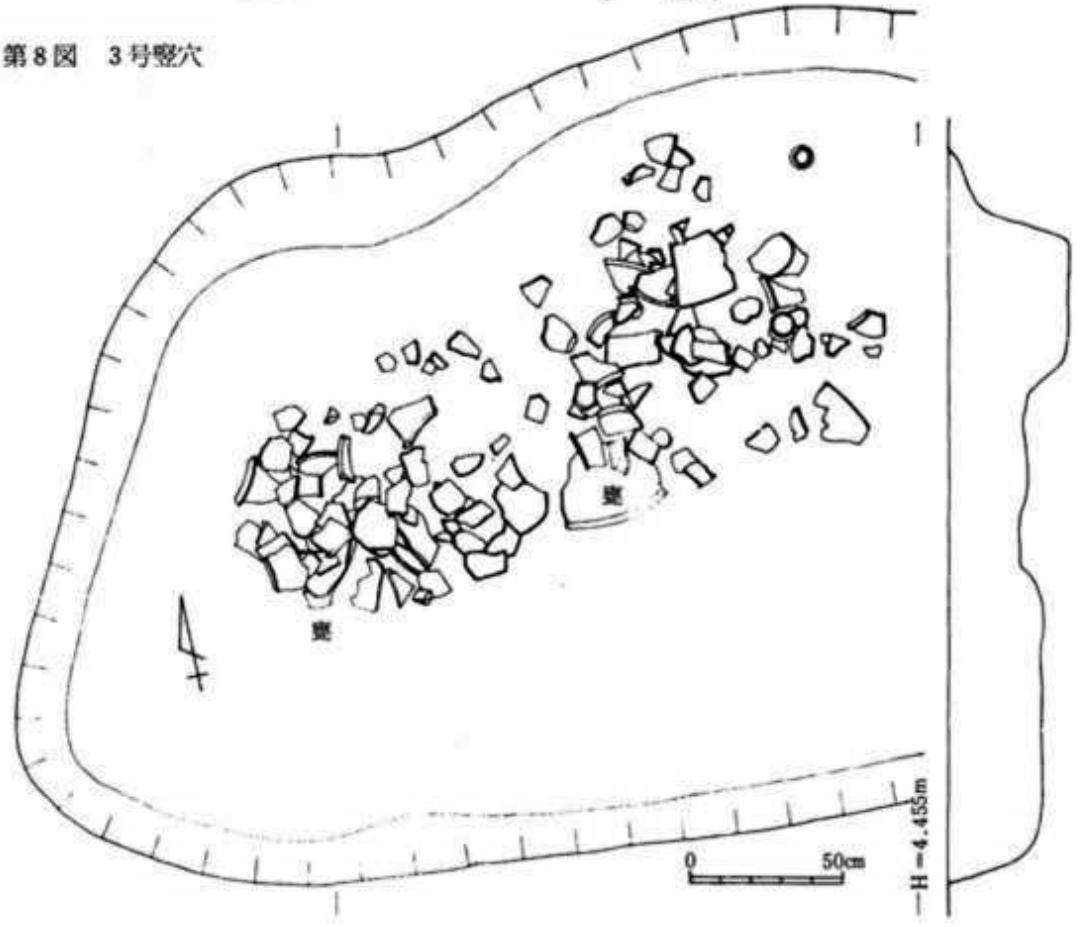
**③3号竪穴**（土器溜）〔第8図〕

群の北部に位置する大形の竪穴土壙である。東西約 360cm、南北約 190cmの隅丸方形を呈し、深さ42cmを深る。竪穴の大きい割には土器や石器類の遺物の出土が少ない特徴がある。小形甕形土器1007、甑型甕1035、鉢1086、蓋形土器1118、器台1216、1224、石斧2091、石鏃2016、剥片等が検出された。

第7図　2号竪穴

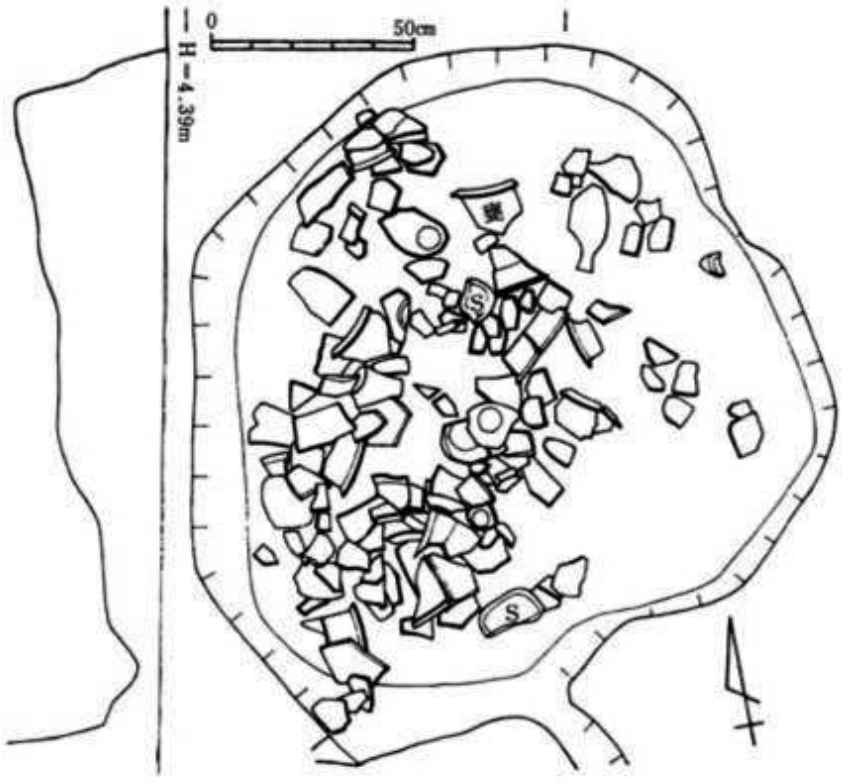



第8図　3号竪穴

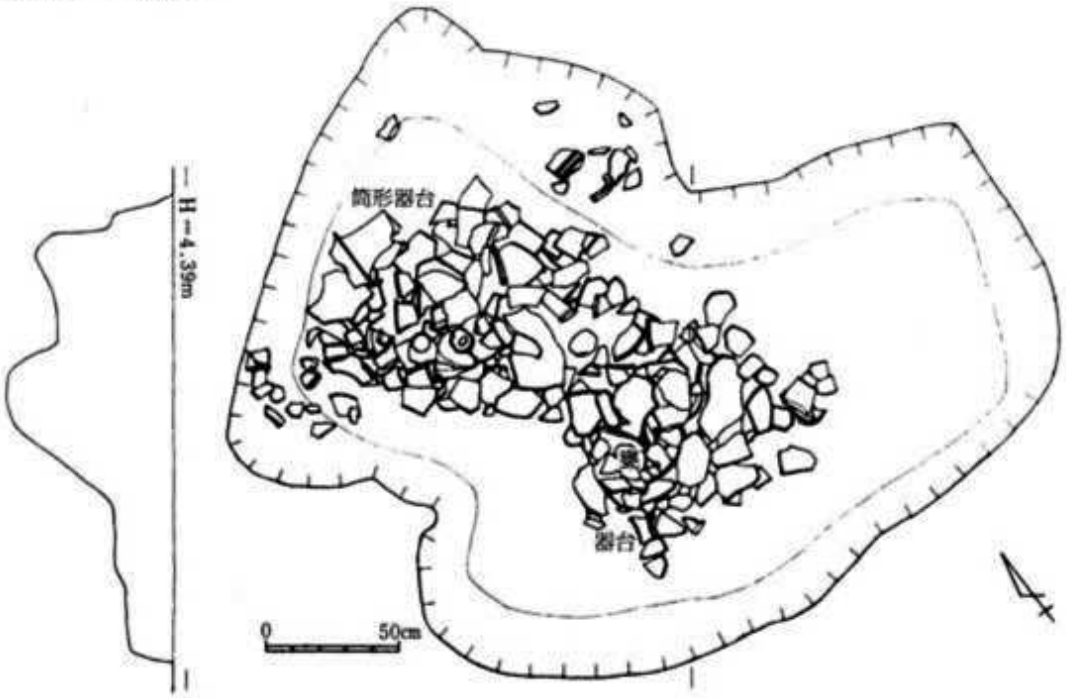


第9図　4号竪穴

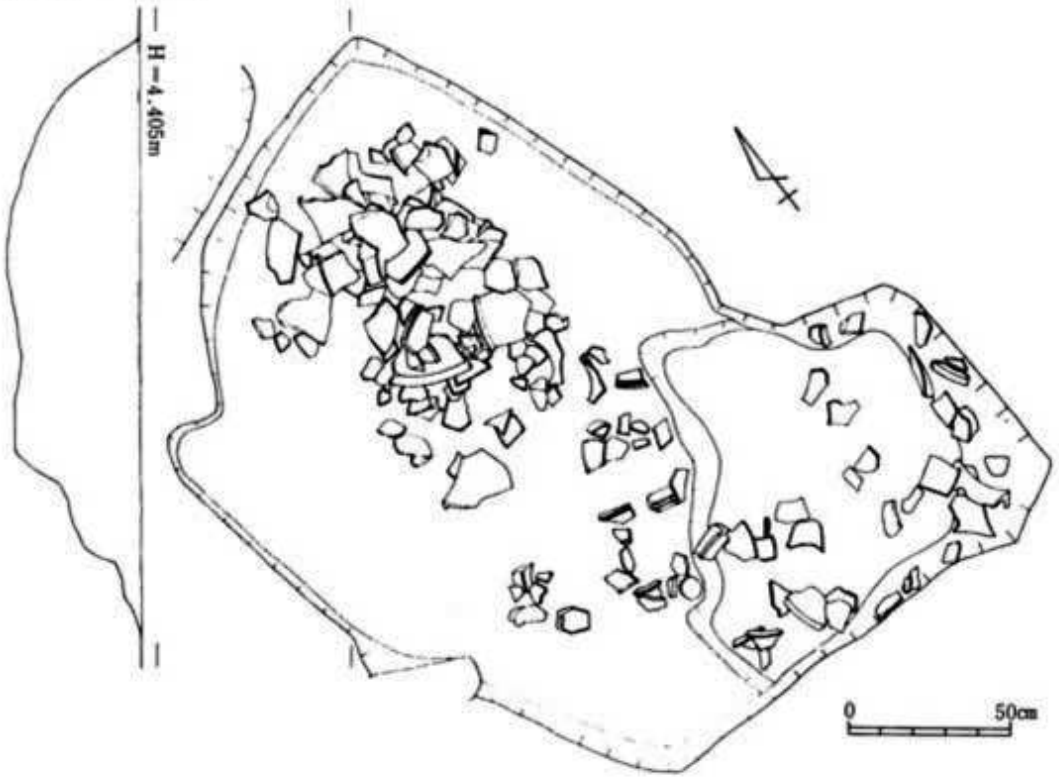
第10図　5号竪穴



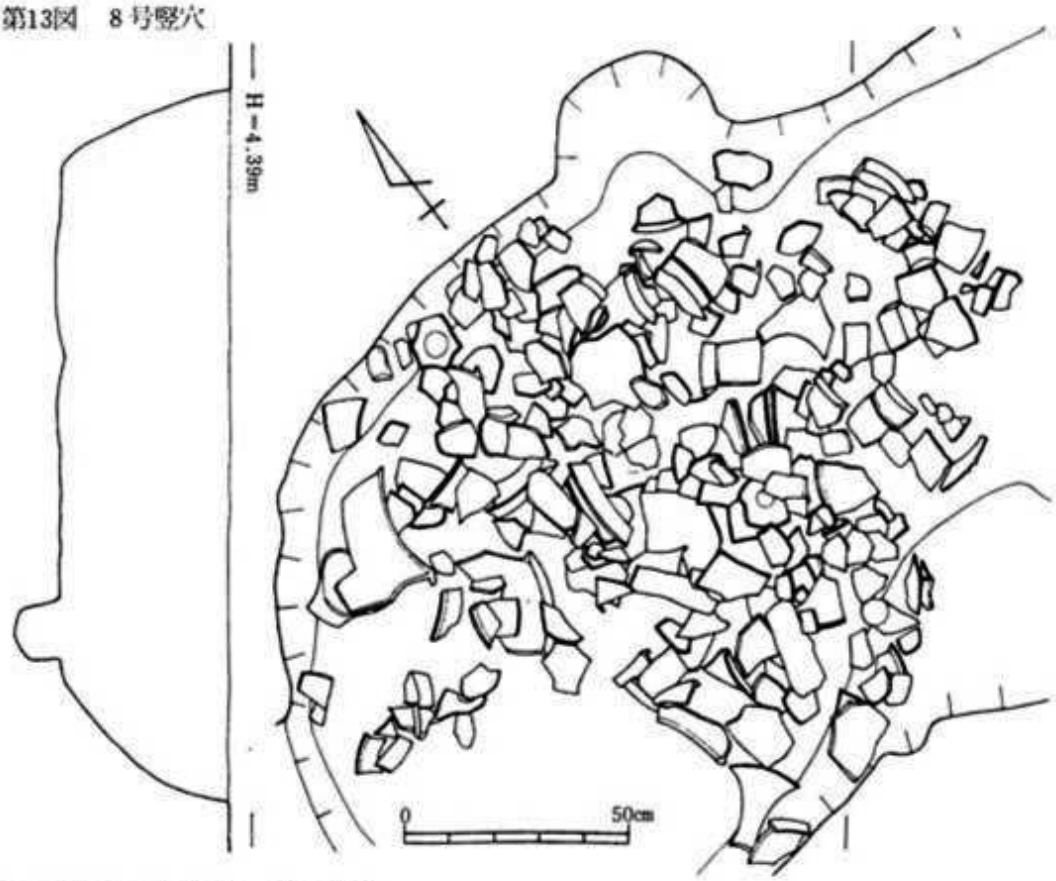
第11図　6号竪穴




第12図　7号竪穴



第13図　8号竪穴




**④4号竪穴**（土器溜）〔第9図〕

土器溜群の北西端に位置し、径 410cmと 220cmを測り甕箪状を呈す。深さは34cmを測る。出土遺物は、小形甕形土器1011、1012、壺形土器1060、鉢形土器1087、蓋形土器1116、器台1220、1217、1226、石鏃2011、2013、2002、石庖丁2044、砥石等である。

**⑤5号竪穴**（土器溜）〔第10図〕

土器溜群の中央部に位置している。南北約 170cm、東西約 160cm、最深部で約40cmを測り、ほぼ円形を呈する。出土遺物は、小甕1005、筒形器台1232、石鏃、石錐2063、石匙等である。

**⑥6号竪穴**（土器溜）〔第11図〕

径 310cmと 230cmの大形の土壙である。深さ63cmを測る。小形甕形土器1008、大形甕形土器1049、支脚形土器1246、1243、筒形器台1231、器台形土器1223、壺形土器1055、高坏1105、石鏃2017、石庖丁、砥石等が出土している。

**⑦7号竪穴**（土器溜）〔第12図〕

群の東端に位置し、西壁を6号溜と境にする。長径 100cm、短径90cm、深さ40cmを測り、隅丸台形状を呈する。8号土器溜から出土した器台と接合資料がある。出土遺物として鉢形土器1079、器台1218、1228、小甕、手捏土器、石鏃2023、2033、石匙、石庖丁、掻器2054、石錐2062、

石斧、石核等がある。遺物から須玖期の遺構と比定できよう。

**⑧8号竪穴**（土器溜）〔第13図〕

4号溜と6号溜に隣接する。約 180cmと約 150cmの楕円形を呈し、最深部で55cmを測る。小形甕形土器1002、壺形土器1058、高坏形土器1094、鉢形土器1075、1076、1077、器台形土器1210、1214、1219、1222、大形甕形土器、蓋形土器、手捏土器1271、石鏃、石斧2094、砥石等を出土した。

**⑨9号竪穴**（土器溜）

段丘上の南斜面に9～12号溜が1群をなしている。9号溜はその中で最上段に位置し、径 220cmと 180cmの方形状を呈す。甕形土器、壺形土器、甑型甕1031、土弾1255、蓋形土器、石鏃、石斧2090、凹石2104、磨石、石錐2066、石鎌等が出土した。

**⑩10号竪穴**（土器溜）

径 350cmと 150cmの二穴状の竪穴土壙である。小形甕形土器片多数、高坏形土器1099、1103、器台形土器、黒曜石製剝片等が出土した。

**⑪11号竪穴**（土器溜）

南斜面裾部に位置し、 400cmと 150cmの溝状竪穴である。南部が削平されている。小形甕形土器1016、1019、壺形土器1052、1062、1059、甑型甕1030、鉢形土器1080、1074、蓋形土器1111、1113、1114、大形甕1042、1044、1046、1047、1048、石鏃2008、2010、石庖丁2041、掻器2051、石斧、凹石、磨石、砥石2112、石核等と夜臼式甕形土器1301、1323、1324、板付1式甕形土器1332、1333、1336、板付系壺形土器1347、管玉2170等が出土した。

**⑫12号竪穴**（土器溜）

9号溜の南に溝状に延びている竪穴土壙であり、長径 950cm、幅 250cmを測る。小形・大形甕形土器、甑型甕1033、蓋形土器1110、1112、1119、器台形土器1215、土弾1259、高杯形土器、手捏土器1270、石鏃2014、石斧2093、磨石、砥石、石核、剝片等と夜臼式甕形土器1306、1325、1350、浅鉢1327、1328、1329、板付1式甕形土器1334、1338、壺形土器1341、1342等が出土した。

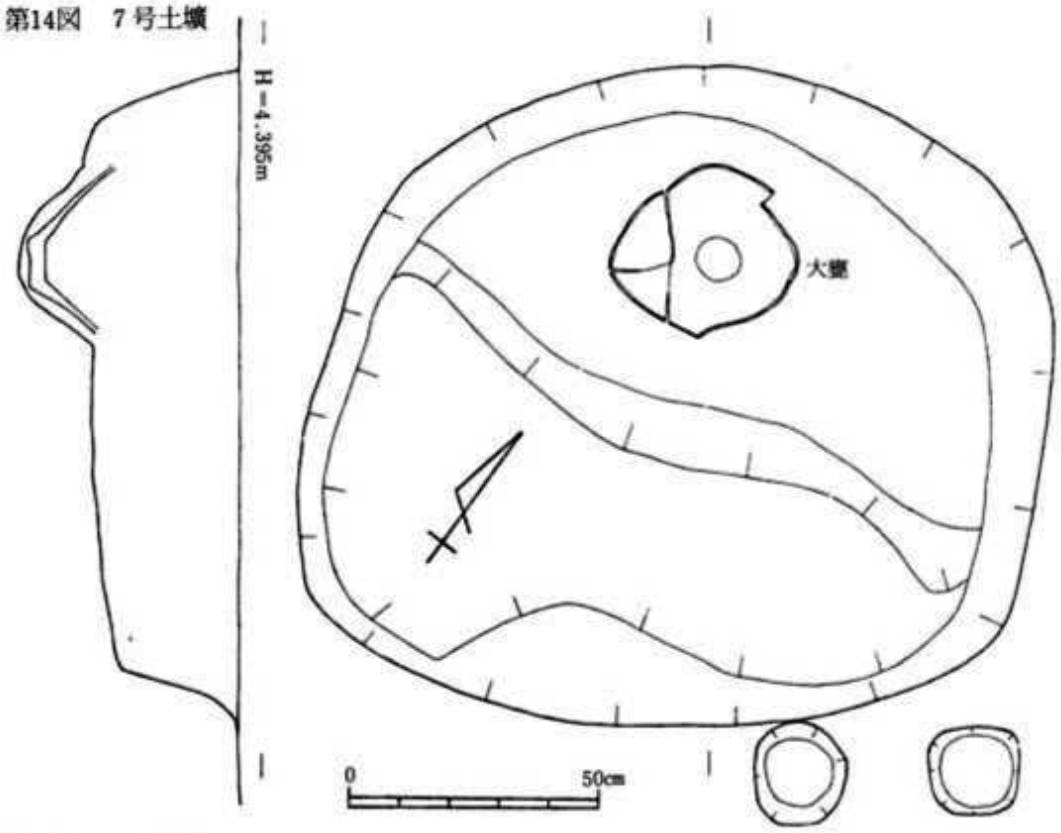
**⑬13号竪穴**（土器溜）

段丘上の西斜面に位置し約 520cmと約 200cmの卵形を呈する。大形甕形土器1045、小形甕形土器1003、1004、1006、1017、壺形土器1054、1056、甑型甕1034、鉢形土器1088、1073、1081、器台形土器1211、1225、石鏃2018、凹石2108、磨石等が出土し、板付系の甕形土器1345が検出された。

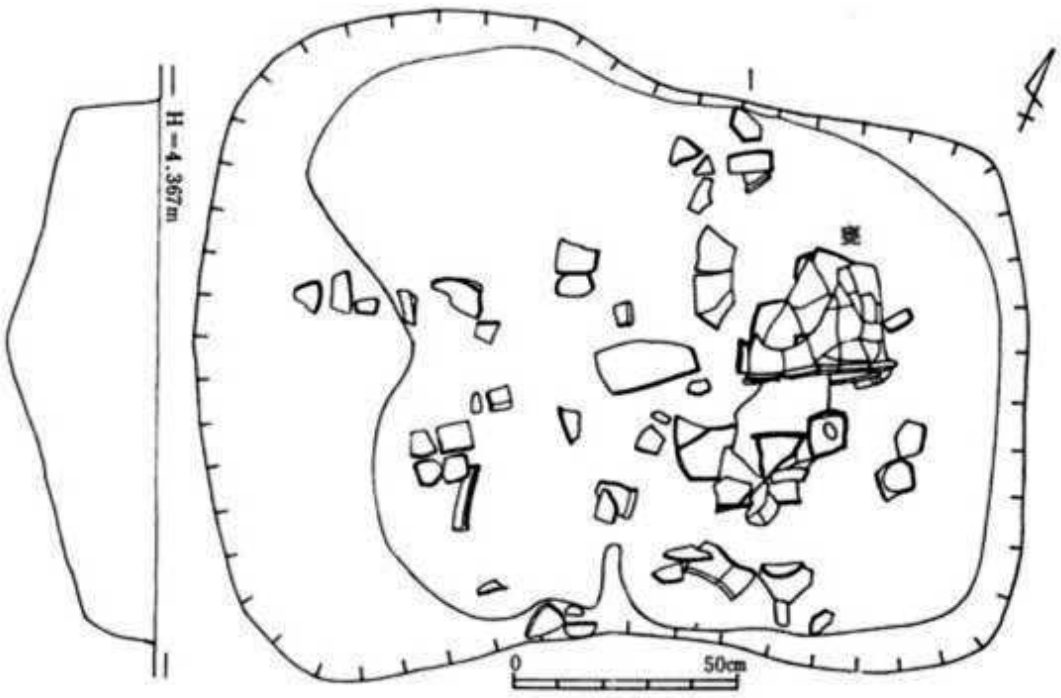
**⑭14号竪穴**（土器溜）

約 330cmと約90cmを測る小形である。小形甕形土器1015、大甕1043、壺形土器1050、1055、1061、1051、1057、高坏形土器1097、1098、1100、1104、蓋形土器1200、支脚形土器1240、板付系甕形土器1344と凹石2102が検出された。

第14図　7号土壙



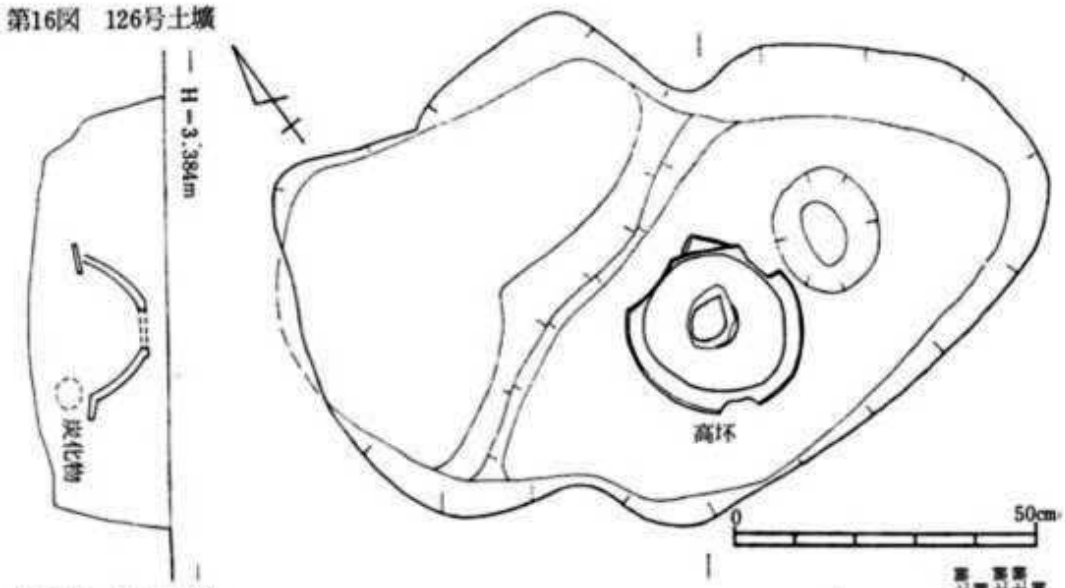

第15図　30号土壙



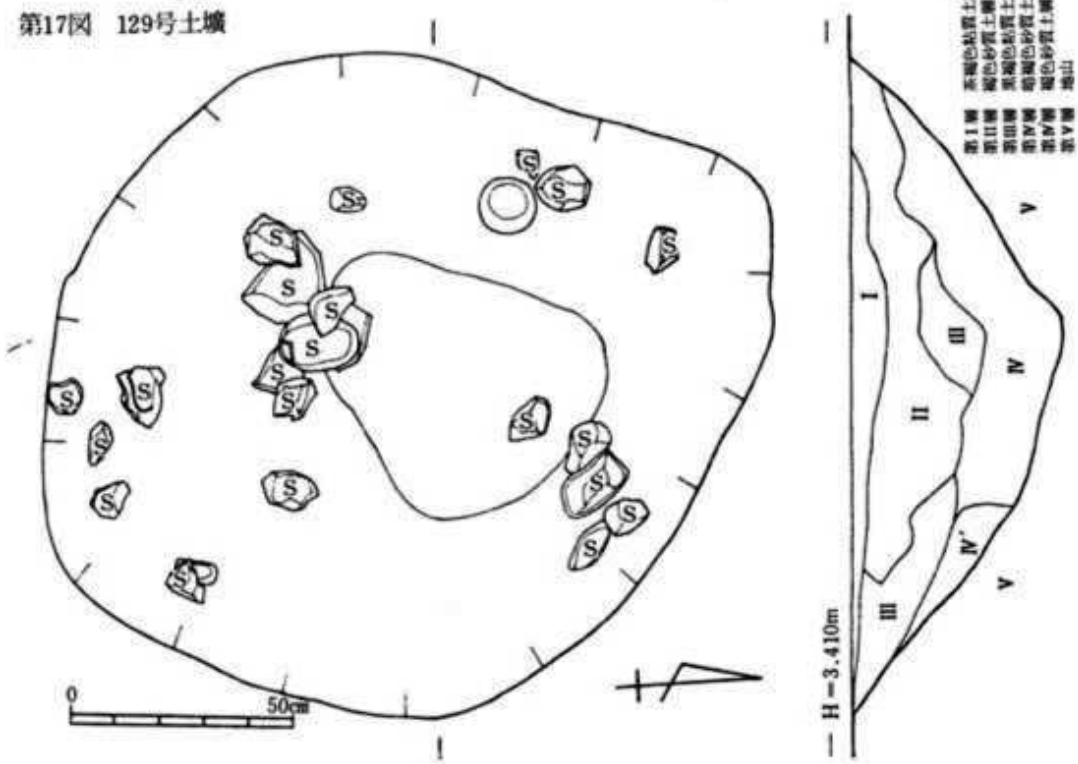
⑮ **7号土壙** 〔第14図〕

遺跡の北西端に位置する。径 150cmと 132cmでほぼ円形を呈し、深さ45cmを測る。東南隅に柱穴が2ケ所並んでいる。遺構底を15cmほど掘り凹めて、大形甕形土器が据えられるように置かれていた。2号竪穴の大形甕との関係が考えられる。

第16図　126号土壙




第17図　129号土壙



⑯30号土壙　〔第15図〕

B 4 区の土器溜群の西に位置する。現状で長径 190cm、短径 140cm、深さ33cmを測る。須玖式土器の小甕、石鏃丁等が出土した。

⑰33号土壙

土器溜群の西に隣接している。径 210cm、 160cmの楕円状を呈する。出土遺物は壺形土器1063、鉢形土器1078、板付１式甕1339、石鏃2006、2020、凹石、石剣2080、黒曜石製石核、剥片等がある。

⑱34、35、36号土壙

34、35、36号土壙は隣接している。多くの土器片に混って、34号より石斧、35号より石鏃2420、凹石2105、石錐2060、36号より石戈2083等の石製品が多く検出された。

⑲39、40号土壙

土器溜群の北に位置する。39号より小形甕形土器1001、石鏃2003、石匙、のみ形石斧2305、砥石、黒曜石製石核、剥片等が、40号より石鏃2015、石核等が検出された。

⑳57号土壙

中央部北端の堆積層にある遺構底より、土師器甕形土器1280、1281と直口壺1282が出土した。汀線外に埋土した第Ⅳ・Ⅴ層に掘られた土壙であり注目される。

㉑64号土壙

遺跡の中央部にある不定形の土壙である。土器片と伴に土製紡錘車1251と石鏃、石鏃丁2045、石斧、石核等が検出された。

㉒126号土壙　〔第16図〕

遺跡の東部にあり、径125cmと70cm、深さ30cmを測り、西壁は袋状を呈する。高坏が出土した。

㉓129号土壙　〔第17図〕

遺跡の東端部に位置する。径 160cmと 140cmの楕円形状を呈し深さ48cmを測る。径10～20cm位の礫が多く含まれ、高坏、甕形土器片等が検出された。

㉔183号土壙

径 220cmのほぼ正方形状を呈する。出土遺物は鉢形土器1083、器台形土器1227と石製品の石鏃2424、2436、掻器2050、凹石2109、砥石、石核、剥片等が出土した。夜臼式甕形土器1326、板付Ⅰ式甕形土器1335、板付式系甕形土器1351が混入していた。

㉕189号土壙

大深田段丘上の土壙で径約 230cmと約 200cmを測る。小形甕形土器1014、高坏1090、1092、1096、黒曜石剥片等が検出された。

㉖194号土壙

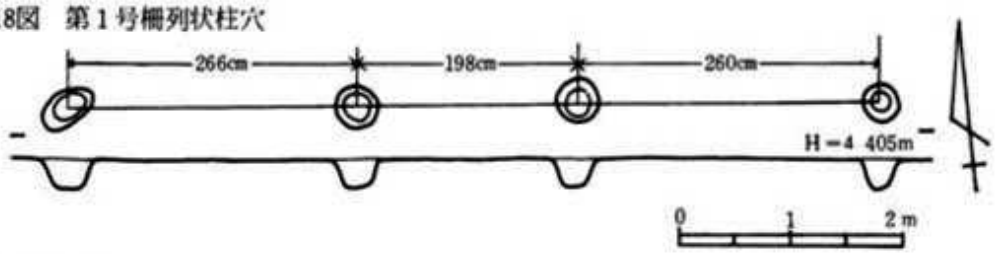
径 290cmと 210cmを測り卵形を呈する。鉢形土器1072、支脚形土器1244、甕形土器胴部片、

石製投弾等が出土した。

**㉗柵列状柱穴**　（第18図）

C 6 区に 4 本の柱が並ぶと推定される柱穴が検出された。ほぼ東西に並び、柱間 200～ 270 cmを測る。時期不明。

第18図　第１号柵列状柱穴




## 2．遺　物

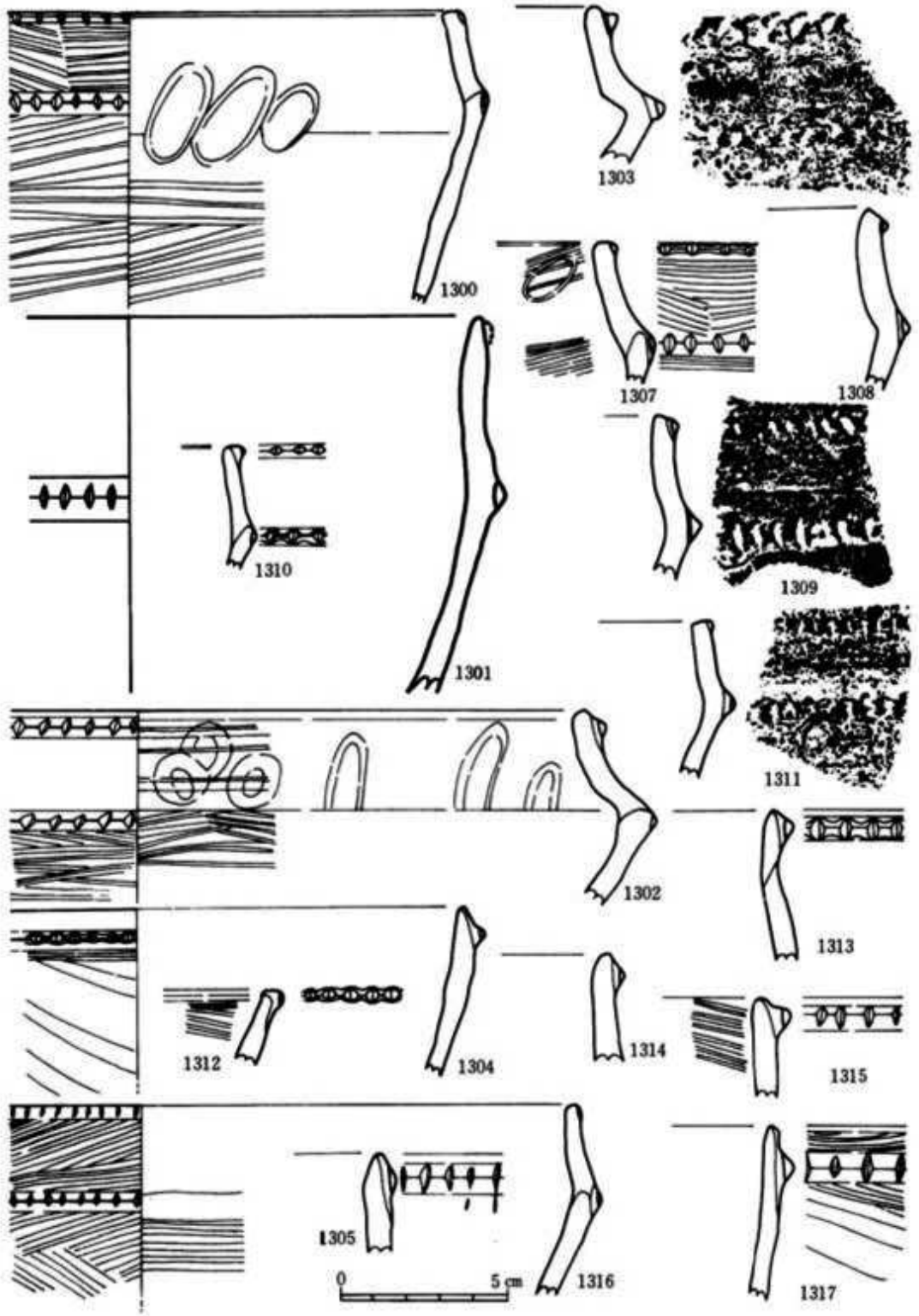
### (1) 土器・土製品

#### 1）夜臼・板付式土器

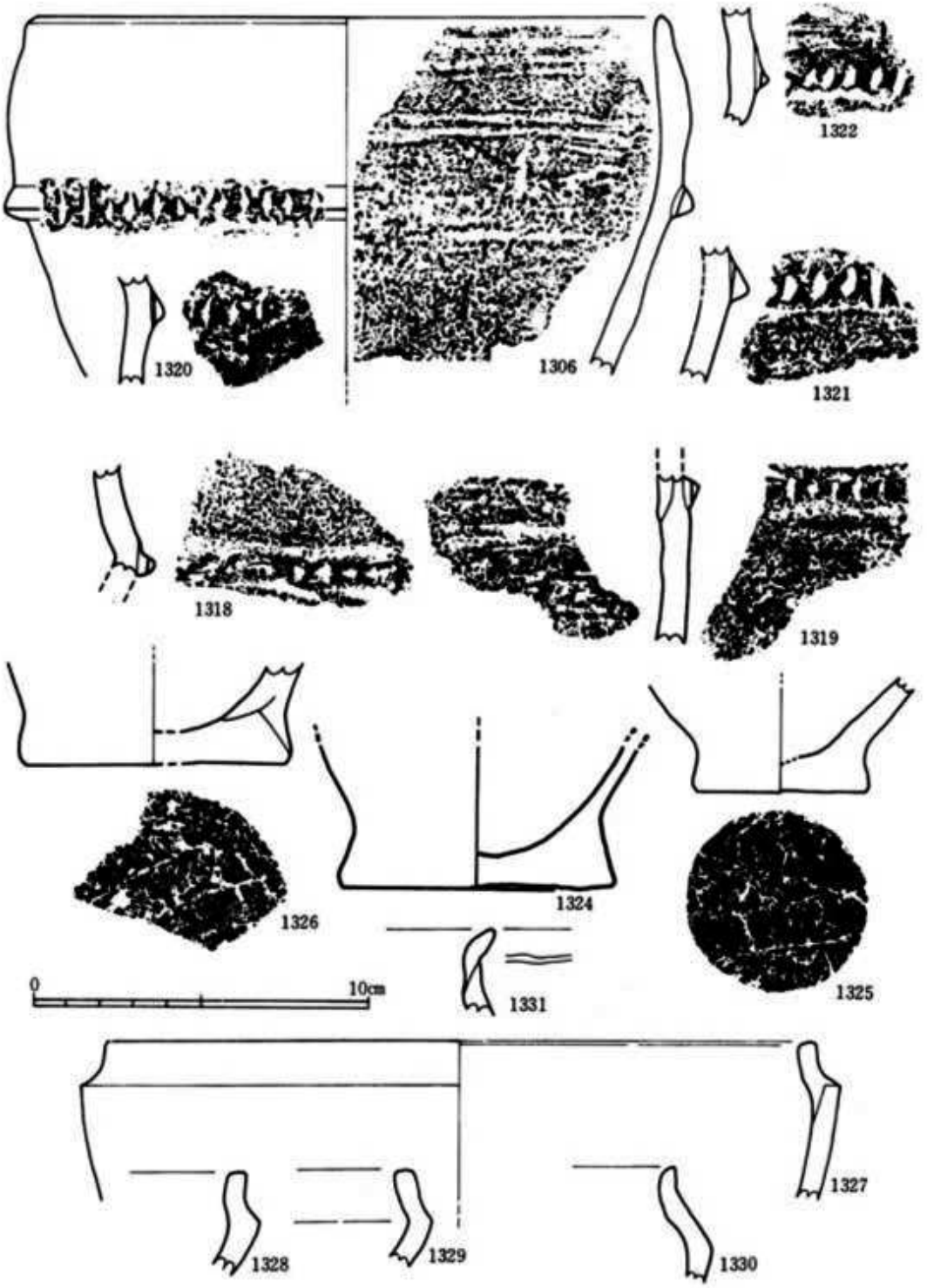
**〈夜臼式土器〉**

**a．甕、深鉢形土器**　1300　〈堆積層〉　口唇端部に薄く突帯を貼付し刻目を施し、胴部反転部にも刻目突帯を巡らす。胴部上位は直線的に外傾し、口縁部はゆるく外反しながら内傾する。推定口径は19.8cmを測る。調整は口縁上端は平坦状にナデ、口縁内面に横ナデ後指による押圧、外面、胴部上位内面には横方向に貝殻条痕が走る。胎土は胴部反転部の接合より異なり、口縁部の胎土には１～３mmの砂粒を多量に含む。色調は外面暗褐色、内面淡褐色を呈す。1301　〈11号竪穴〉　内彎して外傾する胴部上位と、外彎気味に直立する口縁部、胴部の反転はゆるい。口縁部の突帯は欠失している。胴部の刻目突帯は大きく、刻みは規則的である。淡褐色を呈し、砂粒を多く含み器面は荒れているが、胴部内面に横位に貝殻条痕で調整している。1302　〈堆積層〉　口縁下端と、反転部に深い刻目突帯をもつ胴部の反転は大きく、深いくの字状を呈する。調整は、胴部内面は粗い条痕、口縁部内面は指の押圧痕が見られ、外面は刷毛目後ナデで調整している。乳褐色を呈するが胴部外面は暗褐色である。1303　〈堆積層〉、1354　〈堆積層〉　どちらも同じタイプであるが、口縁突帯は1303は幅広く、刻目は深くて長く、1354は小さめである。色調は乳褐色を呈する。1304　〈堆積層〉　口縁端部は丸みを帯び、やや下がって刻目突帯を持つ。ナデ調整。１～５mmの砂粒を含み、暗茶褐色。1305　〈堆積層〉　口縁上辺に平坦面を作り、外端面をやや肥厚させて刻目を刻む。反転する胴部に刻目突帯をもつ。外面に細かい条痕が横位に走る。淡褐色を呈す。1306　〈12号竪穴〉　内彎気味に直行する口縁部は、器厚が薄くなり端部に狭い平坦面を作り出す。胴部の突帯は太く、刻目は篦状工具で施したと思われ、細くて深い。灰褐色を呈し煤が付着する。内面に篦状の条痕が横位に走り、外面は刷

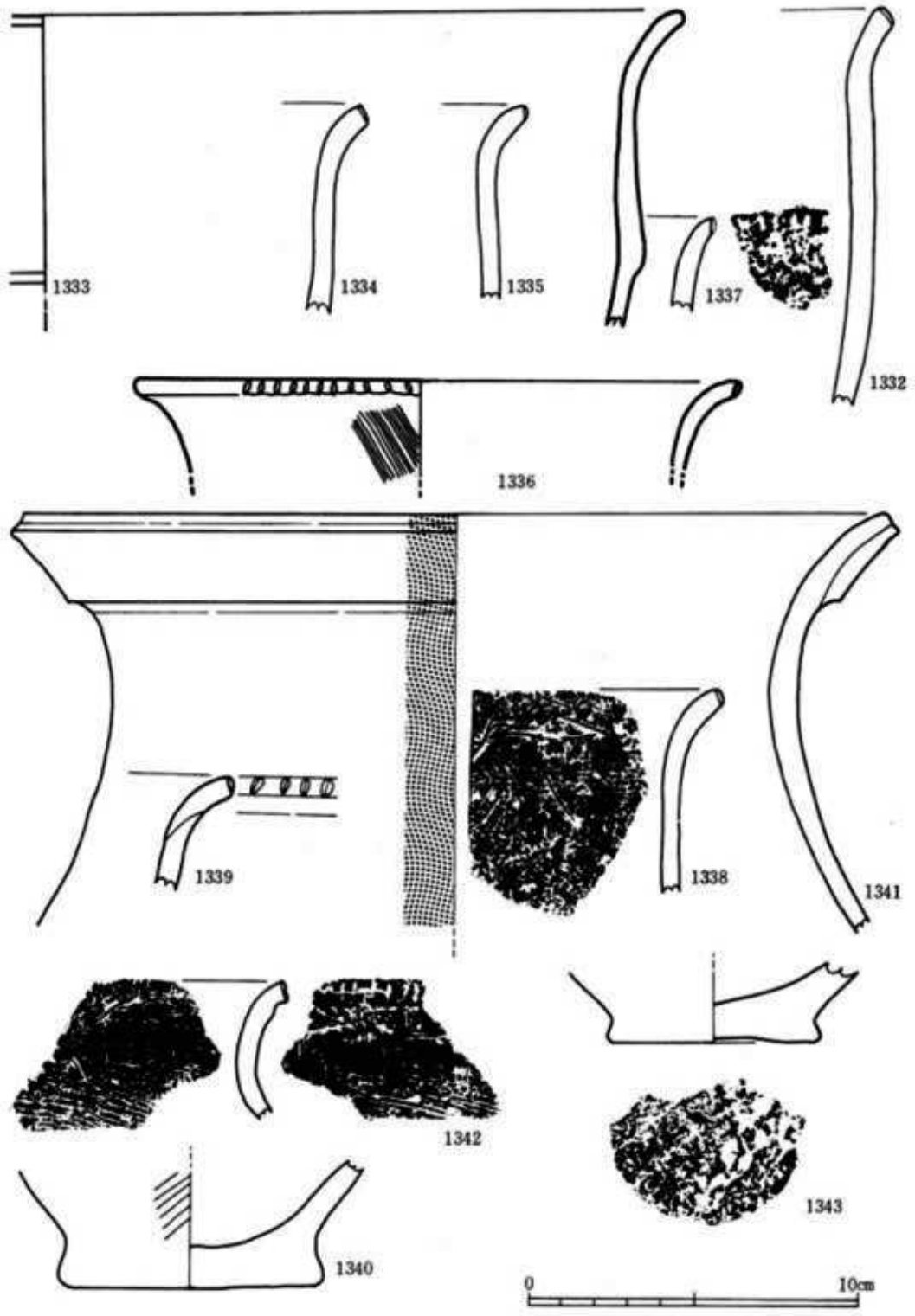
第19図　夜臼・板付式土器実測図(1)



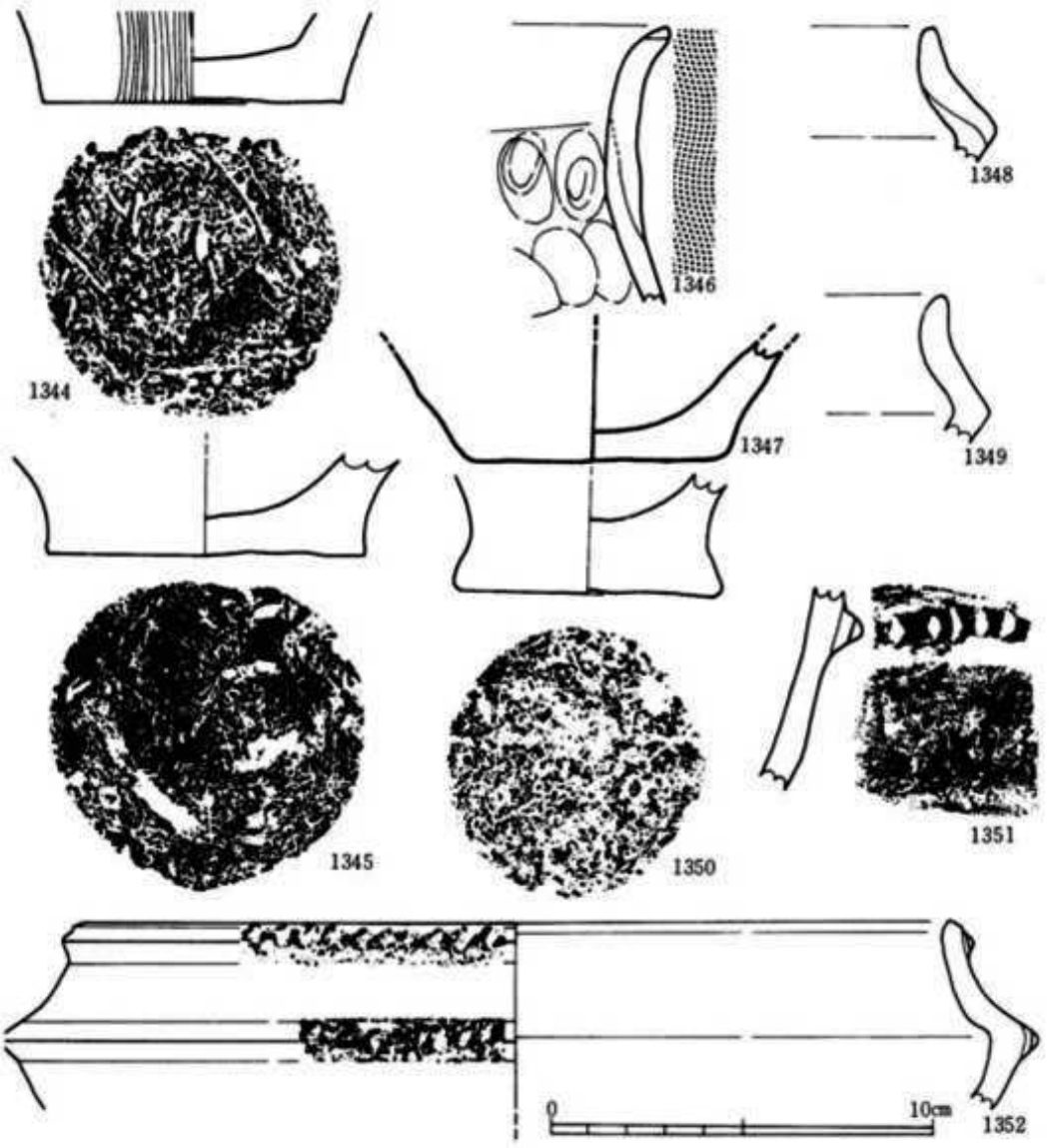
第20図　夜臼・板付式土器実測図(2)



第21図　夜臼・板付式土器実測図(3)



第22図　夜臼・板付式土器実測図(4)




毛目痕後、ナデ調整で仕上げている。砂粒を含み焼成は良好。1307　〈堆積層〉、1308　〈堆積層〉、1309　〈 131号土壙〉　いずれも、口縁上辺に平坦面を作り、口縁直下と胴部反転部に刻目貼付突帯をもつ。反転部は浅い「くの字」状を呈し、口縁部は外反しながら上がる。内外面とも貝殻条痕で調整している。淡褐色を呈する。1310　〈堆積層〉　口縁端の突帯は細く、刻目は幅広い。1311　〈堆積層〉は口縁端部に刻目を入れる。胴部反転部の突帯は大きい。器壁は薄い。茶褐色を呈し黒変がある。1312　〈堆積層〉は口縁端部に低い帯突をつけ刻目は幅広い。1313　〈堆積層〉は口縁直下に太い突帯を貼り付け、大きい刻目を刻む。1314　〈堆積

層〉、1315 〈堆積層〉、1316 〈堆積層〉は口縁端より下げて刻目突帯をつける。1317 〈堆積層〉は端部よりやや下げて太い突帯をつけ、刻目は細く深く刻む。刻む工具は1312と1315は棒状のもので、1316、1317、1314は薄い篦状のもので刻んだものと推定される。1316、1314は乳褐色。1315、1312、1313は黒褐色、1317は黒色を呈す。1318 〈堆積層〉、1319〈〈堆積層〉、1320 〈堆積層〉、1321 〈堆積層〉、1322 〈堆積層〉は、いずれも夜臼系と思われる胴部片。1318は反転部がくの字状に屈折するタイプで、1322は屈曲上方に突帯がつく。1319、1320は細い篦状の工具で、1321は棒状の工具で刻目を刻む。1319は淡茶褐色。1318、1320は乳灰色、1321、1322は黒色を呈す。1322 〈堆積層〉、1324 〈11号竪穴〉、1325 〈12号竪穴〉1326 〈183号土壙〉は甕形土器の底部である。1325、1326は木葉痕がある。

**b．浅鉢形土器** 1327 〈12号竪穴〉、推定口径21cmを測る。砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。1328 〈12号竪穴〉、1329 〈12号竪穴〉は黒色、1330 〈堆積層〉は外面灰褐色、内面は黒褐色を呈する。

**c．壺形土器** 1331 〈堆積層〉、口縁部片である。端部は丸味を帯び外斜する。粘土紐の接合部が沈線状に残る。両面ともナデ調整で仕上げる。微砂粒を多く含み、焼成は良好。黒褐色を呈す。

**〈板付Ⅰ式土器〉**

**a．甕形土器** 1332 〈11号竪穴〉 如意形口縁を呈し、胴部の膨らみは少ない。口縁上辺に細い刻目を刻む。推定口径は23.6cmを測る。器面は荒れているがナデ調整と思われる。内面は茶褐色、外面は黒褐色を呈す。胎土に微砂粒を多く含み、もろい。1333 〈11号竪穴〉 推定口径38cmを測り、薄平の甕形土器である。口縁部の肥厚帯はぐんと下がり、下端部に胴部の最大径がある。色調は赤茶色を呈し、内外面とも丹塗りが施される。1～2mmの微砂粒を多く含む。1334 〈12号竪穴〉 器壁は薄く、茶褐色を呈す。砂粒を多く含みもろい。1335 〈183号土壙〉 茶褐色を呈し黒変がある。いくらか深い如意形口縁を呈す。1336 〈11号竪穴〉 推定口径19cmを測り茶褐色を呈す。外面に斜位に刷毛目調整が見られる。1337 〈56号土壙〉 器面は荒れている。乳灰色を呈し浅い如意形口縁である。1338 〈12号竪穴〉 器面は荒れているが、口縁部内面に横位の刷毛目調整がある。茶褐色を呈す。砂粒を多く含む。1340 〈堆積層〉 浅い断面三角の平底である。外面に斜位に刷毛目痕を残している。乳茶色を呈し底面に黒変がみられる。

**b．壺形土器** 1341 〈12号竪穴〉 推定口径26.6cmを測る大形壺。口縁外面に粘土紐を貼り付け大きく開き、頸部はしまる。器面は荒れているが、外面に丹塗痕がある。赤茶色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。1342 〈12号竪穴〉 肥厚する口縁部は、端部を平坦に調整した後、篦状工具による細い沈線が横に一本はいる。その後、上方から篦状工具で細く刻む。内外面とも刷毛目調整で仕上げる。暗茶褐色を呈する。1343 〈堆積層〉 円盤状の底部に胴部の粘土

帯をのせて、篦、ナデにより調整したものと思われる。上げ底状の平底である。底径は8cmで、種子圧痕がある。胎土に砂粒を含むが焼成は良く、黒褐色を呈す。

〈板付式系土器〉

**a．甕形土器** 1344 〈14号竪穴〉 平底で底部径は 7.8cmを測り、刷毛目調整。胎土に砂粒を多く含む。茶褐色を呈し、黒変がある。底面に籾や植物質繊維と思われる圧痕が見られる。1345 〈13号竪穴〉 底部径 8.2cmを測る。平底で茶褐色を呈し、焼成は良好。

**b．壺形土器** 1346 〈堆積層〉 口縁部は肥厚し外反が大きい。内面はナデ後指による押圧調整が見られる。内外面とも丹塗りを施している。胎土は精製され良く、焼成も良好である。乳褐色を呈する。1347 〈11号竪穴〉 底部径 6.2cmを測る。ナデ調整で仕上げ、褐色を呈す。胎土に1～5mmの砂粒を含む。いずれも板付式系土器である。

**c．浅鉢** 1348 〈堆積層〉 外反する口縁は直行気味に立ち上がる。くの字状に反転する。両面ともナデ調整。胎土に微砂粒を含み緻密で焼成も良好。淡褐色を呈す。1349 〈堆積層〉 口縁の外反が1348よりやや大きい。斜方向に刷毛目調整を施す。淡茶褐色。胎土、焼成とも良。

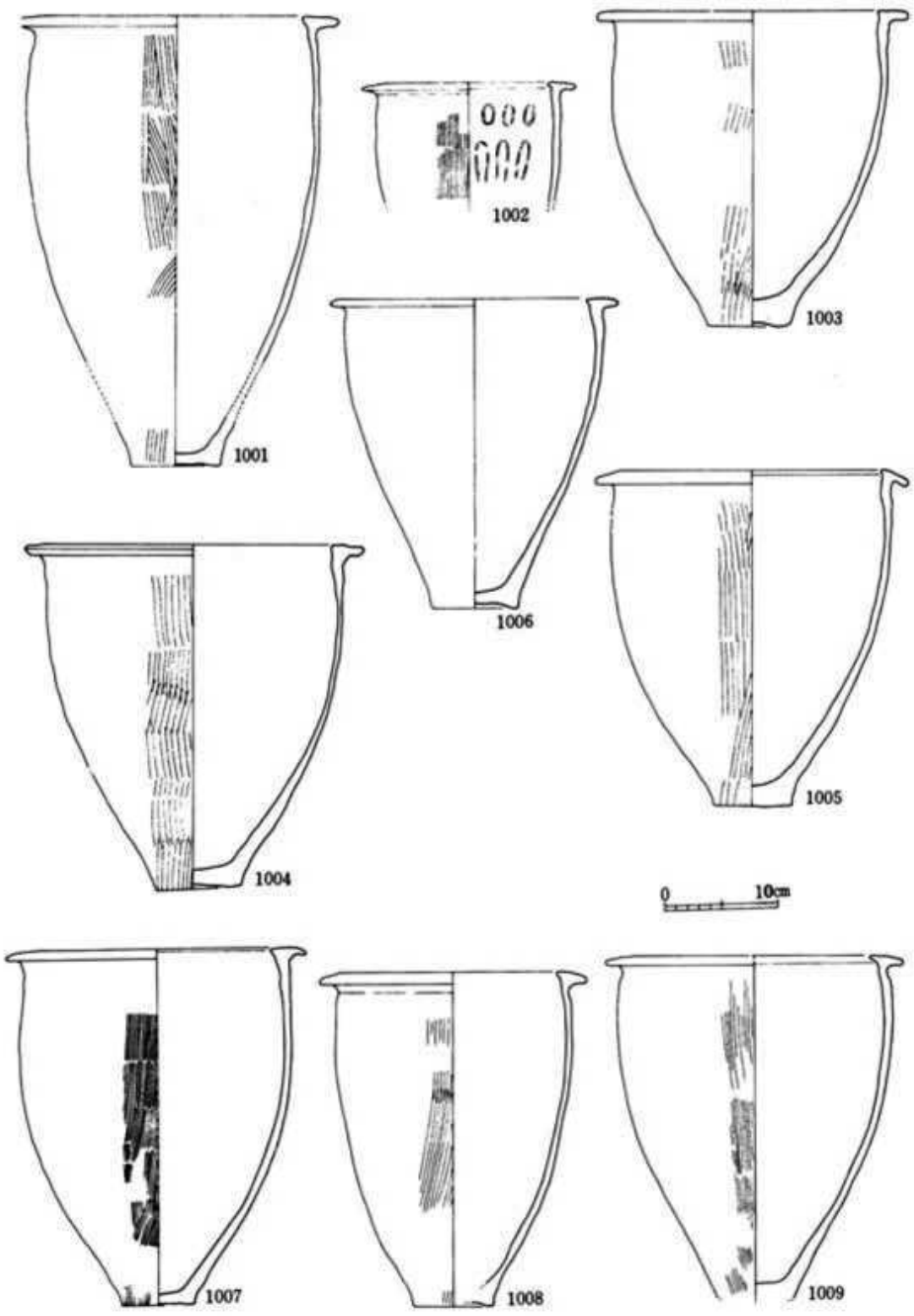
**2）弥生前期末・中期・後期の土器、土製品**

**a．小形甕形土器**

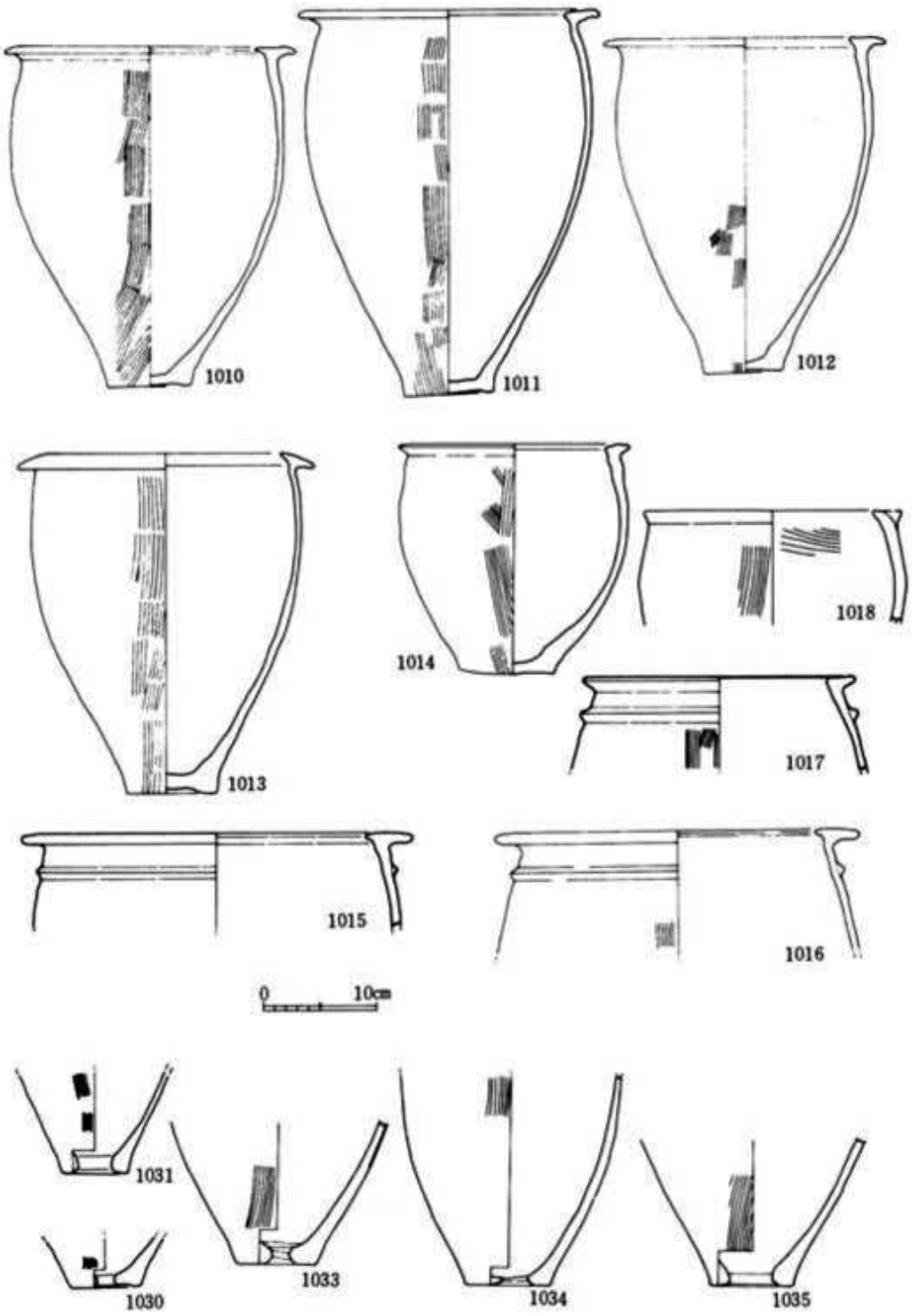
器形、特に口縁部の特徴により四タイプに分けた。A—逆L字形の平坦口縁をもつ。B—器体の上位が内傾するもの。C—内傾はBより大きくなり、逆L字・鍬形状の口縁をもつもの。D—口縁部に三角突帯を貼りつけ、水平面を作り出すもの。

**小甕A**．口縁上部に平坦面を作り、いわゆる逆L字形を呈し、内方へも張り出すものもある。砲弾形を呈し、器体の上位は内傾気味であるがほぼ直立する。1001 〈39号土壙〉 器高（推定）38.2cm、口径28cmを測り、器高は高いタイプである。口縁部は逆L字状を呈し、胴部の最大径は中位よりやや上にあり、胴の張り出しは僅かである。内面はナデ調整、外面は縦方向の粗い刷毛目調整である。赤褐色を呈す外面は一面に黒変が見られる。胎土に砂粒を多量に含む。底部は浅い上げ底状を呈す。1002 〈8号竪穴〉 口径18.4cmを測り、小形である。平坦面を呈す口縁部は僅かに下がるが、逆L字状を呈す。胴部上位の張り出しは殆ど見られない。内面に指頭圧痕が見られナデ調整で仕上げている。外面は縦方向の刷毛目である。赤褐色を呈し黒変がある。胎土に1～5mmの砂粒を含み、焼成は良好。器面がやや磨耗している。1003 〈13号竪穴〉 口縁部と接合する胴部上端が肥厚する。外面は荒れているが丹塗りの痕跡がある。調整は縦方向の粗い刷毛目である。赤褐色を呈し、黒変あり。口径27.4cm、器高27.2cmを測る。1004 〈13号竪穴〉 1003と同じタイプであるが、器壁は薄く底部は浅い上げ底を呈す。赤褐色を呈し、一部黒変している。粗い刷毛目が縦方向に全面にはいる。1～5mmの砂粒を多量に含む。口縁上面と胴部に丹塗りの痕跡がある。1005 〈5号竪穴〉 口縁上面の平坦面が外斜する鍬形状を呈すタイプである。胴部上面は大きく肥厚する。外面は一見篦磨きのような粗い

第23図　小形甕形土器実測図(1)



第24図　小形甕形土器実測図(2)



縦方向の刷毛目で仕上げ、丹塗りの痕跡がある。平底である。1006　〈13号竪穴〉　口径25.0cm、器高26.5cmを測り、赤褐色を呈する。

**小甕B**、砲弾形を呈し、器体の上位が内傾するタイプである。口縁部は逆L字形を呈す。口縁の上方は平坦面を作るが、水平するものと外斜する例がある。1007　〈3号竪穴〉　口縁部の平坦面がほぼ水平を保つタイプである。（胴部の最大径はAタイプよりやや下がる。）平坦面の内端部は張り出し稜を作る。内面ナデ、外面は非常に目の細かい刷毛目調整を全体に施す。赤褐色を呈し外面は黒変している。口径26cm、器高30.6cmを測る。1008　〈6号竪穴〉　平坦口縁の外端が下がり、内端が断面三角形に張り出し最高部を作る。茶褐色を呈し黒変がある。1009　〈堆積層〉　口縁部と胴部の接合部内外面に強い横ナデの跡が残る。外面は刷毛目調整である。

**小甕C**、砲弾形を呈し、器体上位の内傾は大きくなる。平坦面を作る口縁部は逆L字形・鍬形状を呈する。口縁下に突帯を持つものをCⅡ類とする。1010　〈1号竪穴〉　平坦口縁の内端部は大きく張り出しT字状を呈す。胴部の最大径はBタイプより下がり張り出しが大きくなる。調整は内面はナデ、外面は縦方向の刷毛目である。口径25.4cm、器高29.3cmを測る。灰褐色を呈し胴部中央部に黒変がある。1011　〈4・5号竪穴〉　4号と5号土器溜より出土。淡褐色を呈し、粗い刷毛目調整、器高33.2cm。1012　〈4号竪穴〉　淡乳灰色を呈し黒変あり。刷毛目調整。器高28.5cmを測る。1013　〈1号竪穴〉　平坦面を持つ口縁部が鍬形を呈すタイプである。器壁は薄い。外面は胴下部のみ赤褐色を呈し、他は黒褐色に黒変している。全面に粗い刷毛目調整。浅い上げ底を呈す。1014　〈189号土壙〉　口径20.4cm、器高19.6cmを測る小形である。逆L字形を呈する口縁部は外端部がやや上がる。胴部はかなり内彎し、上部の外面は肥厚する。調整は粗い刷毛目である。底部は薄い。暗褐色を呈し、黒斑がある。

**小甕CⅡ**、胴部はかなり内彎し、口縁下に近く断面三角形の突帯を有する。口縁上部に作る平坦面は水平位を保ち、逆L字を呈するものと、内端が張り出すものとがある。1015　〈14号竪穴〉　口縁との間隔をあまりとらない断面三角形の貼付け突帯は小さい。口縁内端はかなり張り出し幅広い平坦面を作る。口縁部と胴部との接合部は肥厚する。細かい刷毛目調整で仕上げ、内外面とも黒褐色を呈する。1016　〈11号竪穴〉　推定口径で32cmを測り、淡赤褐色を呈する。1～4mmの砂粒を多く含む。1017　〈13号竪穴〉　平坦口縁は内方への張り出しを作らない逆L字形口縁である。口縁から間隔をとらずに作る貼付け断面三角形突帯はかなり大きい。赤褐色を呈し、丹塗り痕が見られる。粗い刷毛目調整で仕上げる。

小甕D、1018　〈8号竪穴〉　胴部最上端に断面三角形の粘土紐を貼付け、上辺に水平面を作り出している。胴部が張り出す砲弾形の小形甕である。調整は内面を幅 2.7cmの工具で細かい刷毛目で横方向に、外面は縦方向に刷毛目で施している。推定口径は 7.5cmを測る。内外面とも黒褐色を呈し黒変が見られる。

**b．甕形土器（甑型甕）**

甕形土器の底面に孔を穿った甑形土器が多く出土した。焼成前に孔を穿ったものをAタイプ、焼成後に穿ったものをBタイプとする。

**甑A**、1030　〈11号竪穴〉　甕形土器の底部である。外面は刷毛目調整で仕上げ茶褐色を呈し、黒斑が見られる。底部径 6.4cmを測り、浅い上げ底を呈す。底面の中央部に一孔を穿つ。孔は焼成前に穿ち、ナデ調整で仕上げる。孔径は約 1.6cmの円形を呈する。1031　〈9号竪穴〉　小形の甕形土器の底部片。底面径 5.8cmを測る。器面が荒れているが焼成前に穿孔している。孔径は2.65cmと 2.3cmの楕円形を呈す。1035　〈3号竪穴〉　茶褐色を呈する粗い刷毛目調整の甕形土器の底部である。広い黒変が見られる。底径は 7.4cmを呈しやや大形の甕であろう。穿孔は焼成前に施され、甕底のほぼ中央部に直径 3.8cmの円形を呈す。煮沸時の焼成に起因すると思われる剝落がある。

**甑B**、1033　〈12号竪穴〉　甕形土器の底面に焼成後穿孔している。内外から力を加え、13mmと6mmの細長い三角形に穿っている。胎土に砂粒を多く含み、器面に黒変が見られる。器腹部に煮沸時に出来たと思われる剝落痕が一面にある。1034　〈13号竪穴〉　薄手の器壁をもつ甕形土器に、焼成後、内部から力を加え、 2.4cmと 2.6cmの楕円形の孔を穿っている。粗い刷毛目で調整した外面は、二次的な火熱のため、色調、固さ、剝落の変化を起こしている。

**c．大形甕形土器**

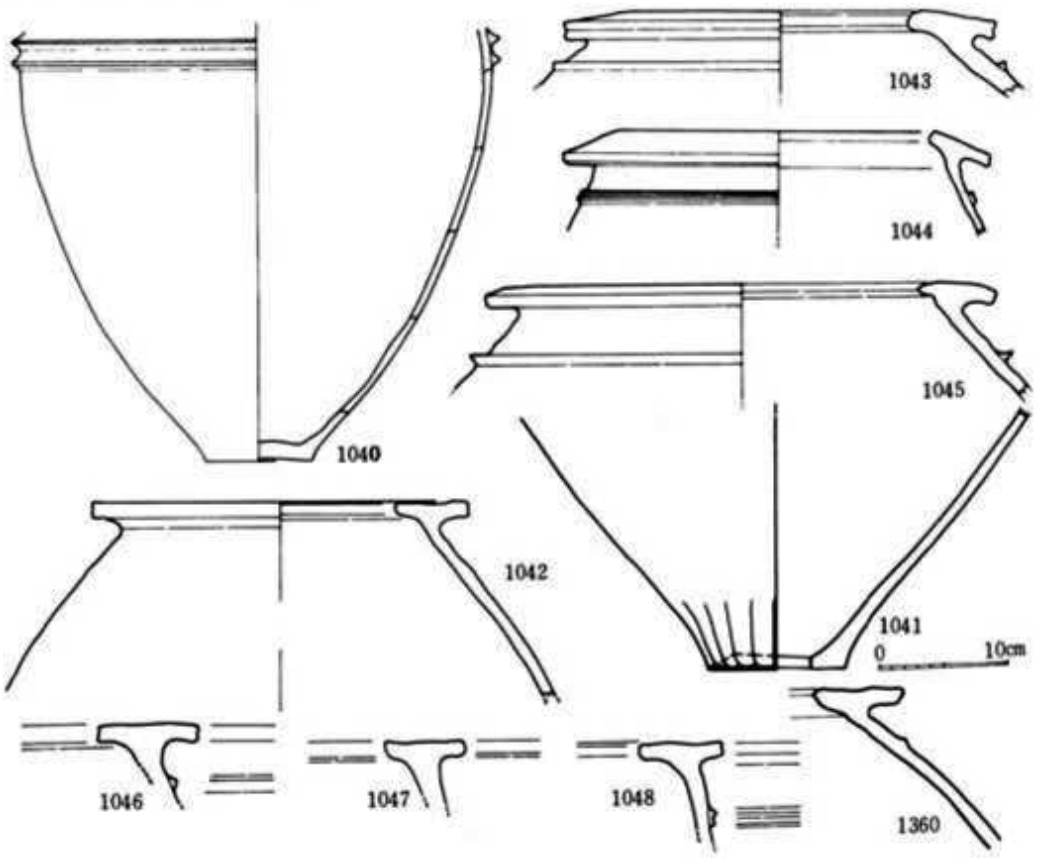
1040　〈1号竪穴〉　胴下半部のみ残存する。最大径の直上に二条の断面コの字状の貼付け突帯を持ち、胴部はあまり脹らない。径12cmを測る上げ底気味の平底である。内外面とも、ナデ調整で仕上げる。胎土に砂粒を含み焼成は良。淡茶褐色を呈し胴部両端に黒変がある。1041　〈2号竪穴〉　底部片。底径10.6cmを測り、ほぼ底面全体を内部から打ち欠いている。胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡茶褐色を呈す。

**d．壺形土器**

**壺A**、胴部片である。突帯は中凹み状の四角形、即ち口唇状の断面をなす。1050　〈14号竪穴〉　器体の最大径のすぐ下方に、一条の突帯を巡らす。外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈し内外面に黒変が見られる。調整は横ナデであり、胎土に1～3mmの砂粒を含む。焼成は良いがもろい。1051　〈14号竪穴〉　器体の最大径のある上下方に一条ずつの口唇状突帯を巡らす。黒褐色を呈す。1052　〈11号竪穴〉　器体の最大径のすぐ上方に2条の突帯を巡らす。赤褐色。

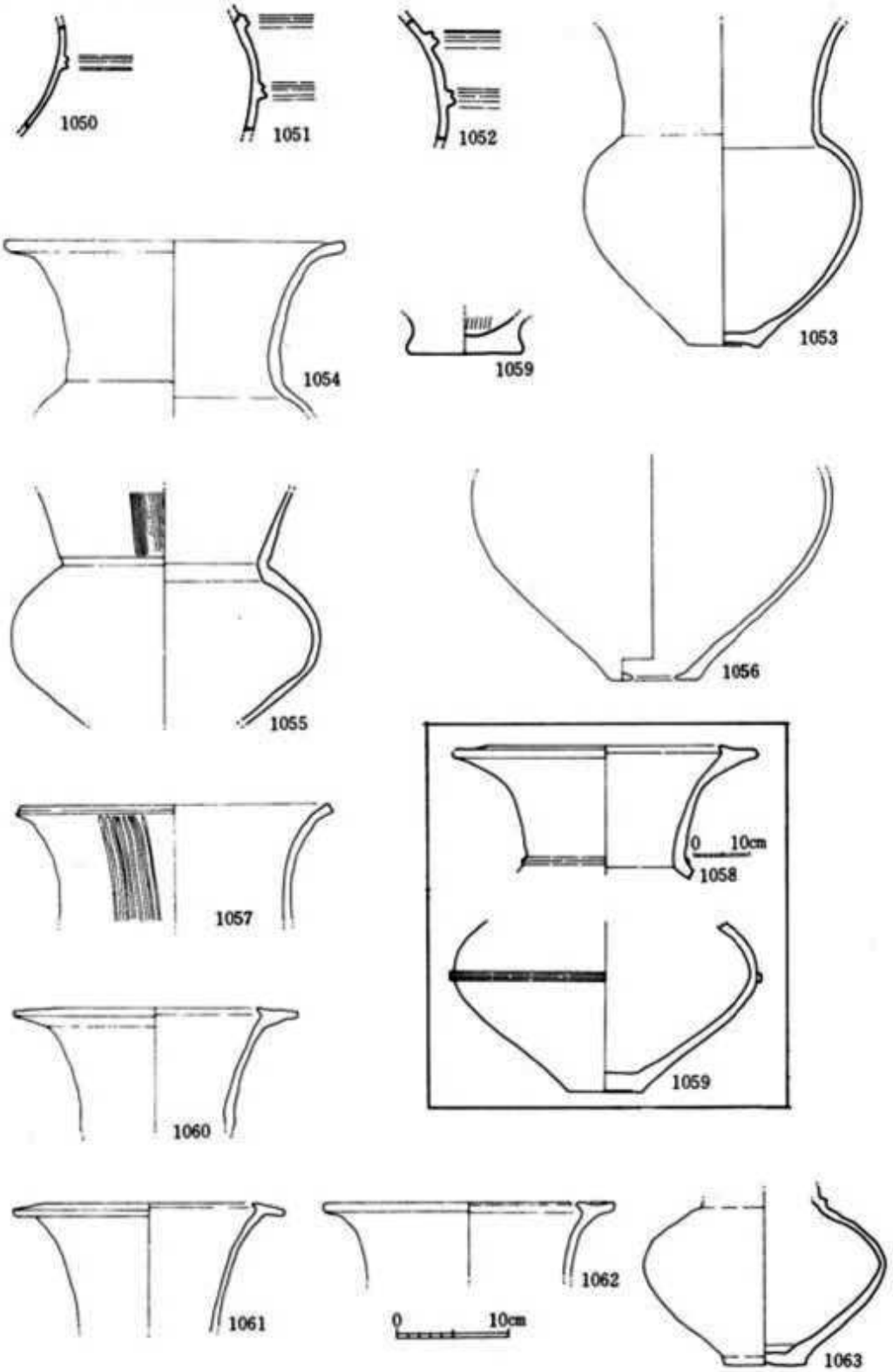
**壺B**、1053　〈2号竪穴〉　広口の高い頸部は立ち気味に外反する。体部より頸部は大きく屈曲する。彎曲口縁の口縁部は開く位置から欠失している。突帯は持たない。器壁は比較的薄い。肩は少し下がり余り脹らない。上げ底の底部は 6.4cmを測り小さい。最大径は胴部にあり24.8cm、器高は現状で28cmを測る。黄褐色を呈し黒変がある。1～5mmの砂粒を多く含む。外面は横方向に刷毛目調整痕が残り、内面はナデで調整しているが、器面は荒れている。1054　〈13

第25図　大形甕形土器実測図




号竪穴〉　単口縁を持つ広口壺の口縁部である。頸部は立ち気味に外反し、大きく開き肥厚した口縁端部がつく。赤褐色を呈し、内面に広い黒変が見られる。内外面とも丹塗りが見られる。1～5㎜の砂粒を含む。器面は荒れているが、横ナデ調整と思われる。1055　〈6号竪穴〉　頸部が直線的に広がって上がる広口壺。最大径は胴部中位にある。頸部と胴部の境に幅7㎜の横ナデ調整による凹線があり、頸部外面は縦方向の刷毛目調整。淡茶褐色を呈し黒変がある。1056　〈13号竪穴〉　上部を欠く。外面全体に丹塗りの痕跡がある。底部を焼成前に穿孔している。色調は赤褐色である。1057〈〈14号竪穴〉　単口縁広口壺の口縁部辺である。推定口径28.2㎝を測る。頸部は立ち気味に外反し、口縁端は肥厚し大きく外方へ開く。横ナデによる調整で断面凹状に面を作っている。頸部外面の調整は横ナデの上を縦位斜位の細い刷毛目調整し、その後で幅9㎝の暗文を 8.5㎝の間隔で施している。外面は暗茶褐色を呈し、内外面に黒変が見られる。1058　〈8号竪穴〉　口縁部は鍬形を呈す。体部と頸部の接合部に断面三角形の貼り付け突帯を有し、大きく屈折する。外反する頸部は口縁部で大きく開く。口縁内端部は断面三角状に張り出す。体部欠損。1059　〈11号竪穴〉　頸部を欠失する広口壺である。胴部中位に最大径（推定27.4㎝）があり、底部よりの張り出しは大変大きい。胴部中位に断面口唇状の

第26図　壺形土器実測図



突帯を一条巡らす。赤茶色を呈す。底部は径 6.4cmと小さく浅い上げ底を呈す。器面の剝落がはげしいが、ナデによる調整と思われる。砂粒は殆ど含まず胎土は緻密である。1060 〈4号竪穴〉、1061 〈14号竪穴〉、1062 〈11号竪穴〉 いずれも断面鍬形状の口縁を呈す広口壺である。1061のみ口縁端部が外方で下がる。頸部が立って口縁部が外方へ広がり平坦面を作っている。いずれも赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、横ナデ調整で仕上げている。1061に黒変が見られるがいずれも丹塗り痕跡は見られない。

**壺C**、1063 〈52号土壙〉 肩が中位に下がり、珠算玉形を呈す。最大径は21.8cmを測り中位にあり、体部と頸部の境に断面三角形の突帯を有す。頸部は欠失するが、細頸の袋状口縁壺と思われる。赤褐色を呈し肩部に黒変が見られるが、丹塗りの痕跡は器面が荒れている為不明。内面は黒褐色。胎土に1～5mmの砂粒を多量に含む。平底である。

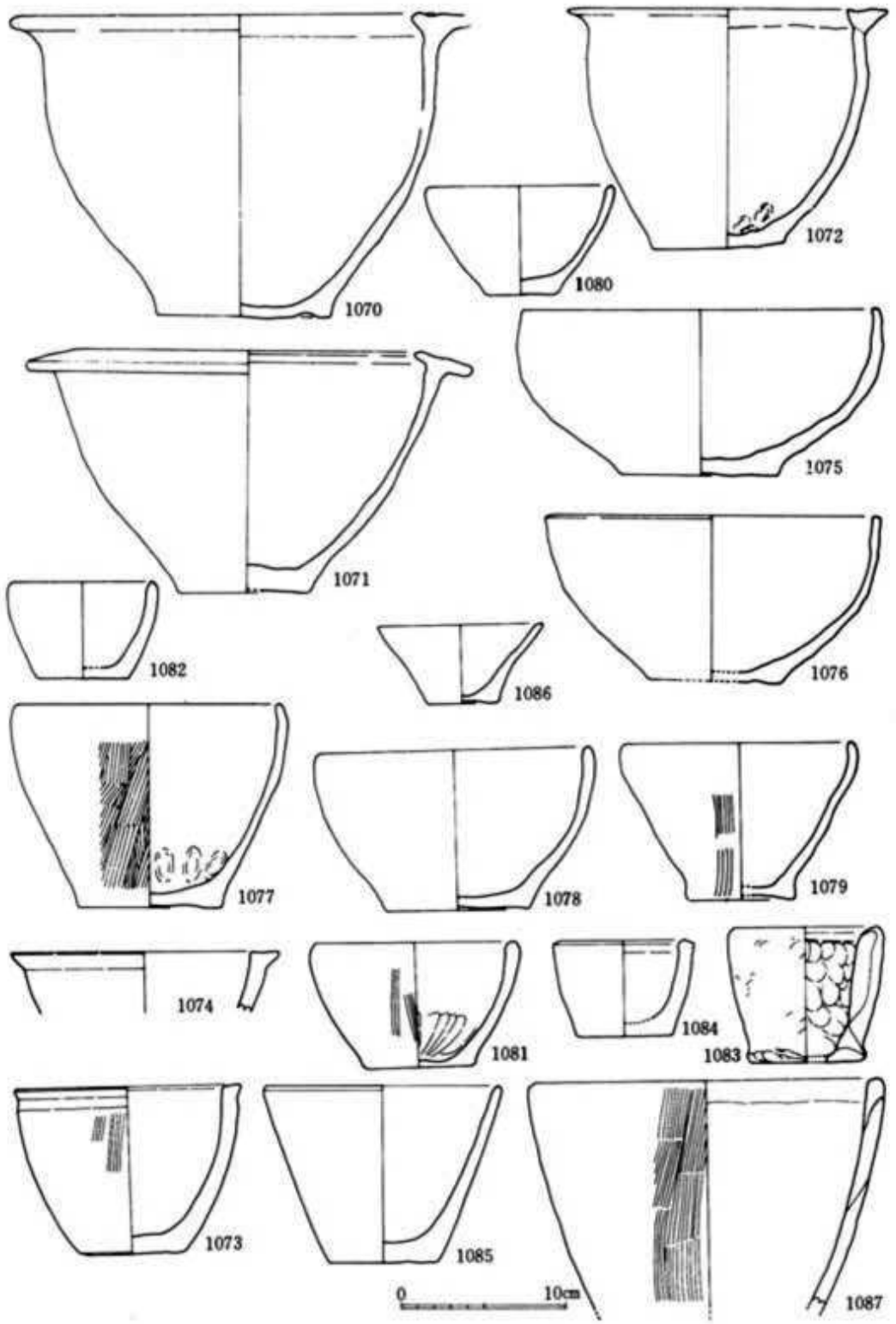
**e．鉢形土器**

**鉢A**、断面が逆T字状、あるいは逆L字状の口縁部を持つ鉢形土器であり、中形から小形製品まである。1070 〈P63〉 第Ⅲ様式の中形。半円形を呈し、しっかりした底部がつく。口縁断面は逆T字状である。口縁外径27.8cm、器高17.8cmを測る。調整は縦方向のナデで仕上げる。頸部に一条の沈線がある。外面は淡茶白色を呈し、底部、口縁の一部に黒変がある。内面は赤褐色を呈し、胎土に1～4mmの砂粒を含む。1071 〈122号土壙〉 口縁部は外斜し、逆T字状を呈し、胴部の張りは小さい。口縁外径27.2cm、器高14.25 cm、底径 8.0cmを測る。外面は刷毛目調整で茶褐色を呈し、底部に黒変がある。内面はナデ調整で指頭調整痕が顕著であり、黒褐色を呈す。胎土に1～5mmの砂粒を多量に含む。1072 〈194号土壙〉 口径20cm、器高14.4cmの小形深鉢である。口縁両端部は鋭角的に張り出し、調整は粗雑であり、内壁に粘土帯接合線が沈線として顕著に残る。器体にゆがみがあり、器面は荒れている。胎土に大粒の砂粒を多量に含み、赤褐色を呈し、黒変がある。ナデツケで調整している。1073 〈13号竪穴〉 口径13.8cm、器高 9.9cmを測り、深鉢形の小形器である。口縁端は断面三角形に短く張り出す。外面は胴部上半は刷毛目調整、下半部はナデ調整で、暗茶褐色を呈す。内面はナデ調整で灰褐色を呈す。底部は不安定な平底である。1074 〈11号竪穴〉 口縁部片。口縁上辺は平坦面をなす逆T字状を呈し、口径は推定で16.2cmを測る。器壁は厚く8mmを測り、黒褐色。

**鉢B**、口縁はいわゆる単口縁で、内彎する胴部は半円形を呈し、平底のタイプである。

**鉢BⅠ**、内彎する腰部は底部から大きく張り出し、口縁は直行に近い中形の浅鉢形タイプである。第Ⅲ様式の範疇にはいるが出土量は少ない。1075 〈8号竪穴〉 口縁外径21.35 cm、器高9.75cmを測る浅鉢である。口縁は直立気味に内彎し、端部は角ばる。胎土に1～5mmの砂粒を多く含む。内外面とも褐色を呈し荒れているが、ナデ調整で仕上げている。外面に黒変あり。1076 〈8号竪穴〉 1075とほぼ同じ器形を呈するが、口径20.2cmとやや小形である。灰黒色を呈し黒変が見られ、剝落がはげしい。内外ともナデによる調整と思われる。

第27図　鉢形土器実測図



**鉢BⅡ**、B形の中でも、口縁半径が器高より小さいタイプである。比較的大きな平底部を有すものから、口径8cm程度の小形品まであり、出土量も多い。浅い内彎で立ち上がる胴部はあまり張らない。1077　〈8号竪穴〉　口径16.2cm、器高 12.05cm、底径 8.8cmを測り小形である。口縁はいくらか内傾する単口縁である。外面は刷毛目調整であるが、上下端のみ横ナデで仕上げ、黒変があり灰褐色を呈す。内面は底面近くに指圧痕が見られ、ナデ調整で仕上げられ、灰色を呈す。1～2mmの小さな砂粒を多量に含む。底面は粘土接合線が見られ、調整は荒い。1078〈33号土壙〉　胴部の張りが大きめで、肥厚気味の単口縁がほぼ直行状を呈す。ナデ調整で仕上げ茶褐色を呈す。1079　〈7号竪穴〉　胴部で外反する器形で、やや肥厚している。口縁部は直立気味に内彎する。底面はやや上げ底を呈する。外面は赤褐色で刷毛目調整の後、ナデによって平滑に仕上げている。内面は灰褐色を呈しナデ調整である。1080　〈11号竪穴〉　小形で、口径（推定）11.4cm、器高 6.3cmを測る。底部は厚く安定している。淡褐色を呈し黒変がある。1081　〈13号竪穴〉　口径12cm、底部 7.4cmを測る。ナデ調整で仕上げているが、内面には指頭による圧痕が残る。平底部の調整は雑で薄く、口唇部は厚ぼったい。茶褐色を呈し、黒変がある。1082　〈1号竪穴〉　推定口径 8.4cmの小形である。口唇部は丸く、平底は安定している。灰褐色を呈する。

**鉢BⅢ**、大きい平底で胴部の張りは殆どなく、口唇部に平坦面を作る。小形である。1083　〈183号土壙〉　胴部壁がとても厚く底部が薄い。底面端に張り出しを作る。内面は指頭押圧調整、外面は縦方向のナデである。推定口径 8.8cm、器高8cmを測る。淡茶褐色を呈し、胎土良好。1084　〈P63〉　口径 8.6cm、器高 5.7cmを測る小形。横ナデ調整。口唇内端部は肥厚する。乳褐色を呈し、底部に黒変がある。胎土良。

**鉢C**、1085　〈P63〉　単口縁の口縁より底部までほぼ直行し、逆円錐台形を呈する器形である。厚めの底部は平底でBⅡに比して小さい。外面は刷毛目調整後ナデ調整で仕上げている。器面は剝落が多いが淡茶褐色を呈し黒変がある。内面は灰褐色を呈しナデ調整である。

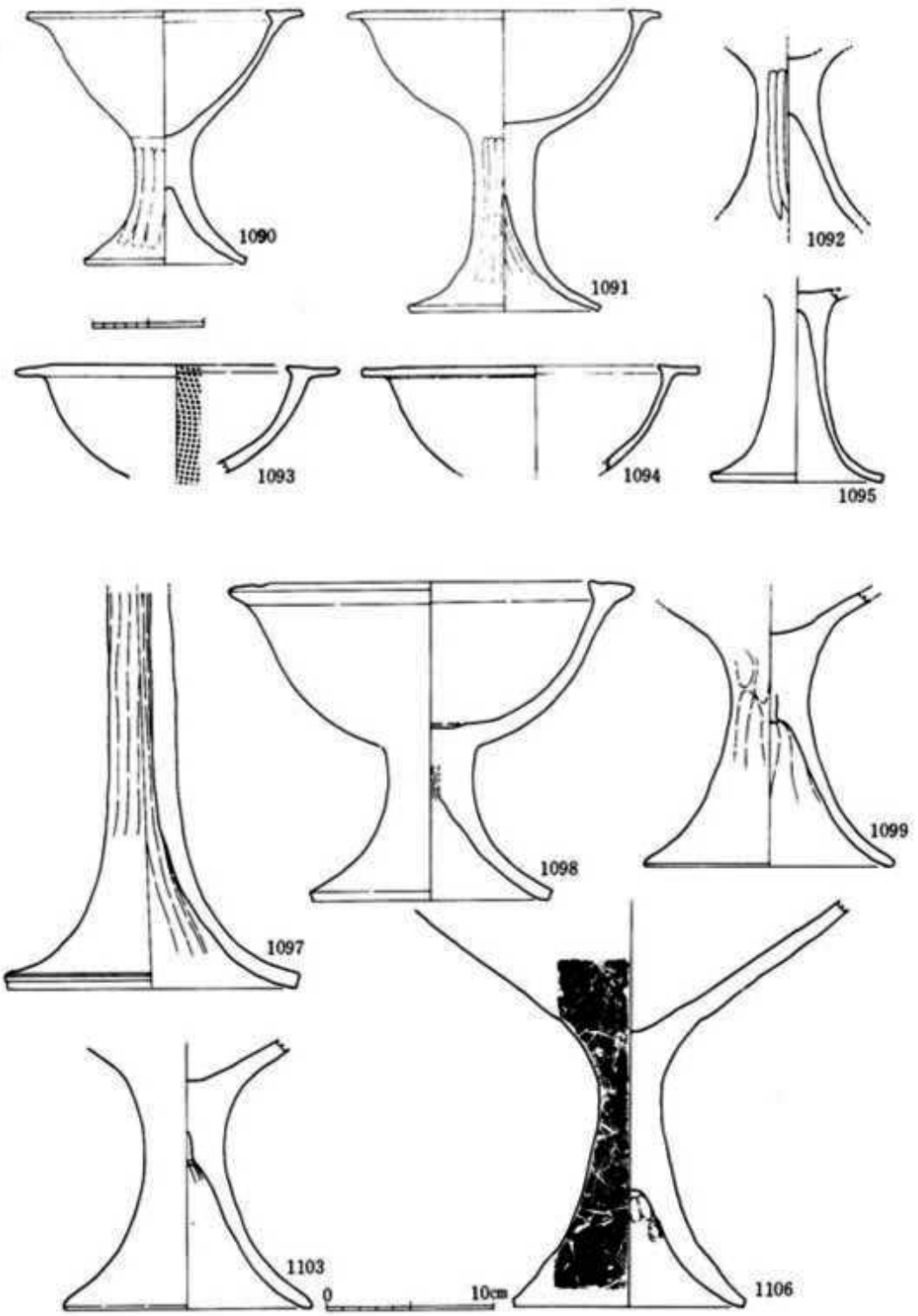
**鉢D**、胴部でくの字形に屈曲するタイプである。1086　〈3号竪穴〉　口径10cm、器高 4.6cm、底部径 4.4cmの小形である。口縁端より内彎気味に下がる器壁は胴部で大きく屈折する。器面は荒れているが茶褐色を呈し、外面は刷毛目調整の後指圧調整で仕上げている。底面は卵形を呈し上げ底気味の平底である。

**鉢E**、単口縁の深鉢形のタイプである。1087　〈4号竪穴〉　開口部はゆるやかに内彎しながら外斜する。口唇部は丸味を帯びた簡単な調整である。最大径は口唇部にあり、外径21.5cmを測る。内面はナデ、外面は縦方向の刷毛目調整である。茶褐色を呈し、口縁部まで黒斑がある。胴部下半の器表面に剝落がある。

**f．高坏**

**高坏A**、坏部は僅かな内彎で立ち上がるロート状を呈し、鍬形状の口縁部が水平につく。脚部

第28図　高坏形土器実測図



は短い。1090　〈 189号土壙〉　坏部口外径24.8cm、器高22.0cmを測る。坏部深さは10.9cmで、ロート状を呈し深い。裾部はあまり広がらない。調整は、脚台外面は縦方向の篦磨き、あとはナデで仕上げる。口縁部は水平で外方へ広がり面どりがある。脚台内面に横刷毛のアタリが残存している。内方へも断面三角形強い張り出しがみられる。赤褐色を呈し、口縁の一部に黒斑がある。外面に丹塗りの痕跡がある。胎土に１～５mmの砂粒を多量に含む。

**高坏B**、坏部は皿状をなし、脚部は高くなり、裾部は広がり面取りをしている。口縁の上部に平坦面をつくる。頸部に突帯を持たない。

**高坏BⅠ**、1091　〈１号竪穴〉　坏部は幾分深めの皿状を呈す。薄めの口縁の上部には平坦面をつくり、内方への張り出しも少ない。坏部の外面は刷毛目痕が残り、丹塗り磨研で仕上げ、脚台の外面は縦方向の篦磨きで丹塗りがあり、内面は上方に絞り痕があり、下方はナデ調整で仕上げる。口縁外径27.7cm、器高26.3cm、裾部径17.0cmを測り、大形品である。胎土に１～５mmの砂粒を含む。内外面共、淡茶褐色を呈す。1092　〈 189号土壙〉　外面、坏部内面とも丹塗りの痕跡があり、外面は篦磨きで仕上げる。器壁が厚く、脚台の壁は坏部まで達しない。1093　〈堆積層〉　脚台を欠失している。口縁外径29.2cmを測る大形製品。坏部は皿状を呈す。口縁上部に平坦面をつくり、外方へ大きく張り出す。口縁上坦面から内部まで丹塗りを施す。淡赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。1094　〈８号竪穴〉　口径28.9cmを測る。淡赤褐色を呈す。丹塗りの痕跡はない。1095　〈１・８号竪穴〉　坏部を欠失している。脚部の高いタイプである。内壁は坏部まで達する。器面は淡茶褐色を呈し、荒れているが、篦磨研痕が残る。裾部端は、はっきりした面をとっている。1096　〈 189号土壙〉　外面、坏部とも丹塗りの痕跡があり、外面は篦磨きで仕上げる。器壁が厚く、脚部の壁は坏部まで達しない。

**高坏BⅡ**　1097　〈14号竪穴〉　器壁の厚い円筒状の脚台は長い。裾部は平均した外反で開口し、端部は平坦面を呈す。内面には強い絞り痕が見られ、裾部は横ナデ、外面は篦ナデ調整である。赤褐色を呈し、器面は荒れている。

**高坏BⅢ**、坏部はBⅡタイプより深く、器壁が張り出し半円形を呈する。口縁は鍬形状を呈し外方への張り出しが少なくなり、面取りは見られず、内方への張り出しは上がり気味になる。脚台は低めで、脚上部では中心に芯を当て絞ったものと思われる。1098　〈14号竪穴〉　口縁外径24cm、器高18.5cm、裾口径13.8cmを測る。器面は赤褐色を呈し荒れているが、ナデ調整による仕上げと思われる。胎土に細かい砂粒を含むが少なく、胎土は細かい。裾端には面取りがある。1099　〈10号竪穴〉　外面は篦削り調整と思われる。器体坏部よりなだらかな外反で裾部まで達し器壁は薄い。

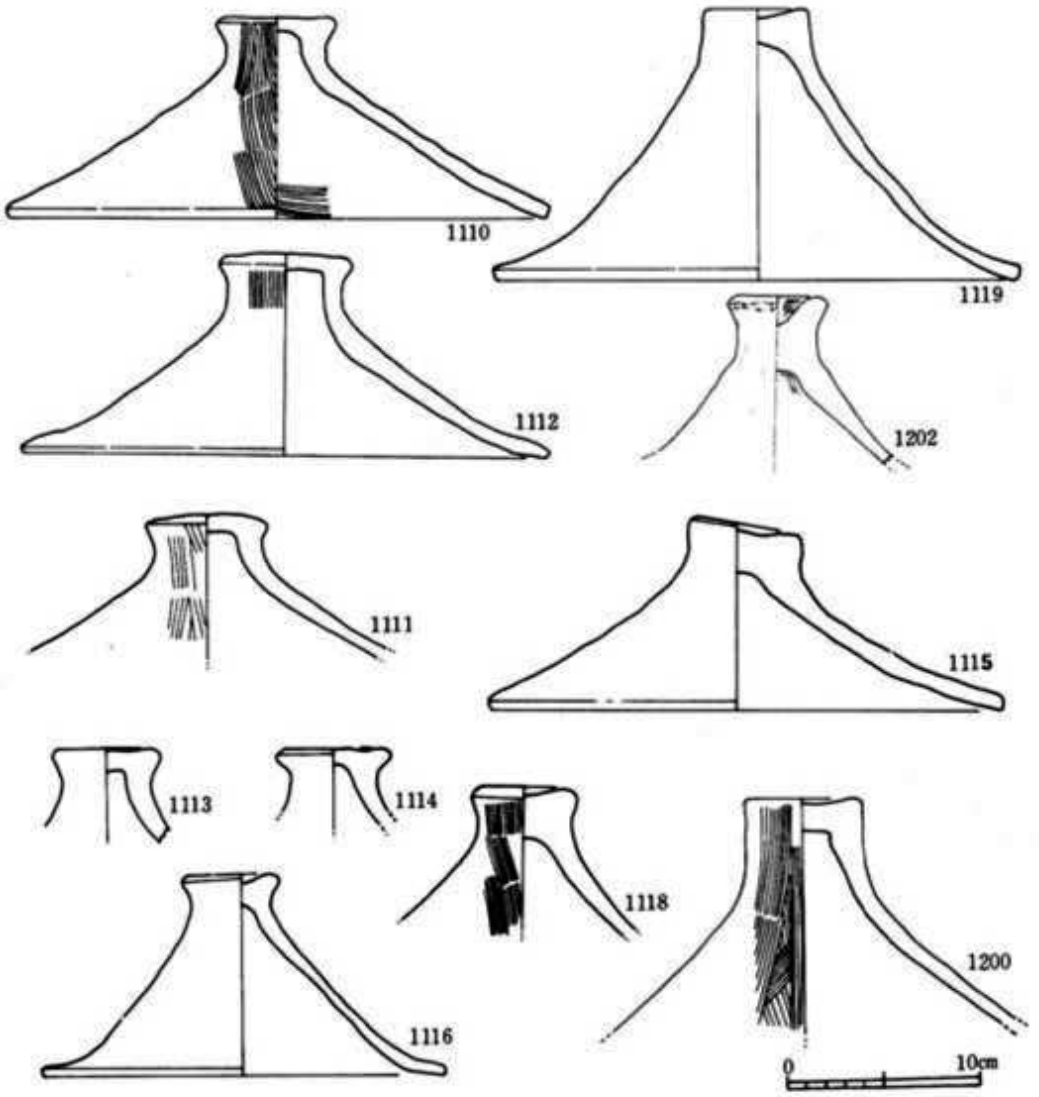
**高坏C**、坏部が脚部より直線的に笠状に広がるが、口縁部は不明。脚台上部は円柱状を呈し、裾部はあまり開かず、面を取っている。1100　〈14号竪穴〉　口縁部を欠くが、裾口径13.8cm、現状で器高23.5cmを測る。柱状を呈す脚台上部は傾く。調整は坏外面、脚台内外ともナデ調整

後、幅 2.5cmの板状工具で強い刷毛目調整を施している。柱状部は刷毛目後、縦ナデ調整も見られる。器面は褐色を呈し、1～5mmの砂粒を含み焼成は良好。脚台外面に黒斑、坏部内面に黒変がある。

**g．蓋形土器**

**蓋A**、大きく開く笠形を呈する。「つまみ」部は大きくくびれている。笠部は内彎状に開き、浅く屈曲して口縁部に続く。底部は中央部がやや盛り上がる。内底部はコの字状に丁寧に仕上げる。1110　〈12号竪穴〉　口径（推定）は28.3cmで大形である。外面は粗い刷毛調整で底部より口縁部まで仕上げている。底部は指圧調整である。つまみ部のみは縦位の篦調整で、他は

第29図　蓋形土器実測図



ナデ調整である。底部に絞り痕が見られる。内外面とも赤褐色を呈し、内面は全体に黒変がある。1111　〈11号竪穴〉　幅1cmの板状工具による粗い刷毛目で外面は仕上げている。内面はつまみ部に絞り痕が見られ、その後ナデによる調整。笠内部は指圧調整である。胎土は1～4mmの砂粒を含む。1112　〈12号竪穴〉　口径27.5cm、器高10.2cmの大形のAタイプである。内外面ともナデ調整で仕上げている。1～4mmの砂粒を多く含み焼成は良。赤茶色を呈し内面に黒変がある。1113　〈11号竪穴〉　底部のみ残存。外面は淡褐色、内面は黒褐色。磨耗のため調整は不明。1114　〈11号竪穴〉　底部径6cmを測る。平底に近いが、中央部がやや盛り上がり気味にナデ調整で仕上げている。外面は赤褐色を呈し、内面は黒変している。

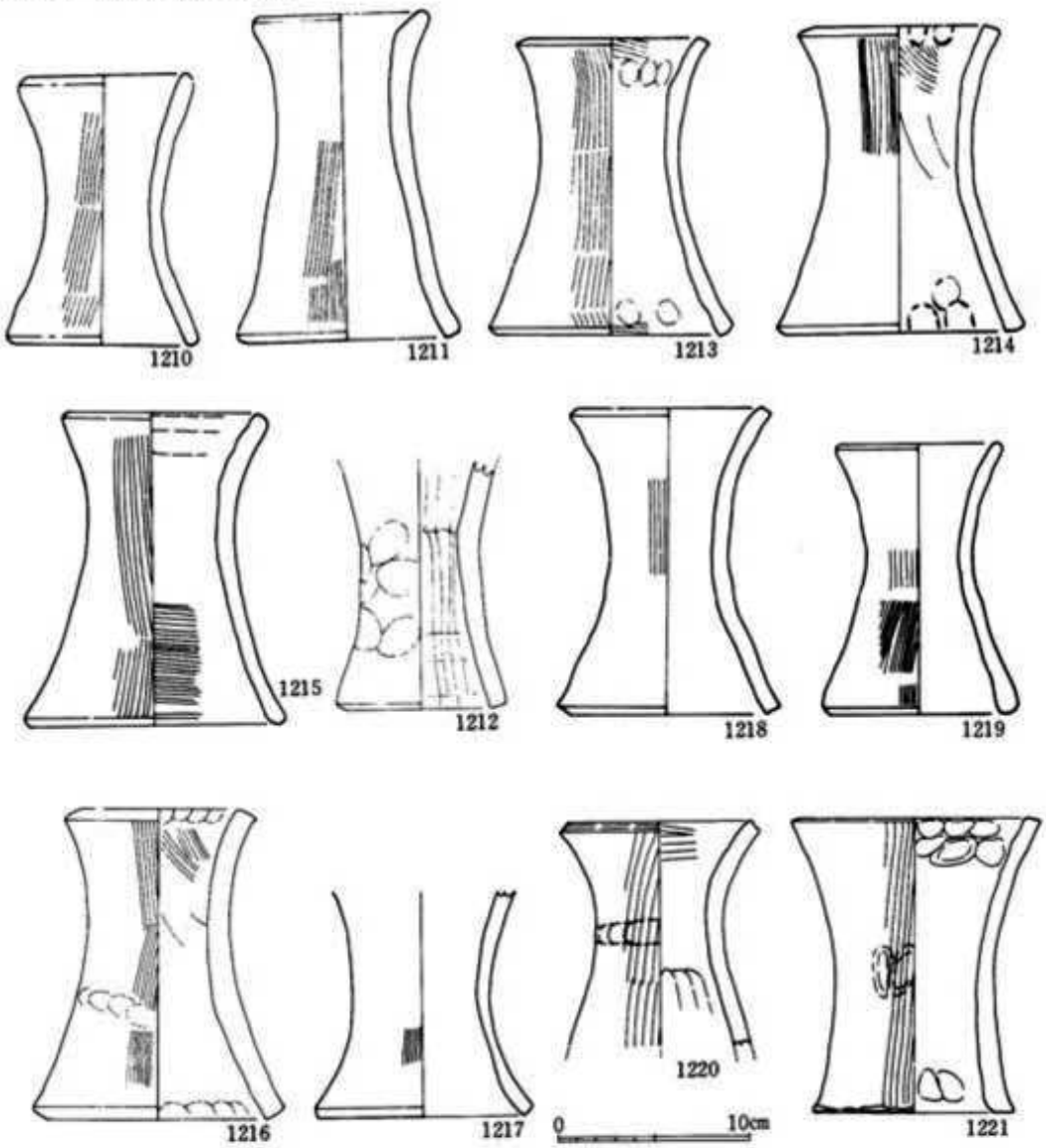
**蓋B**、底部が上げ底を呈し、つまみ部がくびれる。内底はU字状の簡単な成形である。小形で器高の高いタイプもある。1115　〈1号竪穴〉　つまみ部のくびれが小さく、底部は不安定な上げ底である。底部から口縁部まで、外反しながら大きく開く。口径は27.2cm、器高は9.55cmを測る。外面は淡赤褐色、内面は褐色の色調である。胎土に1～2mmの砂粒を多量に含み、焼成は良好。1116　〈4号竪穴〉　口径20.6cm、器高10.2cmと小形で器高の高いタイプである。上げ底を呈し、つまみ部のくびれは大きく、胴部は内彎しながら開く。口縁下の屈曲は浅い「くの字状」を呈する。色調は淡赤茶色。外面は丁寧なナデ調整。1117〈〈1号竪穴〉　1116と同じ器形になると思われる。底部はV字状に上がる。外面は淡茶褐色、内面は黒褐色である。つまみ部の外面に押圧痕、内面に絞り痕が顕著に見られる。1118　〈3号竪穴〉　つまみ部のくびれはやや浅く、上げ底も浅い。縦位の指頭圧後、丁寧な刷毛目調整で仕中げている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

**蓋C**、つまみ部はくびれず直上する。浅い上げ底の底部からゆるいくの字に反転して、内彎気味の胴部へ続く。口縁部には外反のままはいる。底部断面はコの字状を呈する。器高は高い。1119　〈12号竪穴〉　底部径 5.4cm、口径27.3cm、器高13.7cmを測り、大形で器高が高い。外面は横ナデ、内面は縦ナデの後横ナデ調整により仕上げている。色調は外面は淡茶褐色、灰褐色、内面は淡茶色を呈し黒斑が見られる。1200　〈14号竪穴〉　底部径は6cmを測り直上する。外面は刷毛調整、内面は横ナデで丁寧に仕上げている。内に絞り痕が見られる。胎土に砂粒を多く含むが焼成は良好。内外面とも淡黒褐色を呈し黒変が見られる。

**h．器台形土器**

**器台A**、器受部、裾部の口径がほぼ等しく、鼓状を呈すタイプである。従って、くびれがほぼ中間近くにあり、小形のものが多い。1210　〈7・8号竪穴〉　器受部、裾部は内彎気味に端部に達する。内面はナデ、外面は刷毛目で仕上げている。器受径 8.2cm、裾口径 8.9cm、器高13.7cmを測る。胎土に砂粒を含む。色調は外面が乳灰色、内面は淡茶色を呈す。破片は7号溜と8号溜に分かれて出土した。1211　〈13号竪穴〉　器受部が内彎しながら開くBIIタイプである。外面は縦位の、内面端は横位の指ナデ調整である。乳灰色を呈す。1212　〈大深田西区〉

第30図　器台形土器実測図




小形の円筒形に近いタイプである。外面にリング状に三条の指押え痕と、それによって生じた内側の絞り痕が顕著に見られる。裾部は内彎気味に開がる。外面は刷毛目、内面はナデで調整している。胎土に砂粒を多く含み、乳茶灰色を呈し、黒斑が見られる。

**器台B**、器受部のくびれが高いものである。

**器台BⅠ**、1213　〈1号竪穴〉　脚部の広がりが大きいのに比し器受部が小さく、器受部のくびれが高く小さい。器受部径10.0cm、脚部径12.6cm、器高15.0cmを測る。外面は刷毛目、内面は中央部ナデ、口縁部、裾部内部はナデの後指頭による調整である。色調は乳白色を呈し裾部に黒変が見られる。胎土に小砂粒を含む。1214　〈8号竪穴〉　脚部の広がりが大きいBタイ

プである。器受部を指圧成形により内彎させている。外面は刷毛目、内面は刷毛目の後指頭圧痕、端部はナデによる調整である。色調は灰褐色を呈す。1215 〈12号竪穴〉 大型のBⅡタイプである。外面は粗い刷毛目調整、内面器受部は強い横ナデ、裾部は粗い刷毛目調整である。淡茶褐色を呈す。1216 〈3号竪穴〉 内外面とも茶褐色を呈し、黒変が見られる。外面は指圧調整の後刷毛目調整、内面は器受部は刷毛目、裾部は指圧調整で仕上げている。胎土に砂粒を含むが緻密である。1217 〈4号竪穴〉 灰褐色、明茶褐色を呈し、黒斑が見られる。胎土に砂粒を多く含み器面は荒れている。外面は幅 1.9cmの粗い刷毛目調整、裾部は内外面とも横位のナデ調整で仕上げている。

**器台BⅡ**、1218 〈7号竪穴〉 器受部に比し裾部が大きく、くびれが高いタイプの中でも裾部が内彎気味に端部に達するタイプである。外面は刷毛の後ナデ調整、内面は縦位の指ナデ調整で仕上げている。器受部口径10.4cm（推定）、器高15.6cmを測る。胎土に砂粒を多く含み器面は荒れている。淡赤褐色を呈す。1219 〈8号竪穴〉 器高13.7cmの中型のBⅡタイプである。外面は刷毛調整、内面は指ナデ、指圧調整である。赤褐色を呈し黒変がある。1220 〈4号竪穴〉 外面はくびれ部に横位の指押痕が見られ、その後全面を斜位の刷毛調整で仕上げている。内面は中央部に縦位の指圧調整、器受部に横位の刷毛調整を施している。砂粒を多く含み、磨耗がはげしい。乳灰色、赤褐色を呈す。

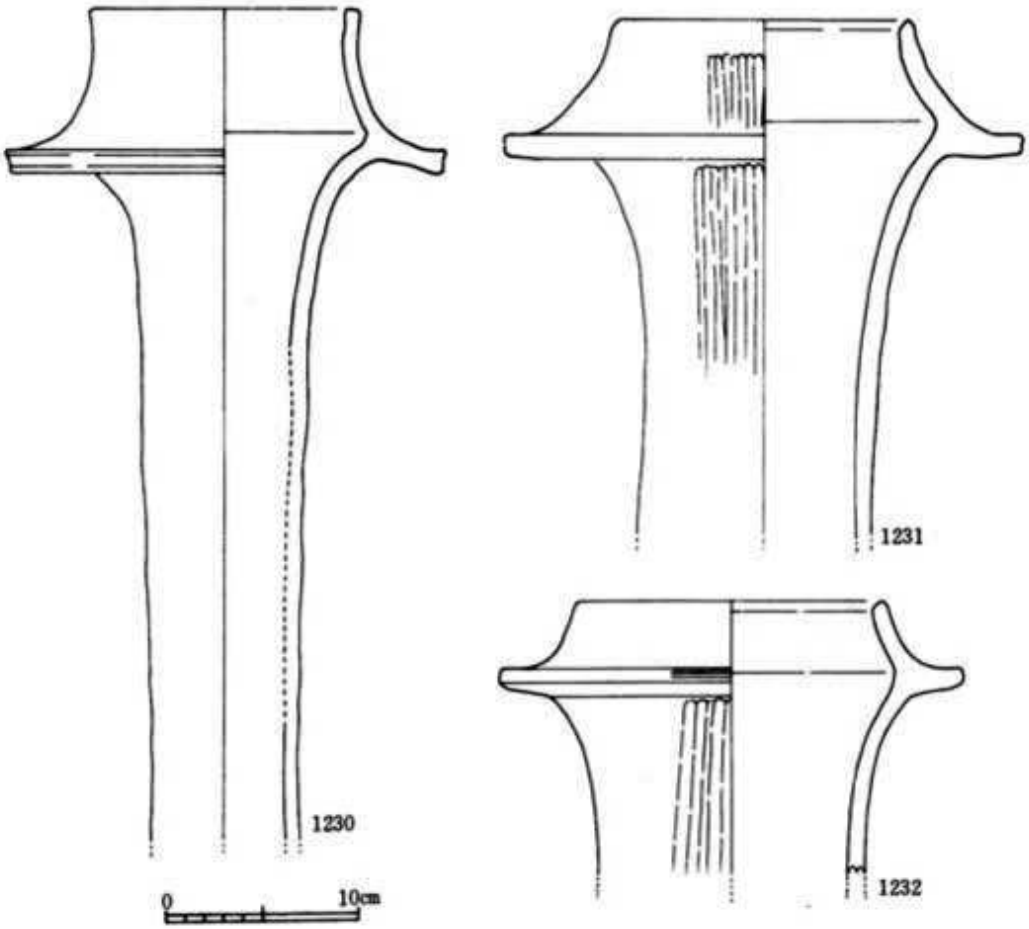
**器台C**、器受部の開きが、脚部より大きいものである。1221 〈大深田西区〉 比較的大形の器台である。器高15.0cm、裾口径10.5cm、器受部口径13.0cmを測り、裾部より器受部が大きなタイプである。外面は明茶褐色を呈し黒斑が見られ、くびれ部は縦位に指圧痕、全面に縦位の刷毛目痕が走る。裾端部は不規則に張り出し仕上げが雑である。内面は明茶褐色を呈し、両端部に指圧調整を施している。

**ⅰ．筒形器台**

**筒形A**、長めの器受部がほぼ直立し、鍔状部がやや下がり、胴部の細いタイプである。1230 〈1号竪穴〉 鍔状部の最大径は23.8cmを測り、肥厚する端部はやや下行する。器受部は直行気味に強く外反する。口縁端部はコの字形を呈する。胴部の最小径は口縁端より39.5cmにあり径 7.5cmを測る。外面の調整は縦方向の篦磨きである。鍔状部、口縁部の端部は横ナデ仕上げである。内面は、口縁より鍔状部までは横ナデ、それより下は指頭によると思われるナデで調整しているが、リング状に絞り痕が残っている。色調は内外面とも赤褐色を呈し、下胴部に黒変がある。外面に丹塗りを施した形跡がある。胎土に1～3mmの砂粒を多量に含み焼成は良好であるが、器面は荒れている。

**筒形B**、ゆるやかに外反する口縁部は斜行を呈し、口径はやや大きい。鍔状部は上に反り、横方向に張り出す。胴部径はAタイプより大きい。Aタイプと同じく調整は縦方向の篦磨きである。器面は荒れているが、丹塗りの形跡は見られない。1231 〈6号竪穴〉 上反する鍔状部

第31図　筒形器台実測図

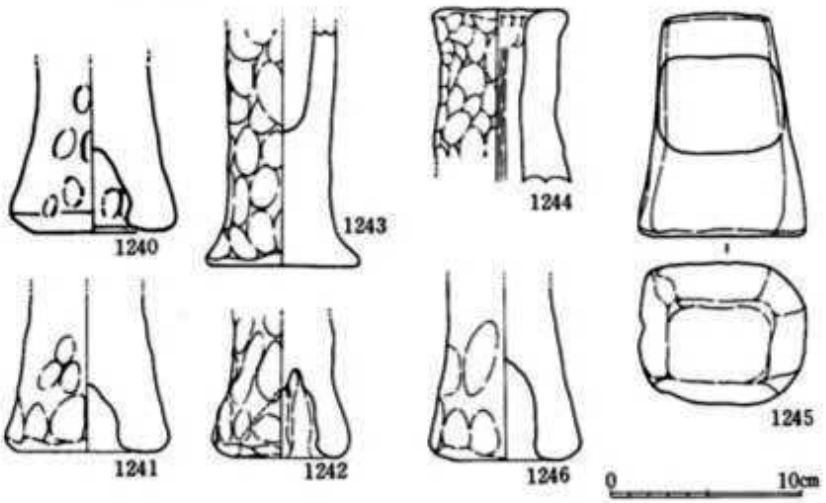



は横に大きく張り出す。鍔状部端部は横ナデによりコの字状を呈すが、口縁端部はV字状を呈し、外面は縦方向に幅5㎜前後の細めの篦磨きで調整する。内面はナデ調整である。下胴部より裾部を欠失している。胎土に砂粒を多く含む。内外面とも黄褐色を呈し、外面に一部黒斑あり。口径14.9cm、鍔状部径26.8cmを測る。1232　〈5号竪穴〉　1231と殆ど同じタイプであるが、器受口径が15.6cmでやや大きい。胴部外面は幅7㎜の篦磨き調整である。鍔状部端部は刷毛目痕が見られる。灰褐色を呈する。

筒形器台は、三根町本分貝塚、唐津市萬籔遺跡、鳥栖市天満宮東方遺跡、小城町宿遺跡、本告遺跡[1]、鳥栖市曽根崎遺跡、千代田町詫田貝塚及び西姉貝塚、神埼町利田柳、川寄若宮遺跡[2]などの弥生遺跡から出土している。萬籔のは丹塗りのAタイプで、萬籔Ⅲ類土器（中期前葉）[3]に比定されている。牟田辺遺跡からは、三号住居址よりAタイプが、溝よりBタイプと思われるもの[4]が出土している。

3点とも透しはなく、2点には丹塗りの痕跡もない。廃棄されたかたちで出土し、裾部破片

第32図　支脚形土製品実測図




はなく完形品にはならない。副葬用とは考え難い。

**j．支脚形土製品**

**支脚A**、1240　〈14号竪穴〉　裾部に穿孔した円柱状で、中央部でくびれるタイプである。内外面とも指頭圧による調整である。3点とも裾部のみの残存である。裾口径は 8.6cmを測る。いずれも赤褐色を呈し、器面が荒れ二次焼成を受けているものと思われる。1242は小形で中央部のくびれが大きく、胎土に砂粒を多く含む。内に絞り痕がみられる。

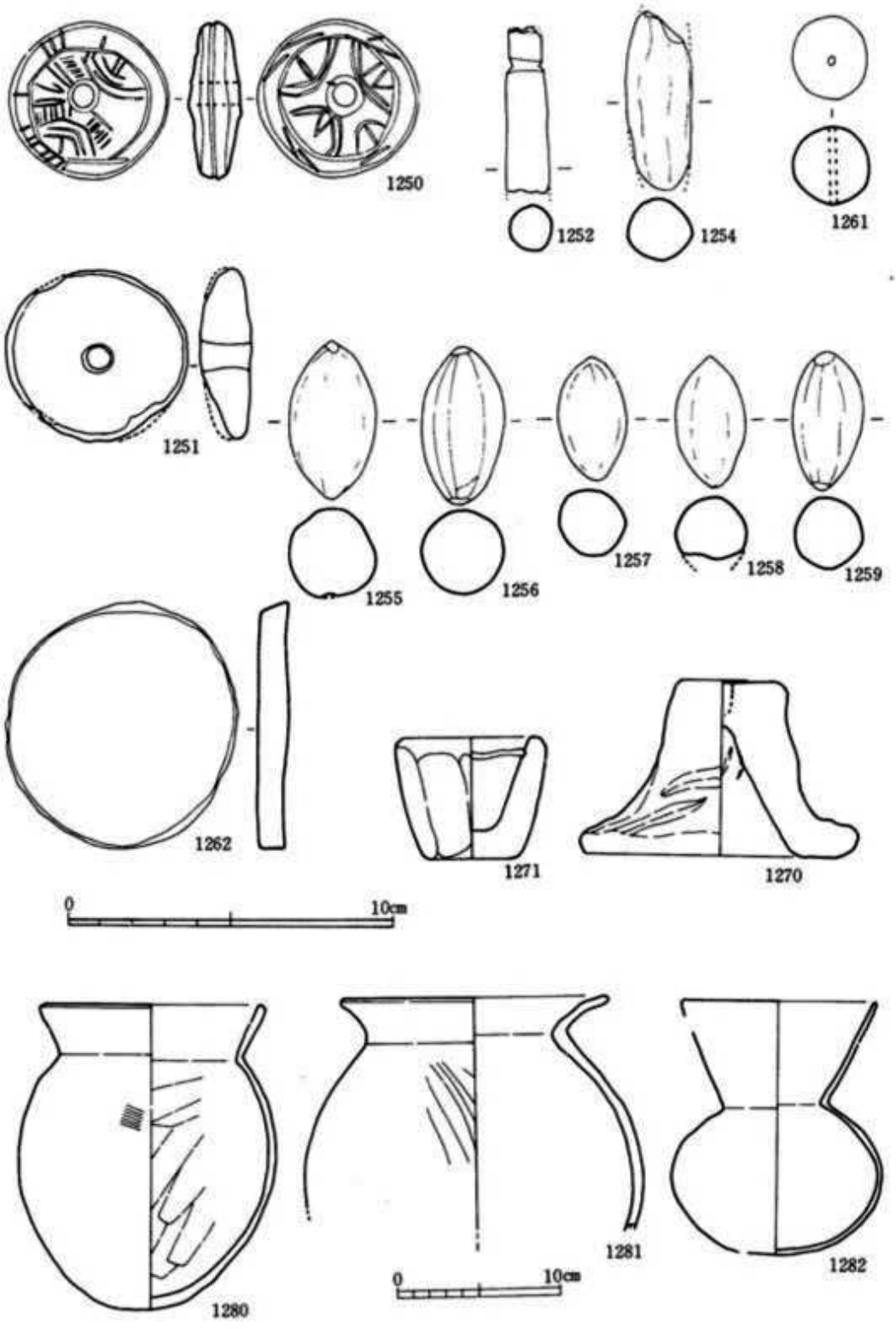
**支脚B**、1243　〈6号竪穴〉　円柱状を呈し、上半を穿孔し、裾部は安定させるため張り出し平底である。器面は指頭圧による調整である。底径は 7.9cmを測る。茶褐色、灰褐色を呈し黒斑がみられる。1244　〈194号土壙〉　1243と同タイプの上半部と思われる。上面は平坦状を呈し径7cmを測る。成形は軸に径 1.6cmと2cmを測る楕円状の棒を当て、そのまわりに粘土を巻きつけ、表面より指頭圧を加えている。赤褐色を呈し、二次焼成を受けた痕跡が多くみられる。

**支脚C**、1245　〈54号土壙〉　角錐台形を呈す。穿孔はない。底面は7cmと 7.9cmの隅丸長方形を呈し、器高は11.3cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、色調は茶褐色で黒変が見られる。二次焼成を受けている。

**k．土製品**

**土製紡錘車**　1250　〈堆積層〉　最大径 4.9cm、器厚 1.6cm、孔径 0.7cm、重さ31.7g を測る。表裏面とも篦様施文具による沈線文がある。円文、重弧文、列点文、笹文を組み合わせている。側面にも一条の沈線文が巡る。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好。茶褐色を呈す。1251　〈64号土壙〉　最大径 5.6cm、器厚 1.6cm、孔径 0.7cm、重さ25.7g を測る。縁辺部を一部欠失している。乳灰色を呈す。

第33図　土製品・土師器実測図



**土　錘**　1252　〈堆積層〉　中脹らみの円柱形を呈し、溝が上部と頂面に通る。砂粒を多量に含み赤褐色を呈する。下部約3分の1を欠失する。1254　〈堆積層〉　両端部を欠失する。中脹らみの円柱状を呈す。灰褐色で、最大径2cmを測る。

**投弾子**　1255　〈9号竪穴〉、1256　〈54号土壙〉、1257　〈193号土壙〉、1258　〈193号土壙〉、1259　〈12号竪穴〉、1255が最大で長軸 4.7cm、最大径 2.6cm、重さ26.6g を測る。茶褐色を呈し黒変する。1257が最小で長軸 3.6cm、最大径 2.1cm、重さ12.0g を測る。乳灰色を呈し黒変が見られる。

**土製丸玉**　径約 2.3cm、重さ12.1g でほぼ球形を呈し、中軸に2mmの貫通孔を持つ。胎土に砂粒を殆ど含まず、黒褐色を呈す。

**円板状土製品**　径 7.3cmで板状を呈す。周縁部の調整は焼成後施され、裏面より入念に行われている。表面は明茶色、裏面は黒色を呈し、胎土に1～4mmの砂粒を多く含む。

**ℓ．手捏土器**　〈12号竪穴〉　1270はhat を想起する蓋形を呈する。平担な頂部には深さ1cm、最大径5mmの穴を穿つ。外面は板状工具の木口で押捺した圧痕が残り、内面に絞り痕がある。砂粒を多く含み焼成良好で堅固である。1271〈8号竪穴〉は素縁平底のミニチュア。器高 3.6cm、口部最大径 4.5cmを測る。淡茶褐色を呈し、煤が付着する。

**3）土師器**

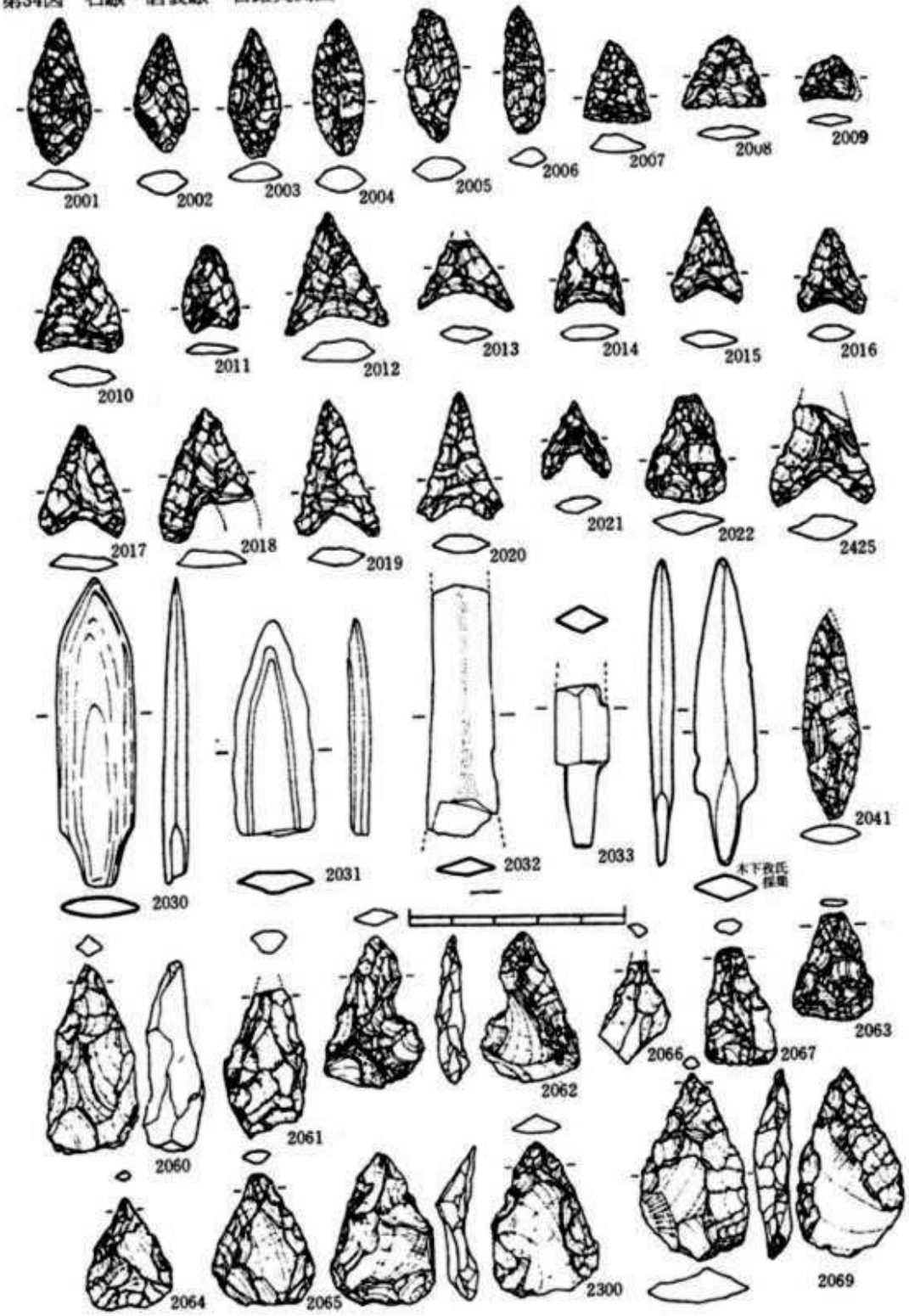
P73より、3点の土師器が出土した。1280　小形の甕形土器。口径14cm、器高18.4cm、最大径は胴部中位にあり15.8cmを測り、丸底である。器面は荒れているが、外面は刷毛目、内面は篦削りで調整している。灰褐色を呈し胴部に黒変がある。1281　壺形土器。最大径は胴部中位にあり20.8cmを測る。外面は粗い刷毛目、内面は篦ナデ調整である。茶褐色を呈し黒変がある。胎土に1～5mmの砂粒を多く含む。1282　丸底直口壺。口径12.0cm、器高15.2cm、最大径は胴部にあり12.9cmを測る。やや大形である。内彎気味に外斜して開く口縁部は頸部で強く屈曲し稜を作る。胴内部は横方向の刷毛目、他の調整は不明。乳灰色を呈し黒斑がある。

**(2)　石　器・石製品**

**a．打製石鏃**　75点（うち未製3点）が出土した。形態によって10種に分類される。A—いわゆる柳葉鏃である。細身のタイプをAⅡとする。B—平基で正三角形に近い。C—凹基式である。CⅠ—浅い抉りで横広の小形。CⅡ—非常に浅い抉りで、やや縦長。器形は不安定。CⅢ—弧状の抉りで、脚が細い。CⅣ—三角形状の浅い抉りで、基部はやや広い。CⅤ—縦長の二等辺三角形状を呈し、抉りもやや深い。CⅥ—深い鋭角の抉りを持つ。CⅦ—抉りが長軸の2分の1近くまで深くなり、器形は正三角形状。CⅧ—いわゆる鍬型鏃。

**b．磨製石鏃**　2030　〈堆積層〉、2031　〈堆積層〉は粘板岩製の柳葉形である。2030は茎端部を少々欠失するが、現状で長7.1cm、最大幅1.9cmを測る。2031は茎部を欠失する。2032〈堆積層〉も磨製の鏃身と思われる。鎬を持ち断面は鋭い菱形を呈する。両側縁とも軽く外反している。

第34図　石鏃・磨製鏃・石錐実測図



## 第1表　打製石鏃一覧表

（※類別の標式タイプ）

| 番　号 | 遺物番号 | 出土地点 | 類　別 | 石　質 | 器長(mm) | 重さ(g) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ※　1 | 2001 | 31号土壙 | AI | 黒　曜　石 | 23.40 | 1.7 | 完、主剝離面残 |
| 2 | 2400 | 表　採 | 〃 | 〃 | (22.65) | ( 1.5) | 先端欠 |
| 3 | 2002 | 4号竪穴 | 〃 | 〃 | 26.85 | 1.7 | 完、厚手 |
| 4 | 2003 | 39号土壙 | 〃 | 〃 | 29.85 | 1.6 | 〃　主剝離面残 |
| 5 | 2004 | 表　採 | 〃 | 〃 | 31.65 | 2.4 | 〃　使用痕 |
| 6 | 2005 | 〃 | 〃 | 〃 | 29.85 | 1.9 | 〃　ねじれ |
| ※　7 | 2006 | 33号土壙 | AII | 〃 | 29.10 | 1.3 | 〃 |
| 8 | 2401 | 表　採 | 〃 | サヌカイト | 4.78 | 2.5 | 完、長身 |
| 9 | 2402 | 堆積層 | 〃 | 黒曜曜　石 | —— | —— | 先端基部欠 |
| ※　10 | 2007 | 82号土壙 | B | 〃 | 18.60 | 1.1 | 完、剝片鏃 |
| 11 | 2403 | 64号土壙 | 〃 | 〃 | 19.25 | 0.8 | 〃　薄手、自然面残 |
| 12 | 2404 | 64号土壙 | 〃 | 〃 | 17.55 | 0.8 | 〃　剝片鏃　小形 |
| 13 | 2405 | 表　採 | 〃 | 〃 | 14.65 | 0.7 | 先端欠、加工粗、小形 |
| 14 | 2406 | 9号竪穴 | 〃 | 〃 | —— | —— | 頭部欠、薄手、ねじれ |
| 15 | 2407 | 表　採 | 〃 | 〃 | 22.80 | —— | 側辺欠 |
| 16 | 2408 | 表　採 | 〃 | 〃 | 26.15 | ( 1.3) | 片基部欠、加工粗 |
| 17 | 2409 | 表　採 | 〃 | 〃 | 21.10 | 1.5 | 完、剝片鏃 |
| 18 | 2008 | 11号竪穴 | 〃 | 〃 | —— | ( 0.8) | 先端欠　薄手 |
| 19 | 2410 | 11号竪穴 | 〃 | 〃 | —— | ( 6.8) | 〃　大形厚手 |
| ※　20 | 2009 | 表　採 | CI | 〃 | ( 4.75) | ( 0.3) | 片脚端欠、超小形 |
| 21 | 2411 | 174号土壙 | 〃 | 〃 | 11.40 | —— | 〃　小形 |
| ※　22 | 2010 | 11号竪穴 | CII | 〃 | 26.00 | ( 1.8) | 脚端欠 |
| 23 | 2412 | 9号竪穴 | 〃 | 〃 | 27.70 | ( 3.7) | 〃　厚手 |
| 24 | 2413 | 表　採 | 〃 | 〃 | 25.80 | ( 3.2) | 〃　〃 |
| 25 | 2414 | 堆積層 | 〃 | 長　　石 | 29.20 | 1.7 | 完、剝片鏃、薄手 |
| 26 | 2415 | 表　採 | 〃 | 黒　曜　石 | —— | —— | 頭部欠、薄手、小形 |
| 27 | 2416 | 表　採 | 〃 | 〃 | —— | —— | 基部のみ残、薄手 |
| 28 | 2417 | 3号竪穴 | 〃 | 〃 | 17.00 | 0.8 | 完形 |
| 29 | 2011 | 4号竪穴 | 〃 | 〃 | (19.55 ) | ( 0.7) | 使用痕、薄手 |
| ※　30 | 2012 | 表　採 | CIII | 〃 | 27.00 | 2.3 | 完、厚手 |
| 31 | 2013 | 4号竪穴 | 〃 | 〃 | 16.10 | ( 0.8) | 先端欠 |
| 32 | 2418 | 堆積層 | 〃 | 〃 | 20.20 | ( 0.7) | 片脚欠、小形薄手 |
| 33 | 2014 | 12号竪穴 | 〃 | 〃 | 21.50 | 0.9 | 完、剝片鏃、薄手 |

| 番　号 | 遺物番号 | 出土地点 | 類　別 | 石　質 | 器長(mm) | 重さ(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 34 | 2419 | 表　採 | CⅢ | 黒曜石 | 21.25 | (0.8) | 片脚欠、薄手 |
| 35 | 2420 | 35号土壙 | 〃 | 〃 | (22.40) | (0.4) | 先端欠、片脚欠、薄手、小形 |
| ※ 36 | 2015 | 40号土壙 | CⅣ | サヌカイト | 21.55 | 0.8 | 完、薄手 |
| 37 | 2421 | 堆積層 | 〃 | 〃 | (17.60) | —— | 片脚欠、小形 |
| 38 | 2422 | 表　採 | 〃 | 黒曜石 | —— | —— | 両脚端、先端欠 |
| 39 | 2423 | 堆積層 | 〃 | 〃 | 19.45 | (0.8) | 片脚欠、薄手 |
| 40 | 2016 | 3号竪穴 | 〃 | サヌカイト | 19.05 | 0.9 | 完、鋸歯縁 |
| 41 | 2424 | 183号土壙 | 〃 | 黒曜石 | (1.72) | —— | 側辺、脚端部欠 |
| ※ 42 | 2017 | 6号竪穴 | 〃 | サヌカイト | 25.10 | 1.3 | 完、薄手 |
| 43 | 2425 | 表　採 | 〃 | 〃 | —— | —— | 頭部欠、大形 |
| 44 | 2426 | 堆積層 | 〃 | 〃 | —— | —— | 頭部片脚欠 |
| 45 | 2427 | 堆積層 | 〃 | 〃 | —— | —— | 〃 両脚欠薄手 |
| 46 | 2018 | 13号竪穴 | 〃 | 黒曜石 | 30.35 | (1.9) | 片脚欠、剝片縁、大形 |
| ※ 47 | 2019 | 表　採 | CⅤ | サヌカイト | 31.85 | 1.6 | 完、薄手、鋸歯縁 |
| 48 | 2020 | 33号土壙 | 〃 | 〃 | 29.35 | 1.5 | 完、脚端に抉り、両側内彎 |
| 49 | 2428 | 堆積層 | 〃 | 黒曜石 | —— | —— | 基部欠、加工粗 |
| 50 | 2429 | 12号竪穴 | 〃 | 〃 | 21.40 | —— | 側部欠 |
| 51 | 2430 | 118号土壙 | 〃 | 〃 | 26.90 | (1.4) | 脚端部欠 |
| 52 | 2431 | 表　採 | 〃 | 〃 | —— | —— | 脚、側部欠 |
| 53 | 2432 | 表　採 | 〃 | サヌカイト | 30.10 | (2.7) | 脚端部欠、厚手 |
| 54 | 2433 | 堆積層 | 〃 | 黒曜石 | 27.80 | (1.8) | 脚部欠、　〃 |
| 55 | 2434 | 堆積層 | CⅥ | サヌカイト | —— | —— | 頭部欠 |
| 56 | 2435 | 表　採 | 〃 | 〃 | 22.25 | (0.6) | 片脚欠 |
| 57 | 2021 | 表　採 | CⅦ | 〃 | 17.20 | 0.6 | 完形 |
| 58 | 2436 | 183号土壙 | CⅧ | 黒曜石 | —— | —— | 頭部欠 |

2043　〈堆積層〉は有茎石鏃で頭部を欠失する。両面ともよく磨かれ断面は菱形で鎬を持つ。

**c．石庖丁**　完形品はなく、破損品、未製品が16点出土した。2040　〈堆積層〉はやや大形で堆定長15.3cmを測る。2040、2041　〈11号竪穴〉は粘板岩製。2042　〈堆積層〉、2043　〈堆積層〉は安山岩質で小形。2044　〈4号竪穴〉、2045　〈64号土壙〉、2046　〈堆積層〉も石庖丁の破損品である。

**d．掻　器**　20点出土した。いずれもサヌカイト製である。スクレーパー系の6点は横形で、いわゆる石匙は横形2点、縦形1点である。いずれも小形である。

**e．石　錐**　11点出土した。いずれも基部を持つタイプであり、穿孔時の耐度を考慮して、刃

## 第2表　掻器一覧

| 番号 | 遺物番号 | 出土地点 | 類別 | 石質 | 器長(㎝) | 器幅(㎝) | 重さ(g) | 刃部 | 加工 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2055 | 堆積層 | 横型 | サヌカイト | 4.36 | 6.66 | 50 | 周縁 | 粗 | |
| 2 | 2056 | 堆積層 | 〃 | 〃 | 4.60 | 6.14 | 44 | 三辺 | 〃 | 側辺に自然面残 |
| 3 | 2057 | 堆積層 | 〃 | 〃 | 4.65 | 6.12 | 40 | 〃 | 刃部両面 | 〃 |
| 4 | 2050 | 183号土壙 | 〃 | 〃 | 3.17 | 5.56 | 26.2 | 〃 | 〃 | 上辺に打面残 |
| 5 | 2058 | 51号土壙 | 〃 | 〃 | 3.68 | 4.74 | 16.9 | 上下辺 | 〃 | 側辺に打面残 |
| 6 | 2051 | 11号竪穴 | 台形型 | 〃 | 3.70 | 4.17 | 14.2 | 四辺 | 〃 | 薄手 |
| 7 | 2052 | 堆積層 | 縦形石匙 | 〃 | 2.73 | 7.32 | 20.5 | 両側辺 | 〃 | |
| 8 | 2053 | 堆積層 | 横形石匙 | 〃 | 7.74 | 2.38 | 18.2 | 側下辺 | 〃 | |
| 9 | 2059 | 堆積層 | 〃 | 〃 | — | — | — | — | — | 薄手 |
| 10 | 2306 | 堆積層 | 石匙つまみ部 | 〃 | — | — | — | — | — | |

## 第3表　石錐一覧表

| 番号 | 遺物番号 | 出土地点 | 類別 | 石質 | 器長(㎝) | 重さ(g) | 刃部加工 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2060 | 35号土壙 | 厚手・尖 | サヌカイト | 4.32 | 12.5 | 両面・粗 | |
| 2 | 2068 | 堆積層 | 〃 〃 | 黒曜石 | — | — | 〃 精 | 刃部欠 |
| 3 | 2061 | 表採 | — — | サヌカイト | — | (4.6) | 〃 〃 | |
| 4 | 2062 | 7号竪穴 | 薄手・鈍 | 黒曜石 | 3.48 | (3.7) | 〃 〃 | |
| 5 | 2069 | 堆積層 | 〃 尖 | サヌカイト | 4.26 | 7.8 | 〃 〃 | |
| 6 | 2300 | 堆積層 | 〃 鈍 | 〃 | 3.47 | 5.5 | 片面・粗 | |
| 7 | 2063 | 5号竪穴 | 〃 — | 黒曜石 | (2.43) | (2.0) | 両面・精 | 刃部欠 |
| 8 | 2064 | 堆積層 | 〃 尖 | サヌカイト | 2.35 | 2.7 | 〃 〃 | |
| 9 | 2065 | 表採 | 〃 — | 〃 | 2.94 | 4.6 | 〃 〃 | 刃部欠 |
| 10 | 2066 | 9号竪穴 | 〃 尖 | 〃 | — | — | 〃 〃 | 刃部欠 |
| 11 | 2067 | 表採 | 〃 鈍 | 黒曜石 | 2.69 | 2.6 | 〃 〃 | |

## 第4表　石斧一覧表

| 番号 | 遺物番号 | 種別 | 出土地 | 備考 | 番号 | 遺物番号 | 種別 | 出土地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2090 | 蛤刃 | 9号竪穴 | 刃部欠 | 7 | 2098 | — | 堆積層 | 頭部片 |
| 2 | 2091 | 〃 | 3号竪穴 | 刃部欠、再利用 | 8 | 2099 | — | 1号竪穴 | 未製品 |
| 3 | 2092 | 〃 | 堆積層 | 基部・刃部欠 | 9 | 2302 | 扁平片刃 | 堆積層 | 頭部欠 |
| 4 | 2093 | — | 12号竪穴 | 〃 | 10 | 2303 | 片刃 | 〃 | 刃部片 |
| 5 | 2094 | — | 8号竪穴 | 表皮片 | 11 | 2304 | 小形蛤刃 | 〃 | 頭部欠 |
| 6 | 2095 | — | 堆積層 | 〃 | 12 | 2097 | — | 〃 | 体部表皮再利用 |

## 第5表　凹石・磨石一覧表

| 番号 | 遺物番号 | 出土地 | 種別 | 最大長(cm) | 最大幅(cm) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2100 | 176号土壙 | 凹石 | 9.34 | 9.47 | 円形　両面凹 |
| 2 | 2101 | 堆積層 | 〃 | 8.91 | 11.75 | 〃 |
| 3 | 2102 | 14号竪穴 | 〃 | 6.92 | 9.51 | 小形、側面磨、敲痕　〃 |
| 4 | 2103 | 表採 | 〃 | 9.12 | 9.75 | 〃 |
| 5 | 2104 | 9号竪穴 | 〃 | (7.24) | (6.68) | 側面磨痕　〃 |
| 6 | 2105 | 35号土壙 | 〃 | 11.36 | 10.12 | 〃 |
| 7 | 2301 | 堆積層 | 〃 | 7.28 | 9.14 | 側面敲打痕　〃 |
| 8 | 2106 | 堆積層 | 〃 | 7.89 | 10.96 | 板状平石　〃 |
| 9 | 2107 | 堆積層 | 磨石 | 11.56 | 8.69 | 特に片面に磨痕顕著、側面に敲打痕 |
| 10 | 2108 | 13号竪穴 | 凹石 | 9.89 | 6.38 | 自然礫の片面にのみ凹み |
| 11 | 2109 | 183号土壙 | 敲石 | 7.74 | 6.40 | 自然礫を利用 |

部の厚さと角度により類別した。

**f．石錘**　2070　〈堆積層〉楕円形を呈する。短軸の周囲を幅広の紐縛りの溝が巡る。砂岩製。2071　〈P99〉小型で全面を十字に細い溝が走る。滑石製。

**g．石剣、石戈**　2080　〈33号土壙〉は磨製石剣。身部先端を欠損する。二本の鏑が末端部まで通り、薄珠算玉断面を呈す。茎には台形状のくりこみを両側より抉る。現存長6.6cm、幅3.9cm、厚さ0.75cmを測る。泥質砂岩製である。2081　〈表採〉は剣身部を欠失して柄部のみ残存。2082　〈堆積層〉は石剣の柄形石器と推定される。粘板岩製で剝落が著しく研磨痕は確認できない。長12.5cmを測る。2083　〈36号土壙〉は石戈。身の先端と関の先端を欠損する。茎は方形に近い。鏑はなく断面は凸レンズ状を呈す。穿孔は鈍く二孔の間隔は 2.0cmである。頁岩系製。

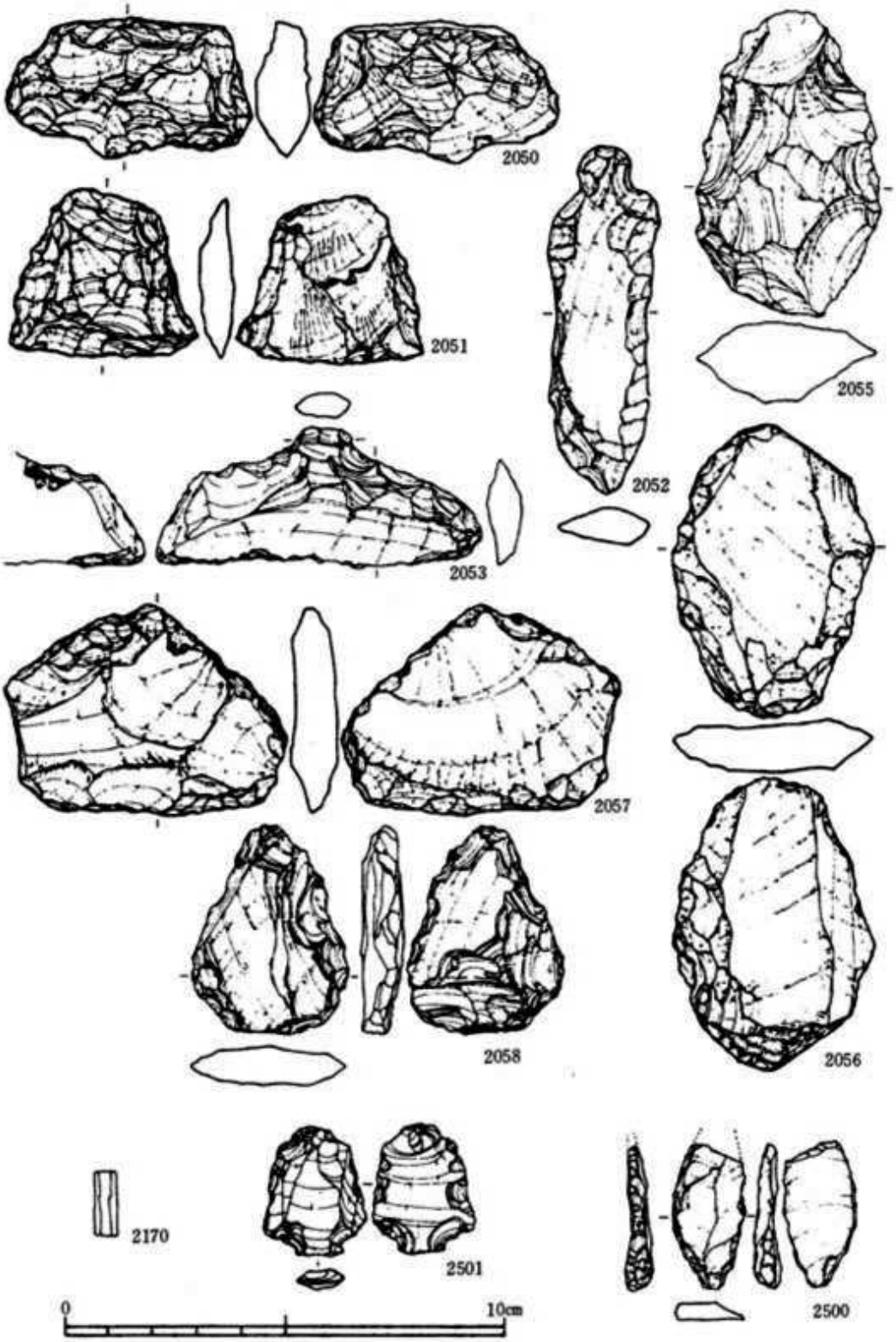
**h．石斧**　完形品はなく破損品ばかり34点出土した。抉入石斧はなく扁平片刃石斧は1点のみで、他は両刃石斧である。2091　〈3号竪穴〉、2097　〈堆積層〉は破損後棄却せずに、側縁部はナタか鑿的に再利用したと推定される剝離痕が残る。

**i．凹石、磨石、敲石**　凹石19点、磨石11点出土。凹石と磨石の兼用、磨石と敲石の兼用が見られる。2106　〈堆積層〉は側面に焼成痕がある。

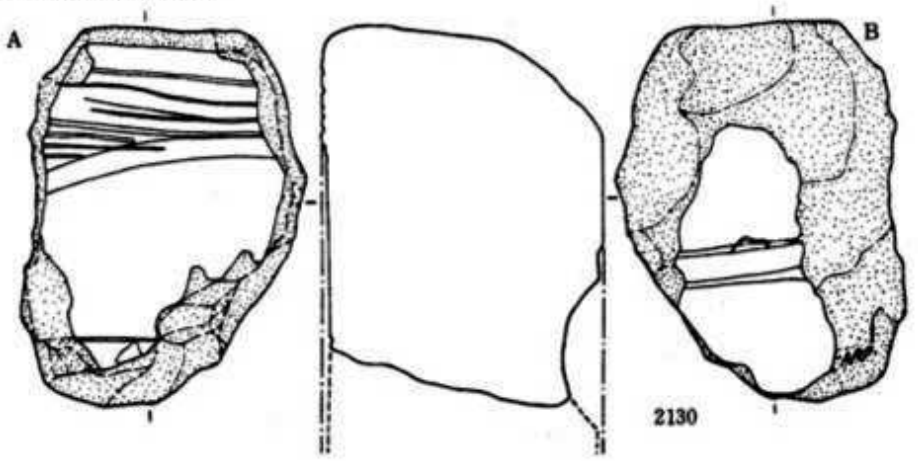
**j．砥石**　砥石片27点出土。2110　〈表採〉、2111　〈180号土壙〉、2113　〈表採〉はいずれも手持ち砥。2110は頁岩で細砥。縦位に条痕状の研ぎ痕が見られる。2111、2112　〈11号竪穴〉は中砥、2113　〈表採〉は粗砥である。

**k．石製支脚**　2120　〈表採〉　安山岩製。四角錐台状を呈し安定した底面を持つ。器高13.1

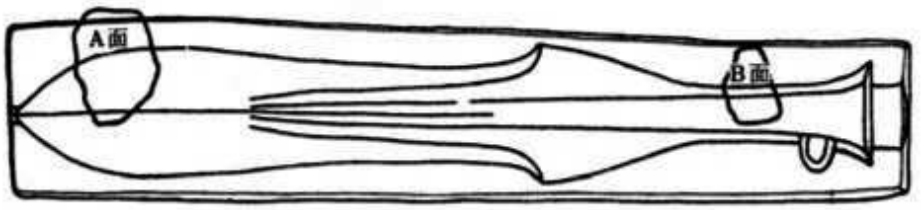
第35図　掻器・管玉・その他実測図



第36図　銅鉾鋳型実測図




第37図　銅鉾鋳型模式図




cm。

**ℓ．銅鉾鋳型**　B11区の遺溝面直上の堆積層から出土した砂岩製の広鋒銅鉾の鎔范破片で、鋳造した痕跡が黒変して残る。A面が穂部、裏面に型どるB面は袋部である。A面の鋒先は膨らみ、鋒端は欠損しているが、鎬から刃部まで 5.2cmを測り、身幅の最大幅は10.4cm位と推定される。鎬部の身厚は約6mmである。B面は袋部で関と耳の中間で、茎の最大径は現状で推定3.9cmと 2.2cmを測る。関から伸びてくるヒレは幅1cm、厚0.35cmを測る。A面に残る数条の沈線は、ズレ防止のための目と思われる。広鋒銅鉾鋳型は次の遺跡から出土している。

①福岡県糸島郡前原町三雲　②同町三雲川端　③福岡市板付　④同市高宮八幡宮　⑤同市五十川　⑥同市井尻、熊野権現　⑦春日市須玖皇后峰　⑧同市須玖岡本、二例　⑨同市吉村政吉氏宅地　⑩同市エイダ　⑪同市熊野神社後方の12ヶ所である。(6)

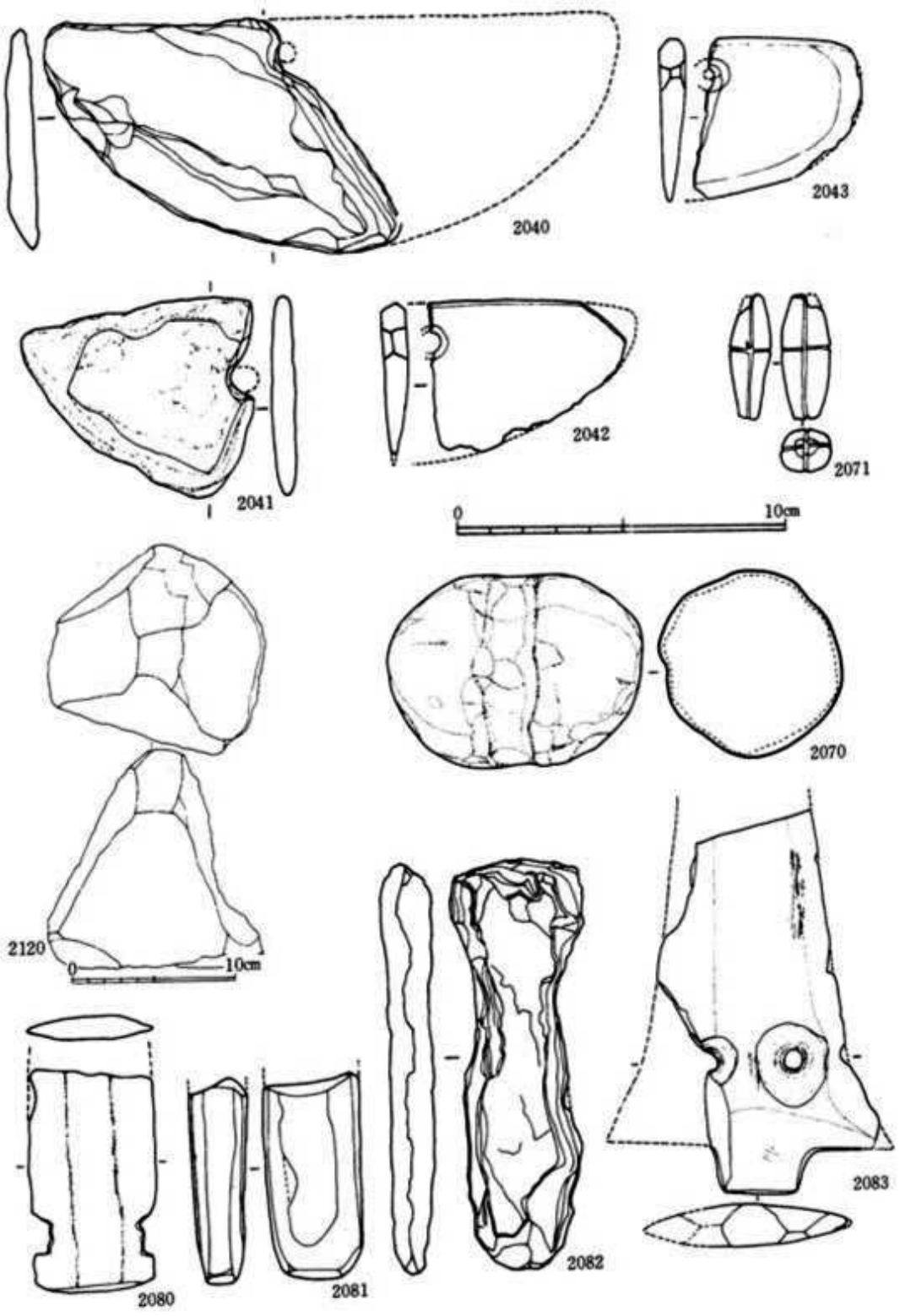
県内では最初の出土資料である。

**m．その他**　ナイフ形石器　2500　〈東区堆積層〉、つまみ形様石器2501等が出土している。

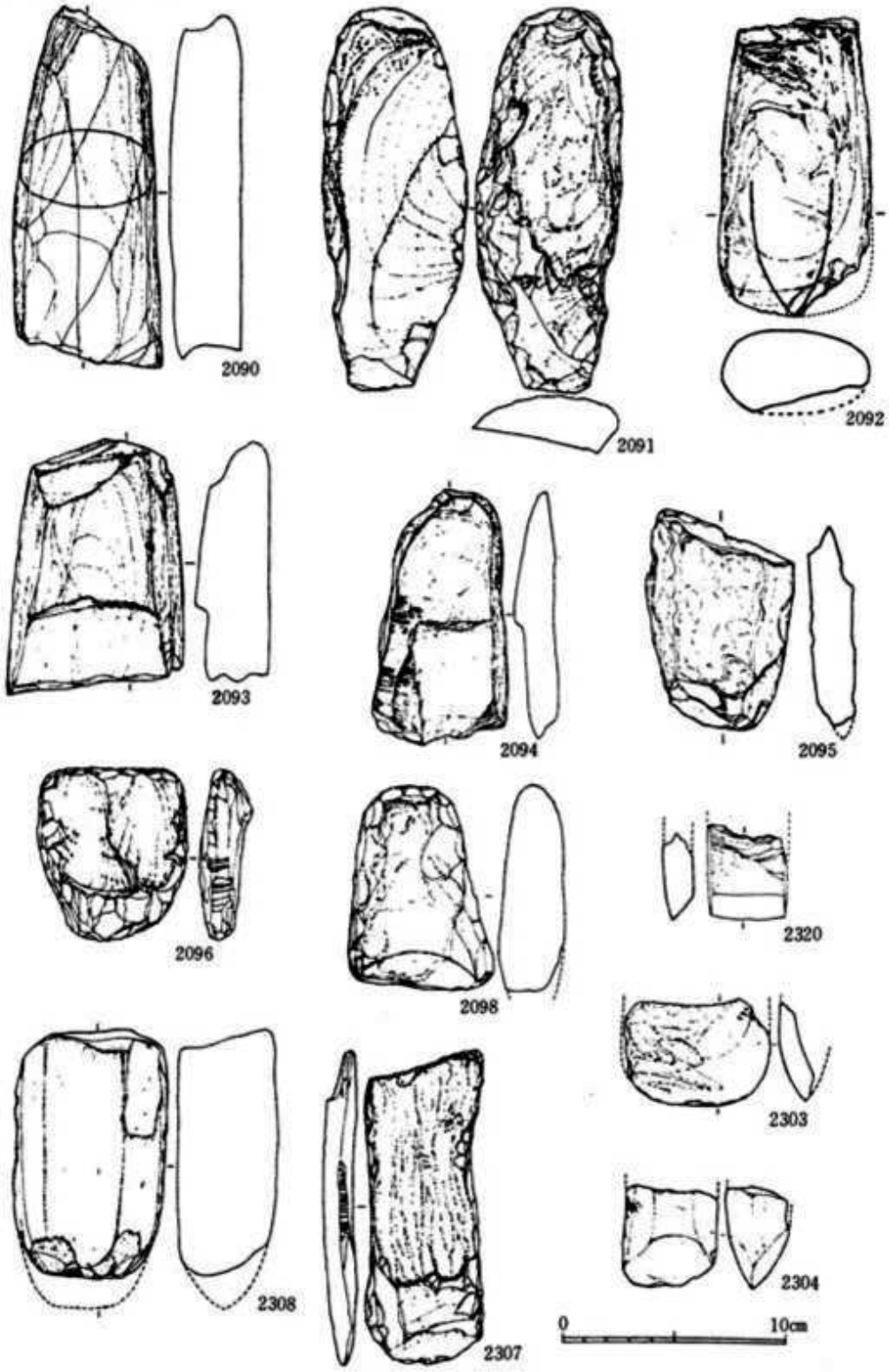
**(3)　装身具**

2170　〈11号竪穴〉の覆土より碧玉製の管玉が1個出土した。長さ14.1mm、外径 5.1mm、孔径 2.7mmと 2.5mm、重さ 0.5g を測り、両面より穿孔している。風化して白色化している。

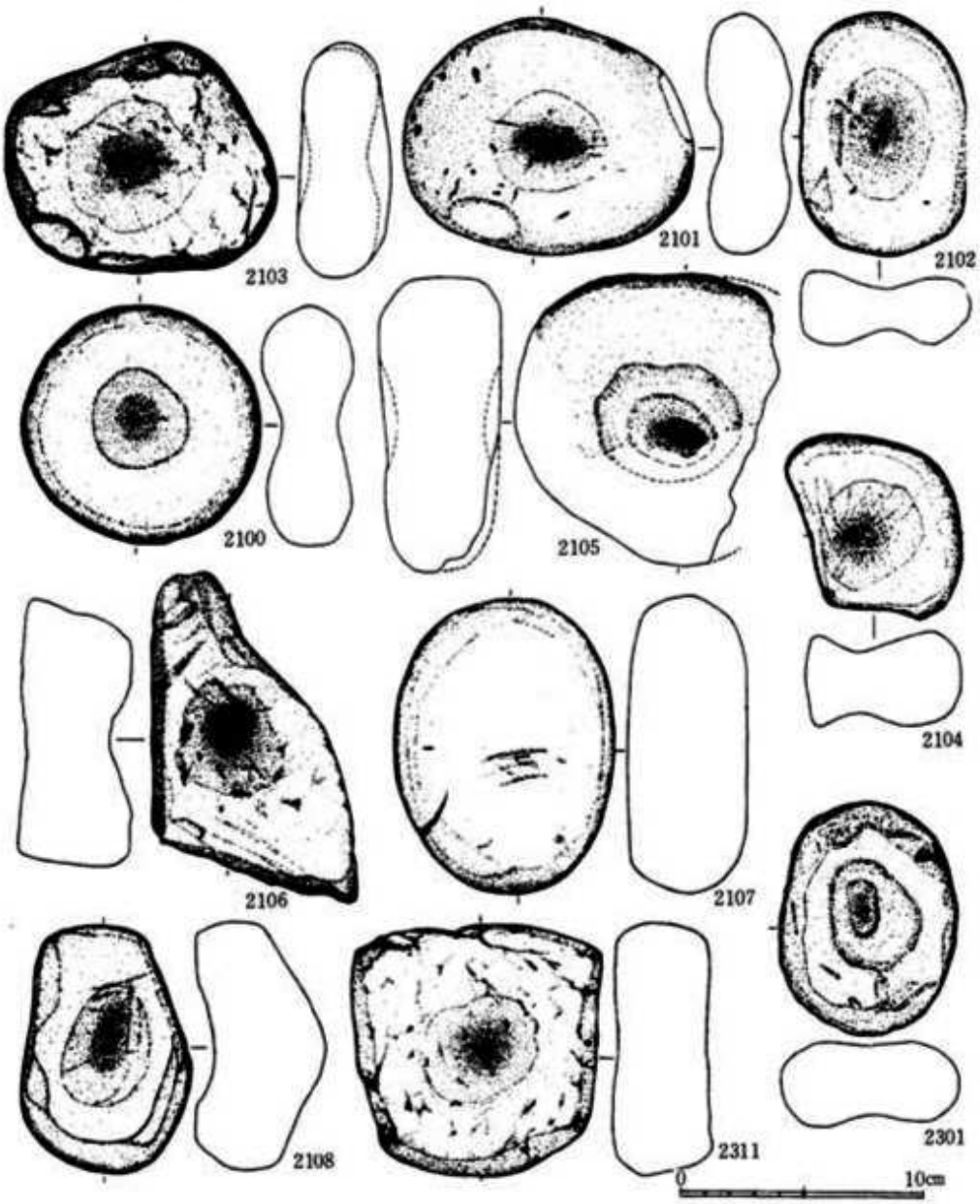
第38図　石庖丁・石錐・石剣・石戈実測図



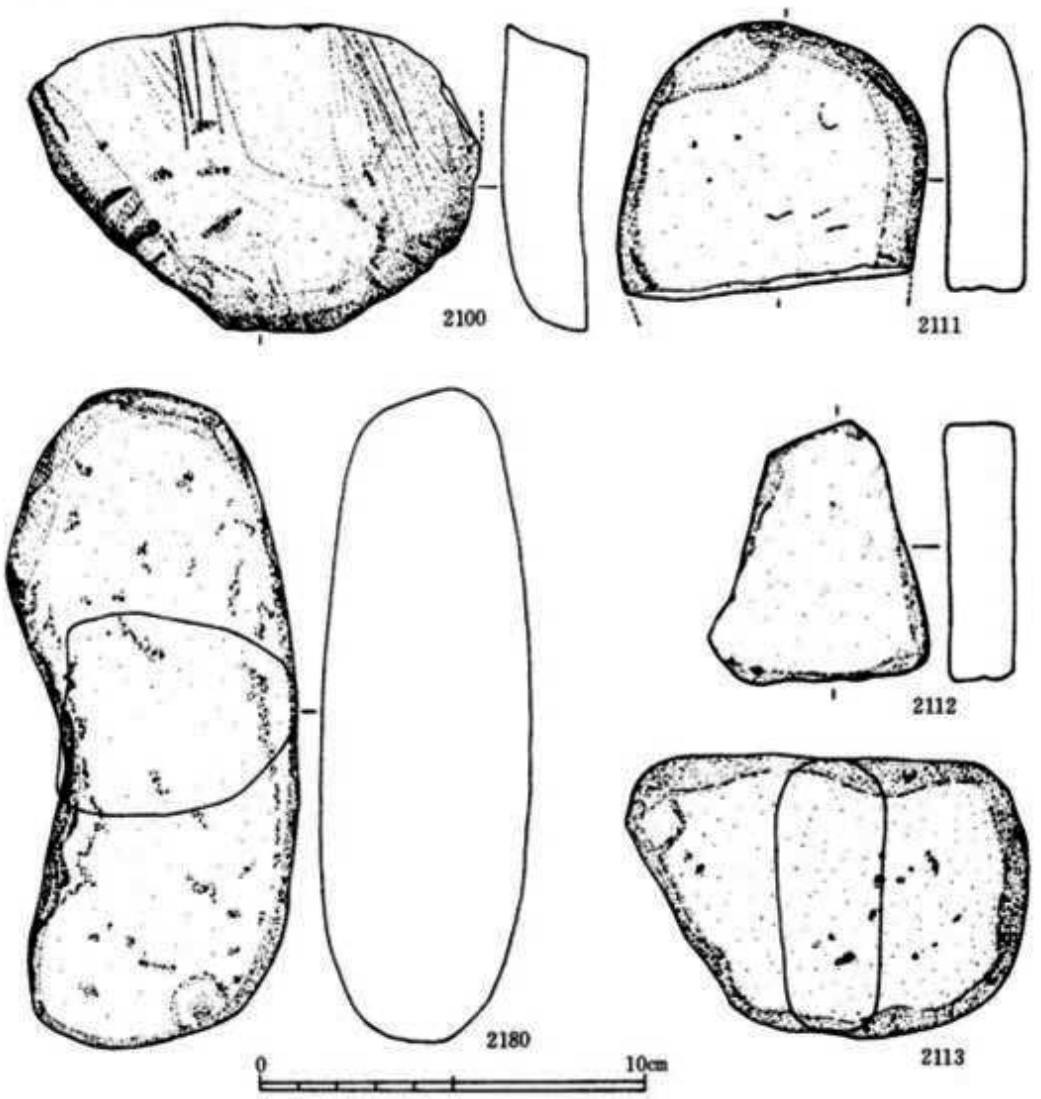
第39図　石斧実測図


2090
2091
2092
2093
2094
2095
2096
2098
2320
2303
2304
2308
2307
0
10cm

第40図　凹石・磨石実測図



第41図　砥石その他実測図



註

(1) 木下之治「牟田辺遺跡」多久市教育委員会 1975.1

(2) 中島弘之氏教示

(3) 岩永政博氏教示

(4) 木下 巧「萬籠遺跡」佐賀県教育委員会 1974.3

(5) 天本洋一他「牟田辺遺跡・第二次」多久市教育委員会 1977.3

(6) 森 浩一「日本古代文化の探究・鏡」 1978.9

参考文献

(1) 高島忠平「三日月町佐織の夜臼式土器」新郷土 1975.10

(2) 森 貞次郎「福岡県夜臼遺跡」（日本農耕文化の生成）日本考古学協会編 1961

(3) 杉原荘介「弥生式土器集成（北九州地方）」日本考古学協会 1964.1

(4) 小田富士雄「弥生土器 九州」考古学ジャーナル76～84 1972～1973

(5) 福岡県八女市教育委員会「亀ノ甲遺跡」1964.1

(6) 長崎県教育委員会「住吉平貝塚」1973

(7) 沢 皇臣「板付」福岡市文化財調査報告集48集 1979.2

(8) 木下 巧「田代天満宮東方遺跡」佐賀県教育委員会 1973.3

# 第 Ⅲ 部

# 田　島　遺　跡

唐津市柏崎字田島1188番地所在

もくじ


1．田島遺跡の概要……69

2．田島遺跡の土層……69

3．遺構と遺物……69

(1) 溝状遺構（M２）……69

(2) 田島遺跡甕棺墓群……78

(3) 銅　　鏡……84

(4) 土 壙 墓……85

(5) 装 身 具……86

(6) １号住居址……88

(7) 袋状竪穴……88

(8) 土　　壙……90

(9) 柵列状柱穴……96

(10) その他の遺構・表採遺物……96

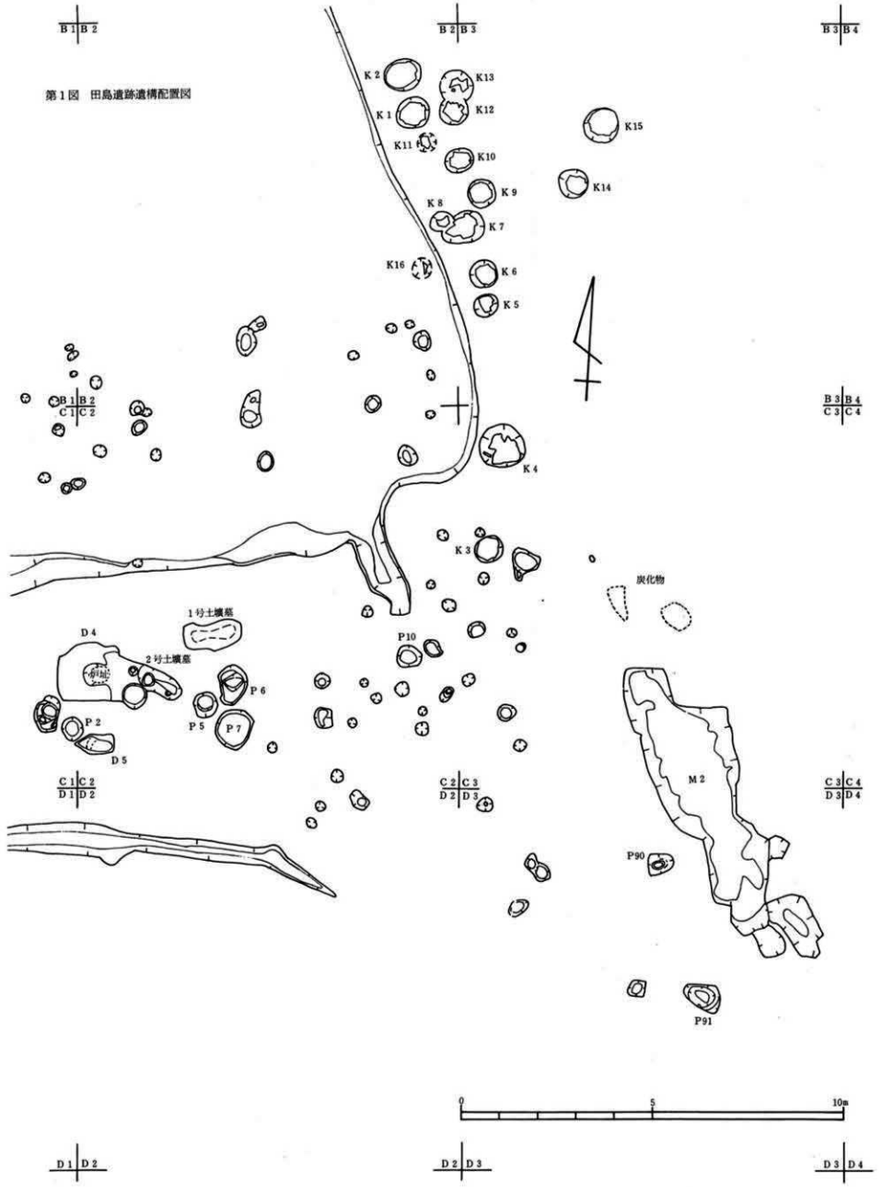
# 挿 図 も く じ

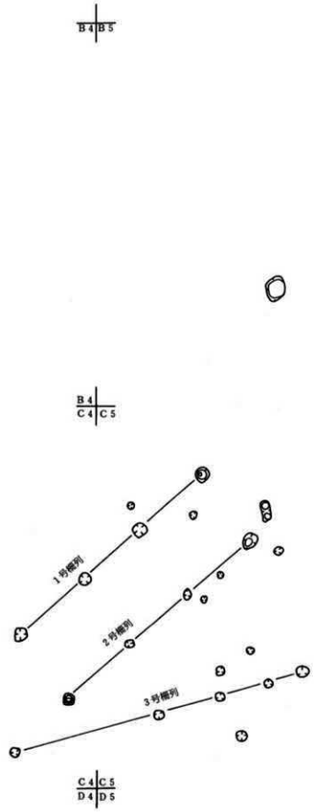

第１図　田島遺跡遺構配置図……67
第２図　田島遺跡土層断面図……69
第３図　溝状遺構（Ｍ２）実測図……70
第４図　Ｍ２　第II層出土土器実測図……71
第５図　Ｍ２　第II層出土石器実測図……73
第６図　Ｍ２　第Ⅳ層出土遺物実測図……75
第７図　Ｍ２　第Ⅳ層出土木製品
　　実測図（1）……77
第８図　Ｍ２　第Ⅳ層出土木製品
　　実測図（2）……78
第９図　１号甕棺墓……80
第10図　２号甕棺墓……80
第11図　６号甕棺墓……80
第12図　９号甕棺墓……80
第13図　甕棺実測図（1）……81
第14図　甕棺実測図（2）……82
第15図　甕棺実測図（3）……83
第16図　日光鏡実測図……85
第17図　１号土壙墓……86
第18図　管玉・小玉実測図……86
第19図　第１号住居址遺構実測図……88
第20図　第１号住居址出土土器……88
第21図　第１号袋状竪穴遺構実測図…… 89
第22図　第２号袋状竪穴遺構実測図…… 89
第23図　第３号袋状竪穴遺構実測図…… 89
第24図　第２号袋状竪穴出土土器…… 89
第25図　第３号袋状竪穴出土土器…… 90
第26図　第４号袋状竪穴出土土器…… 90
第27図　第１号土壙出土遺物…… 91
第28図　第２号土壙出土遺物…… 92
第29図　第３号土壙出土遺物…… 92
第30図　第４号土壙・
　　第２号土壙墓実測図…… 93
第31図　第４号土壙・Ｐ59・Ｐ94
　　出土遺物…… 93
第32図　第５号土壙遺構実測図…… 94
第33図　第５号土壙・Ｐ95出土遺物…… 95
第34図　柵列状柱穴遺構実測図…… 96
第35図　土師器実測図…… 97
第36図　石鏃・掻器・石核実測図…… 99
第37図　石庖丁・石鎌・土製品実測図……100
第38図　石斧・砥石実測図……101
第39図　凹石・磨石実測図……102

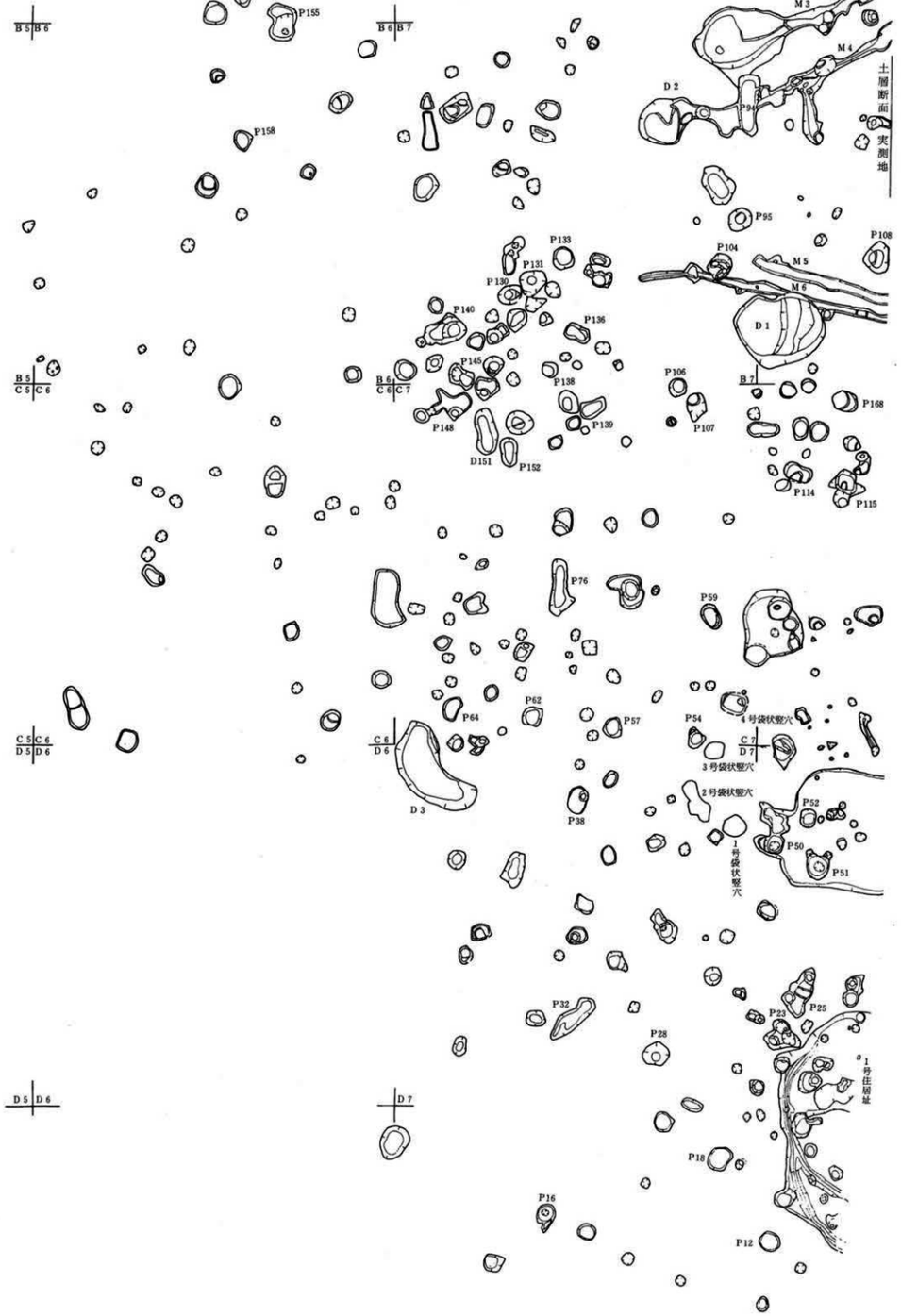

# 図 表 目 次


第１表　第１号土壙墓出土ガラス製
　　小玉計測値……87
第２表　甕棺墓一覧…… 87
第３表　石鏃一覧……103

第1図　田島遺跡遺構配置図



## 1．田島遺跡の概要〔第1図〕

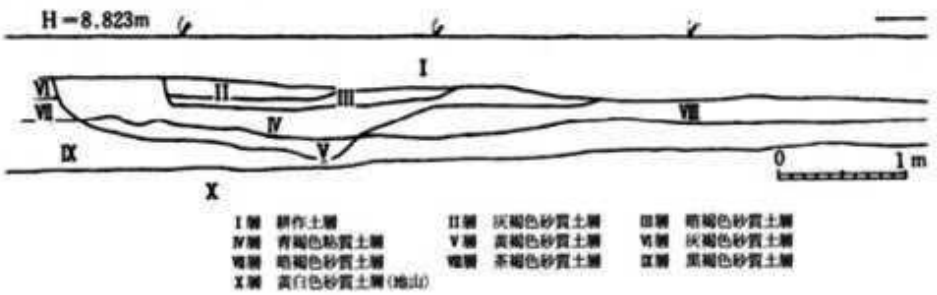
田島遺跡は唐津市柏崎字田島1188番地にあり、柏崎段丘とその西の割石丘陵の中間に位置する。現在は水田に削平されているが、ここもやはり舌状段丘が北に延び、その段丘上に、遺跡は広がっていたことが確認されている。昭和5年の「佐賀県史蹟報告」で吉村茂三郎氏の言う[1]久里貝塚の第2、3、4貝塚がそれである。それ以来も縄文時代晩期、弥生時代前、中、後期の遺物多数が出土している。

今回は、遺跡の南端部即ち[2]「田島段丘」の根冠部にあたる地区の調査を実施した。丘陵東斜面では弥生中期から古墳時代前期の生活址――竪穴住居址・袋状竪穴・柱穴等、中央部にある縄文晩期から弥生初頭の溝状遺構からは、夜臼、板付Ⅰ、Ⅱ式土器と木製品等が検出された。中央部から西斜面にかけて、甕棺墓、土壙墓等の墓域も確認された。

## 2．田島遺跡の土層〔第2図〕

田島遺跡は、数回にわたり土砂の堆積と削平が繰り返されてきたことが推察される大溝跡も検出され、圃場造成の歴史も伺い知ることができる。第X層が基盤層であり、遺構が掘り込まれている。第2図は東壁（北端部）の土層断面図である。

第2図　田島遺跡東壁断面図

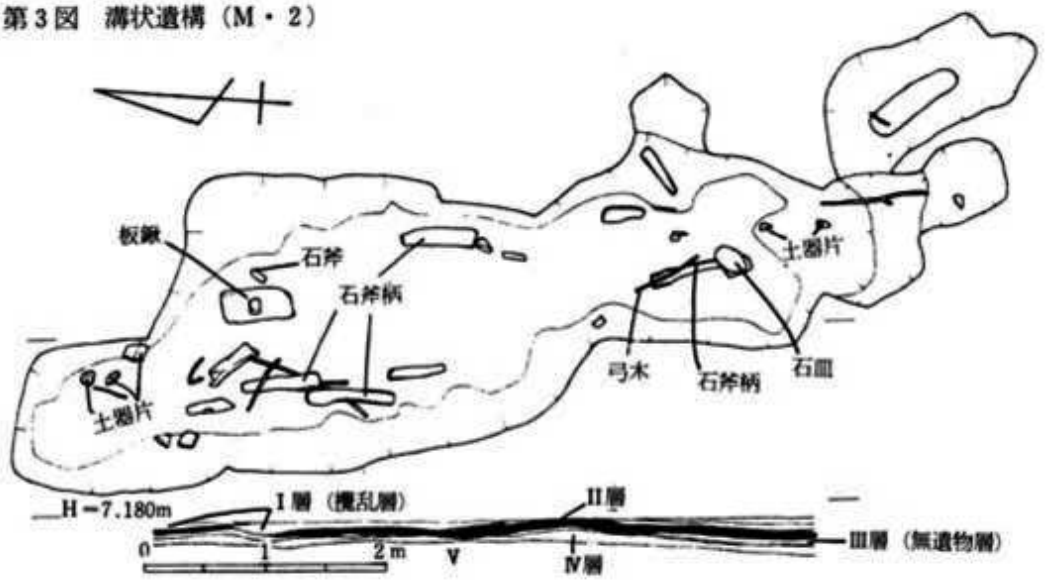



## 3．遺構と遺物

### (1) 溝状遺構（M 2）〔第3図〕

「田島段丘」の丘上からやや東へ下がる地区に溝状の遺構が検出された。ほぼ南から北へ主軸をとるが、両端は削平されたと推定される。遺物包含層はII層の灰白色砂層とIV層の黒灰色砂層で、Ⅰ、III層は無遺物層である。土器片、石製品、木製品などが出土したが、IV層は主に夜臼、板付Ⅰ式土器、II層は夜臼、板付Ⅰ、II式土器が検出された。木製品はIV層から流木、植物種子とともに検出された。

第3図　溝状遺構（M・2）




**①Ⅱ層出土遺物**

**1）出土土器〔第4図〕**

**〈夜臼式土器〉**

**a．甕、深鉢形土器**　3001　外反気味の口縁部の端部直下に断面三角形の突帯を貼付ける。接合部が沈線状に残る。刻目は篦状工具による施文と思われ細い。内面灰褐色、外面黒褐色を呈する。胎土は緻密で焼成は良。3002　端部は平担状を呈し、棒状工具による刻目を施す。暗褐色を呈し、焼成は良好。3003　浅い胴部の反転部に刻目を巡らす。刻目は棒状の工具で施文したと思われ太い。ナデ調整で仕上げる。焼成は良好。茶褐色を呈す。3004　暗褐色を呈し黒変がある。外面ナデ、内面は横位の貝殻条痕調整で仕上げる。胎土に砂粒、雲母を含み、焼成は良。

**b．壺形土器**　3010　胴部片。褐色を呈し、外面に丹塗り痕があり、内面は貝殻条痕文が横位に走る。胎土に砂粒を多く含む。

**c．浅鉢形土器**　3020　黒褐色を呈し小形製品。焼成は良。3021　外反する口縁部の端部は丸味を帯びて張り出す。胎土に砂粒を多く含み、灰褐色を呈す。

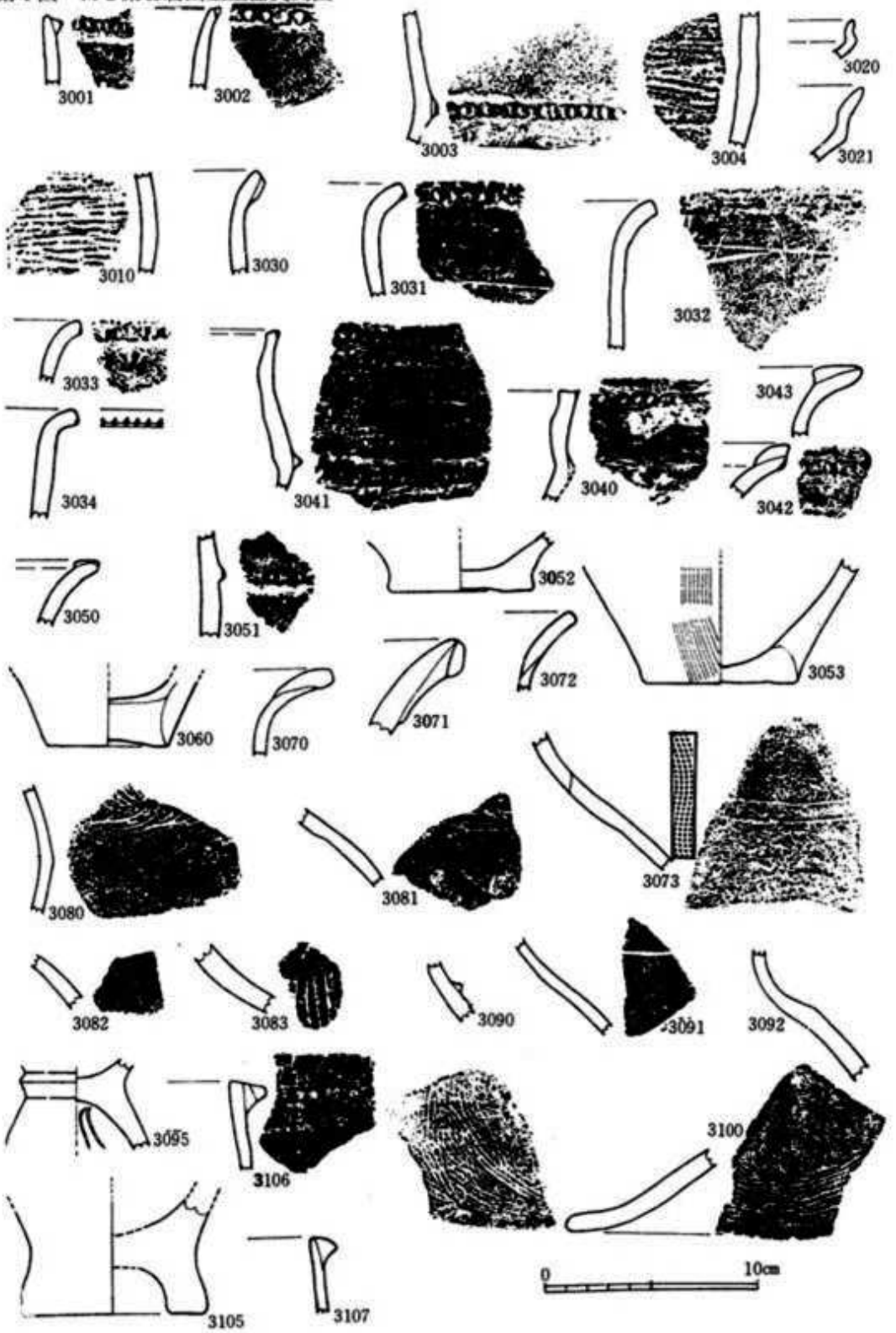
**〈板付Ⅰ式土器〉**

**a．壺形土器**　3030　外反する口縁部に粘土紐を貼付け肥厚させる。外面は細かい刷毛目調整である。黒褐色を呈し、胎土に1～3㎜の砂粒を含む。

**〈板付Ⅱ式土器〉**

**a．甕形土器**　3031　わずかに肥厚した如意形口縁の下端に刻目を施す。内面はナデ調整で外面は縦方向の刷毛目調整で仕上げ、頸部に沈線が一本巡る。淡褐色を呈す。3032　如意形状に、

第4図　M2第II層出土土器実測図



浅めの外反状を呈する口縁部である。内面上辺部に横位の刷毛目、外面は斜位の細かい刷毛目調整後二条の沈線が走る。黄褐色を呈する。3033　如意形口縁を呈し、端部は肥厚させ下端に篦状工具で刻目を施す。胎土に砂粒、雲母を含み、黄褐色を呈す。3034　深い如意形を呈す。茶褐色を呈し外面は黒変している。3040　刻目は細かく灰褐色を呈し黒変がある。3041　如意形口縁の口唇端部に細い刻目を施す。口頸部は内彎し刻目突帯を貼付ける。内面は指による押圧調整後、ナデ調整で仕上げる。暗褐色を呈す。胎土は砂粒を少々含み良。3042、3043、3050　如意形口縁の上辺に粘土紐を付け断面三角形に肥厚させるタイプである。3042は刻目を施し、3050は刷毛目痕がある。3042は暗褐色、3050は褐色、3043は淡褐色を呈す。3051　淡茶褐色を呈し、刻目を持つ胴部片である。3052、3053、3060は底部片である。3060は厚手で、3052は薄手であり、3052、3060はナデ調整、3053は縦位の刷毛調整である。色調は3060が茶褐色、3052、3053は褐色である。

**b．壺形土器**　3070　口縁端部内面を肥厚させ大きく外反する口縁部である。器面の磨耗著しい。砂粒を多く含む。暗灰色を呈する。3071は大形壺の口縁部である。肥厚された口縁部の端部は更に粘土紐を加え、平坦面を作る。灰褐色を呈し、黒斑がある。胎土に砂粒、雲母を含む。3072は胎土に砂粒を多く含み淡茶褐色を呈する。3073は肩部に二条の沈線が走り、研磨が見られる。肩部内面は粘土帯の接合部でやや肥厚させ、絞り痕がある。淡褐色を呈し、内外面とも丹塗り痕跡がある。3080、篦による研磨痕が見られ、篦状工具によって不整な無軸の羽状文を付している。褐色を呈し黒変している。胎土に砂粒、雲母を含み焼成は良。3081　肩部に横方向に走る三条の沈線を持つ。黒変している。内面に指頭調整痕がある。3082　無軸の羽状文を持つ胴部片。淡褐色を呈す。3083、3090、3091、3092も胴部片である。

**c．高坏形土器**　3095　板付式系と思われる高坏形土器である。坏部と脚台の接合部に、三角突帯一条を貼付ける。脚台内面に絞り痕が見られる。器面は荒れていて調整不明。黒褐色を呈す。

**d．蓋形土器**　3100　蓋形土器の裾開口部である。推定口径は21.4cmである。黒褐色を呈し、内外面に刷毛目調整を施す。

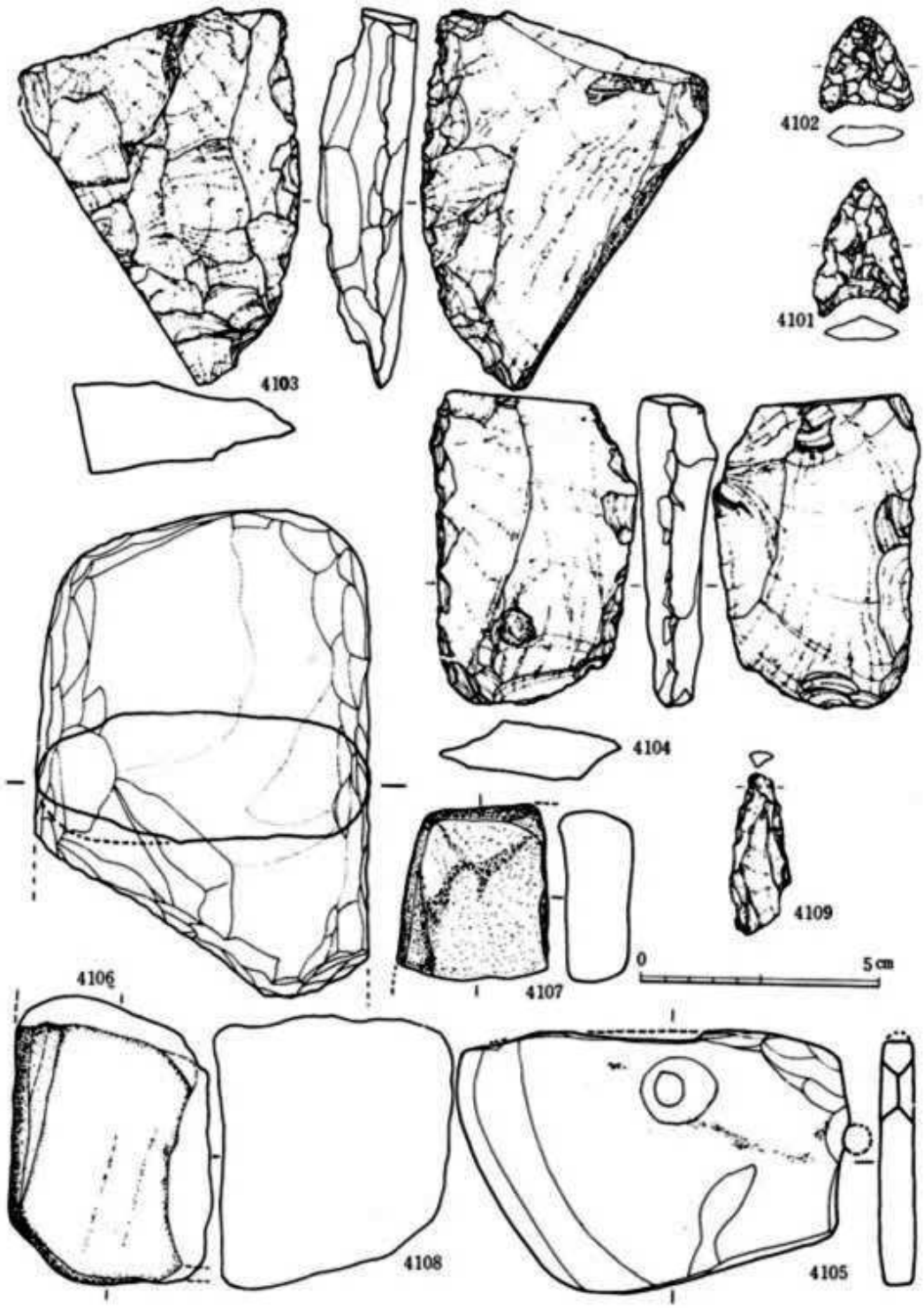
**〈前期末土器〉**

3105　甕形土器の脚台状を呈す底部である。推定口径は 8.8cm。内外面は荒れているがナデ調整と思われる。黄茶色。3106　口縁外側に粘土を貼付けて小さな平坦口縁を形造っている。茶褐色を呈す。胎土に砂粒、雲母を含み焼成は良好。

**2）出土石器**　〔第5図〕

4103、4104ともサヌカイトの縦長剝片を素材にしたスクレーパーである。側面に大きく自然面を残す。刃部は両面より調整している。4105　石庖丁、入念に研磨し両面から穿孔している。下縁に平坦面を作る研磨があるが、二次使用されたと思われる。粘板岩製。4106は両刃石斧の

第5図　M2第II層出土石器実測図



頭部である。打製加工痕が残る。安山岩製。砥石4107、4108はいずれも砂岩製であり、据え砥の破片と思われる。4109は石錐。サヌカイト製で、厚手、鋭角タイプである。刃部は片面加工で先端部に使用痕が見られる。

② Ⅳ層出土遺物

(1) 出土土器

〈夜臼式土器〉

**a．甕形土器** 3110 口唇部から少し下がって、粘土帯を貼り付けた刻目突帯が巡る。突帯の断面は高い半円形を呈し、刻目は棒状工具によるもので大きく、等間隔に刻む。反転部にある突帯は断面三角形を呈し、細く深く刻む。胎土は砂粒を含むが堅緻であり黒褐色、茶色を呈する。外面はナデ、内面は横位の細かい刷毛目調整である。3111 口縁上辺に平坦面を作り端部に突帯を貼り付ける。黒褐色を呈する。外面は条痕文、内面に粘土帯の接合が沈線状に残る。質は堅緻である。3112 口唇部に刻目を施し、反転部に突帯を持つ。黒褐色を呈し、篦調整。

3114、3115は突帯を持つ胴部の反転部片である。茶褐色を呈す。3116、3117も胴部片であり、内面に横方向に貝殻条痕による施文が見られる。茶褐色を呈す。3118 円盤貼り付けの底部で底面径 5.2cmを測る。茶褐色を呈し、木の葉文の圧痕を残す。

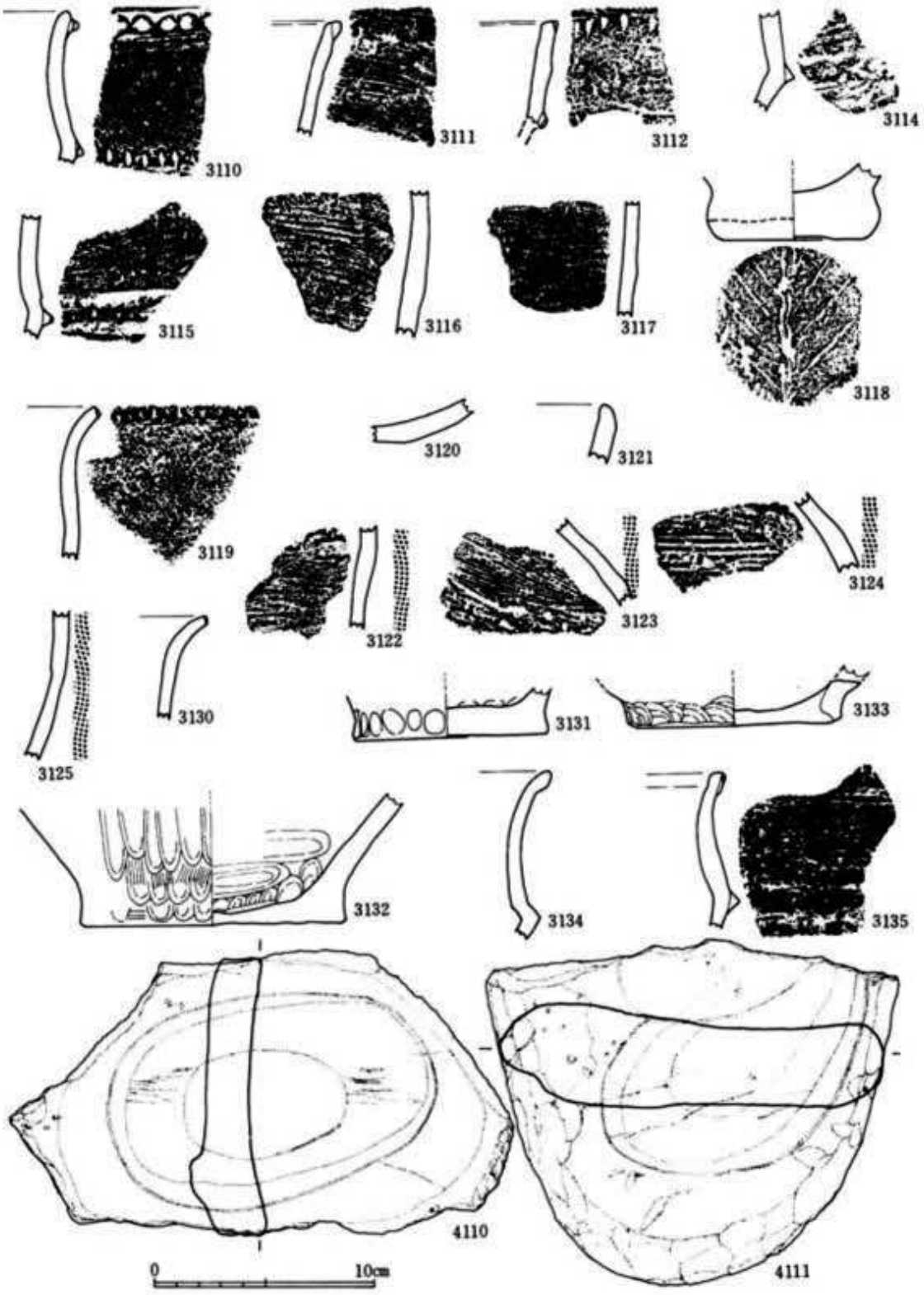
**b．壺形土器** 3120 丸底の底部である。灰褐色を呈し、底面内面に黒変がある。胎土に砂粒を少し含むが緻密で焼成も良好。外面に丹塗り痕が残る。

**c．深鉢形土器** 3121は深鉢形土器の口縁部と思われる。外斜する口縁部は、端部で直行し丸味を呈する。ナデ調整である。灰褐色を呈する。

〈板付Ⅰ式土器〉

**a．甕形土器** 3129 如意形口縁を呈し、端部の平坦面に刻目を施す。内外面とも横方向の刷毛目痕が見られる。茶褐色を呈し、煤が付着する。3130 口縁下より縦方向に、その下方は横方向に刷毛目調整を施す。褐色を呈し、煤が付着するがもろい。3131 平底を呈す円盤形の底部で、径9cmを測る。内面にナデ、外面に指頭による押圧痕が残る。暗褐色を呈し、煤の付着が認められる。3132 円形の粘土盤の上に粘土盤の上に粘土帯を輪積みし、接合部を内外から押圧している。底部にわずかに反りが残り、断面は台形状を呈する。外面は縦方向に刷毛目調整を施し、その後やはり縦方向に下から篦研磨調整を施す。内面はナデ調整で仕上げている。胎土に砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈す大形の甕である。3133 底面中央部が薄い平底である。外面に指頭圧痕が顕著に残る。淡褐色。3134 大きく外反する口縁部の外端部に粘土紐を貼付し、低い突帯を作る。反転部の屈折は大きく、くの字状を呈する。内外面とも篦研磨が丁寧に施されている。茶褐色を呈し黒変が見られる。3135 ゆるやかにくの字状に反転する胴部に無刻の突帯を巡らす。口唇外端は粘土を貼付して肥厚させるがやはり刻目はない。外面は篦による調整が見られる。褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。黒変が見られる。

第6図　M2第Ⅳ層出土土器実測図



〈板付式系土器〉

3122、3123、3124、3125の壺形土器の胴部片は板付式系土器である。内面は横方向に刷毛目痕が走る。その後ナデ調整を施しているのもある。外面はナデで仕上げ、丹塗りを行なう。色調はいずれも淡褐色を呈す。

**2）石製品**

石皿。4110、4111はいずれも砂岩製である。4110は楕円形を呈すると思われるが半截している。裏面の使用痕はない。4111は周囲を破損している。裏面も研磨痕が見られる。

**(3) 木製品**

C3・D3区の溝状遺構M2の第II、IV層より出土した夜臼式、板付I、II式土器とともに多くの流木が出土した。その中に加工痕の確認出来る農具の鍬、工具の石斧柄、狩猟具の弓木等の木製品も伴出した。

① **平鍬** 4001 平鍬の鍬身の未製品である。長21.5cm、幅12.4cm、隆起部厚 3.2cm、刃厚 1.9 cmを測る。内側に卵形を呈す柄つぼの隆起部を作出するが、柄孔は全く穿たれていない。4002 中央部に柄つぼの隆起部を持ち、両端に刃部を持つタイプである。鍬身が外側に反るのは乾燥時のひずみと思われる。腐触が大きいが隆起部は隅丸長方形状をなす。現長で48cmを測る。柄孔は穿たれていない。4003 平鍬の未製品である。長50.5cm、幅19.5cm、隆起部厚 4.5 cm、刃部厚 3.0～ 1.6cmを測る。隆起部は幅広の長方形を呈する。柄孔未製。

② **斧 柄** 石斧直柄の未製品が4点あり、製作工程を推測出来る資料である。樹種は未鑑定である。

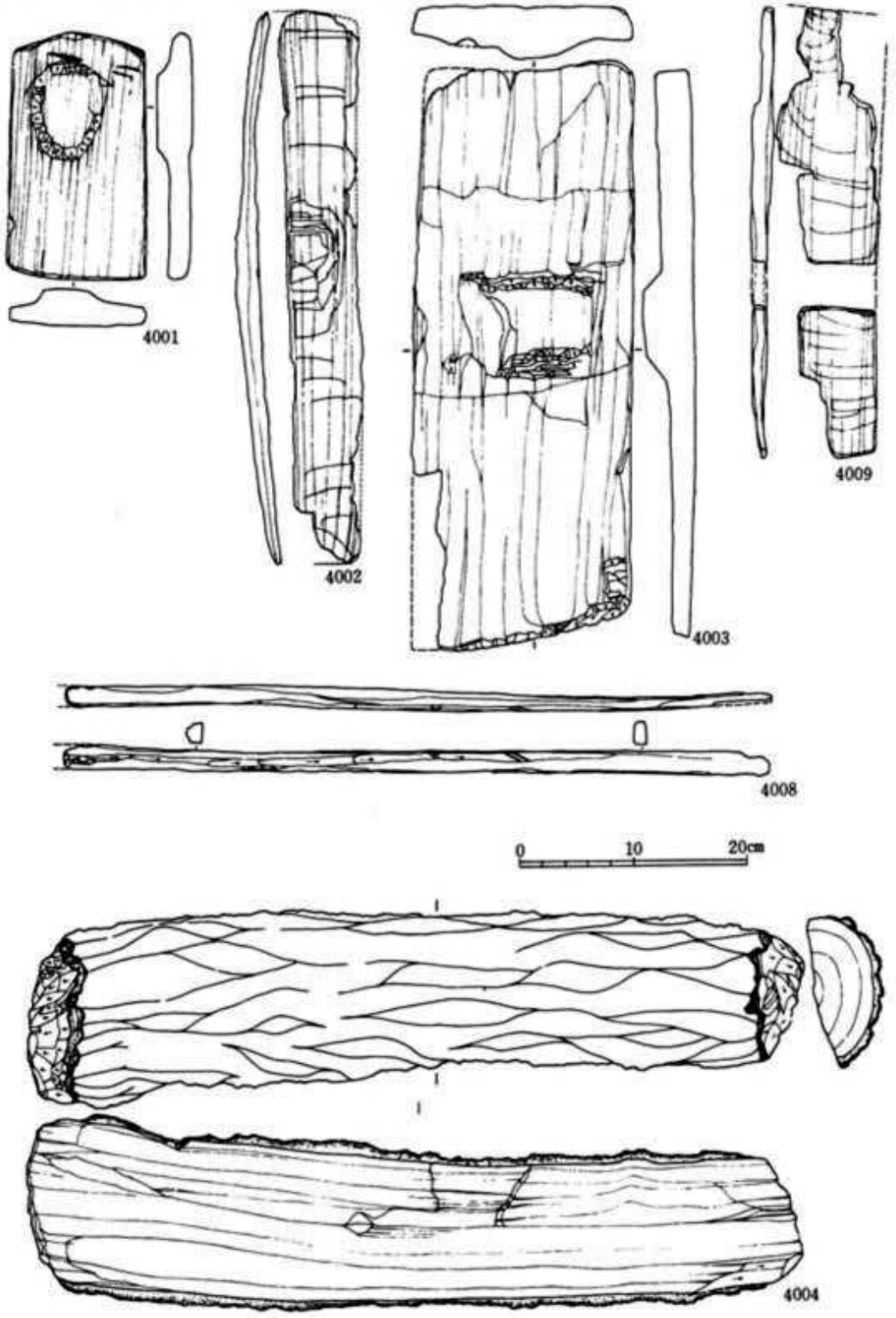
〈工程1〉 4004 根側幹径約15cmの根部に近い幹部の、節のない部分を半割した資料である。樹皮の除去は行なわず、現長69cmを測る。切断は樹皮の方から芯部の方へ施し、切断角は梢側で約60度、根側で約45度を測り、芯部付近はその角度が大きい。半割は梢部側の方から打割したと思われ、根部側の面が起伏に富む。半割後の削り加工は梢部の方から斧を入れている。側面に簡単な加工痕が二ヶ所ある。

〈工程2〉 4005 柄の頭部側の切断加工面は丸味を帯びる。側面の握り部を作り出す加工は、頭部分だけ残して、頭部側から約20度のゆるい角度で芯部まで達している。握り部を作出する加工は、まず握り部の手元側から芯にそって斧を入れて粗割りし、その後削り加工を加えている。現長69cmを測る。

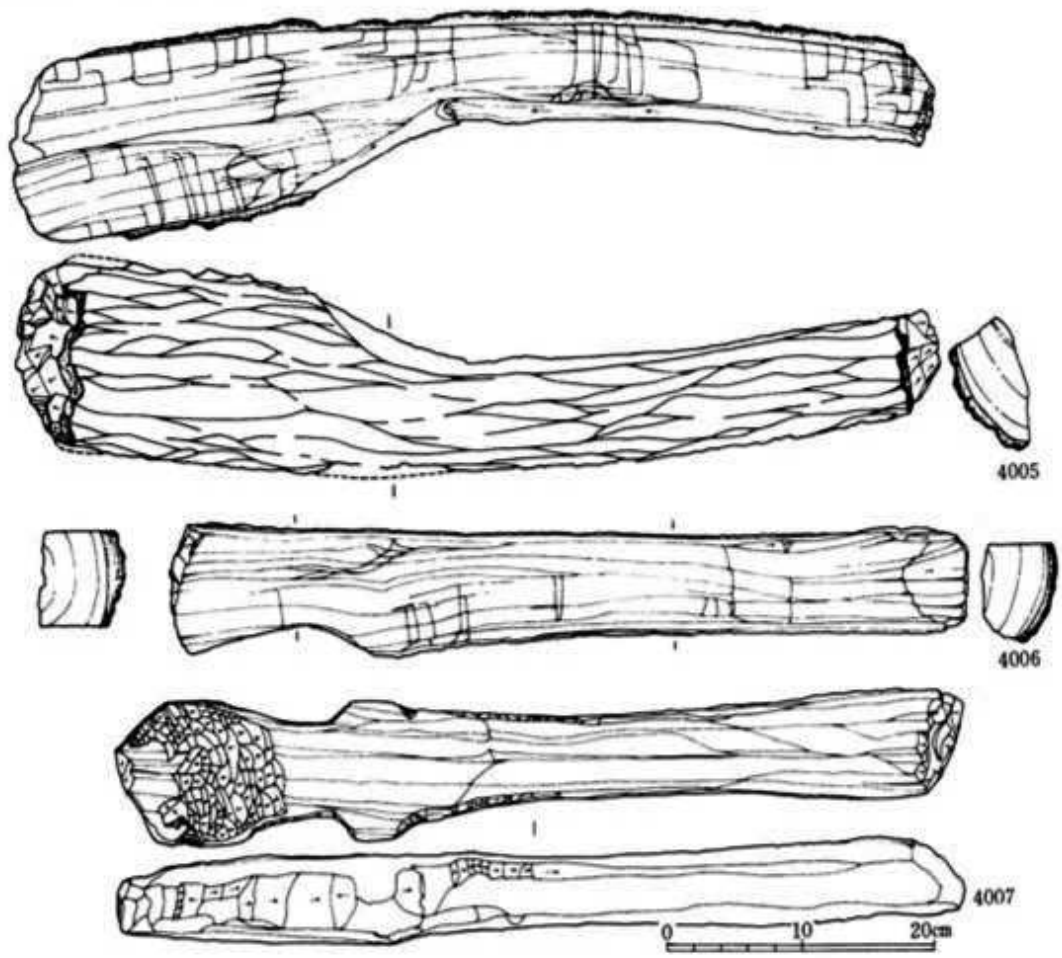
〈工程3〉 4006 側面加工を施している資料である。斧頭部は、両方向から斧を入れ、約2cmの抉りを作り出す。この抉りから 2.5cm離している握り部の加工は、面取り加工を重ねることによって握り部の丸味を作り出している。この加工は4005と異なる。現長59.1cmを測り、樹皮はまだ除去していない。

〈工程4〉 4007 粗加工後に施した削り加工がほぼ済んだ資料である。斧身の基部を挿入

第7図　M2第Ⅳ層出土木製品実測図 (1)



第8図　M2　第Ⅳ層出土木製品実測図 (2)




するための孔はまだ穿っていない。有孔部の上下面に整った平坦面を作り、断面は約7㎝と約4㎝のほぼ長方形を呈す。柄部は上下面と面取りの削り加工を繰り返すことによって調整している。最細部で径6㎝と5㎝の楕円形を呈す。有孔部の側面は樹皮を取り去った後、薄くするための削平加工を施す。

③ **弓木状木製品**　4008　現長で63㎝、最大幅 2.1㎝、最大厚 1.8㎝を測る。端部に弦掛けと思われる抉りが両側面にあり、断面は薄い長方形を呈する。中央部は前面に張り出しが強くなり、断面はかまぼこ形を呈す。中央部付近から欠損しているが弓木と推測される。

④ **板状製品**　4009　厚さ4～14㎜を測り板状を呈し、中央部が厚い。端部に反りが見られる。

**(2) 田島遺跡甕棺墓群**

「田島段丘」の丘上からやや西に傾斜する付近に墓域はある。峯部にそって南から北へ16基の甕棺墓が確認された。いずれも開墾や耕地整理時に削平されてしまっている。また地層が花崗岩の風化砂層であるため、墓壙もよく確認出来なかった。K6から日光鏡、K1からガラス

製小玉、K９から碧玉製管玉などの副葬品が、検出された。K６下、K15下、K４下、K16下は中期後半の立岩式、K３下、K13下は後期初頭の桜馬場式、K14下、K１下は後期前半の三津式と比定できよう。

**K１下甕**　截頭卵形を呈す。口縁部は直線的に立ち上がって開き、頸部でくの字状に屈折し内面に稜をつくる。肩部はやや張り、胴部上位に最大径はある。胴部は内彎が軽い。断面台形を呈す突帯を、頸部直下と胴部中位に各一条ずつ有す。棺底より、コバルト色のガラス製小玉を検出。内外面とも刷毛目調整を施し、焼成は良好。色調は赤褐色。

**K２上甕**　口頸部を欠いで甕棺に使用している。胴部の最大径より下に二条のコの字貼付け突帯を巡らす。内面はナデ、外面は細かい刷毛目調整で仕上げる。淡茶色を呈し黒変がある。

**K２下甕**　截頭卵形を呈す器形で、口縁部を欠いで埋葬している。肩部は殆んど張りがなく、最大径は胴部の中位よりやや上にある。器壁は薄く平底である。肩部最上位と胴部中位に、小さめの突帯を一条ずつ貼付ける。前者は断面三角形、後者はやや乱れた台形状である。外面は縦方向の粗い刷毛目調整で仕上げる。焼成後外面より水孔を穿っている。色調は淡赤茶色である。大きく黒変が見られる。

**K３下甕**　わずかに外反する厚手の口縁部は、立ち気味に開く。頸部の屈折部はくの字状を呈し内面に稜をつくる。最大径は胴部中位にあり、珠算玉状を呈す器形である。肩部と胴部中位に突帯を一条ずつ有す。底部は上げ底気味の平底である。器面は荒れて調整不明。赤茶色を呈す。

**K４下甕**　截頭卵形を呈す大形の器形である。胴部の最大径付近に二条のコの字状突帯が巡る。底面は上げ底状の平底である。底部近くにのみかなり粗い刷毛目痕が残る。胎土は微砂粒を少し含み良。焼成やや良。淡茶褐色を呈す。

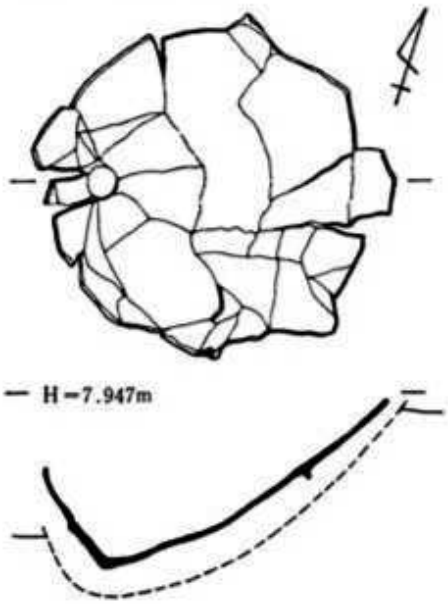
**K５下甕**　底部のみ残存。底部は不安定な平底であり、厚くゆるやかに胴部へ上がる。外面は刷毛目調整で仕上げる。胎土は多少砂粒を含み良。明茶色を呈す。

**K６下甕**　最大径の推定される胴部中位に断面コの字状突帯を貼付け、胴部下半はゆるやかな立ち上がりで張り出しが少ない。底部は厚いしっかりした平底である。内面はナデ、外面は縦方向の粗い刷毛目調整で仕上げる。砂粒を多く含み焼成はやや不良。淡茶色を呈す。日光鏡一面が副葬されていた。

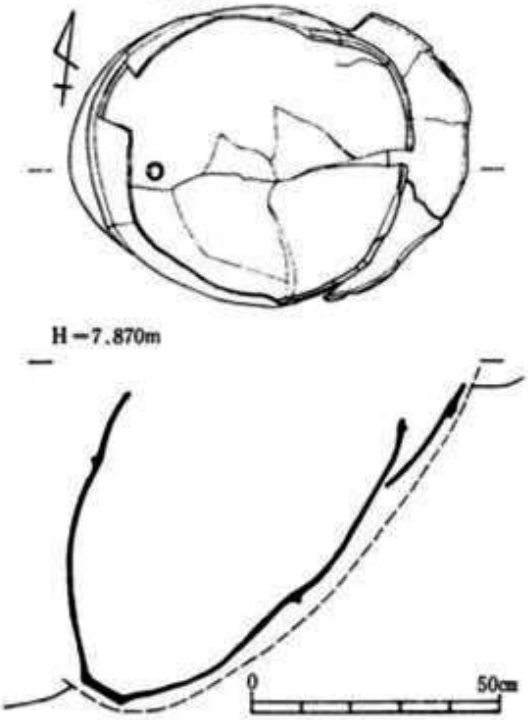
**K７下甕**　口頸部を欠失するが、球形に近い器形である。胴部の最大径付近に、小さめの貼付け突帯が一条ある。外面は一面に粗い刷毛目が斜位に走り、底部はその後ナデ調整を施している。砂粒を含むが堅緻である。色調は赤茶色。

**K８下甕**　底部のみ残存。浅い上げ底状の平底である。刷毛目調整後、粘土帯の接合部に横ナデ痕、底部に指頭圧痕が見られる。砂粒を含み、焼成良。色調は赤茶色を呈し、黒変が見られる。

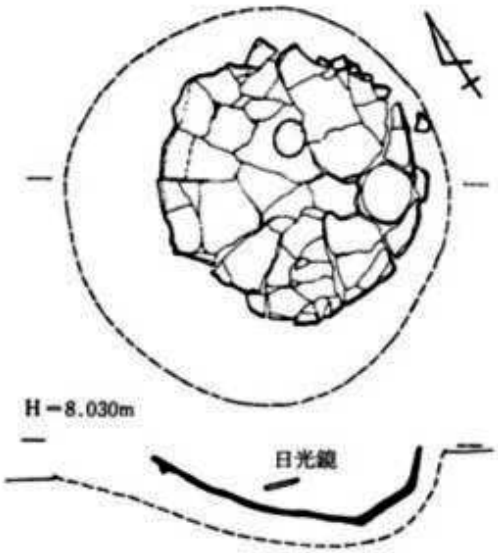
第9図　1号甕棺墓



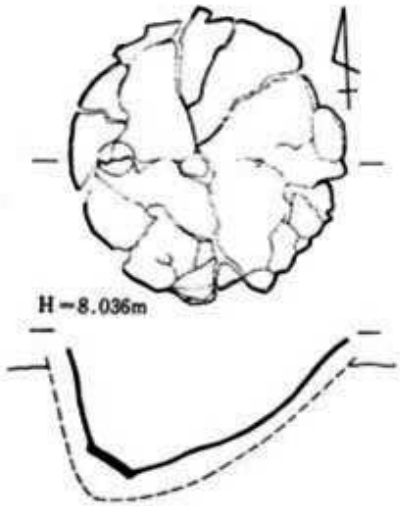

第10図　2号甕棺墓



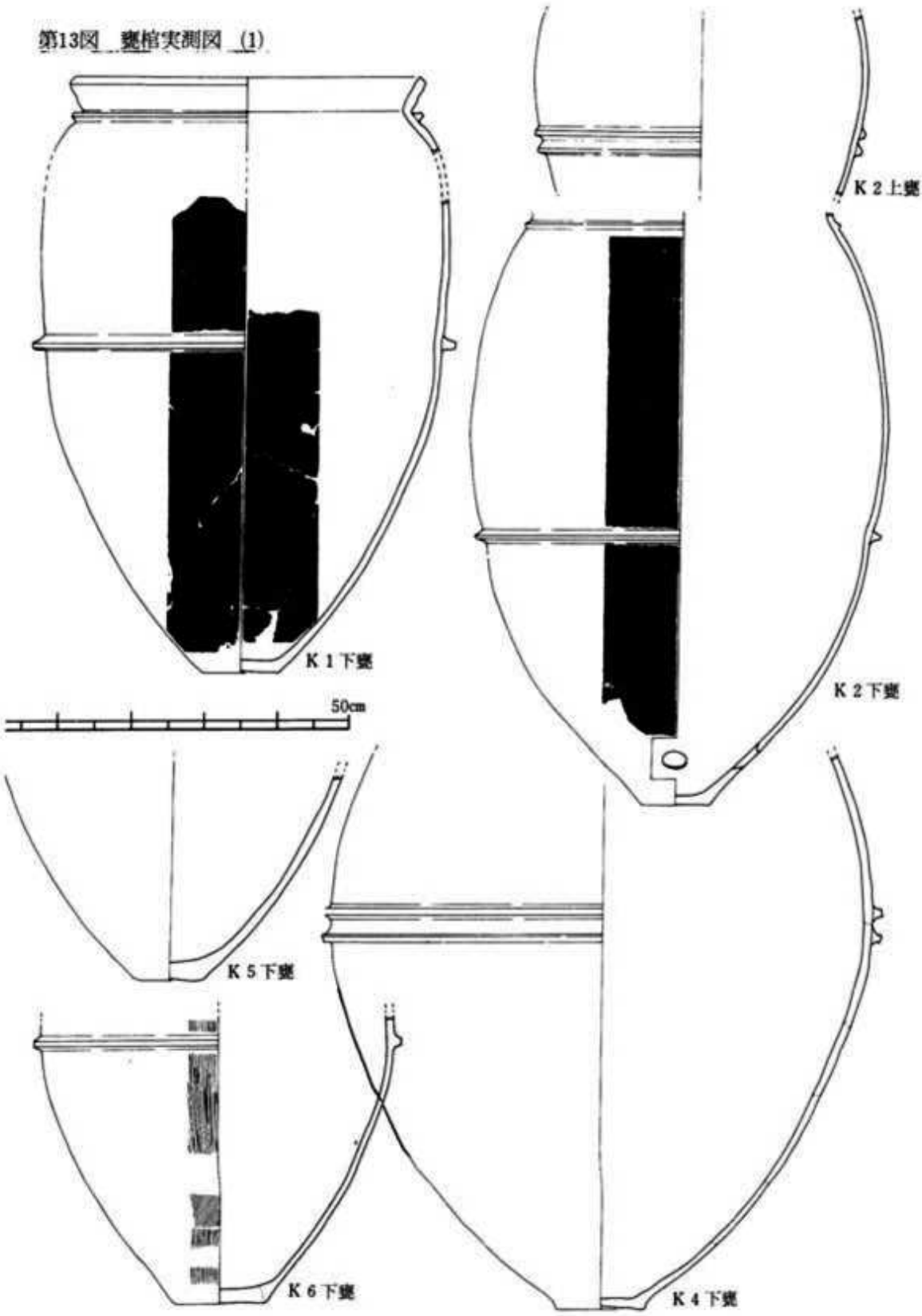

第11図　6号甕棺墓



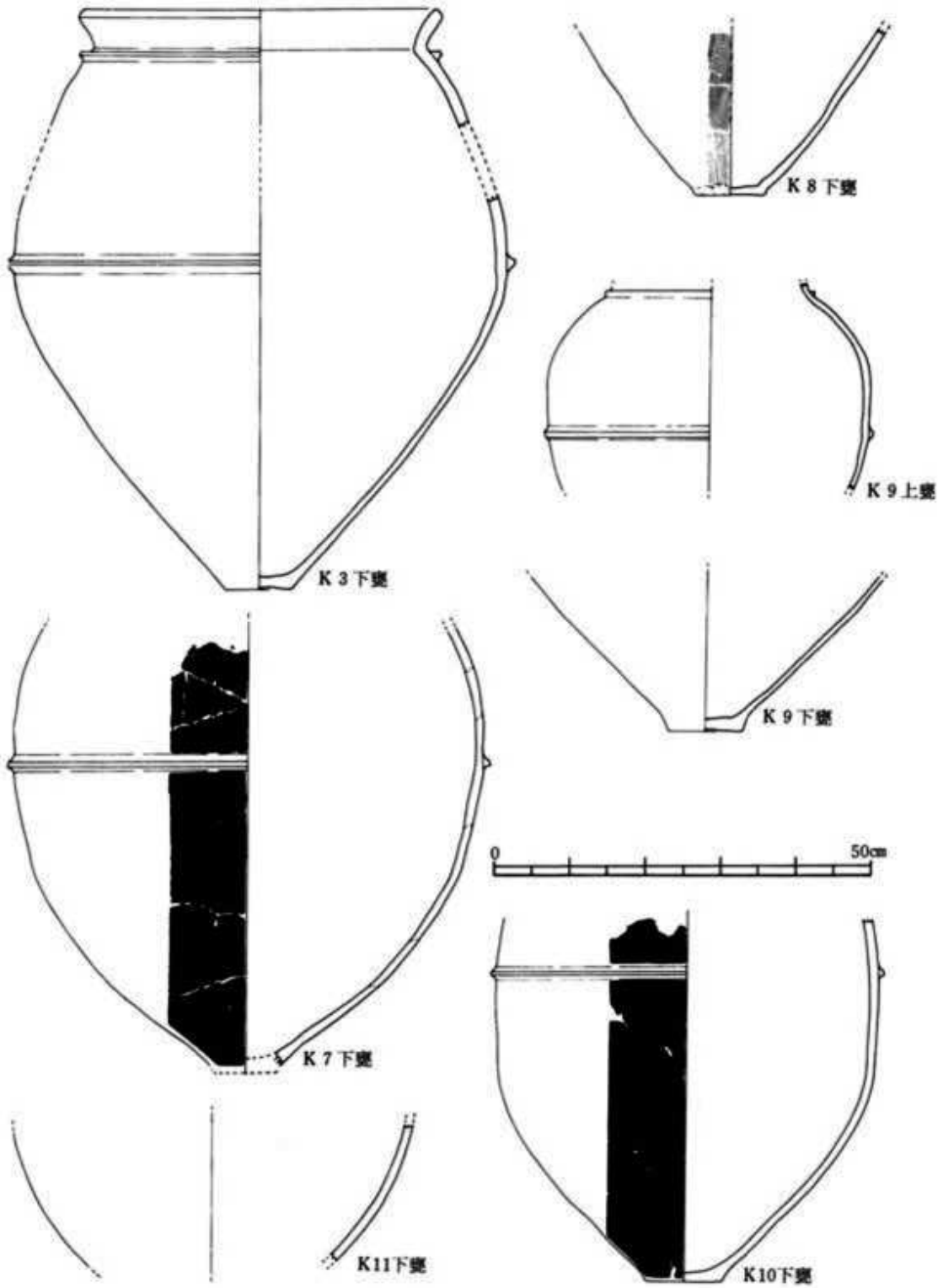

第12図　9号甕棺墓



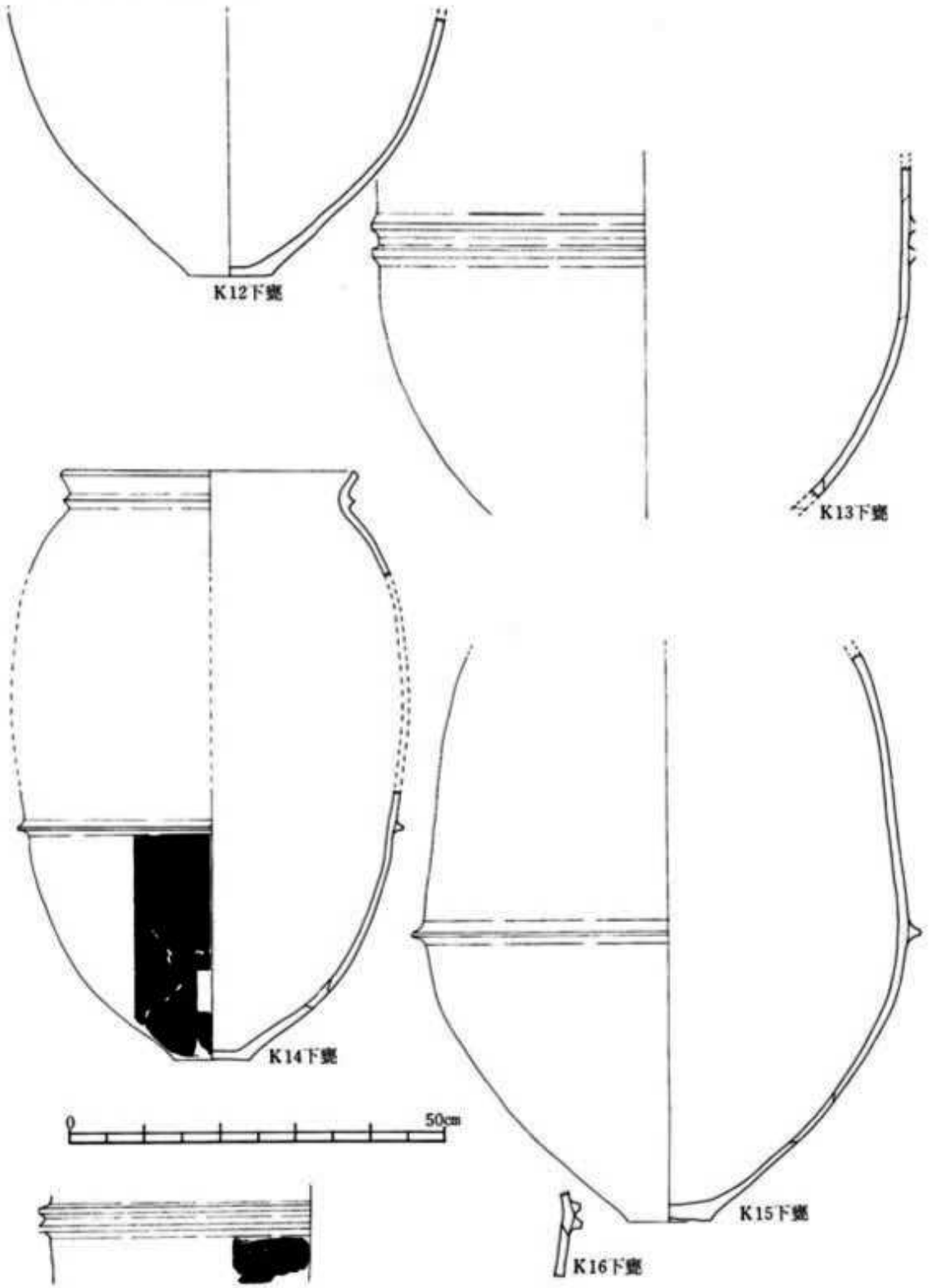
第13図　甕棺実測図 (1)



第14図　甕棺実測図 (2)



第15図　甕棺実測図 (3)



**K９上甕**　下甕に埋没した状態で出土した。口縁部を欠いでいる。肩部に最大径があり大きく張り出す。口縁直下に断面三角形、胴部にコの字状の貼付け突帯を一条ずつ巡らす。やや小形で、器壁は薄い。内面はナデ調整、外面は刷毛目調整の後ナデ調整で仕上げ、丹塗り痕がある。明茶色を呈す。砂粒を殆んど含まず胎土、焼成とも良。

**K９下甕**　底部のみ残存。底面は上げ底気味の平底であり、胴部に向って大きく張り出す。器壁は薄い。器面は荒れて調整不明。淡茶色。棺底近くに、碧玉製管玉二個が副葬されていた。

**K10下甕**　胴部上体を欠失。最大径付近に小さい断面コの字状の貼付け突帯を一条巡らす。外面は粗い刷毛目調整で仕上げ、丹塗りを施す。赤褐色。

**K11下甕**　胴下半部のみ残存。外面は刷毛目調整であるが、粘土帯の接合部はナデによって仕上げている。明茶灰色を呈し、黒斑がある。

**K12下甕**　底部のみ残存。外面は粗い刷毛目調整の後ナデ調整がみられる。胎土に１～５㎜の砂粒を多く含み、焼成は不良。

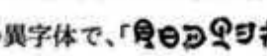
**K13下甕**　胴部のみ残存。胴部中位はあまり張らない。胴下位は大きな内彎を呈す。外面より小さな水孔を穿つ。色調は乳茶色で胎土に砂粒を多く含む。

**K14下甕**　胴部上位を欠失するが全体の器形は推定出来る。口縁部は短く頸部でくの字状に反転する。肩はあまり張り出さず最大径は胴部中位に推定される。胴部下半は大きく内彎して底部に至る。底部の器厚は薄く上げ底気味の平底である。口縁部と胴部の接合部に尖り気味の断面三角形の突帯と、胴部やや下位に小さめの断面台形の貼付け突帯が一条ずつ付く。底部近くに外面より穿孔している。外面は刷毛目調整で仕上げる。色調は淡茶褐色で、焼成はやや不良。

**K15下甕**　截頭卵形を呈する。口頸部を欠失する。肩はやや張り胴部上半は直線的にすぼまる。裾部の広い断面台形の貼付け突帯は胴部の最大径部につく。胴部下半は大きく張り出す。外面より大きな水孔を穿つ。砂粒を多く含み焼成不良。磨滅がひどく調整不明。色調は淡灰褐色である。

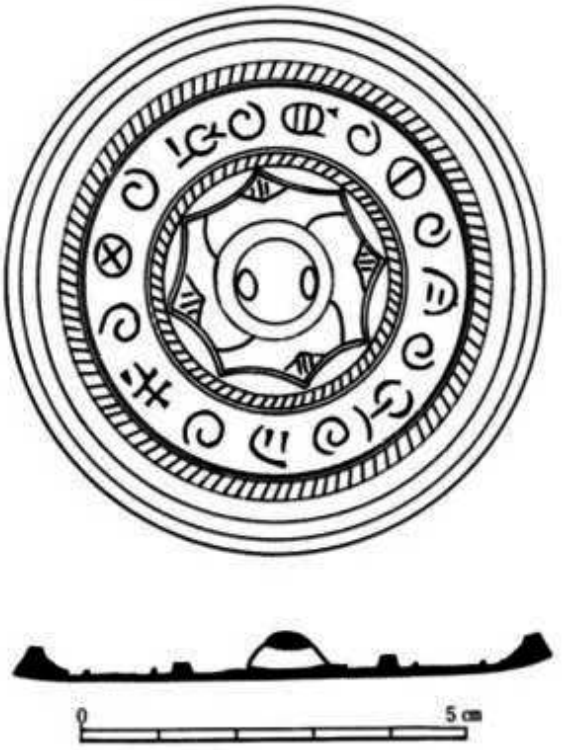
**K16下甕**　胴部片のみ残存。二条の断面コの字形貼付け突帯を付ける。内外面とも刷毛目調整であるが、突帯の付近はナデ調整、その内面には指圧による押圧痕が残る。淡茶色を呈す。

### (3) 銅　鏡

前漢の中期およびやや後に造られた舶載鏡で「日光鏡」と呼ばれるものである。鏡背面の内区の主区に銘帯をもち、そして連弧文帯をもつ直径 6.9cmの小型鏡である。鏡面は凸面を呈する。中心に直径１cmの半球型の鈕があり、鈕のまわりの鈕座は円座である。内区の鈕座寄りに八弧からなる内行花文（連弧文）帯を有す。弧の間には、⏚型文と、鈕座まで達する｜文が交互につく。その八連弧文帯と、同心円状の櫛目文帯をはさんで、単圏の銘帯が位置する。銘文の書体は楔形の異字体で、「  」の八文字がはいる。その字間に渦◎文の間置文

を交互に入れている。銘文の判読を中国歴史博物館の史樹青先生にお願いし、「〝見日月之明光、田貞（卓）〟田貞（卓）は造鏡人の姓名である」との御解読を承った。外区には内区と同様の櫛目文帯を有す。図文、銘文はいずれも細い突線で描いている。最外辺の縁は平縁である。

第16図　日光鏡実測図




この日光鏡と同形鏡が中国の連雲港市海州の霍賀墓より出土している。霍賀墓は小礁山の北麓にあり、1973年3月に調査[3]されている。竪井式の墓坑に、東西3.34m、南北2.65mの木槨があり、この中にある木棺二個に男女が葬られていた。女性の左足先に直径13cmの百乳鏡、男性の足先中央部に日光鏡が副葬されていた。この日光鏡は直径が6.6cmで田島の日光鏡より3mm小さいが、同銘同文の同形鏡である。

**(4) 土壙墓**

**①　1号土壙墓**　「田島段丘」上の墓域の南西隅の西斜面に土壙墓が二基検出された。1号土壙墓は、主軸方位をN87°Eにとり現状で長さ146cm、幅65cm、深さ20.5cmを測る。頭部は東向きと推定され、胸元にガラス製小玉、腰右側に鉄製刀子が副葬されていた。

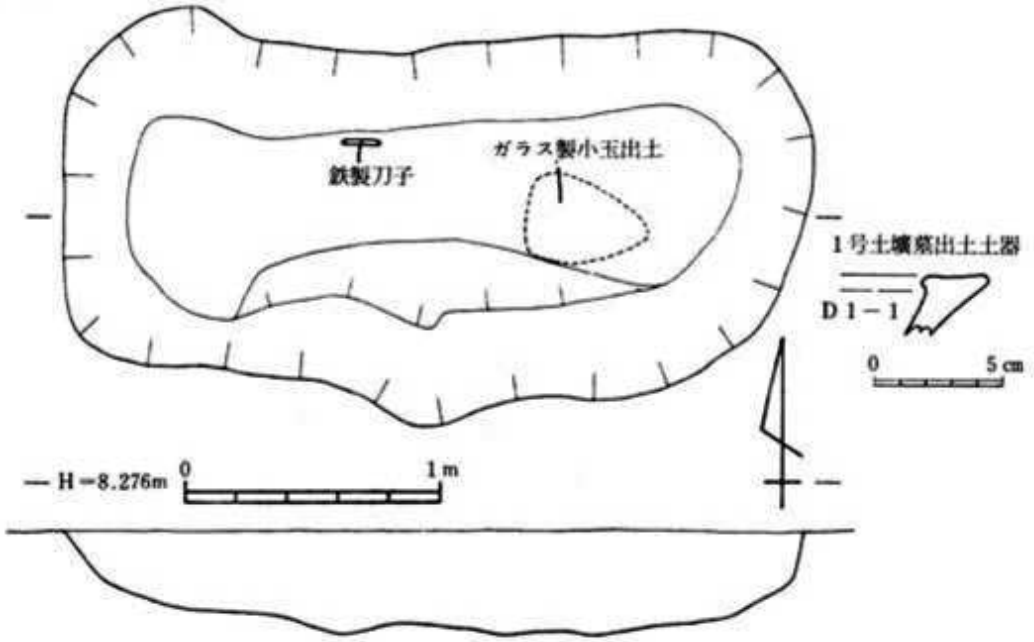
覆土中より検出されたD1－1は壺形土器の口縁部片である。上辺は平担面を作り、内端部は軽く張り出す。淡茶色を呈し、胎土良好。

**刀子**（鉄製）　1号土壙墓の棺底より出土した。柄部を欠失する。切先の刃部はゆるやかにメス状に尖る。錆が著しく、関は不明である。現長で7.4cm、推定刃幅1.0cm、刃厚2.5mmを測る。

**ガラス製小玉**　1号土壙墓よりガラス製小玉が104点以上出土した。色調は8点がブルーグリーン、他はスカイブルーを呈する。前者は大形のみで、後者は殆んどが小形である。

**②　2号土壙墓**　4号土壙を切り、2本の柱穴により切られている。長径120cm、短径63cmの楕円形状を呈する。深さは現状で30cmを測る。副葬品は検出されなかった。小児用と推定される。

第17図　第1号土壙墓




**(5)　装身具**

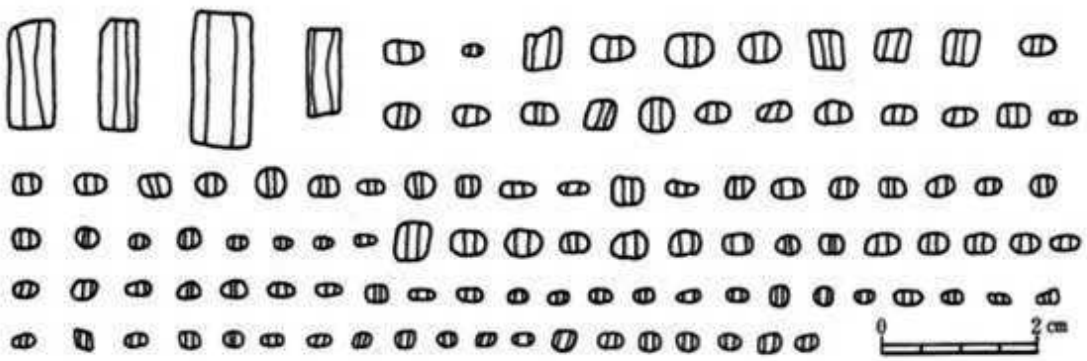
甕棺、土壙基3基と攪乱層より、装身具は碧玉製管玉3点、ガラス製管玉1個、ガラス製小玉 105個以上が出土した。

①〈1号甕棺小玉〉ガラス製でコバルト色の小玉1個が棺底より出土した。長 1.4㎜、外径 2.9㎜、孔径 1.1㎜を測る。

②〈9号甕棺管玉〉碧玉製管玉2個が棺底に近い部分より出土した。長13.9㎜、外径 4.6㎜、孔径 1.6㎜と 1.4㎜、重さ0.5gと長13.8㎜、外径 6.0㎜、孔径 2.5㎜、重さ0.8gを測り、前者は一方より、後者は両面より穿孔している。

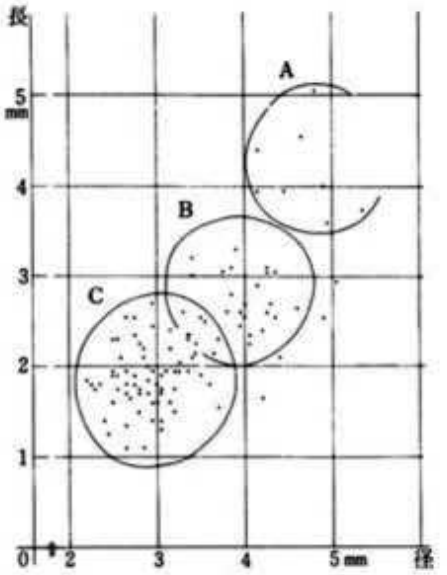
③〈攪乱層〉　二個の管玉が出土した。碧玉製品は両面よりの穿孔で、長11.0㎜、外径 4.1

第18図　管玉・小玉実測図



mm、孔径 1.9mm、重さ 0.3g を測り小形細身である。ガラス製品はスカイブルー色を呈し大形である。長16.7mm、外径 7.8mm、孔径 2.8mm、重さ 1.8g を測る。

**第1表　第1号土壙墓出土ガラス製小玉計測値**



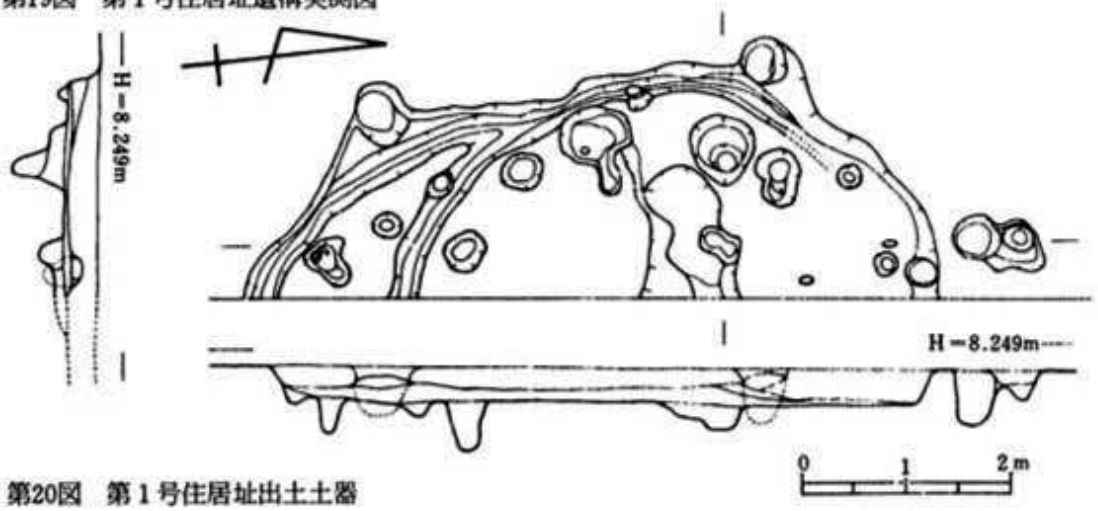

**第2表　甕棺墓一覧**

| 甕棺 | 方位 | 形態 | 傾斜度 | 組合せ 上 | 組合せ 下 | 突帯 上 | 突帯 下 | 墓壙 | 粘土帯 | 副葬品 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | N 72°E | —— | 56° | — | 甕 | — | 口一条<br>胴一条 | — | — | ガラス製小玉 | 破壊による欠失 |
| 2 | N 84°E | 覆口 | 54° | 甕 | 甕 | 胴二条 | 口一条<br>胴一条 | — | — | | ＊ 水孔あり |
| 3 | N 82°E | —— | 54° | — | 甕 | — | 口一条<br>胴一条 | — | — | | ＊ |
| 4 | N 58°W | —— | 26° | — | 甕 | — | 胴二条 | — | — | | ＊ |
| 5 | S 84°W | —— | 56° | — | 甕 | — | — | — | — | | ＊ |
| 6 | N 56°W | —— | 56° | — | 甕 | — | 胴一条 | — | — | 日光鏡 | ＊ |
| 7 | S 76°W | —— | — | — | 甕 | — | 胴一条 | — | — | | ＊ |
| 8 | N 86°W | —— | 70° | — | 甕 | — | — | — | — | | ＊ |
| 9 | S 83°W | —— | 59° | 甕 | 甕 | 口一条<br>胴一条 | — | — | — | 管玉 | ＊ |
| 10 | —— | —— | 42° | — | 甕 | 胴一条 | | — | — | | ＊ |
| 11 | N 85°E | —— | — | — | 甕 | — | — | — | — | | ＊ |
| 12 | —— | —— | 44° | — | 甕 | — | — | — | — | | ＊ |
| 13 | —— | —— | — | — | 甕 | — | 胴二条 | — | — | | ＊ 水孔あり |
| 14 | N 56°E | —— | 72° | — | 甕 | — | 口一条<br>胴一条 | — | — | | ＊ 水孔あり |
| 15 | S 83°W | —— | 30° | — | 甕 | — | 胴一条 | — | — | | ＊ 水孔あり |
| 16 | —— | —— | — | — | 甕 | — | 胴二条 | — | — | | ＊ |

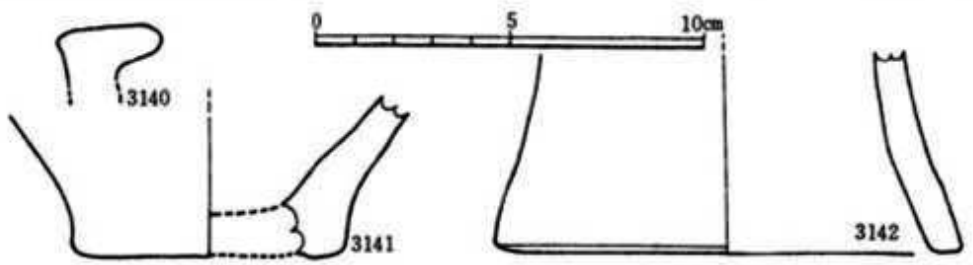
### (6) 1号住居址

遺跡の東南端に住居址が一基のみ検出された。住居址の西部分約3分の1が残存している。西壁の高さは23cmで、径約7mの円形状を呈するものと思われる。柱根が一本残存していた。〈出土遺物〉3140、3141は甕形土器である。3140は逆L字状の口縁部片で、茶褐色を呈する。3141は平底の底部片であり、内面に指頭によるナデ、外面に刷毛目痕が残る。赤褐色で黒変が見られる。3142は器台形土器の裾部片である。裾部はわずかに内彎して端部に達する。色調は赤茶色。胎土に砂粒を多く含む。石器は石鏃1点4182と黒曜石製石核が1点検出された。

第19図　第1号住居址遺構実測図




第20図　第1号住居址出土土器




### (7) 袋状竪穴

「田島段丘」の東斜面裾部にL字形に並ぶ4基の貯蔵穴と推定される袋状竪穴が検出された。2号～4号は中期中葉に比定できよう。

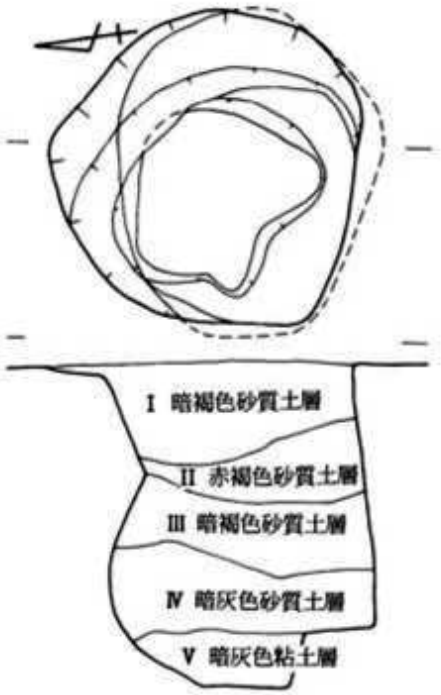
#### ① 1号袋状竪穴　〔第21図〕

口径約60cm、底面からやや上方にある最大部径約50cm、深さ62cmを測る。出土遺物は土器細片のみで、覆土下層からの出土はない。

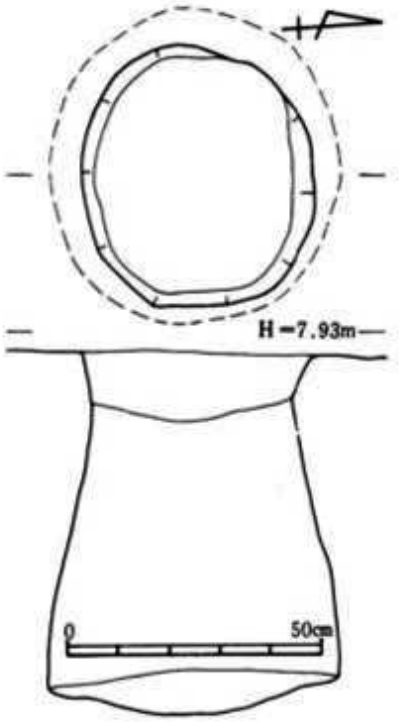
#### ② 2号袋状竪穴　〔第22図〕

南北に皿状の凹みをもつ。口径58～42cm、深さ75cm、底径32cmの袋状を呈す。下層からの出

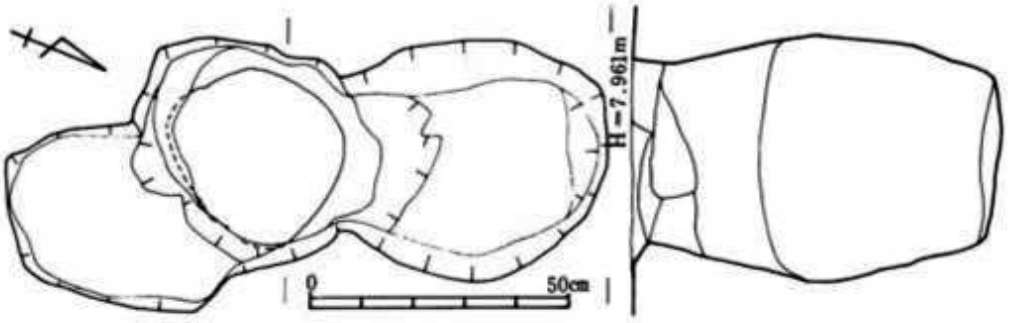
第21図　1号袋状竪穴遺構実測図



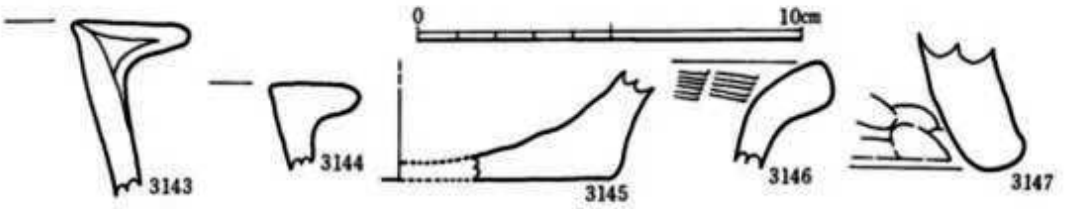

第23図　3号袋状竪穴遺構実測図




第22図　2号袋状竪穴遺構実測図




第24図　2号袋状竪穴出土土器

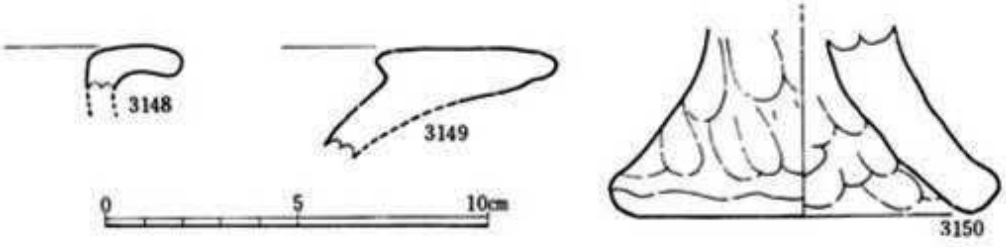


土遺物は次の通りである。3143、3144は甕形土器の口縁部で、逆L字状を呈す。3145は壺形土器の底部で推定底面径は11cmを測る。3146器台形土器の器受部である。くびれ部が上位にあり、内面に刷毛目痕が残る。3147土製支脚の裾部片。内面に指頭押圧による調整がある。いずれも茶褐色を呈す。

**③　3号袋状竪穴**

口径46～50cm、底径57～60cm、深さ69cmを測り整った袋状を呈す。3148　逆L字状の甕形土器口縁部である。3149　壺形土器の口縁部で幅4.6cmの広い平坦口縁をもち、頸部は大きくすぼむ。推定口外径27.2cmを測る。赤茶色を呈し黒変がある。3150　支脚形土製品と思われる。内外面とも指による押圧調整を施し、外面はナデで仕上げている。茶褐色。

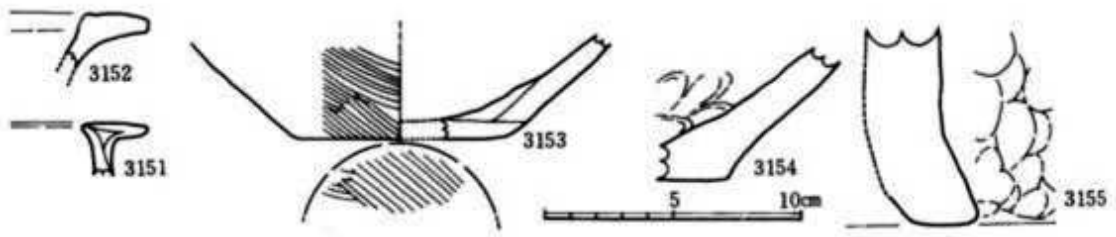
第25図　3号袋状竪穴出土土器




**④　4号袋状竪穴**

口径46cmと64cm、底径60cmと74cmの楕円形を呈し、深さ65cmを測る整った袋状土壙である。底部と竪穴外に小ピットを有す。3151は逆L字状を呈す甕形土器の口縁部。3152は平坦口縁をもつ壺形土器の口縁部。3151、3152とも灰茶色。3153、3154は壺形土器の底部である。3153　外面は底部まで刷毛目痕がある。底径は推定で 8.0cmを測る。灰褐色。3154　大形の壺で器壁も厚い。内面に指頭圧痕がある。赤茶色。3155　土製支脚の脚部片である。指頭圧による調整である。茶褐色を呈す。袋状竪穴からは、いずれも石器関係の遺物は検出されなかった。

第26図　4号袋状竪穴出土土器



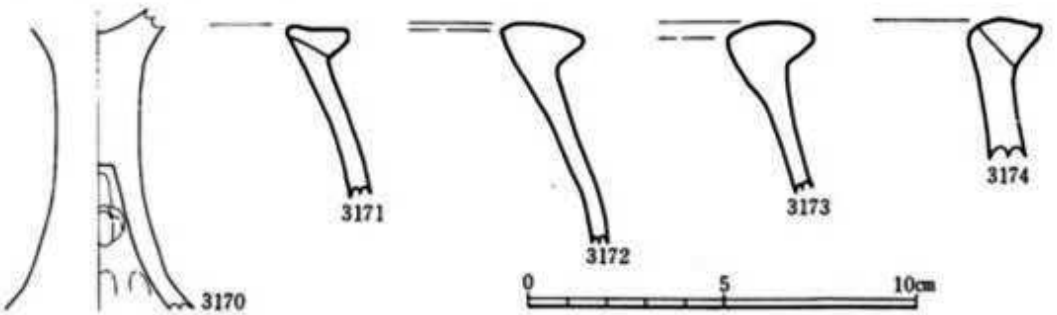

**(8)　土　壙**

**①　1号土壙**

東北区にある大形土壙である。径2.56m と2.07m の楕円状を呈し、深さ51cmを測る。

3170は高坏脚台である。坏底中央部は凹み、口縁部までそのまま内彎するタイプと推測される。脚部はゆるやかに外反するが裾部を欠く。柱状部は長い。調整は外面は横ナデ、脚内面は指頭圧後ナデで仕上げる。胎土に砂粒を殆んど含まず良好。3171～3174は甕形土器の口縁部片である。いずれも内傾し、断面三角形の厚めの張り出しが外部につく。3171は上辺が平坦面であるが、3172～3174は中ほどが盛り上がる。3172、3173は口縁内面が肥厚し稜線をつくる。3174は器壁が厚い。3173は淡茶色、他は茶褐色を呈する。

第27図　1号土壙出土遺物




**②　2号土壙**

東北端にあり、径 2.6m と 1.7m の卵形を呈する。東壁は溝状遺構で切られ、南側にも溝状遺構が走る。

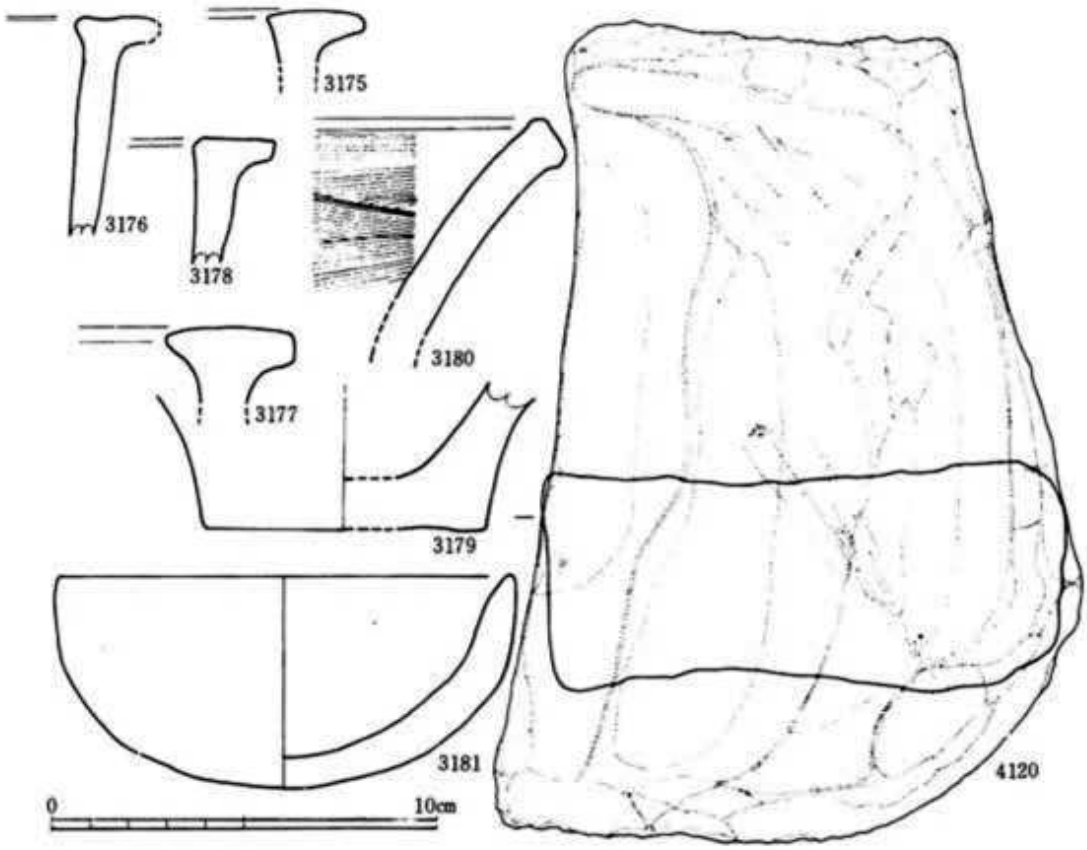
3175～3178は甕形土器口縁部である。いずれも逆L字状を呈し、上面は平坦面を作る。3175の平坦内端はわずかに張り出して稜を作るが、3176はやや張り、3177は大きく突出する。3178は張り出しがないタイプである。3179は甕形土器の平底を呈する底部である。3180は外反気味に大きく開口する壺形土器の口縁部である。口縁端部は平坦面を作り、上下端は肥厚する。内面に刷毛目痕が残る。3181は椀形土器である。口径12cm、器高 5.5cmを測る。厚手の口縁部はほぼ直立し、口唇部は丸く尖る。底部は不安定な丸底で薄めである。胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良で器面は荒れている。暗褐色を呈し内面は黒変している。2号土壙より多数の土器片が出土したが小甕の破片が多い。石製品で砥石が出土した。砂岩製で両面と両側面に研磨痕がある。

**③　3号土壙**

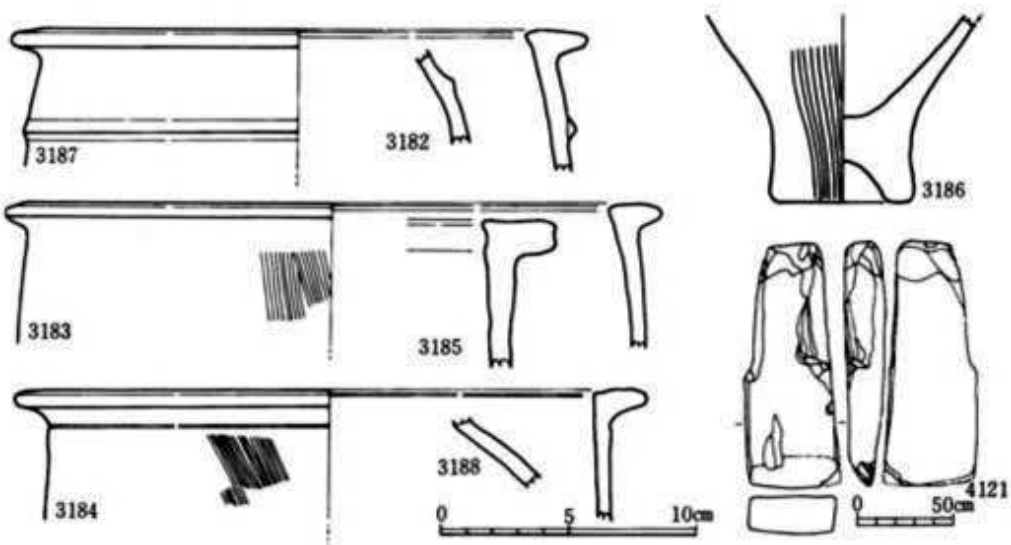
最大径 2.8m と短径 1.1m の不定形の土壙である。

3182～3186は甕形土器片。3182～3184は小甕の口縁部片でいずれも逆L字状を呈す。3182は胴部上位が内傾し、口縁部下 3.5cmに断面三角形の貼付け突帯を一条有す。口縁内端がわずかに突出する。3183　突帯を持たない。外面は縦方向の刷毛目調整である。推定口径25.8cmを測る。3184　胴部上位は殆んど直立する。外面の調整は縦方向の刷毛目である。色調はいずれも

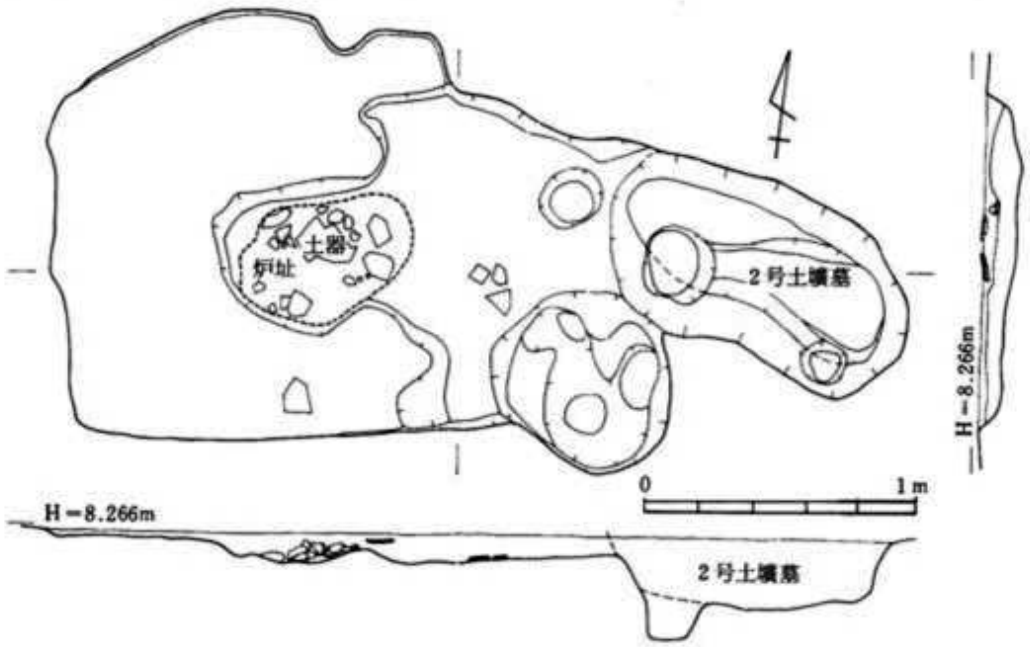
第28図　2号土壙出土遺物



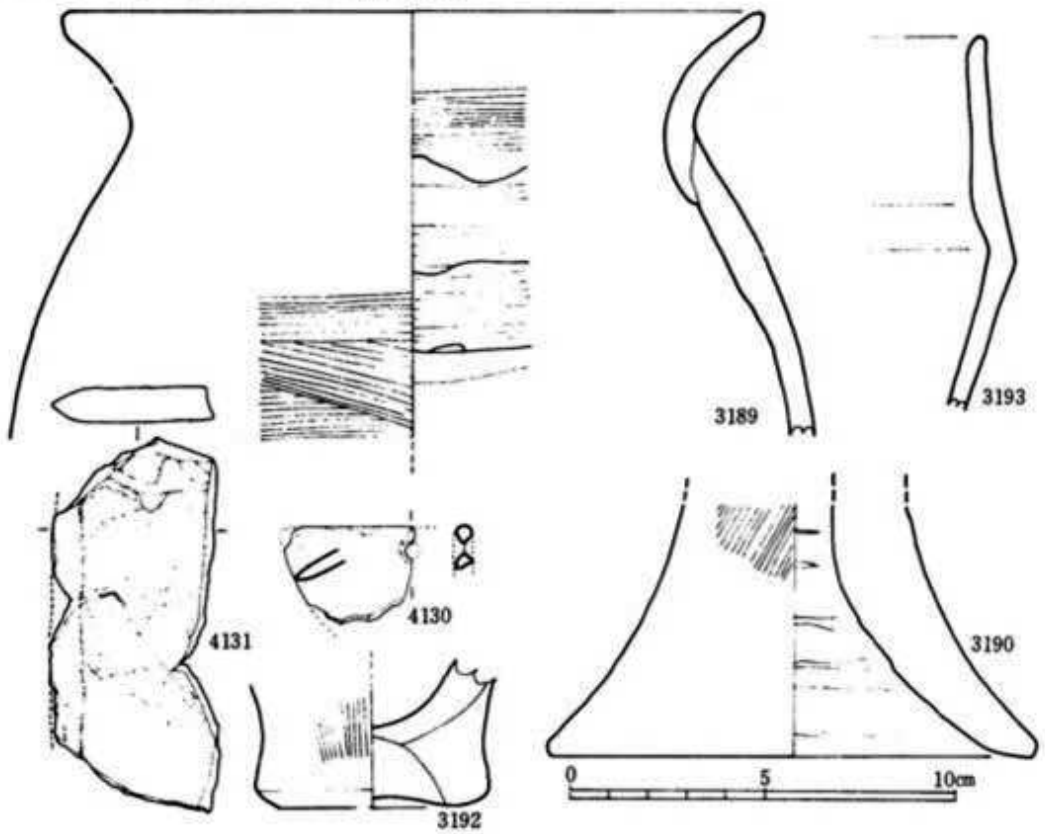

第29図　3号土壙出土遺物



第30図　4号土壙・2号土壙墓遺構実測図




第31図　4号土壙・P59・P94出土遺物



褐色。3185は推定口径45cmを測る大きめの小甕と思われる。しっかり付いた口縁部は逆L字状を呈し、直下は肥厚する。口縁内外端面は横ナデ調整時にいく分凹んでいる。内外面とも横ナデ調整。胎土に1～4㎜の砂粒を含み焼成良好。色調は淡茶色。3186　甕形土器の底部片。厚手で浅い上げ底である。推定底径 6.2cmを測る。3187、3188は壺形土器の肩部片と思われる。3187は三角突帯を一条有す。3187は赤茶色、3188は淡褐色。4121は扁平片石斧で器長 6.2cm、器幅 2.3cmを測り、粘板岩製。

**④　4号土壙**（第30・31図）

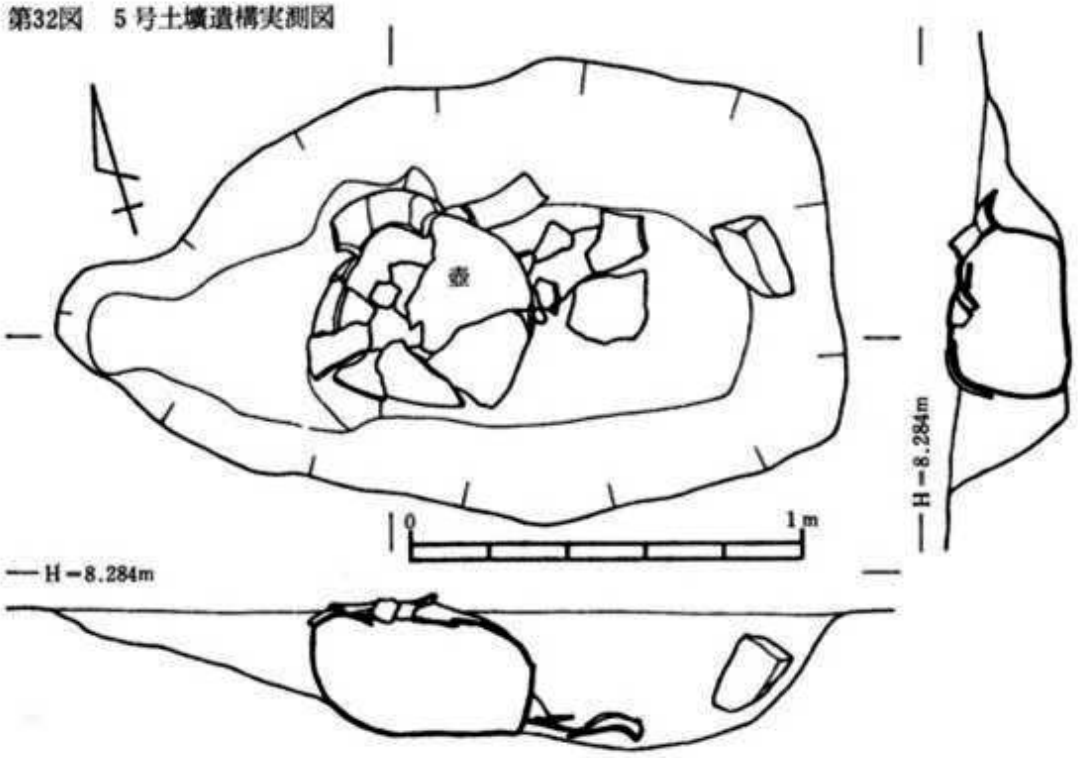
西南端にあり、現状で2.20m と1.50m を測り、台形状を呈する。炉址と推定される粘土床は65cmと45cmの卵形を呈し、中央部はやや凹み、床面は土器状に焼成を受けている。東壁は2号土壙墓と円形土壙に切られている。

3189は壺形土器で口外径18.1cmを測り、胴部上半のみ残存。外反して開く口縁部は端部で平坦面を作る。頸部の内面は厚く肥厚する。肩部の張りは小さい。内外面とも刷毛目調整であるが、内面の調整は粗雑である。外面は茶褐色、内面は口縁部まで黒変している。3190は高坏脚台の裾部である。裾口径12.4cmを測る。器厚がとても厚い。外面に刷毛目痕、内面に指頭によるナデ痕が残る。色調は暗茶色。その他土器細片が多数出土した。

**⑤　5号土壙**（第32・33図）

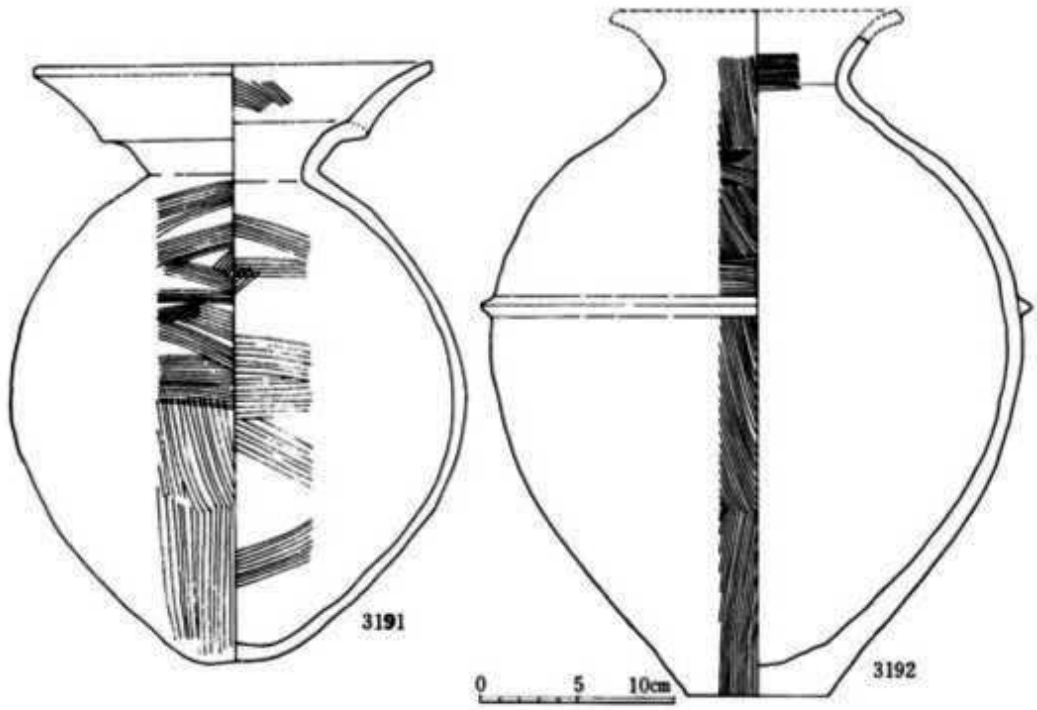
長径 2.0m と 1.2m の卵形を呈し、断面は深さ30cmを測る皿状の遺構である。

第32図　5号土壙遺構実測図



3191は壺形土器で、器高30.1cm、口径20.4cm、胴部最大径23.4cmを測る中形の完形品である。二重口縁の上縁下縁とも外反しながら大きく外へ張り出し、接合部の屈折は明瞭な稜線を作り出す。頸部は殆んどなく肩部への屈折は大きい。胴部はわずかに縦長状の球形を呈する。底部は不安定な平底風である。内外面とも刷毛目調整であるが、外面の胴部上半は横位の細かい刷毛目で、下半は縦位の粗い刷毛調整である。口縁部にも刷毛目痕が残るが横ナデによって仕上げている。胎土に砂粒を少し含み焼成は良く、褐色を呈する。弥生終末期に比定できよう。3302は土師器の壺形土器である。頸部がしまり、肩は張り、明茶褐色を呈す。内面は篦削り、外面は横方向の刷毛痕が残る。黒斑がある。胴部の最大径22.5cmを測る。

第33図　第5号土壙・P95出土遺物




⑥ **P59**　東中央部は、かつて段丘の凹みだったものと推定されるが、その覆土層から多量の遺物が出土した。石鏃4147、4183等4点、スクレーパー、石庖丁4130、石斧、磨石、礫投弾、石剣4131等が検出された。4131は石剣の未製品と推定される。刃部を両面からよく研磨しているが、他は打製調整痕が残る。接合資料である。

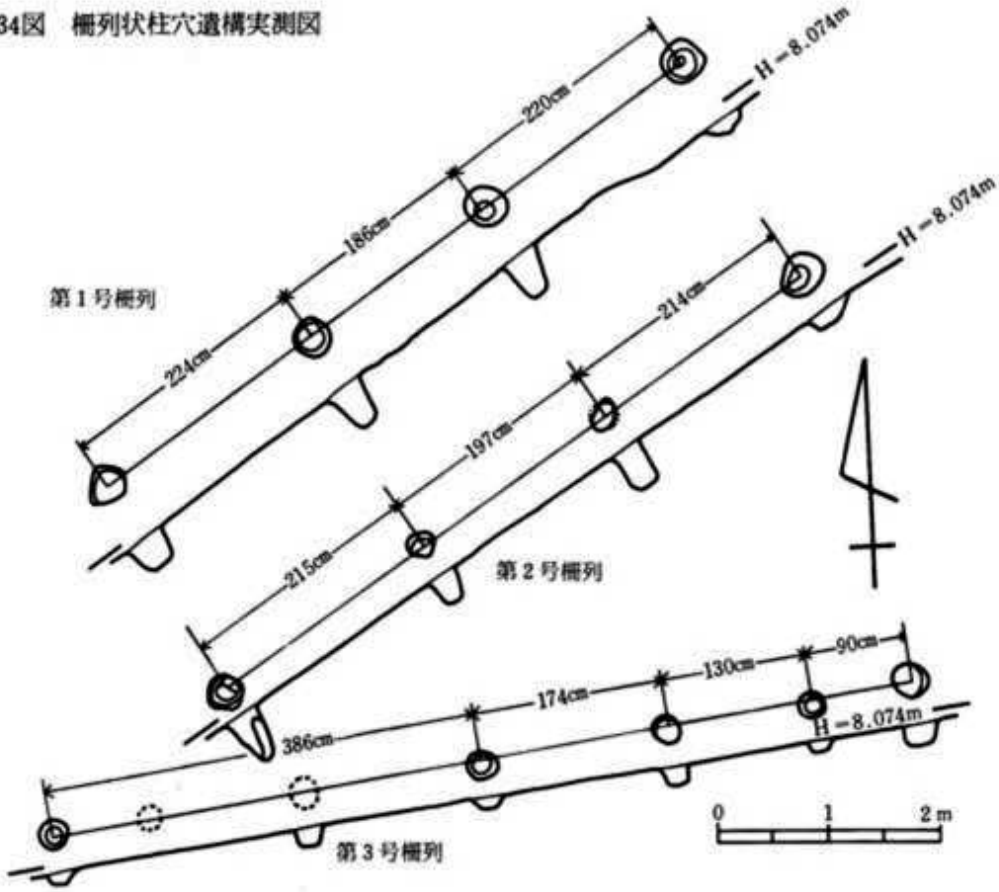
⑦ **P94**　2号土壙と隣接し、溝状遺構を切る土壙である。 120cmと50cmの隅丸方形を呈する。3193は夜臼式系土器の甕形土器。口径21.2cm、胴部最大径は22.7cmを測る。胴部でくの字状に反転し、口縁部は外反気味に内傾する。調整は内外面とも横方向の貝殻条痕文である。胎土に微砂粒や雲母を含み、焼成はやや不良。灰茶色を呈す。

⑧ **P95** 東北区にある土壙で直径58cm、深さ32cmを測る。3192は壺形土器で、器形は長胴で、口頸部を欠するが単口縁の壺と推定される。推定器厚35cm、胴部最大径28.4cmを測り、やや大形品である。底部は安定した平底である。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、その上方に断面三角形の突帯を貼付ける。肩部は張り出し、頸部はすぼまり、大きく屈曲する。調整は内面は横ナデ、外面の胴部上半は縦位、横位の刷毛目、突帯より下半は縦位の刷毛目調整である。器壁は底部は厚いが、上がるごとに薄くなる。第4様式である。胎土に砂粒を含み、焼成は良いがもろい。茶褐色を呈し、胴部上半に黒変が見られる。

**(9) 柵列状柱穴**（第34図）

遺跡の中央部に三本の柵列址と推定される柱穴群が検出された。1号と2号は酷似し、3号はそれより長いものと推測される。1・2号はN41° E、3号はN15° Eの方位をもつ。時期不明。

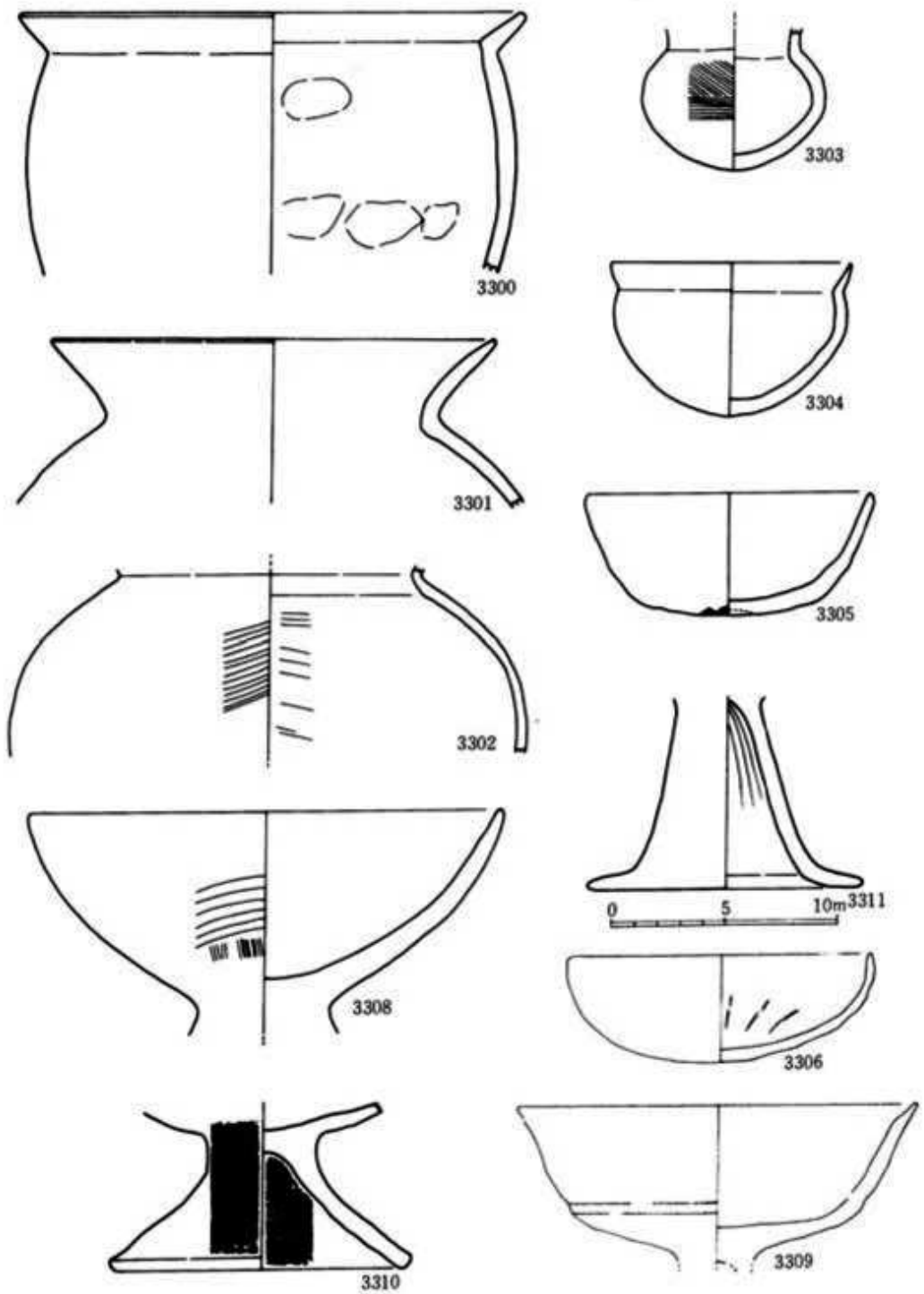
第34図　柵列状柱穴遺構実測図




**(10 その他の遺構・表採遺物**

**① 土師器**

第35図　土師器実測図



ⅰ）**甕形土器**　3300　〈P59—5〉　推定口径22cmを測る。内面は指による押圧痕が残り、外面は刷毛調整で仕上げる。淡茶褐色を呈し黒変がある。胎土に1～4㎜の砂粒を多く含む。

ⅱ）**壺形土器**　3301　〈T7〉　口縁部は外反ぎみに開き、口径は19.3cmで、頸部の屈曲は、大きい。淡茶褐色を呈し、器面は荒れている。胎土に砂粒、黒曜石片を含む。3303　〈T8〉　口唇部を欠失する。口縁部は外反しながら上がり、肩が張る。最大径は胴部中位にあり21cmを測る。丸底である。内面はナデ、外面は刷毛目調整である。淡褐色を呈し黒変が見られる。

ⅲ）**鉢形土器**　3304　〈T2〉　有頸小形鉢である。尖り気味の丸底を呈す。器体の最大径は口縁部にあり、推定径10.6cmであり、器高 6.6cmを測る。頸部は浅いくの字状を呈し、内面に稜を作る。両面ともナデ調整で仕上げ、器壁は薄い。胎土は精良で、焼成も良好。淡黄褐色を呈し、底部に黒変がある。

ⅳ）**坏形土器**　3305　〈T7〉　やや深めの坏形土器で、口径14cm、器高 7.4cmを測る。成形は粗く、底部は不安定な丸底である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや良。灰褐色を呈し、底面に煤が付着する。3306　〈T2〉　口径13cm、器高 4.7cmを測る完形品である。内面に篦状のアタリが残る。胎土に1～5㎜の砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。3307　〈P93—2〉　暗褐色を呈する。口径12cm、器高 5.5cmを測り丸底を呈する。口縁はほぼ直行し厚手であり、底面は薄い。胎土に1～3㎜の砂粒を多く含み、もろい。ナデ調整と思われる。

ⅴ）**高　坏**　3308　〈T2〉　ゆるやかに内彎する坏部を持つ。外面に篦ナデ、刷毛目痕を持ち、内面はナデ調整である。外面は茶褐色を呈し、黒斑が見られる。胎土に1～4㎜の砂粒を含むが焼成は良好。口径20.6cm、坏深 7.1cmを測る。3309　〈T2〉　坏部のみ残存。平面状の坏底から口縁部は外反するが直線的に開き、口径は17.4cmを測る。赤茶色を呈し、胎土は精良であるが、焼成やや不良。内面に刷毛目痕が残る。3310　〈T2〉　脚台は低く、裾部は大きく開く。微粒砂を含むが胎土、焼成とも良好。脚台の内外面とも入念な刷毛調整を施している。坏内面に篦状のアタリが残る。3311　〈T7〉　直線的に開く脚台は大きく屈曲して水平に近い裾部を作る。内外面ともナデ調整である。淡茶色を呈し、砂粒を多く含む。

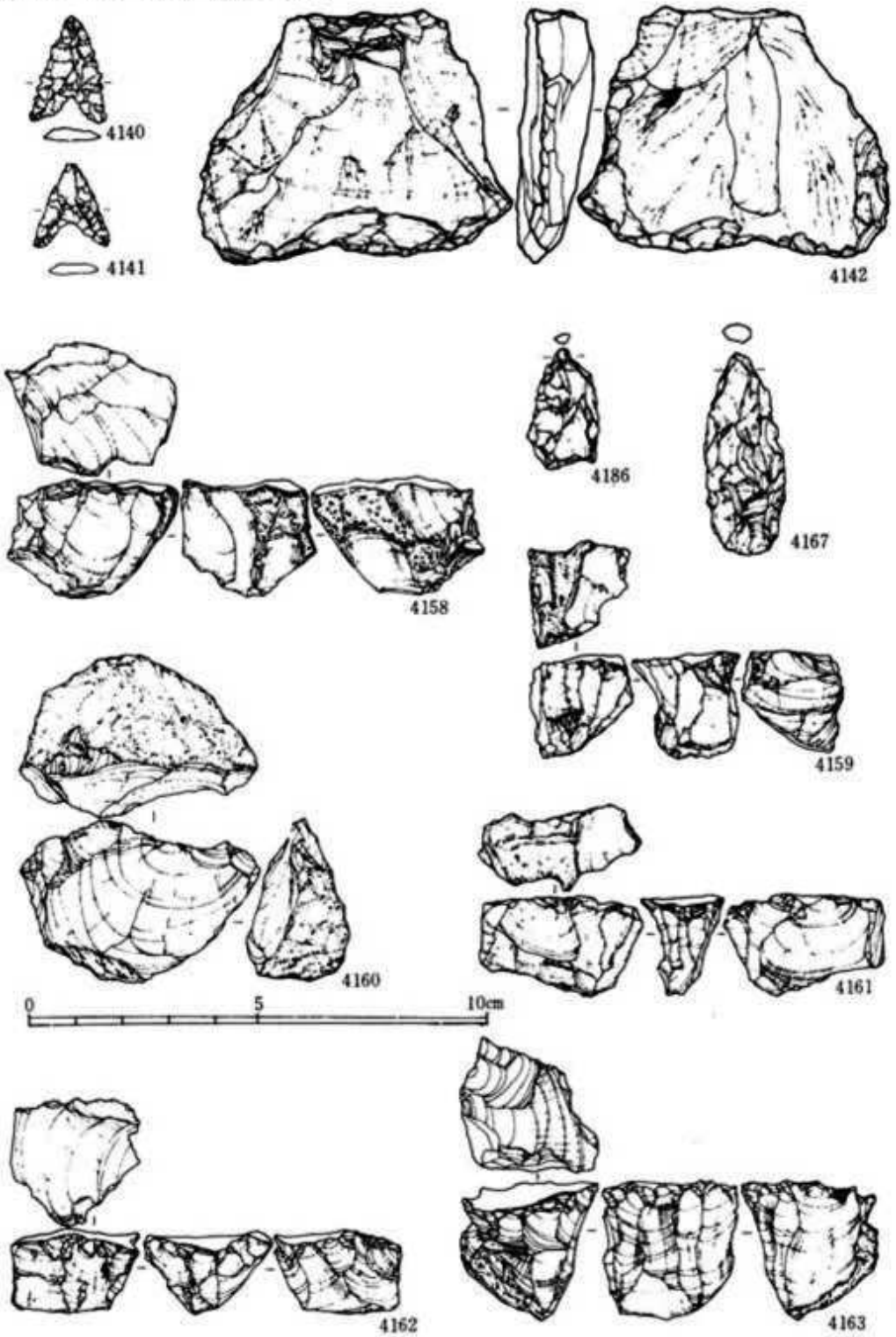
② **手捏土器**　〔第37図〕

3194　壺形土器　〈西区表採〉　口唇部を欠失する。わずかに肩の張る球形状の胴部に、ゆるく外反する広口状の頸部と、安定した平底がつく。最大径は胴部中位にあり 7.4cm、器高は現行で8cmを測る。文様は細い二条の平行沈線文と、連弧文の組み合わせである。

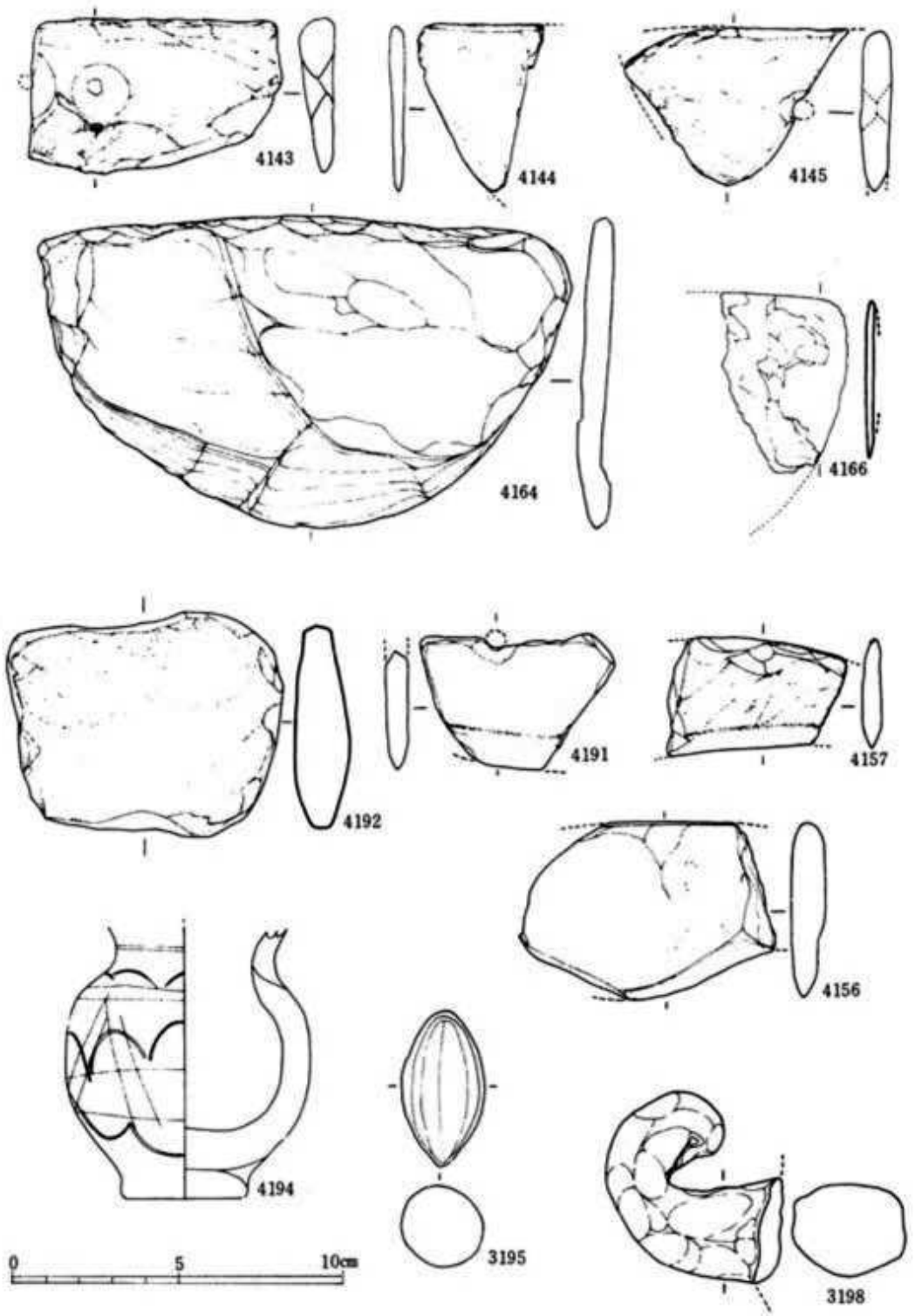
③ **石　器**　（表採）

**掻器**　4142サヌカイト製の横広剝片を素材にしている。下辺に両面より刃部作成の調整を入念に施している。**石鏃丁**　4143、4164、4144、4145はいずれも表採である。4164は未製品である。**石斧**　4147～4149はいずれも表採である。4148は扁平片刃石斧の頭部、4149はのみ形石斧で、いずれも粘板岩製である。4150は硬質粘板岩系の蛤刃石斧である。**石錘**　4156、4157とも

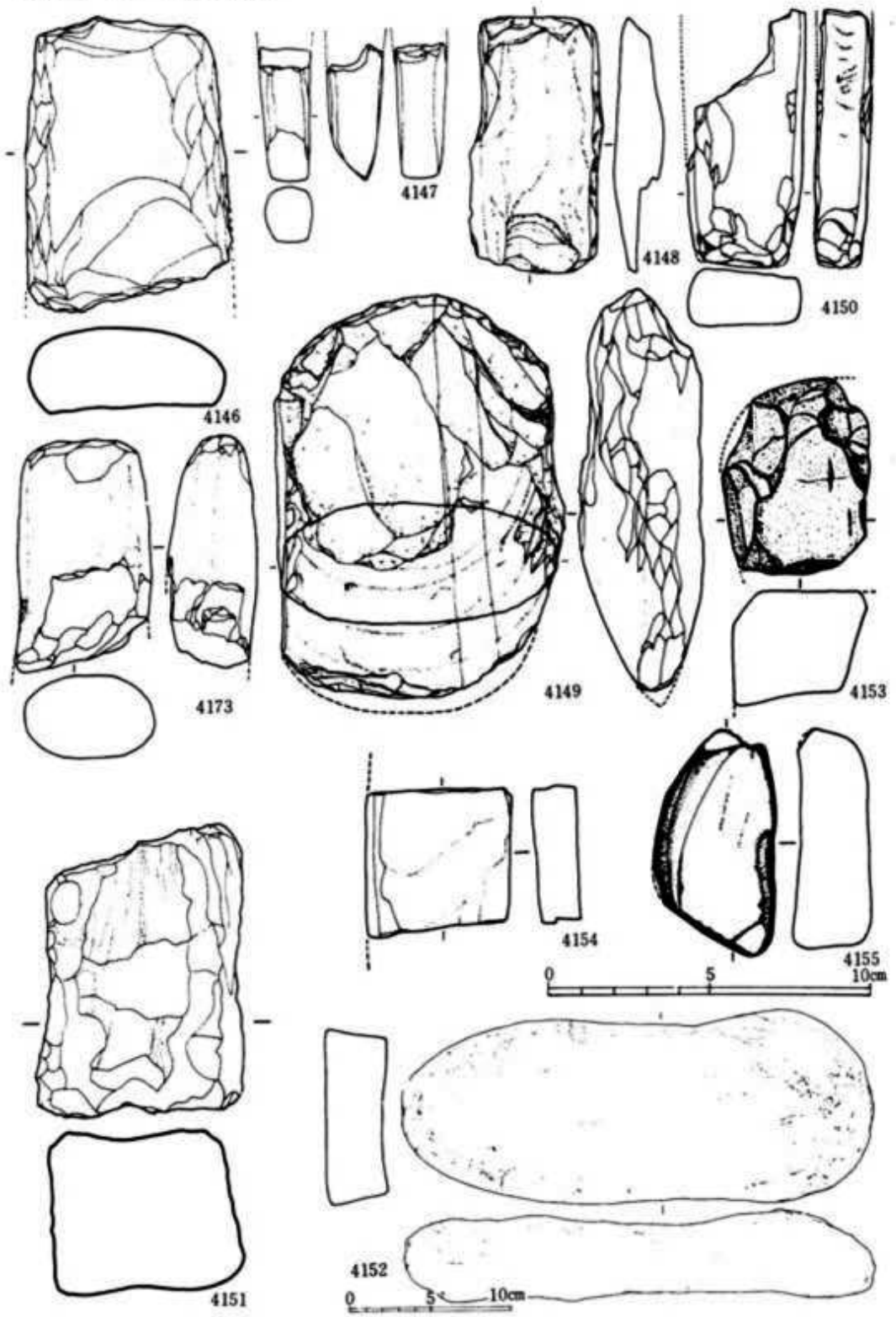
第36図　石鏃・掻器・石核実測図



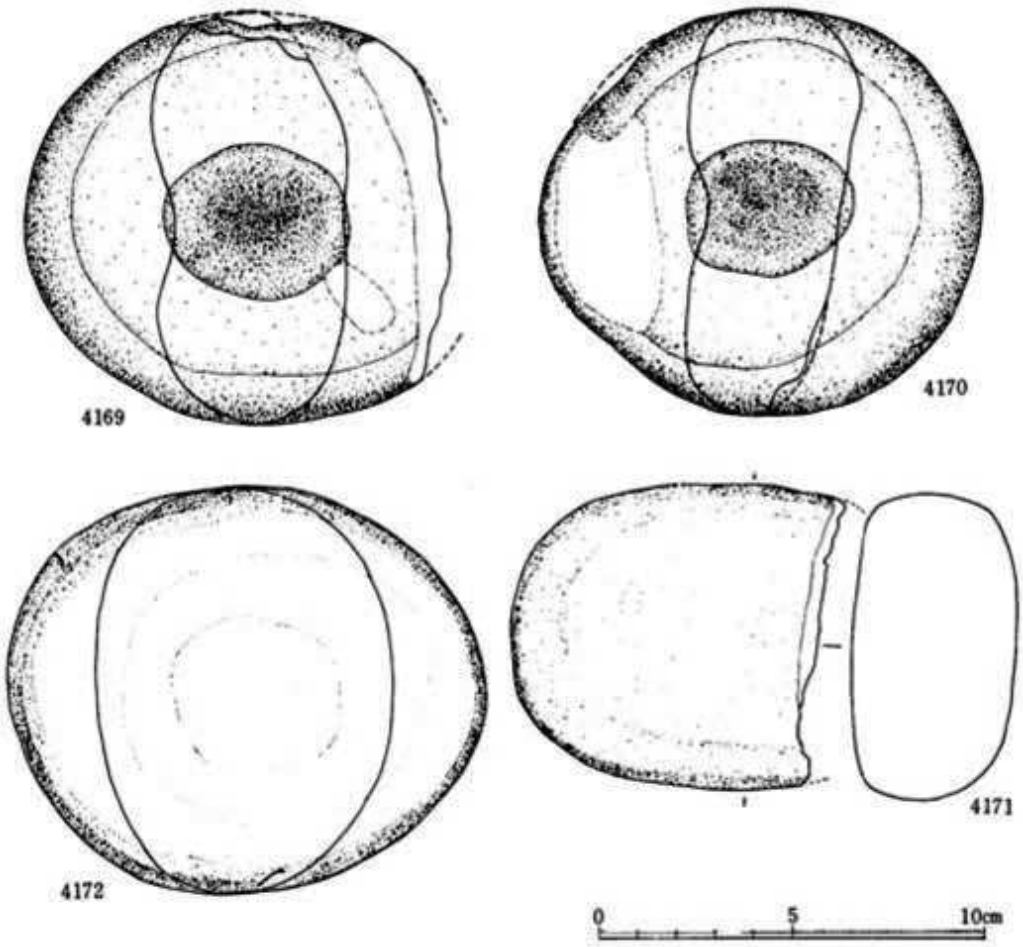
第37図　石庖丁・石鏃・土製品実測図



第38図　石斧・砥石実測図



第39図　凹石・磨石実測図




砂質粘板岩製。**石錐**　4168は黒曜石製で、横広の剥片を素材にしている。刃部は片面加工で、先端部に使用痕が見られる。4167は厚手鈍角のタイプであり、現長 4.4cmを測り先端部に使用剥離痕がある。サヌカイト製。**凹石、磨石**　4169はＴ４堆積層、4170は表採でいずれも玄武岩製。凹みは一面だけにしか見られない。4170は側面を磨石として兼用している。4172は安山岩質の磨石で、未だ自然礫の状態を呈し磨痕は少ない。**砥石**　4151はＰ52より、4152はＴ２より、4153～4155は堆積層より出土したものである。4151は両面と両側面が使用され、中央部が凹む。条線の研砥痕も見られる。4152は長楕円の自然石の四面を使用したものである。いずれも砂岩製。**石核**　4158～4163はいずれも黒曜石製。4160はＰ83より、4161はＴ２より出土し、他は表採資料である。4158は不純物を多く含むが他は良質であり、腰岳系と推定される。また針尾島系の剥片も検出されている。尚4171はＰ163より出土した安山岩製の磨石で、使用頻度が高い資料である。

打製石鏃は15点出土した。大深田遺跡と同方法で分類すると、抉りの浅いCⅡと、平基のタイプが多い。掻器は11点出土したが、いずれもスクレーパーである。石庖丁は14点出土した。未製品がその中に3点含まれる。完形品はなく、破損後二次使用したと思われる資料もある。石斧は15点出土し、片刃石斧が6点含まれる。石鏃片は表採で2点出土した。石錘は3点で、M2、P142、表土層から出土した。凹石8点、磨石9点出土したが、遺構内からの出土は少ない。砥石は15点出土した。完形品は2号土壙とT2からの2点である。T2の据え砥は磨石、土師器坏と共伴したものである。投弾礫がP59より17点、P54より16点等、総計91点が出土した。そのうち完形品は76点あり、60g 以上11点、50～59g 8点、40～49g 6点、30～39g 18点、20～29g 24点、19g 以下9点で平均重量は37.8g を測る。大別して20～40g と、50～70g の二つのタイプがあるようである。

**第3表　石鏃一覧**

| 番　号 | 遺物番号 | 出土地点 | 類　別 | 石　質 | 器長(mm) | 重さ(g) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 4180 | M2 II層 | A　I | 黒　曜　石 | — | — | 頭部欠 |
| 2 | 4181 | 表　　採 | B | 〃 | 1.63 | (1.1) | 片基端欠 |
| 3 | 4182 | 1号住居址 | 〃 | 〃 | 1.84 | (1.3) | 先端欠、主剥離面残 |
| 4 | 4183 | P　59 | 〃 | 〃 | — | (1.2) | 〃 |
| 5 | 4102 | M2-II層 | C　II | 〃 | (1.81) | (1.3) | 両基端欠 |
| 6 | 4184 | 表　　採 | 〃 | 〃 | (1.65) | (1.8) | 〃 |
| 7 | 4185 | 表　　採 | 〃 | 〃 | (1.52) | (1.0) | 先端欠 |
| 8 | 4186 | P　50 | 〃 | サヌカイト | — | (2.1) | 〃　長身 |
| 9 | 4101 | M2 II層 | C　V | 〃 | 2.55 | (2.3) | 片基端欠 |
| 10 | 4140 | T　2 | C　VI | 黒　曜　石 | 1.72 | 0.8 | 完、薄手 |
| 11 | 4187 | P　59 | 〃 | 〃 | — | (1.1) | 先端・両基端欠 |
| 12 | 4141 | T　4 | C　VII | 〃 | 1.30 | 0.5 | 完　薄手　、 |

註

(1) 市丸末吉氏、松尾ユキ子氏、浦田　始氏、青木スエノ氏談

(2) 松岡　史「唐津市史」唐津市史編纂委員会　1962

(3) 南京博物院・連雲港市博物館「海州前漢霍賀清理簡報」『考古』1974．3

参考文献

(1) 岡崎　敬「立岩遺跡」立岩遺跡調査委員会　1977．3

(2) 森　貞次郎「福岡県夜臼遺跡」（日本農耕文化の生成）　日本考古学協会編　1961

(3) 佐原　真「石斧論一横斧から縦斧へ一」松崎寿和先生退官記念事業会編　1977．3

(4) 佐原真・金関恕「稲作の始まり（古代史発掘4巻）」講談社　1979．5

(5) 樋口隆康「大陸文化と青銅器（古代史発掘5巻）」講談社　1979．5

(6) 佐原　真「銅鐸一日本の原始美術7」講談社　1979．10

(7) 田中　琢「古鏡一日本の原始美術8」講談社　1979．2

(8) 杉原荘介「弥生時代一世界考古学大系2」平凡社　1975．12

(9) 橋口達也「福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XXXI）1979．3

10 七田忠昭他「二塚山」　佐賀県教育委員会　1979．3

11 宮崎貴夫他「里田原遺跡」「長崎県教育委員会　1977．3

12 藤田亮策「日本考古学辞典」日本考古学協会編　1978．6

13 八幡一郎他「世界考古学事典」平凡社　1979．2

# 第 Ⅳ 部

# 石 蔵 貝 塚 遺 跡

**唐津市柏崎字石蔵1213番地所在**

もくじ


1．石蔵貝塚遺跡の概要……106

2．遺跡の土層……107

3．出土遺物……107

(1) 貝層内出土遺物……107

(2) 黒色粘質土層内出土遺物……107

4．石蔵貝塚遺跡から出土した
自然遺物について……109

(1) 貝種同定について……109

(2) 獣骨・魚骨の同定について……114

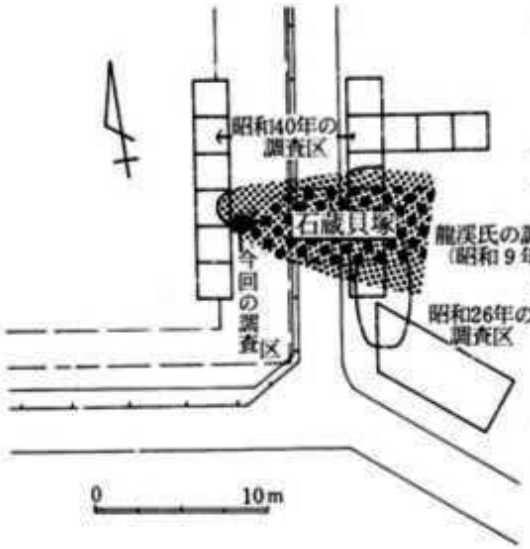
# 挿 図 も く じ

第1図　石蔵貝塚遺跡の調査区……106
第2図　石蔵貝塚遺跡の土層断面図……106
第3図　石蔵貝塚遺跡の出土遺物 (1)……108
第4図　石蔵貝塚遺跡の出土遺物 (2)……109

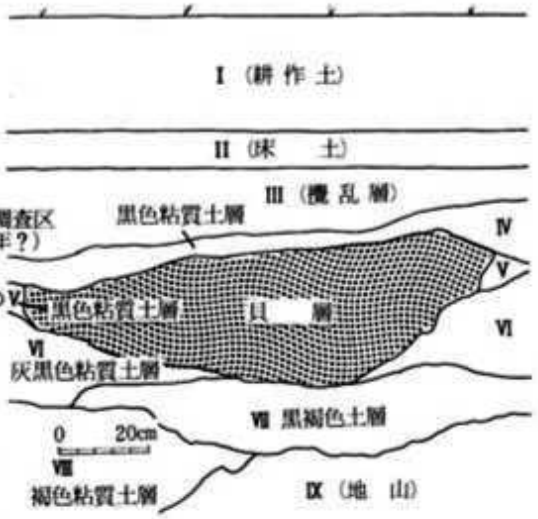
# 図 表 も く じ

第1表　石蔵貝塚産貝類同定 (1)……110
第2表　石蔵貝塚産貝類同定 (2)……111
第3表　貝類のBlock Sampling……112
第4表　獣骨・魚骨類鑑定一覧……113

第1図　石蔵貝塚遺跡の調査区（推定）




第2図　石蔵貝塚遺跡土層断面図




**1．石蔵貝塚遺跡の概要**（第1図）

石蔵貝塚遺跡は唐津市柏崎字石蔵1213番地に所在する。

夕日山の北麓にあり、北に延びる柏崎段丘の根元部の西斜面に位置する。前述の通り、昭和3年耕地整理中に発見されて以来脚光を浴び、「久里貝塚」「柏崎貝塚」と呼ばれてきた遺跡である。

今回の調査は、圃場整備事業の水路部分のみで、昭和40年の日仏合同調査の際発掘調査された10区と13区の間にあたる地区である。道路区の10区で貝層が確認され、その西の13区ではうすい貝殻の散布程度であったというから今回の調査区で確認された貝層がこの石蔵貝塚の西端と云えよう。層位的にみると、貝層はV層の黒色粘質土層にあり、昭和40年の調査が再確認された。貝層からは板付II式土器、黒色粘質土層からは前期末の土器が検出された。

## 2．遺跡の土層（第2図）

Ⅲ層は攪乱層であり、貝殻層のあるⅤ層が遺物包含層である。Ⅵ～Ⅷ層からは遺物は確認されなかった。貝層は中央部が凹み、最厚部で30cmを測り、平面は 110cmと90cmの楕円形を呈する。

## 3．出土遺物

### (1) 貝層内出土遺物〔第3図〕

5001～5003は板付Ⅱ式、板付式土器系の甕形土器である。5001 口縁部は強く屈曲し、口唇下端に刻目を施す。黒褐色。5002は口唇下端が肥厚し、茶褐色。5003は胴部片で細かい刻目の突帯をもつ。5004～5006は板付式土器系の壺形土器である。5004 口縁部が肥厚し、頸部に縦方向の刷毛目をもつ。5005、5006は肩部片で、5005は篦ナデ、5006は縦位の刷毛目、篦ナデ調整を施している。5007は立屋敷系の鉢形土器の口縁部と思われる。胎土に砂粒を多く含み灰褐色を呈す。5008 土製投弾で半欠している。

黒曜石剥片が数点出土したが製品は確認出来なかった。5001 砂岩製の礫に、通孔と凹み穴と思われる二ケ所の磨研穿孔がある。使途不明。

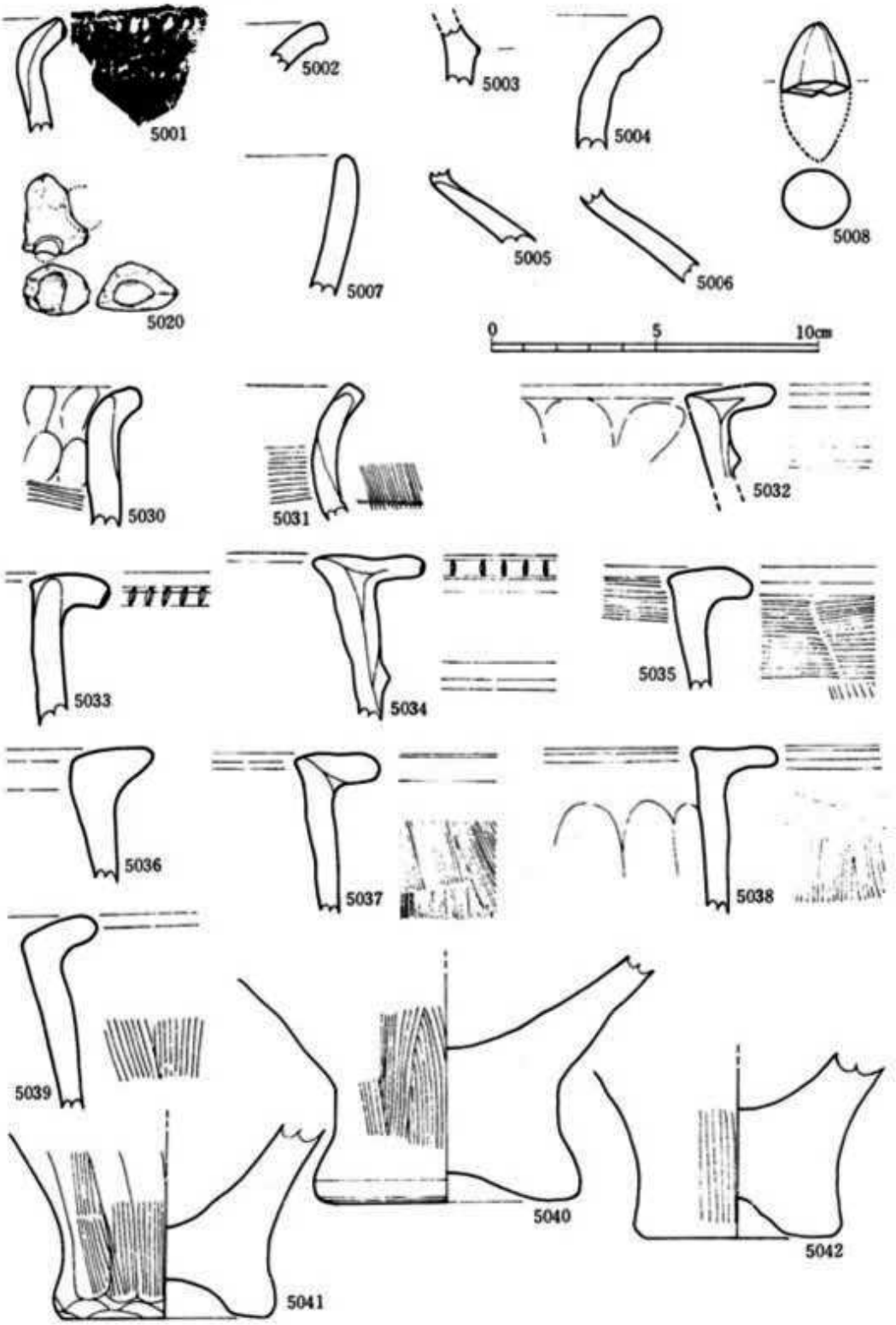
### (2) 黒色粘質土層内出土遺物〔第3・4図〕

5030～5039は甕形土器の口縁部である。5030、5031は外反する口縁で、5030は厚手、5031は沈線をもつ城の越Ⅱ系である。5032～5039は逆L字状の口縁部である。5033、5034は口縁外端部に押捺文をもち、5032、5034は口縁下部に断面三角の隆起帯をもつ。5032、5034、5037、5038は平坦縁で、5033、5035、5036は彎曲口縁である。5039は口縁内端が下がる。5033、5037は縦方向に、5034、5035、5038は横方向に刷毛目調整を施す。5040、5041、5042は厚底で上げ底を呈し、縦方向の刷毛目調整で仕上げる。5032～5042は城の越式土器である。5043、5044は、壺形土器の口縁部である。5043は平坦口縁の広口壺で口唇部に押捺を施し、内端部が大きく張る。5044は袋状口縁である。板付式壺である。

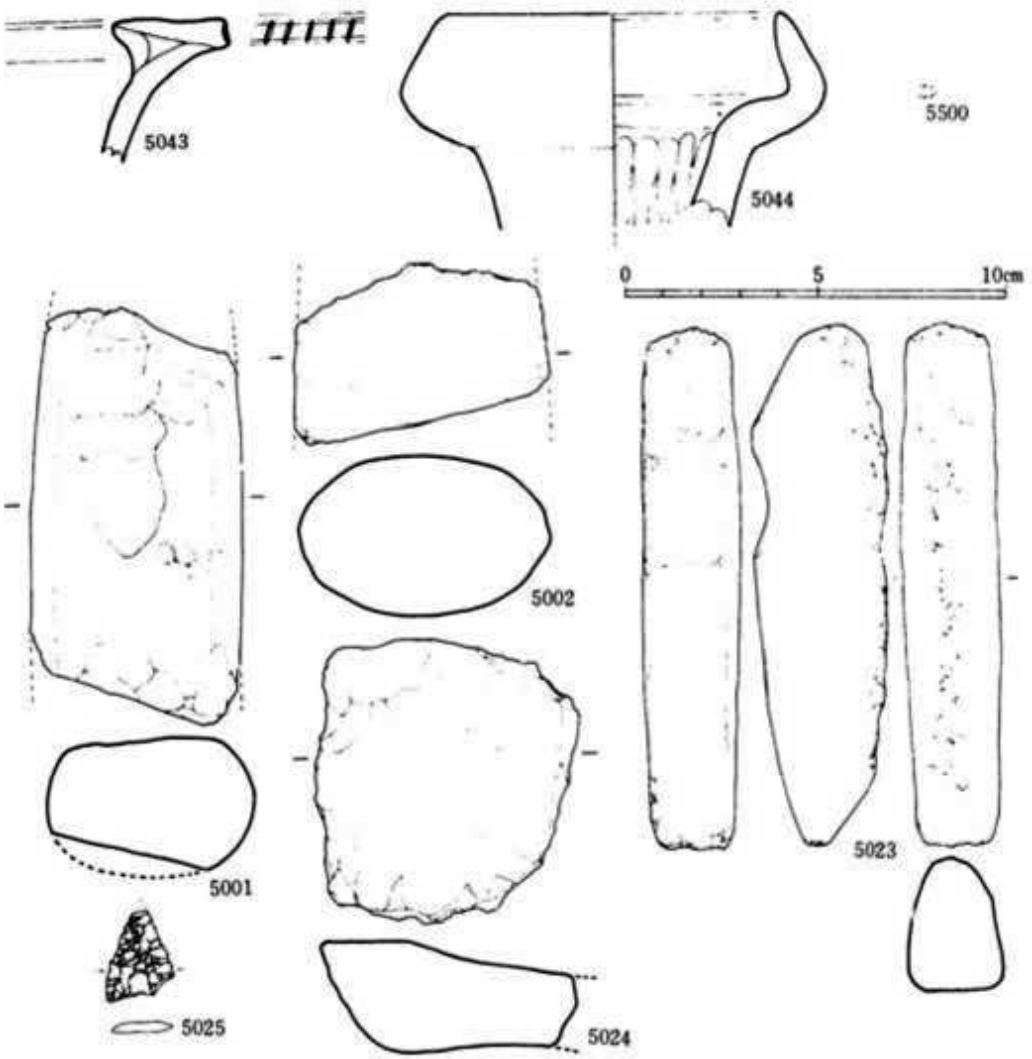
8点の石製品と45点の石核、剥片、石片が出土した。5021、5022とも蛤刃石斧体部片であり刃部の様子は不明。5022は安山岩製。5023は抉入石斧、器高13.2cm、器幅 2.6cmを測る完形品である。内面に 2.7cmの抉入部がある。刃端に使用剥離痕が見られ、頭部の内背面に打撃痕がある。安山岩製。5024は石皿の端部片である。凹部に研条痕がある。裏面も研磨が見られる。5025は石鏃でわたぐりは浅く、薄手で長二等辺三角形を呈するCⅡタイプである。基部先端部を欠く。黒曜石製。その他掻器、砥石片等も出土した。

5500は、グリーンを呈するガラス製小玉で大形である。長 3.0mm、外径 5.0mm、孔径 2.2mmを測る。外面は風化し白色化している。

第3図　石蔵貝塚の出土遺物(1)



第4図　石蔵貝塚の出土遺物(2)




**4．石蔵貝塚遺跡から出土した自然遺物について**

貝塚層の遺物の総量は少なかったのでそのすべてを対象にした。

**(1)　貝種同定について**

貝種の同定については、長崎大学教育学部地学教室の鎌田泰彦教授と県理科教育センターの田口満研究員に依頼した。（第1・2表）

その結果を受けて、ブロックサンプリングを行なった。ヤマトシジミがほとんどで、ウミニナ、ヘナタリが約2割含まれていた。（第3表）

## 第1表　石蔵貝塚産貝類同定 (1)

同定　鎌田　泰彦先生　1980年2月15日

| | | |
|---|---|---|
| I | 二 枚 貝 (斧足綱)　Pelecypoda | |
| 1 | オキシジミ<br>Cyclina orientalis (Gmelin) | 房総以南、西太平洋、潮間帯～水深20m、泥底 |
| 2、9 | ハマグリ<br>Meretrix luzoria (Röding) | 北海道南部～九州、内湾奥の潮間帯～水深20m<br>砂泥底 |
| 3 | サルボウガイ<br>Scapharca subcrenata (Lischke) | 東京湾～有明海、中海等の内湾、潮間帯下～水深20m<br>砂泥底 |
| 4、5、6 | マガキ<br>Crassostrea gigas (Thunberg) | 日本全国、沿海州～中国、東南アジア、潮間帯<br>岩礫 |
| 8 | ヤマトシジミ<br>Corbicula japonica Prime | 全国の河口、湖 |
| II | 巻 貝 (腹足綱)　Gastropoda | |
| 7 | バイ<br>Babylonia japonica (Reeve) | 北海道南部～九州、潮間帯～水深20m、砂底 |
| 10 | ツメタガイ<br>Neverita (Glossaulax)<br>didyma (Röding) | 北海道以南、潮間帯下、細砂底 |
| 11、12、16 | アカニシ<br>Rapana venosa (Valenciennes)<br>(異名: Rapana thomasiana Crosse) | 北海道南部～中国大陸沿岸、内湾の潮間帯～水深20m<br>砂泥底 |
| 13 | ヘナタリ<br>Cerithideopsilla cingulata (Gmelin) | 本州以南、潮間帯の砂泥底 |
| 14、15 | ウミニナ<br>Batillaria multiformis (Lischke) | 本州以南、潮間帯、砂礫底 |
| 17 | 不明 | |
| 18 | ナガニシ<br>Fusinus perplexus (A. Adams) | 北海道南部～九州、潮間帯下の砂泥底 |
| 19 | サザエ (ふた)<br>Batillus cornutus (Lightfoot) | 北海道南部～九州、中国大陸、朝鮮、潮間帯下の岩礁 |
| 20 | イボニシ<br>Thais clavigera (Küster) | 北海道南部以南、潮間帯の岩礁 |
| 21、22 | クボガイ<br>Chlorostoma argyrostoma lischkei<br>(Tapparone-Canefri) | 北海道南部以南 (主として太平洋側)<br>潮間帯の岩礫地 |
| 23、25 | スガイ<br>Lunella coronata (Gmelin) | 北海道以南、潮間帯の岩礫底 |
| 24 | マルタニシ<br>Cinpagopaludina chinensis nalleata<br>(Reeve) | 全国、田沼溝 |
| 26 | キクスズメガイ<br>Amalthea conica Schumacher | 北海道南部以南、他殻上に着生 |
| 27 | ウニのとげ | |
| 28 | 不明 | |

## 第2表　石蔵貝塚産貝類同定 (2)

同定　田口　廣先生　1980年2月18日

| I | Pelecypoda （(斧足綱)　二　枚　貝 | | |
|---|---|---|---|
| 標本No. | 名　　称 | 地　　域 | 産　　状 |
| 1 | Cyclina orientalis (Gmelin)<br>オ キ シ ジ ミ | 房総以南、西太平洋 | 潮間帯～水深20m、泥底 |
| 2、9 | Meretrix luzoria (Röding)<br>ハ マ グ リ | 北海道南部～九州 | 内湾奥の潮間帯～水深20m<br>砂泥底 |
| 3 | Scapharca subcrenata (Lischke)<br>サ ル ボ ウ ガ イ | 東京湾～有明海 | 中海等の内湾、潮間帯～水深20m、砂泥底 |
| 4、5、6 | Crassostrea gigas (Thunberg)<br>マ ガ キ | 日本全国、沿海州～中国東南アジア | 潮間帯　岩礫 |
| 8 | Corbicula japonica Prime<br>ヤ マ ト シ ジ ミ | 日本全国 | 河口、潟 |
| II | Gastropoda　(腹足綱)　巻　貝 | | |
| 7 | Babylonia japonica (Reeve)<br>バ イ | 北海道南部～九州 | 潮間帯 |
| 10 | Neverita (Glossaulax)<br>didyma (Röding)<br>ツ メ タ ガ イ | 北海道以南 | 潮間帯下、細砂底 |
| 11、12、16 | Rapana venosa (Valenciennes)<br>ア カ ニ シ | 北海道南部～中国大陸沿岸 | 内湾の潮間帯～水深20m、砂泥底 |
| 13 | Cerithideopsilla cingulata (Gmelin)<br>ヘ ナ タ リ | 本州以南 | 潮間帯の砂泥底 |
| 14、15 | Batillaria multiformis (Lischke)<br>ウ ミ ニ ナ | 本州以南 | 潮間帯、砂礫底 |
| 18 | Fusinus perplexus (A.Adams)<br>ナ ガ ニ シ | 北海道南部～九州 | 潮間帯下の砂泥底 |
| 19 | Batillus cornutus (Lightfoot)<br>サ ザ エ (ふた) | 北海道南部～九州<br>中国大陸、朝鮮 | 潮間帯下の岩礁 |
| 20 | Thais clarigera (Küster)<br>イ ボ ニ シ | 北海道南部以南 | 潮間帯の岩礁 |
| 21、22 | Chlorostoma argyrostoma lischkei<br>(Tapparone-Canefri)<br>ク ボ ガ イ | 北海道南部以南<br>(主として太平洋側) | 潮間帯の岩礫地 |
| 23、25 | Lunella coronata (Gmelin)<br>ス ガ イ | 北海道以南 | 潮間帯の岩礁底 |
| 24 | Cinpagopaludina chinensis nalleata<br>(Reeve)<br>マ ル タ ニ シ | 全国の陸、淡水 | 田沼溝 |
| 26 | Amalthea conica Schumacher<br>キ ク ス ズ メ ガ イ | 北海道南部以南 | 他殻上に着生<br>(サザエ、アワビ等) |
| III | そ の 他 | | |
| 17 | 不　　明 | | |
| 27 | ウ ニ の と げ | | |
| 28 | 不　　明 | | |

## 第3表　貝類のBlock Sampling

| Saple Number | Family | Species | 個体数 | 総個体数に占める割合(%) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 斧足綱 | | | | | |
| 1 | まるすだれ科 | オキシジミ | 11 | + | |
| 2、9 | 〃 | ハマグリ | 105 | 2.1 | |
| 3 | ふねがい科 | サルボウガイ | 11 | + | |
| 4、5、6 | いぼたがき科 | マガキ | 18 | + | |
| 8 | しじみがい科 | ヤマトシジミ | 3290 | 67.1 | |
| 腹足綱 | | | | | |
| 7 | えぞばい科 | バイ | 3 | + | |
| 10 | ねこがい科 | ツメタガイ | 6 | + | |
| 11、12、16 | あつきがい科 | アカニシ | 3 | + | |
| 13 | うみにな科 | ヘナタリ | 173 | 3.5 | |
| 14、15 | 〃 | ウミニナ | 1051 | 21.4 | 29.3% |
| 13、14、15 | 〃 | ヘナタリ・ウミニナの区別不明 | 210 | 4.3 | |
| 18 | いとまきばら科 | ナガニシ | 1 | + | |
| 19 | りゅうてん科 | サザエ(ふた) | 7 | + | |
| 20 | あつきがい科 | イボニシ | 1 | + | |
| 21、22 | にしきうず科 | クボガイ | 1 | + | |
| 23、25 | りゅうてん科 | スガイ | 2 | + | |
| 24 | たにし科 | マルタニシ | 3 | + | 淡水産 |
| 26 | すずめがい科 | キクスズメ | 3 | + | |
| 27 | —— | ウニ | —— | —— | |

田口満研究員のまとめ

(1) ほとんど暖流系の貝である。

(2) 現生と同じ貝類である。

(3) ほとんど潮間帯で浅い所の貝である。

(4) 淡水の陸産のものは、No24のみで他はすべて海産である。

(5) 岩浜のものより、砂泥地（砂浜）のものがやや多い。

## 第4表　獣骨・魚骨類鑑定一覧

同定　鹿児島大学　大塚　裕之先生

| | |
|---|---|
| 哺乳類　Mammalia | |
| 齧歯目　Rodentia<br>ネズミ科　Muridae<br>Muridae？ gen. sp. indet.（属、種不明） | 遺物番号 ⑮ 部位　尺骨の一部 |
| 偶蹄目　Artiodactyla<br>イノシシ科　Suidae<br>イノシシ属　Sus　Linnaeus<br>ニホンイノシシ<br>Sus scrofa leucomystax Temminck | 遺物番号 ③ 左下顎犬歯<br>④ 左下顎第1門歯<br>⑤ 上顎左第3大臼歯<br>⑦ 上顎右門歯 |
| シカ科　Ceruidae<br>シカ属　Cervus　Linneous<br>シカ　Cervus nippon Temminck | 遺物番号 ① 左角の第1枝(前枝)の先端部<br>② 左脛骨の一部<br>⑥ 上顎左第3大臼歯<br>⑧ 角の先端部 |
| | |
| 両生類　Amphibia | |
| カエル目　Salieutia<br>Salientia gen. d fam. indet.（属、種不明） | 遺物番号 ⑫ 大腿骨の一部<br>⑭ 頭蓋骨の一部 |
| トカゲ目　Squamata<br>トカゲ科　Scincidae<br>トカゲ族　Eumeces　Wiegmann<br>トカゲ　Eumeces　sp. | 遺物番号 ⑨ 下顎骨破片 |
| ヘビ亜目　Ophidia<br>Ophidia fam, gen, d sp. indet.（科、属、種不明） | 遺物番号 ⑩ 脊椎骨 |
| | |
| 魚類　Pisces | |
| Pisces, order, fam, gen, d sp. indet.<br>（目、科、属、種不明） | 遺物番号 ⑪ 脊椎骨 |
| 遺物番号　⑬　不明 | |

### (2) 獣骨・魚骨の同定

獣骨や魚骨類の同定については鹿児島大学理学部地学教室の大塚裕之助教授に依頼した。その結果は第4表の通りである。

1．二枚貝の場合、貝殻を左・右殻に分け、数量の多い方をとった。
2．カキ類は靭帯面を有するものを個体数とした。
3．殻破片は個体数に入れない。
4．サザエはふたで計数。尚、サザエ類の刺が認められ、有刺型も含まれると思われる。

参考文献

(1) 吉村茂三郎「佐賀県史蹟報告・久里貝塚・第二輯」1930.3
(2) 龍溪顕亮「金石併用期における唐津地方の遺跡と遺物」松浦史談会 1939
(3) 鏡山 猛「柏崎貝塚調査概報」佐賀県文化財調査報告書第1輯 1952
(4) 九州大学考古学教室「北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査」1966
(5) 福岡県八女市教育委員会「亀の甲遺跡」1964

# 第Ⅴ部

# 土井崎遺跡

**唐津市柏崎字土井崎1106～1107番地所在**

もくじ


1．土井崎遺跡の概要……117

2．土井崎遺跡の土層……117

3．土井崎遺跡の遺構と遺物……117

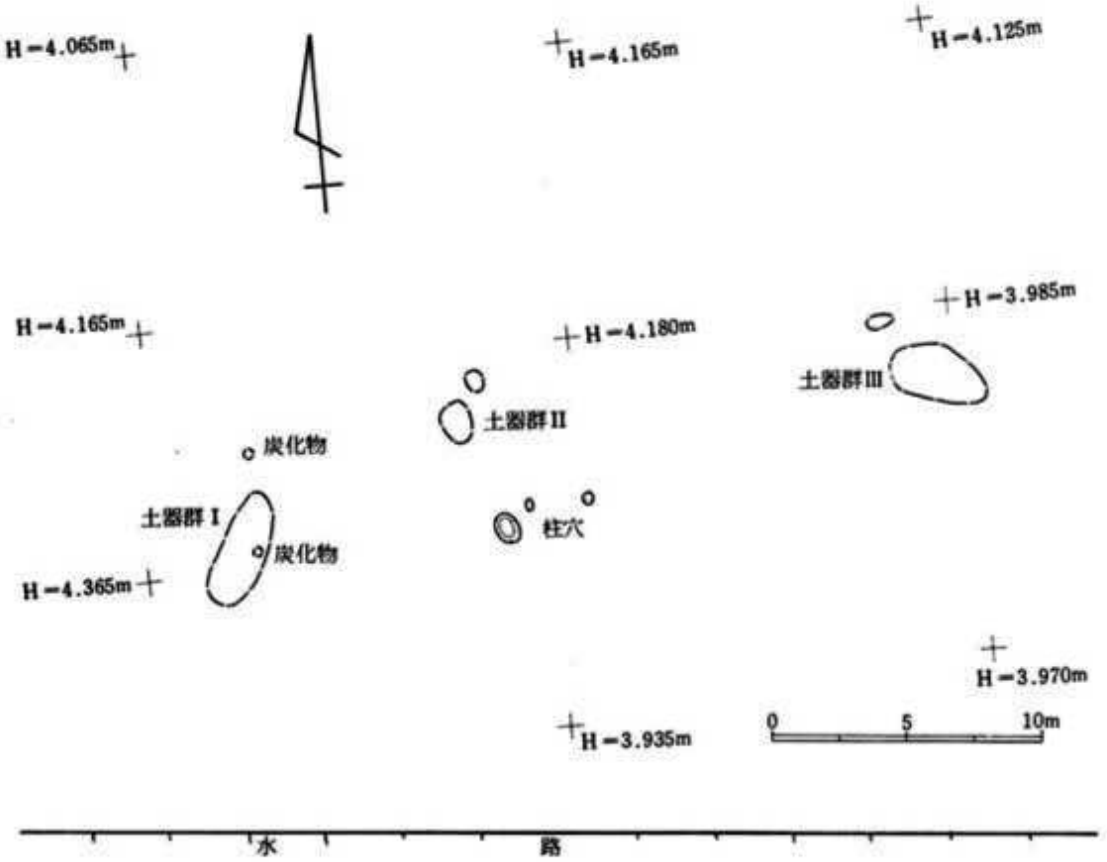
(1) 土井崎遺跡の遺構……117

(2) 土井崎遺跡の遺物……117

# 挿 図 も く じ

第1図　土井崎遺跡遺構配置図……116
第2図　土井崎遺跡土層断面模式図……117
第3図　土井崎遺跡出土遺物……118

第1図　土井崎遺跡遺構配置図

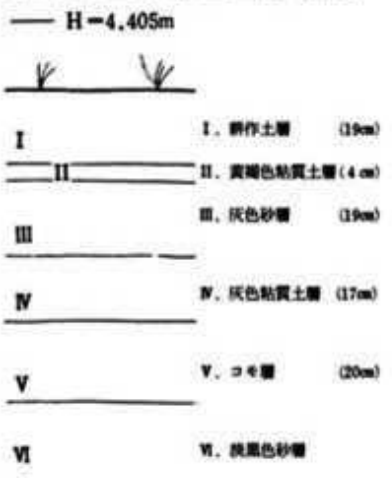


## 1．土井崎遺跡の概要

土井崎遺跡は唐津市柏崎字土井崎 1,106～ 1,107番地に所在する。

柏崎遺跡群の西端部にあり、割石丘陵の北約 100mに広がる遺跡であり、その範囲は狭いと推定される。遺跡の存在は昭和53年4月の予備調査により確認された。遺跡の範囲は南北10m、東西30mで3ケ所の土師式土器群と柱穴、炭化物包含地点等が確認された。祭祀遺跡と推測されるが、製塩土器と思われる鉢形土器等も出土しており、その性格については類例を待ちたい。

第2図　土井崎遺跡土層断面図




## 2．土井崎遺跡の土層

第2図は土井崎遺跡の東南区東壁の土層断面模式図である。第V層にコモ層がみられるが、その上下層は砂質土層の堆積である。III層が遺物包含層であり、IV層では遺物は検出されなかった。

## 3．土井崎遺跡の遺構と遺物

### (1)　土井崎遺跡の遺構

第III層に土器群が検出された。土器群は中央部のII群が小規模であり、西・東区の第1・第III群がやや大きい。第I群の北 130cmの地点と、I群中央部東寄りに炭化物群が検出された。II群の東南3mに3個のピットが存在するが同時期のものと推定される。

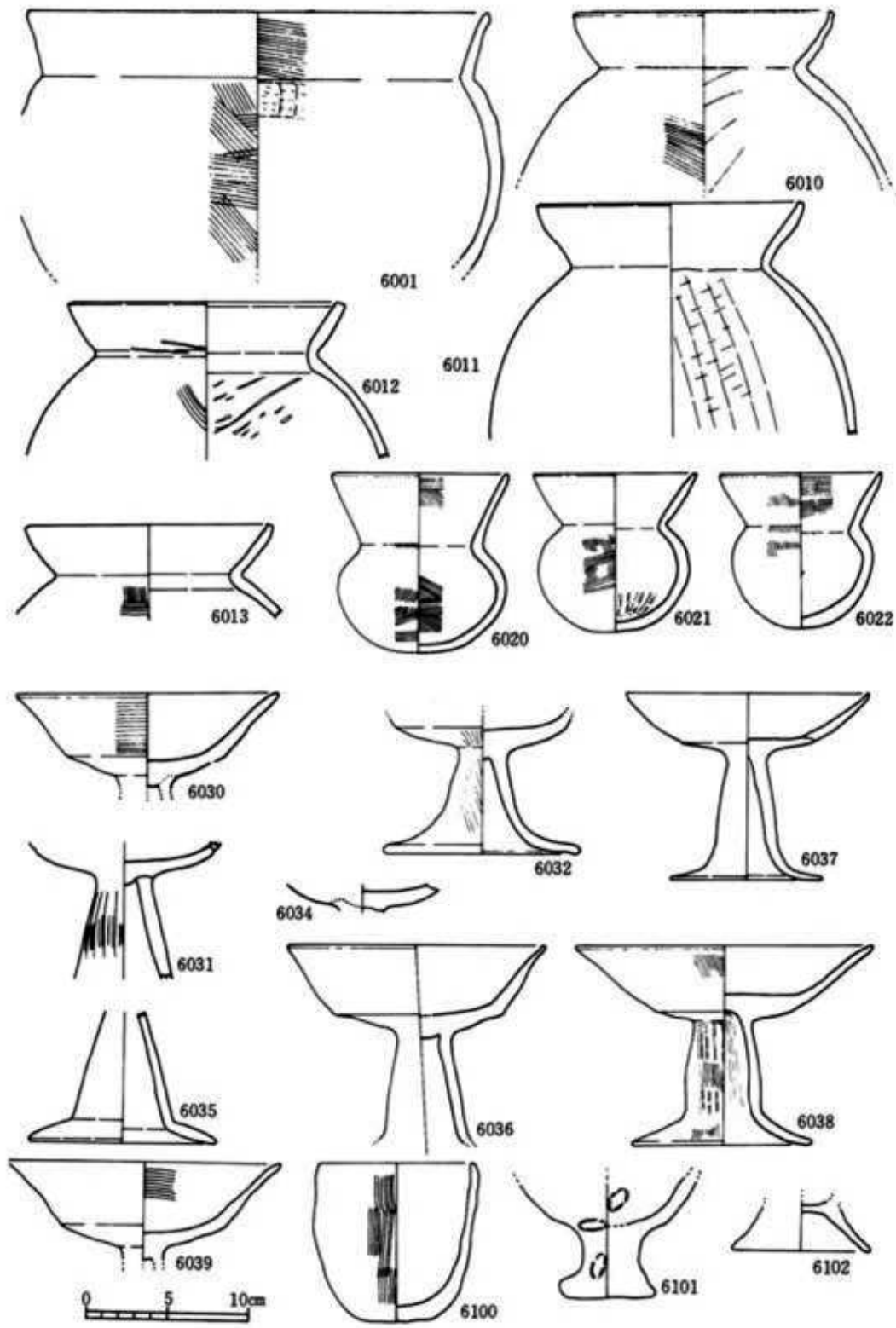
### (2)　土井崎遺跡の遺物

3ケ所の土器群から出土した土器片はそのほとんどが細片で磨耗している。特にII、III群ではそうである。II層出土遺物とIII層との関連は強いと思われるが、遺構との関係が不明であったので堆積層出土遺物として取扱っている。

① **甕形土器**　6001　〈堆積層〉　くの字状に外反する口縁部に球形の胴部がつく甕である。推定口径28.2cmを測る。胴部内面は削り、他は刷毛目調整で仕上げる。灰褐色を呈し黒変がある。

② **壺形土器**　6010　〈堆積層〉　内彎気味に開口する口縁部は、くの字状に大きく屈折し、球形の胴部がつく。推定口径は15.8cmを測る。胴部外面は刷毛後ナデ調整、内面は篦削り調整である。1～5mmの砂粒を含む。淡褐色を呈し黒変が見られる。焼成良好。6011　〈堆積層〉口縁部中位を横ナデ調整時にやや肥厚させる。外面の刷毛目は横位→縦位→斜位の順に調整している。淡褐色を呈し黒変がある。内面は削りの後ナデで仕上げている。6012　〈堆積層〉

第3図　土井崎遺跡出土遺物



口唇部内端が僅かに肥厚する。口縁外面に、篦工具のアタリが残る。1～6㎜の砂粒を多く含む。淡茶褐色を呈す。推定口縁外径は17cm。6013 〈堆積層〉 内彎して開口する口縁部。くの字状の反転は大きく屈折する。

③ **小形丸底壺** 6020〈Ⅰ群－1〉 口頸部の高いタイプである。刷毛目調整し、口頸部の外面は横ナデで仕上げている。色調は乳褐色で胴部中央部に黒変がある。最大径は口唇部にあり10.9cm、器高10.7cmを測る。胎土は精良。6021〈Ⅰ群－4〉 反転部の屈折は大きく、肩の張るタイプである。口縁外径は10cm、器高は 9.4cmを測る。内底に篦削り痕が残る。灰褐色を呈し、胴部下半に黒変がある。6012〈Ⅰ群－8〉 口頸部は大きく外傾する。調整は粗く、内底に絞り痕が残る。胎土に砂粒を含み、焼成は良。黄褐色を呈す。口径 9.9cm、胴部径 8.6cm、器高 9.3cmを測る。

④ **高坏** 6030〈Ⅰ群－1〉 坏部のみ残存。口径16.1cmを測る。外面に稜を作り、細かい刷毛目調整である。灰褐色を呈し、焼成良好。6031〈Ⅰ群－2〉 坏内面に粗い刷毛目痕が残る。赤褐色を呈し、焼成良好。6032〈Ⅰ群－3〉 中膨らみの脚台を持ち、裾部はゆるやかにのび、下端が肥厚する。粗い刷毛調整で接合部は指圧で仕上げる。脚内面は篦ナデである。赤褐色を呈し、焼成は良好。

6034〈Ⅰ群－3〉 坏底部のみ残存。赤褐色を呈する。6035〈Ⅰ群－5〉 中膨らみの脚部を持つ裾部は強く屈曲する。外面は刷毛目、内面は篦ナデ調整。淡茶色を呈し、胎土精良で焼成良好。6036〈Ⅰ群－7〉 坏部の器形がくずれ、中膨らみの脚台がつく。坏部の口唇内端が肥厚する。器面が荒れ調整は不明。胎土に1～4㎜の砂粒を多く含み、焼成不良。色調は赤褐色を呈す。6037〈Ⅰ群－10〉 坏口径14.9cm、器高11.2cm、裾口径 9.4cmを測る完形品である。坏底は平坦で口縁部はわずかに内彎しながら広く開口する。端部は薄く丸みをつくる。脚台は中膨みで裾部は大きく外反する。淡茶茶色を呈する。胎土に砂粒を少々含み焼成不良。器面の磨耗がはげしく調整不明。6038 〈堆積層〉 坏部は外反しながら開き稜線が通る。脚台は中張らみで、裾部は強く折れ曲がる。刷毛目の後ナデ調整で仕上げる。坏部と脚台の接合部に篦削り痕が巡る。脚部内面は強い絞り痕が残る。胎土に砂粒を含むが焼成良好。淡茶褐色を呈す。口径18.2cm、裾口径11cm、器高11.9cmを測る。6039 〈堆積層〉 推定口径16.8cmを測る。刷毛目の後ナデ調整で仕上げている。赤褐色。

⑤ **製塩土器** 岡山県牛窓町師楽で注目された製塩土器と推定される土器が、3点出土した。6100〈Ⅰ群－9〉 口径 9.4cm、器高 9.5cmを測り、小形の深鉢形を呈する。底部は丸底状の平底。調整は粗く、指頭圧成形後、外面は縦方向の刷毛目、内面は横ナデで仕上げる。内面に篦のアタリが残る。胴部底部に黒変が見られる。暗褐色を呈する。胎土に1～5㎜の砂粒を含むが焼成は良好。6101〈Ⅲ群－5〉 台付鉢形を呈し現状で推定口径10.6cm、器高 8.2cmを測る小形厚手である。指頭調整で粗い。二次焼成の痕は確認できない。暗褐色を呈し堅い。6102

〈Ⅲ群－5〉　倒坏形の脚台であり、上部の鉢（坏）は欠失し底部のみが残る。裾口径 4.6cm を測る小形である。器壁は薄い。ナデ調整で仕上げ、器形は整っている。胎土に1～5mmの砂粒を含む。黒褐色を呈し堅い。

師楽式土器を出土する他の遺跡と同様、土師器を伴なう点、遺跡規模の小さい点は共通する。製塩土器説と祭器説があるが、6100は前者といえよう。松浦地方では初例である。

参考文献

(1) 藤田亮策「日本考古学辞典」日本考古学協会編　1978.6

(2) 八幡一郎他「世界考古学事典」平凡社　1979.2

# 第 Ⅵ 部

## ま　と　め

今回の調査対象面積は、約 8,300㎡に及んだ。「末盧国」の中心部と推測されている柏崎遺跡群で、住居址、墓域、貝塚、祭祀遺跡と多岐にわたり、時代的にも先土器時代から古墳時代までである。

大深田東区の堆積層（標高約 4.3m）から出土したナイフ形石器には興味がもたれる。上場地方には先土器時代の遺跡が数多く点在するが、下場では初例である。上場では弥生時代になると遺跡の数が激減することから、上場のムラ集団は稲作伝来とともに沖積地へ移住したと考えられてきたが、この「柏崎ムラ」は上場の部族と関連をもつのか否か、独立している場合その部族はどこに存在するのか今後の解明に期したい。

田島遺跡の溝状遺構Ⅳ層から検出された木製品の平鍬と斧柄にも注目される。夜臼、板付Ⅰ式土器と共伴したこれらの木製品の加工痕は金属器によることが推定されるが、弥生の当初から太形蛤刃石斧、金属器のともにこれらの技術が「末盧」の地にも伝来したことが証明されよう。

筒形器台は唐津地方で三例目である。前例の石蔵貝塚周辺と萬鰹遺跡の場合は、他の多くの事例と同じように甕棺墓に伴なうものと考えられるが、今回の例は甕、壺、器台、石製品とともに棄却されたと推定される。

大深田遺跡からは14ケ所の土器溜が検出されたが、７号と８号、１号と８号からは同一個体の接合資料が出土している。一つ一つが連続して使用されたというよりいくつかの竪穴が同時期に使用されたといえよう。また、土器溜群のそばに、土器片をほとんど持たない土器溜の竪穴と同規模のものが並んでいるが、その竪穴の用途が注目される。

田島Ｋ６から出土した『日光鏡』、Ｄ１の『鉄製刀子』、大深田東区の『銅鉾鋳型』は、中期後半から後期にかけての大陸文化との交流、金属器文化の繁栄を裏付ける資料である。

出土遺物の中で、石製品の石質同定、木製品の材質同定結果については、次回の報告書にまわしたい。

尚、一年中調査に追われていて、十分なる遺物整理、遺物実測そしてまとめるにあたっての資料蒐集や考察ができなかったことをお詫びしたい。

# あ　と　が　き

1．この報告書は農業基盤整備事業に係る発掘調査記録である。

2．本報告書の作成担当は次の通りである。

遺物実測　堀川義英　田島龍太　馬場悦子　川頭久美

トレース　田島龍太　高山久美子　川頭久美　白津トモエ　隈本鎌子　渡辺幸子　堀川義英

写　　真　堀川義英

執筆・編集　堀川義英が行ない、田島龍太が補助した。

3．日光鏡の銘文の判読は、中国歴史博物館の史樹青先生にお願いした。遺物の同定は、貝類を長崎大学教育学部地学教室の鎌田泰彦教授と、佐賀県理科教育センターの田口満研究員に、獣骨・魚骨類を鹿児島大学理学部地学教室の大塚裕之教授にお願いした。厚く感謝の意を表したい。

4．出土遺物の整理は、堀川、田島、白津、隈本、渡辺が行ない、県文化課唐津分室に保管している。

5．山口一秋、前田藤三郎、入船勇、前田貞子、藤井昌子、唐津東高郷土研究部の協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

（昭和55年２月29日　堀川義英記）

# 図版Ⅰ部

# 大深田遺跡

## 図版もくじ


図版1　柏崎遺跡群航空写真……124
図版2－1　遺跡の遠景(北より)……125
図版2－2　遺跡の遠景(南より)……125
図版3－1　大深田遺跡西区……126
図版3－2　1号竪穴(土器溜)……126
図版4　小形甕形土器　(1)……127
図版5　小形甕形土器　(2)……128
図版6－1　盛形土器……129
図版6－2　鉢形土器……129
図版7－1　高坏形土器……130
図版7－2　蓋形土器……130
図版8－1　器台形土器……131
図版8－2　筒形器台……131
図版9－1　土製品……132
図版9－2　支脚形土器・手捏土器・土師器……132
図版10－1　石鏃　(1)……133
図版10－2　石鏃　(2)……133
図版11－1　磨製鏃・石庖丁……134
図版11－2　掻器……134
図版12－1　石錐……135
図版12－2　石錘・砥石……135
図版13－1　石剣・石戈……136
図版13－2　銅鉾鋳型……136
図版14－1　石斧　(1)……137
図版14－2　石斧　(2)……137
図版15－1　凹石・磨石　(1)……138
図版15－2　凹石・磨石　(2)……138

図版1　柏崎遺跡群航空写真

図版２－１　遺跡の遠景(北より)　1．大深田遺跡　2．宇木田遺跡　3．きこがしら遺跡

図版２－２　遺跡の遠景(南より)　1．土井崎遺跡　2．田島裏垣遺跡　3．田島Ｍ２遺構　4．田島住居址　5．大深田遺跡　6．石蔵貝塚

図版３－１　大深田遺跡西区

図版３－２　１号竪穴(土器溜)

図版 4　　小形甕形土器 (1)

1001

1006

1003

1005

1004

1007

図版 5　　小形甕形土器 (2)

1013

1010

1011

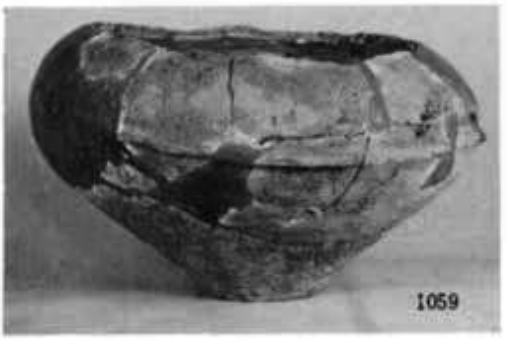
1012

1021

1020

図版 6 — 1　壺形土器

1053


1059

1063

図版 6 — 2　鉢形土器

1070

1072

1075

1077

1076

1085

図版７－１　高坏形土器

1091

1098

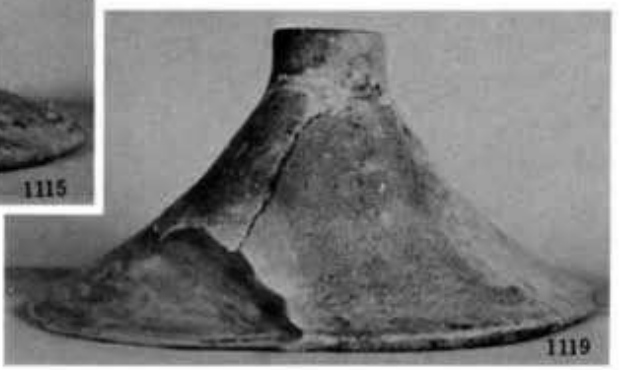
1090

図版７－２　蓋形土器

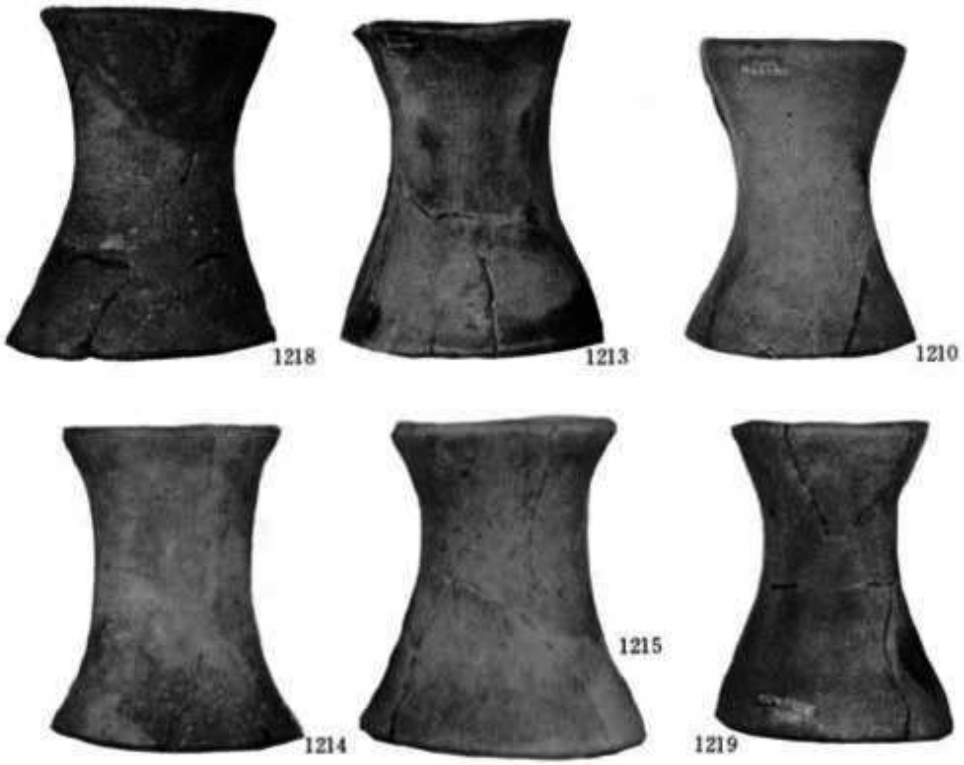
1110

1116

1115

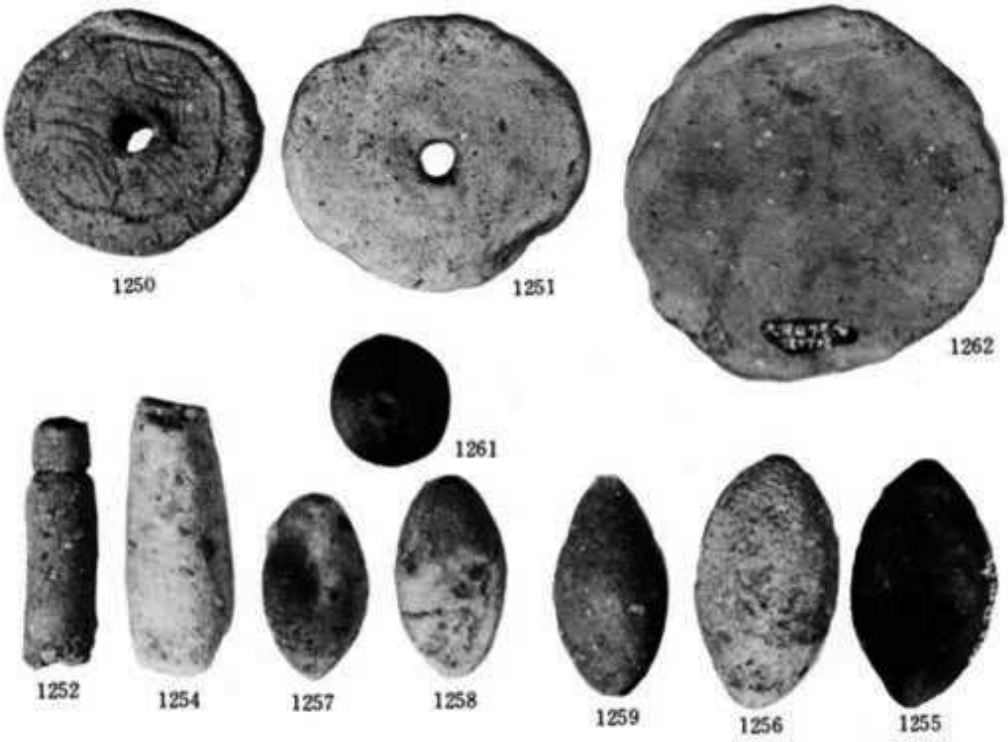

1119

図版 8 — 1　器台形土器

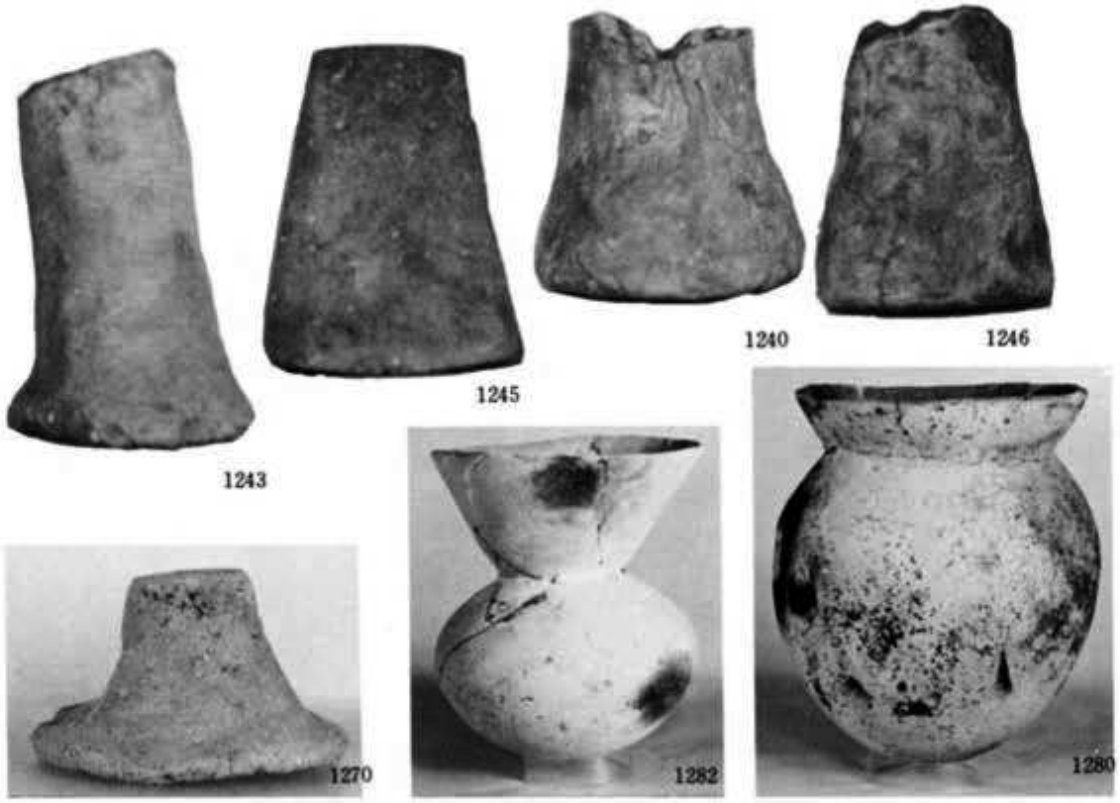



図版 8 — 2　筒形器台

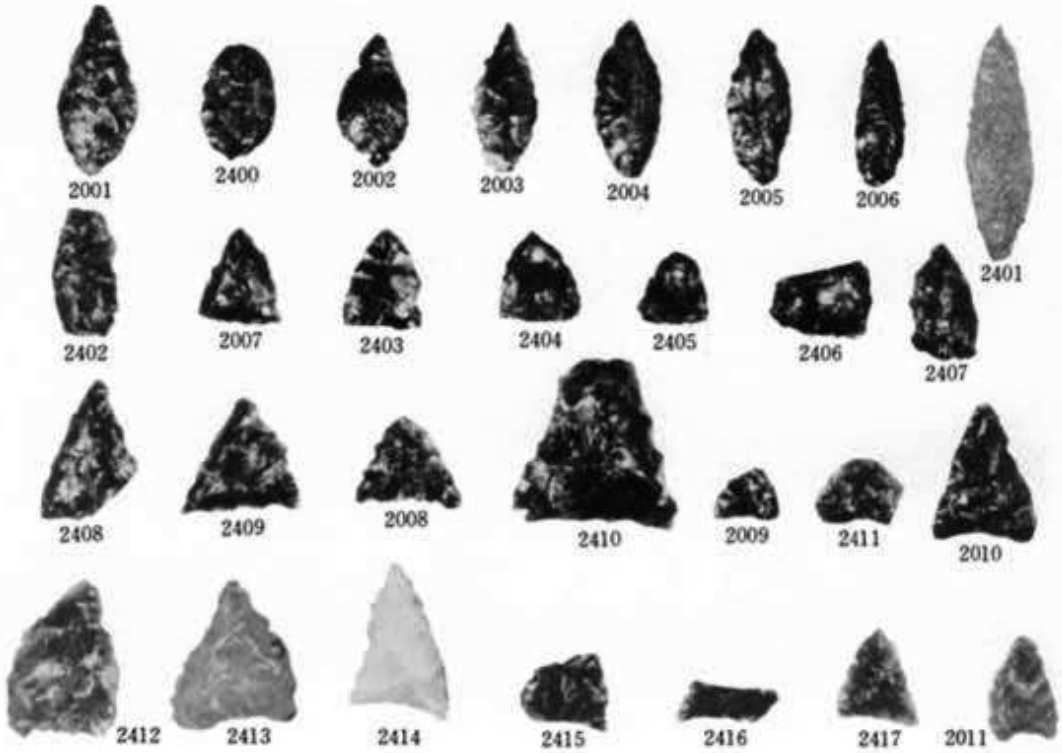
図版 9－1　土製品



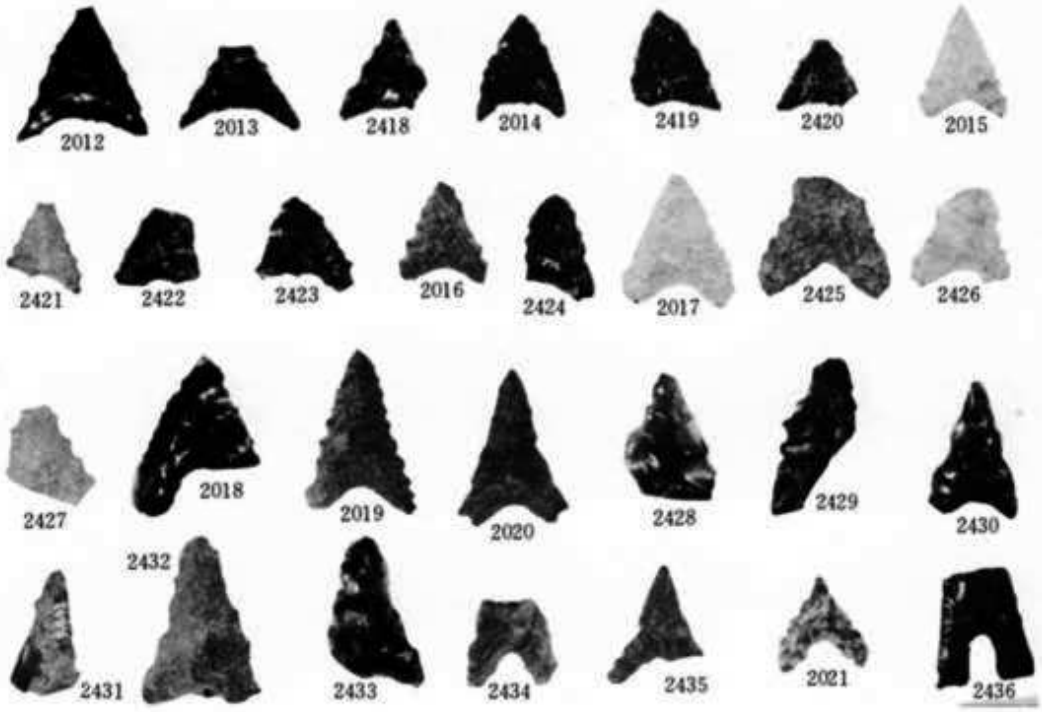

図版 9－2　支脚形土器・手捏土器・土師器



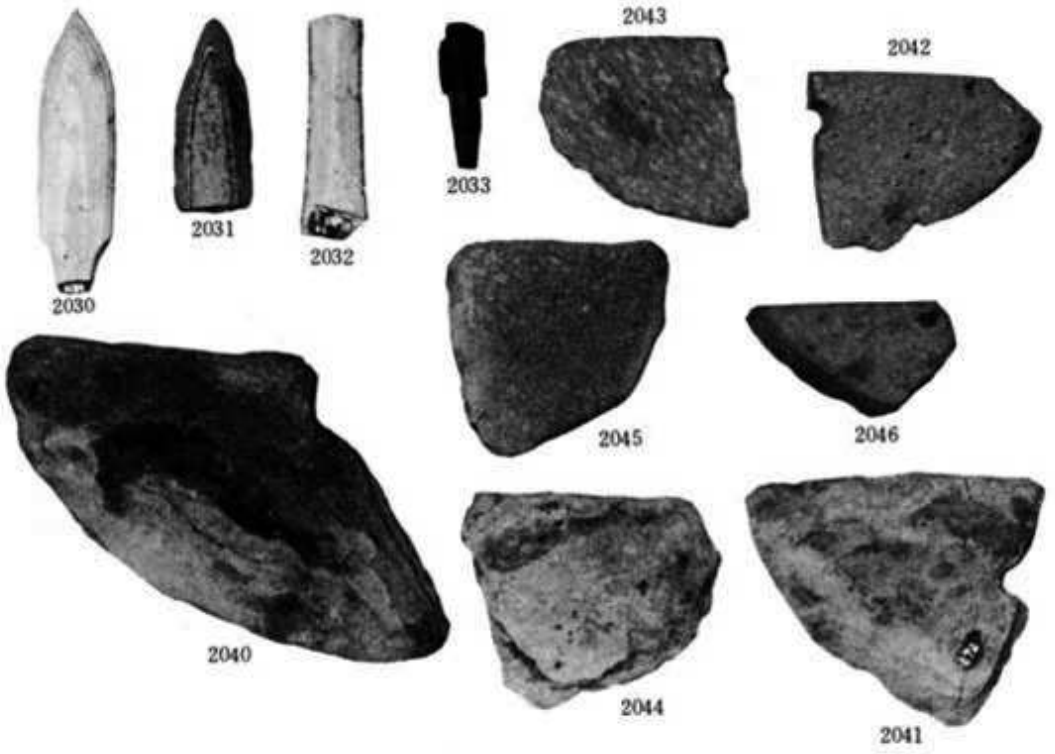
図版10— 1　石鏃 (1)



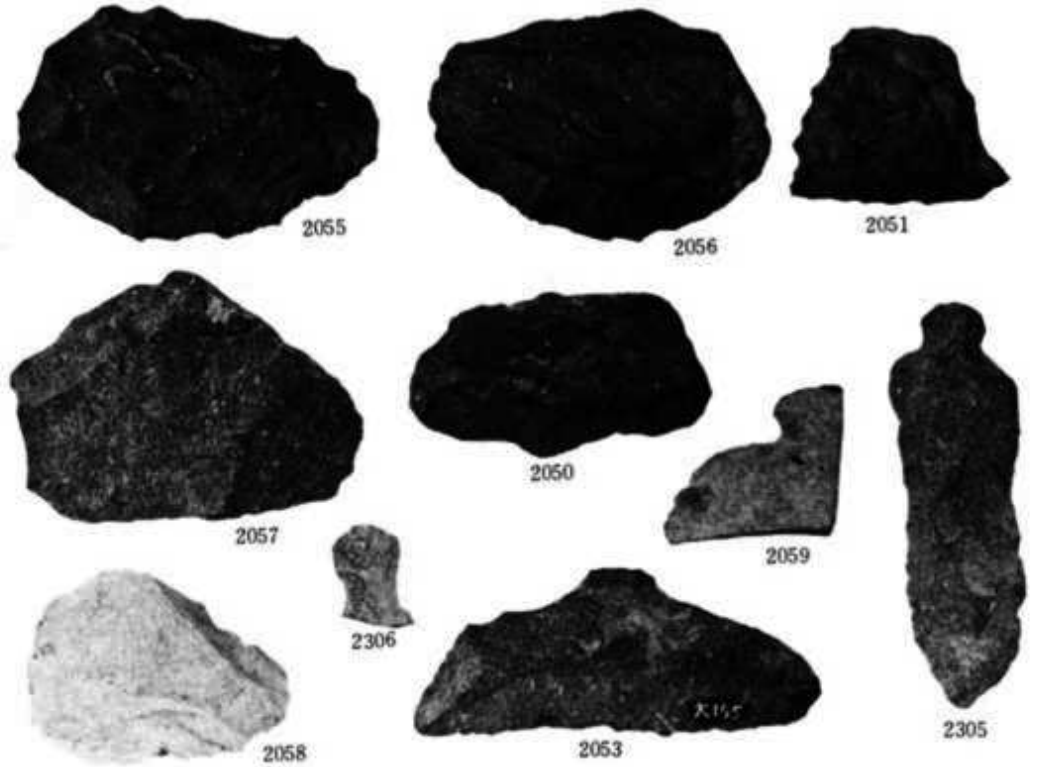

図版10— 2　石鏃 (2)



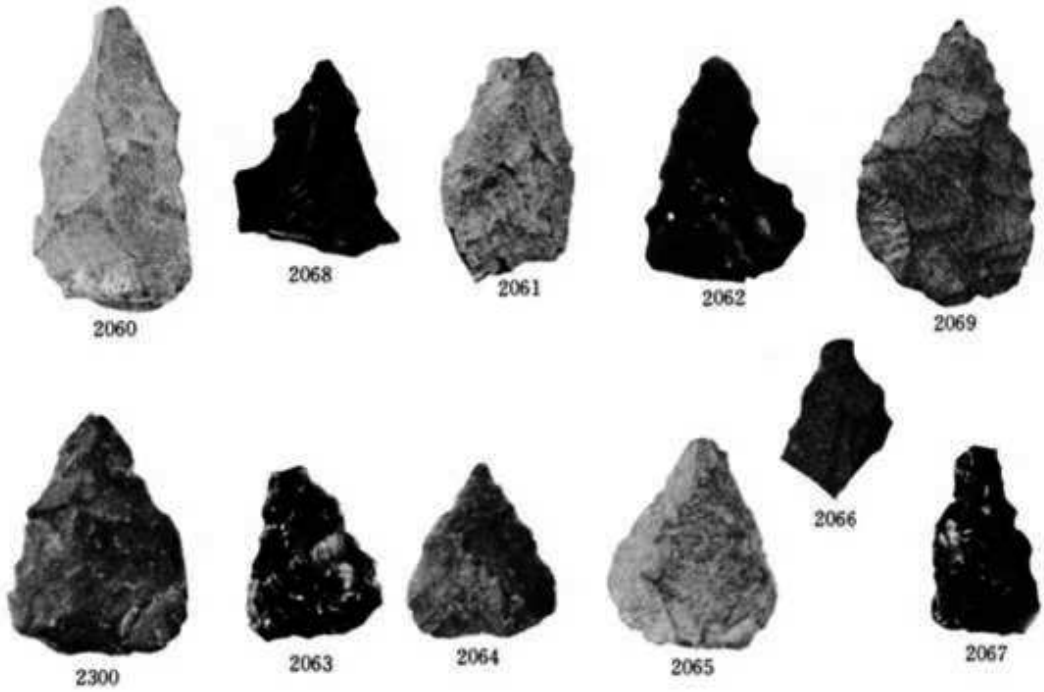
図版11—1　磨製鏃・石庖丁



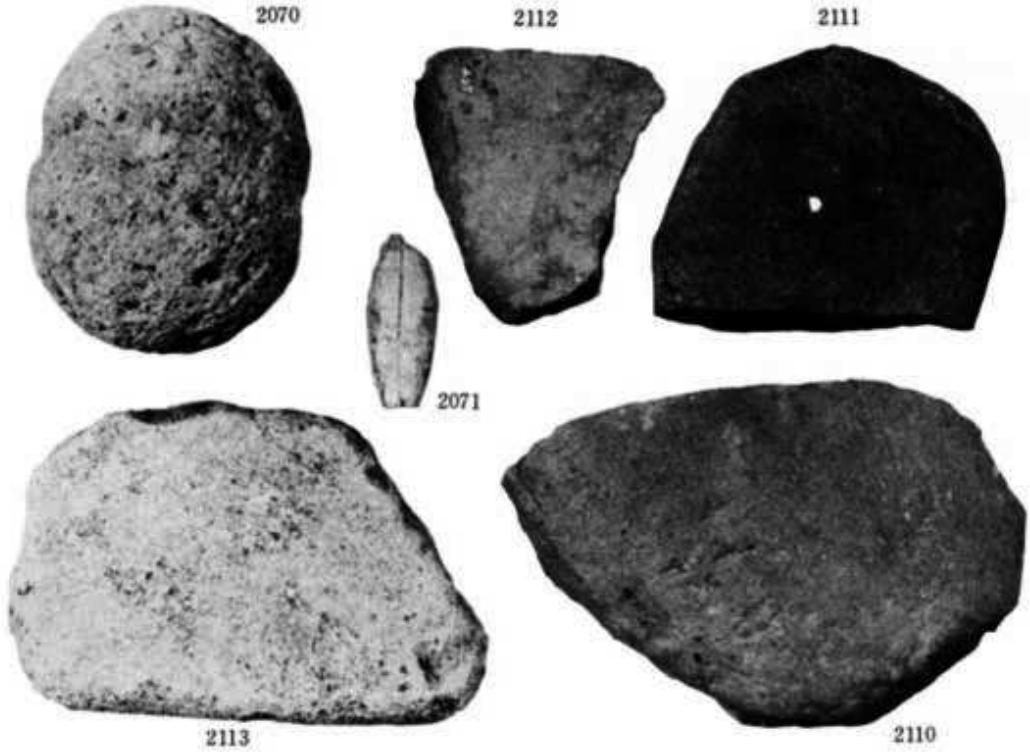

図版11—2　掻器



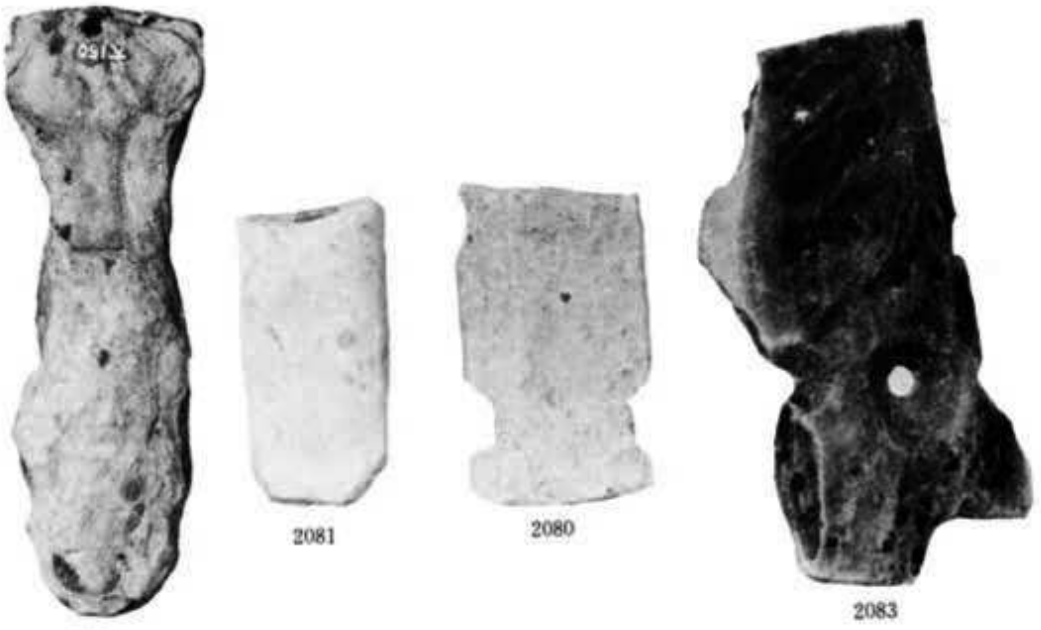
図版12—1　石鏃




図版12—2　石錘・砥石



図版13－1　石剣・石戈

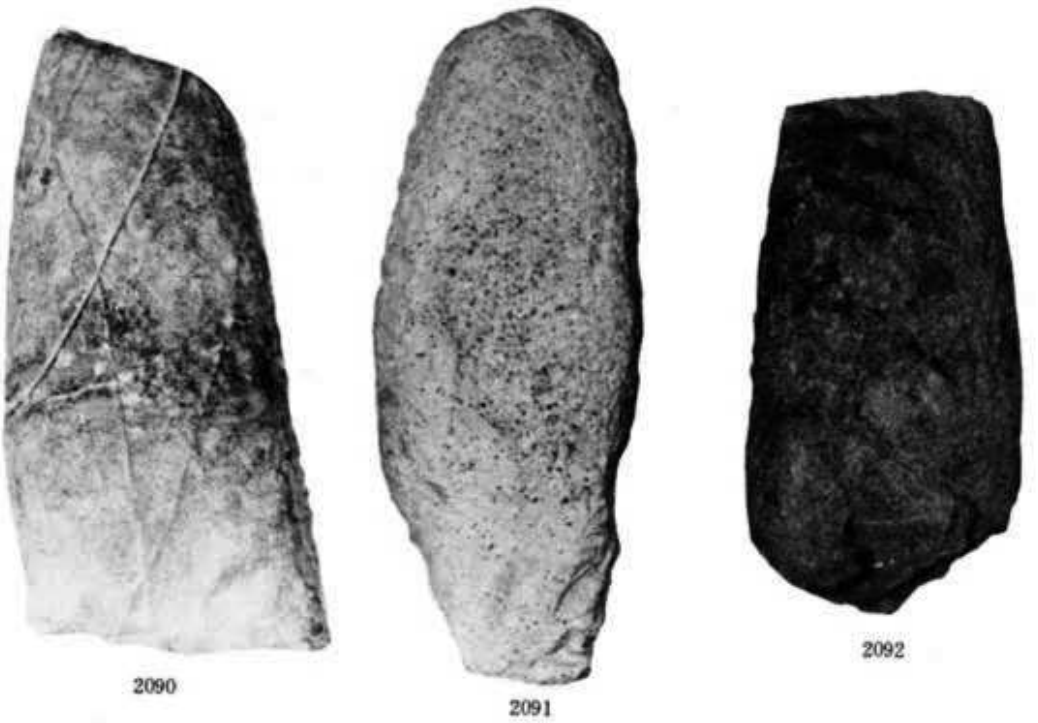


2082　2081　2080　2083

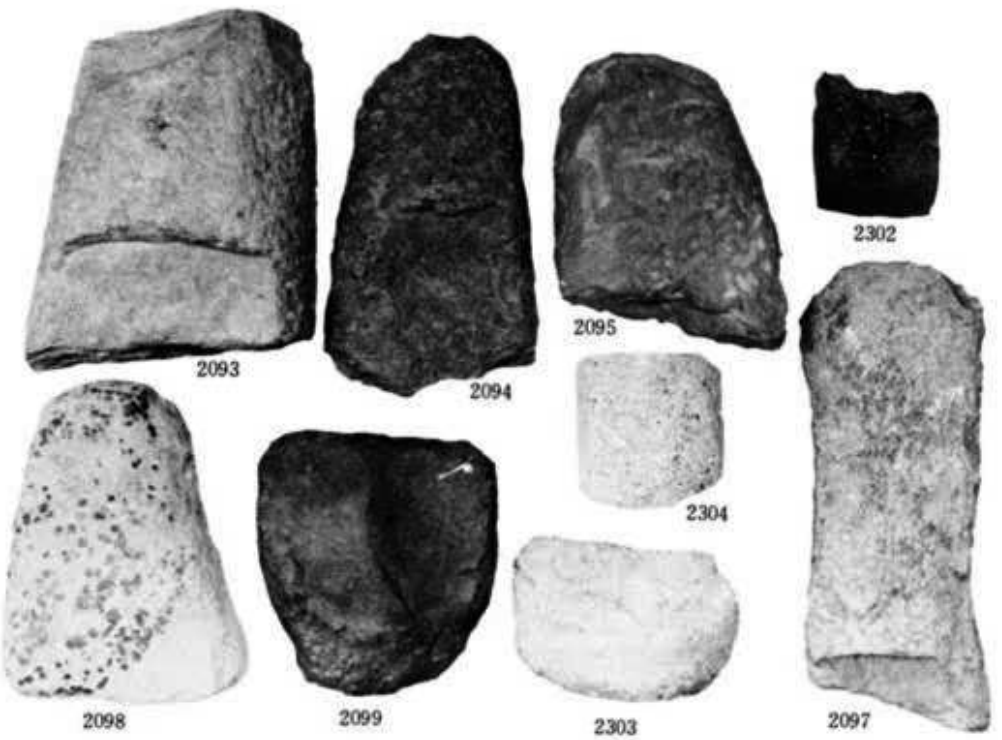
図版13－2　銅鉾鋳型

2130

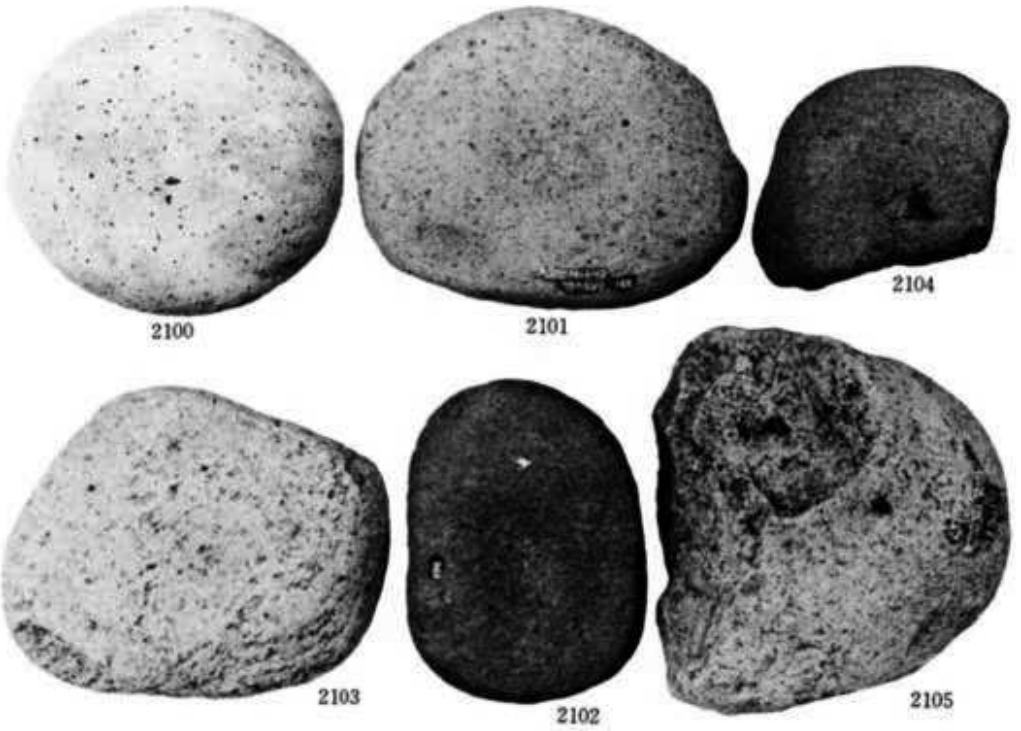
図版14－1　石斧（1）



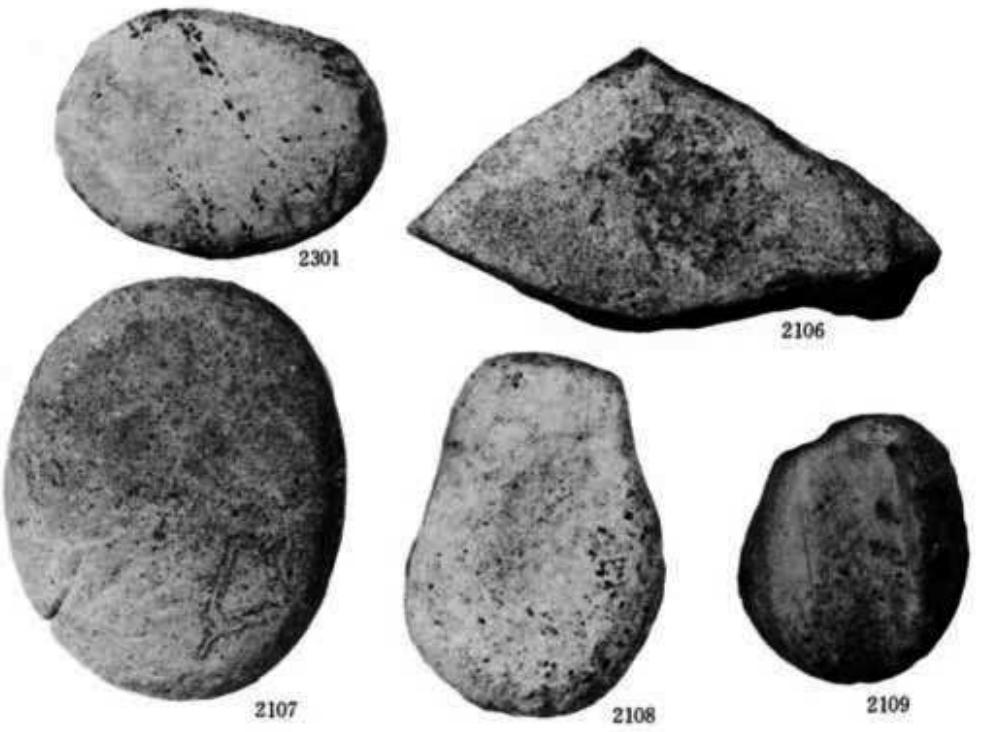

図版14－2　石斧（2）



図版15—1　凹石・磨石 (1)




図版15—2　凹石・磨石 (2)



# 図版Ⅱ部

# 田　島　遺　跡

## 図　版　も　く　じ

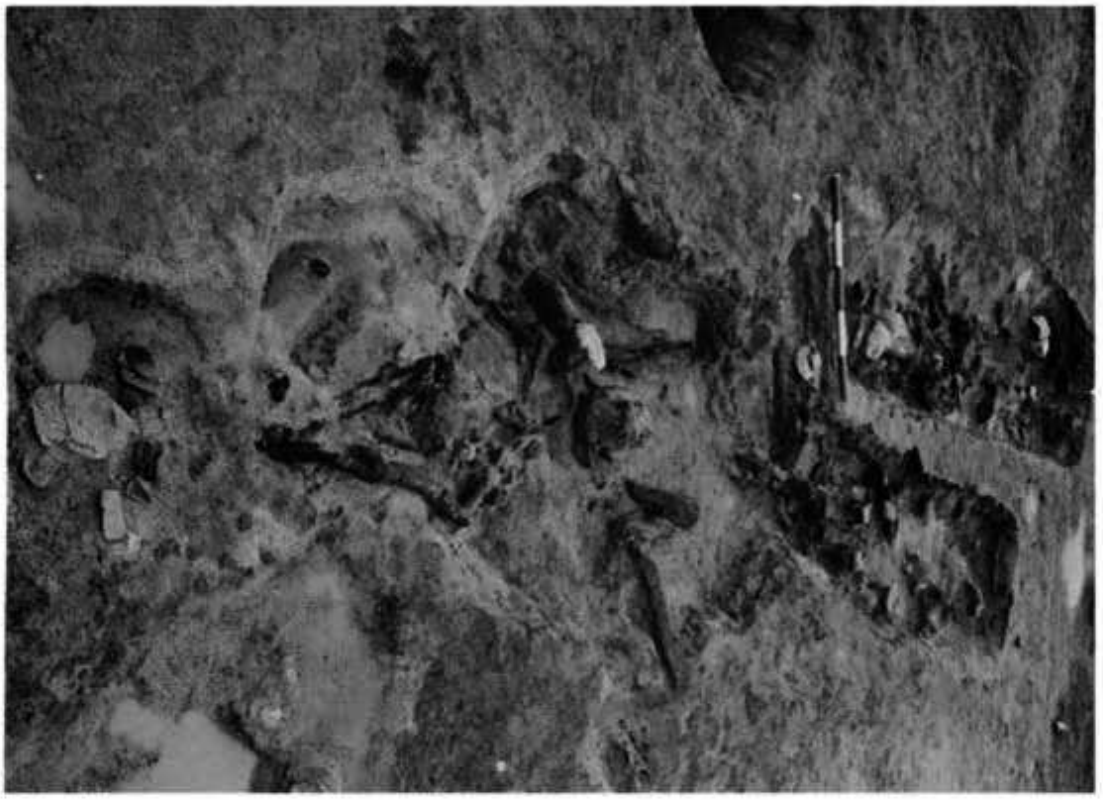

図版１－１　田島遺跡遠景(南より)……140
図版１－２　住居址・袋状竪穴・ピット群……140
図版２－１　甕棺墓群……141
図版２－２　溝状遺構……141
図版３－１　第１号土壙墓……142
図版３－２　２号袋状竪穴……142
図版４－１　日光鏡出土状況……143
図版４－２　日光鏡・装飾品……143
図版５－１　Ｍ２－Ⅳ層……144
図版５－２　石斧柄・弓木状木製品出土状況……144
図版６　木製品　(1)……145
図版７　木製品　(2)……146
図版８－１　壺形土器……147
図版８－２　甕棺……147
図版９－１　石鏃……148
図版９－２　掻器・石錐・石鏃・石剣……148
図版10－１　石斧……149
図版10－２　石庖丁……149
図版11－１　砥石　(1)……150
図版11－２　砥石　(2)……150
図版12－１　凹石・磨石……151
図版12－２　石皿……151
図版13－１　投弾礫……152
図版13－２　５号土壙壺形土器出土状況……152

図版１－１　田島遺跡遠景(南より)

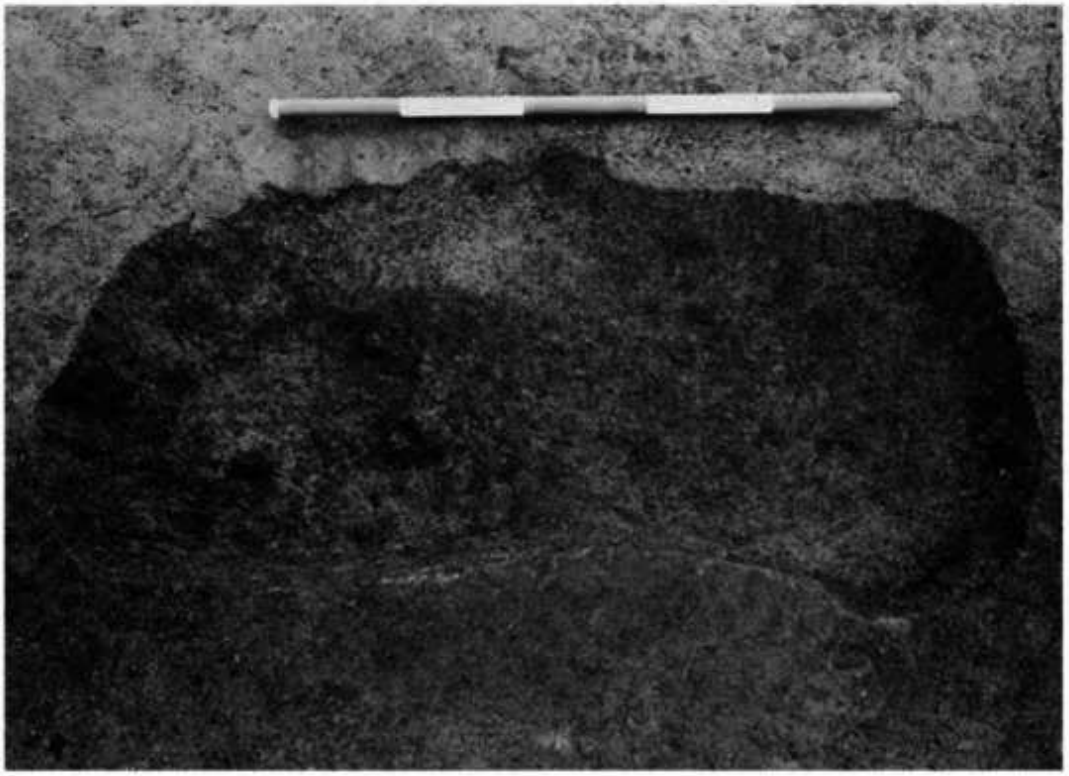
図版１－２　住居址・袋状竪穴・ピット群

図版２－１　甕棺墓群

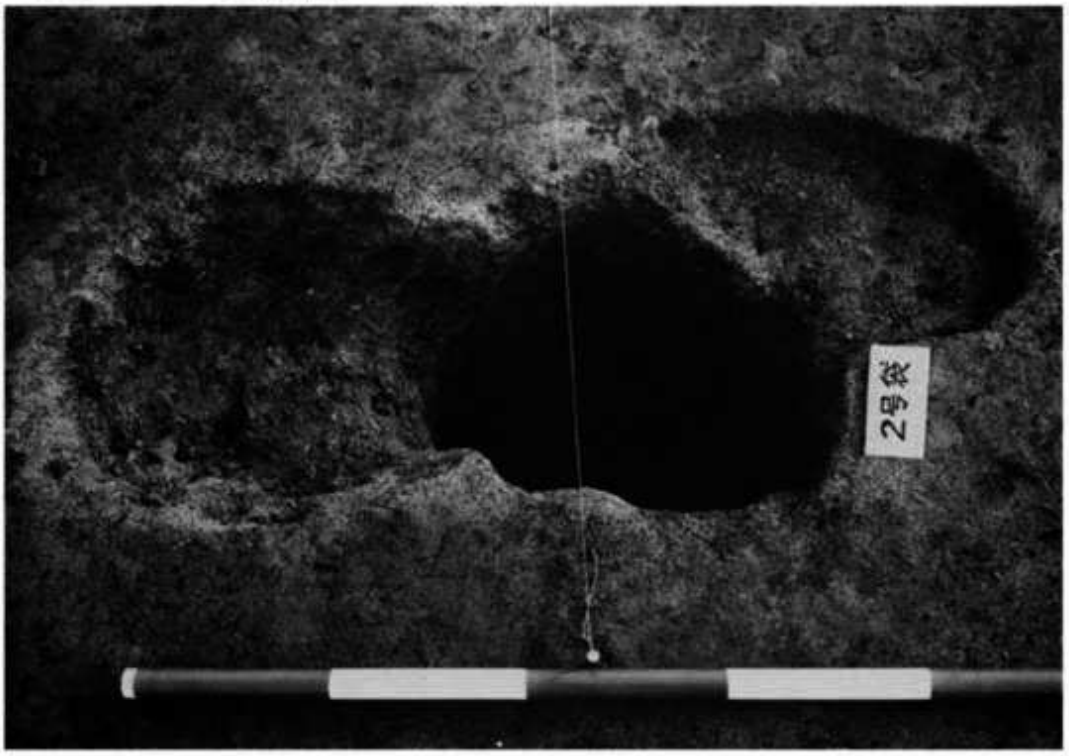
図版２－２　溝状遺構



図版３－１　第１号土壙墓



図版３－２　２号袋状竪穴



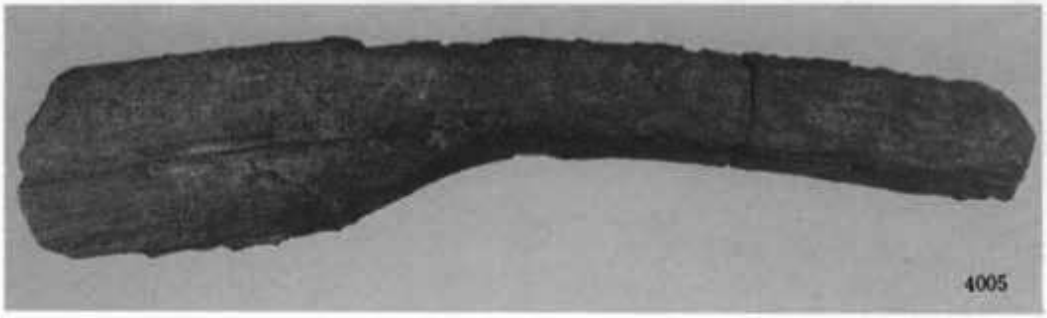
図版４－１　日光鏡出土状況

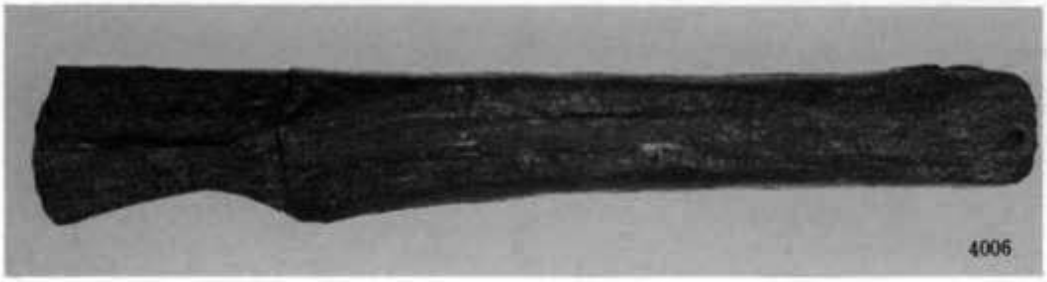
図版４－２　日光鏡・装飾品

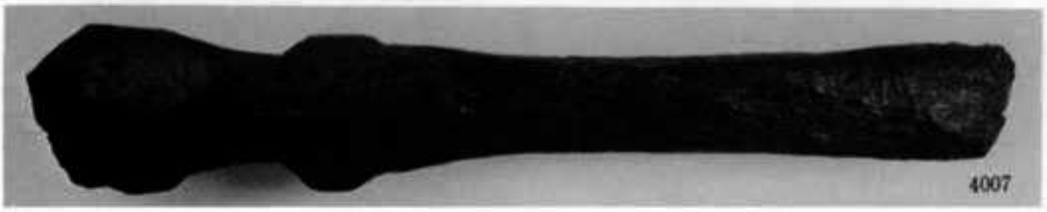
図版５－１　Ｍ２－Ⅳ層

図版５－２　石斧柄・弓木状木製品出土状況

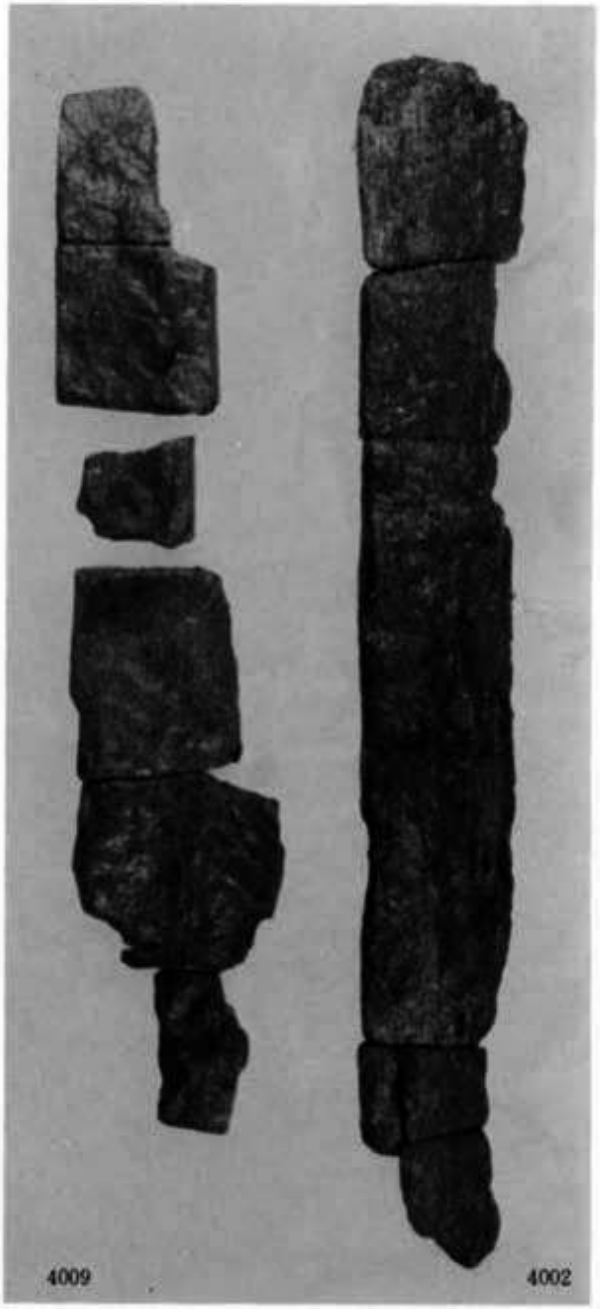
図版 6　　木製品 (1)



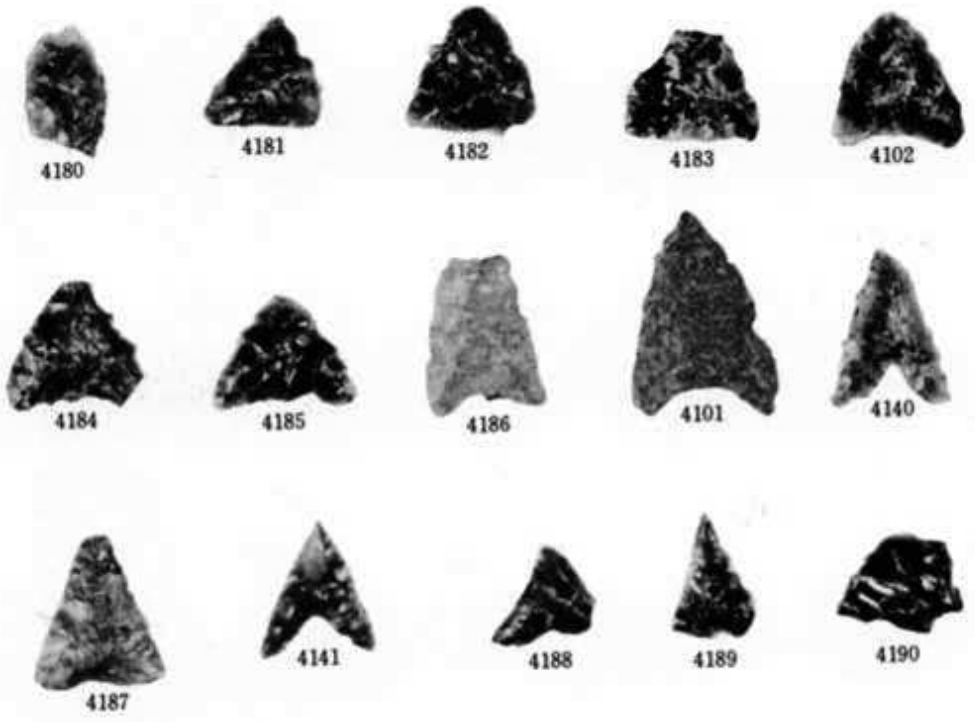
図版 7　　木製品 (2)



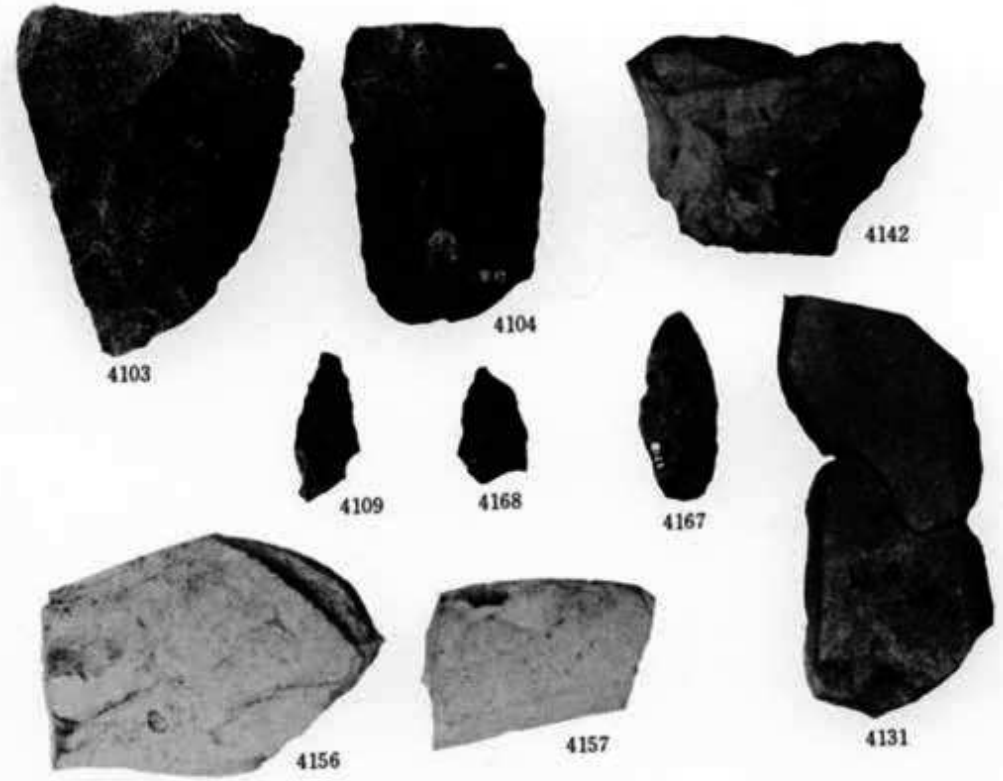
図版８－１　壺形土器

図版８－２　甕棺

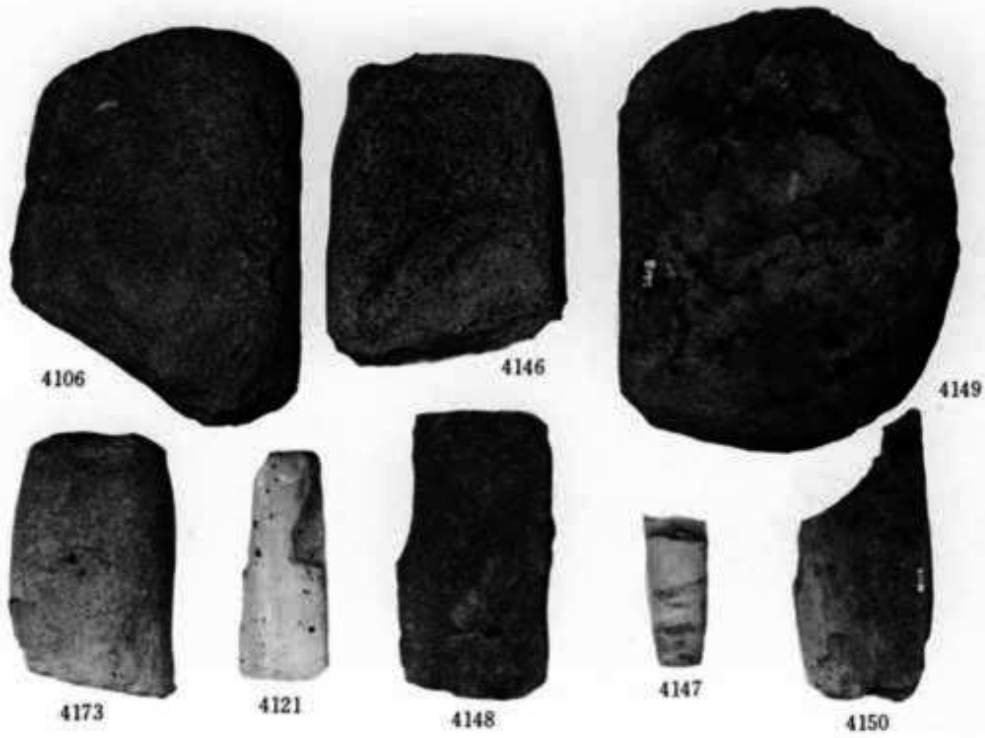
図版 9－1　石鏃



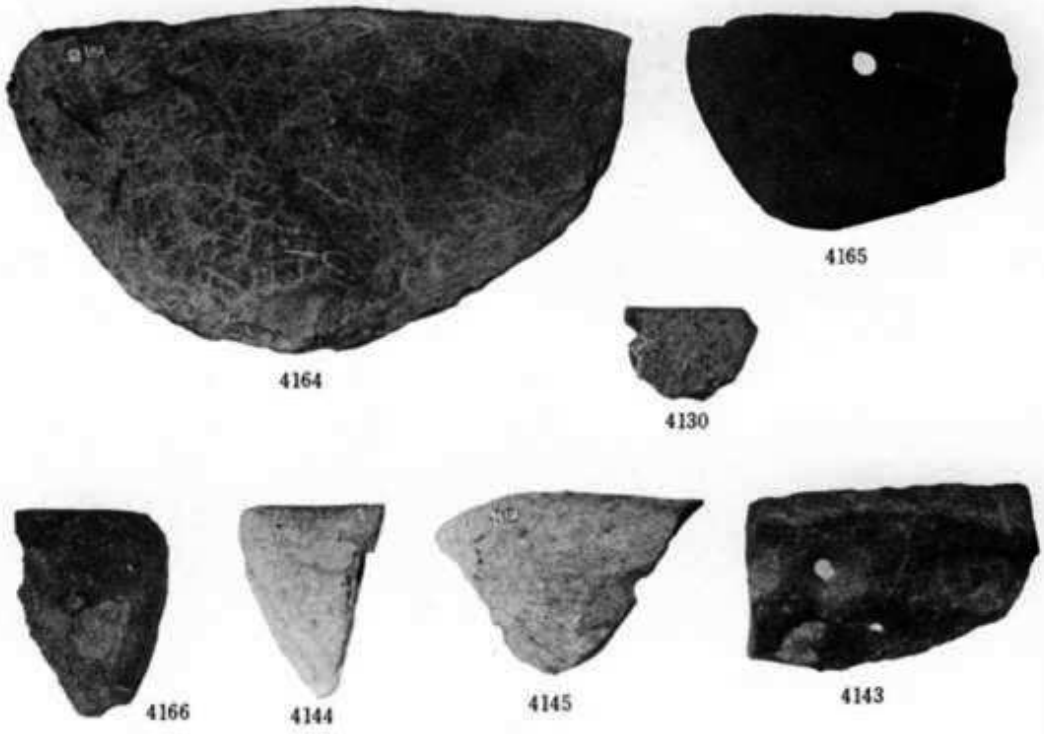

図版 9－2　掻器・石錐・石鏃・石剣



図版10—1　石斧




図版10—2　石庖丁



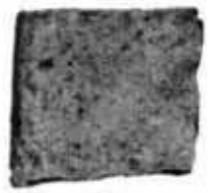
図版11－1　砥石 (1)

4108

4107

4153

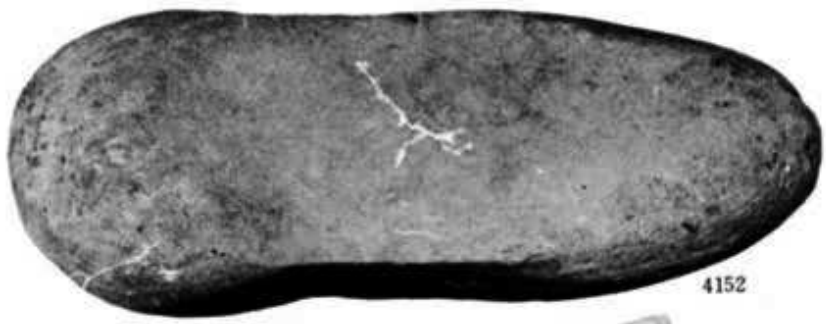
4151



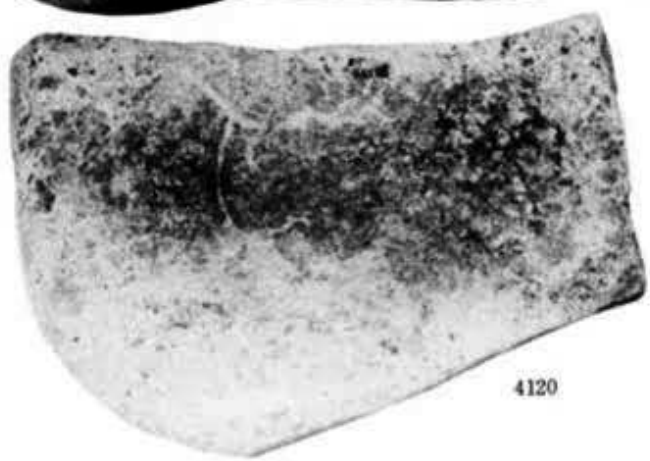
4154

4155

図版11－2　砥石 (2)

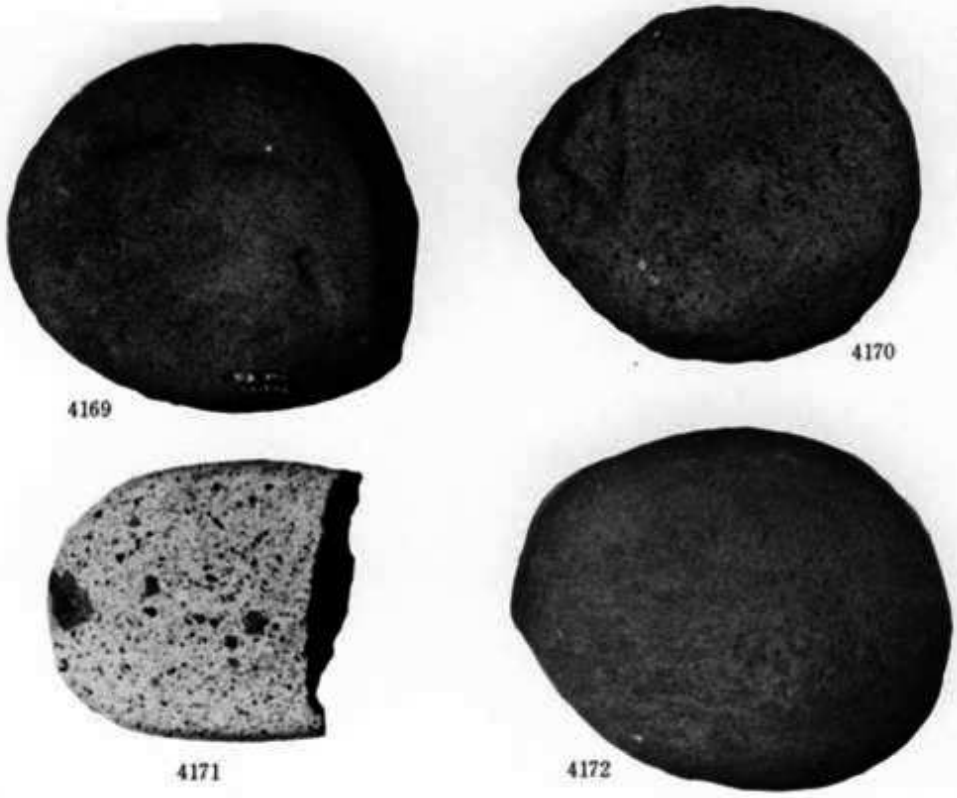


4152

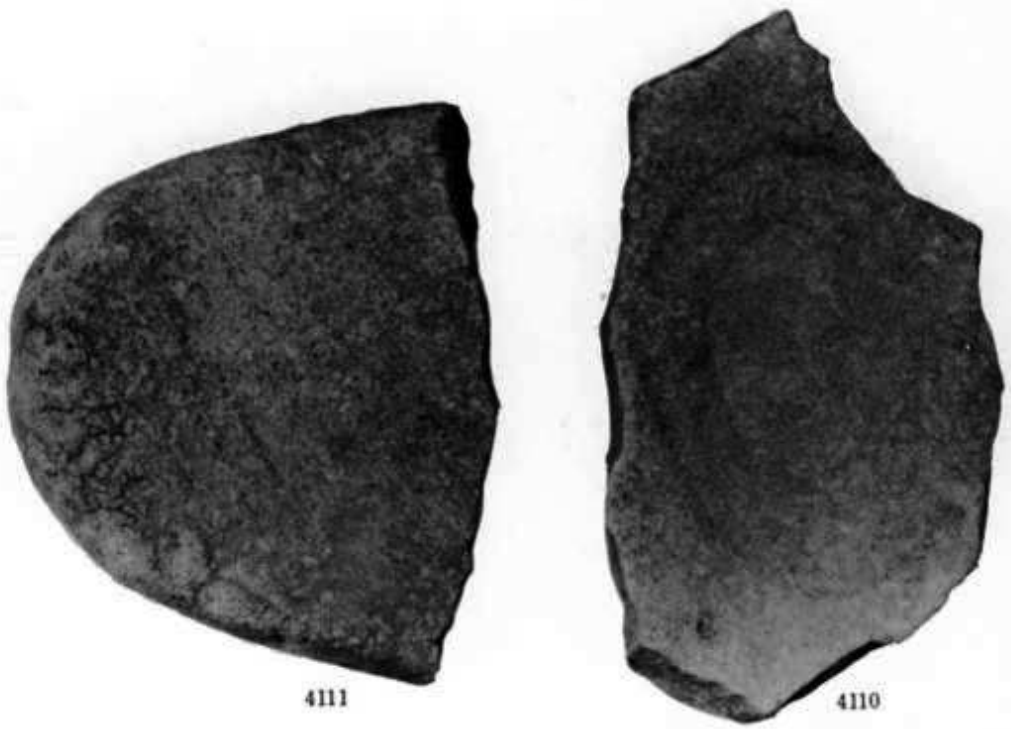


4120

図版12—1　凹石・磨石




図版12—2　石皿



図版13—1　投弾礫

図版13—2　5号土壙壺形土器出土状況

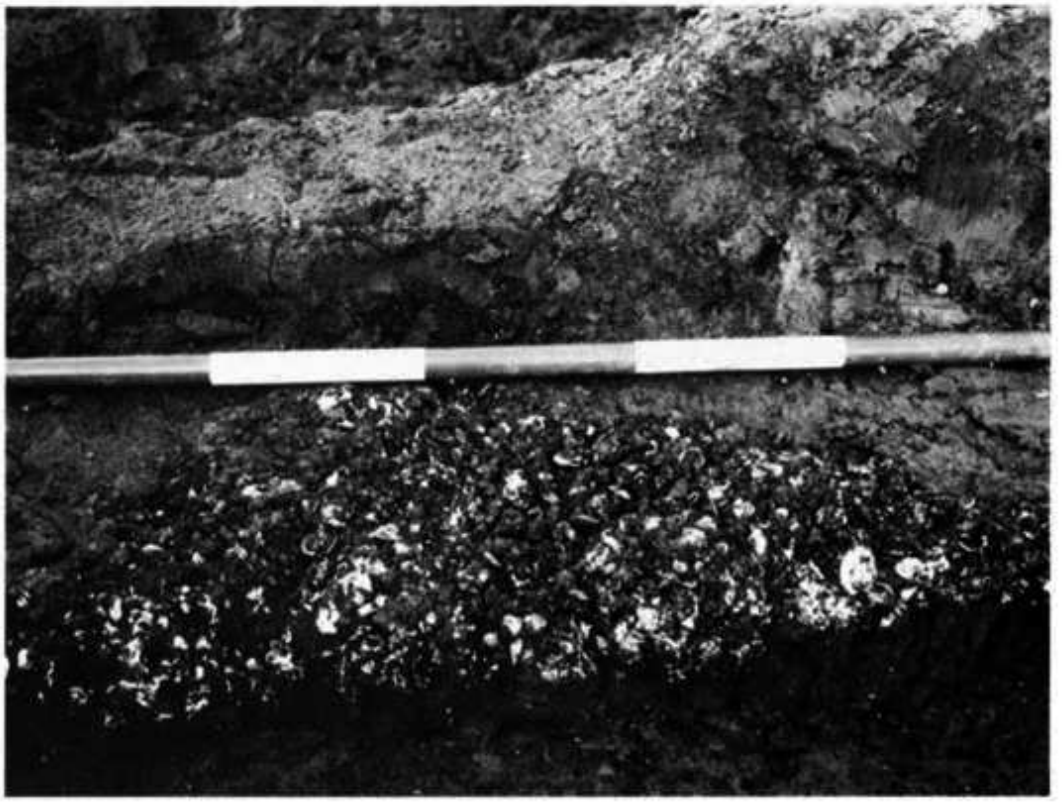
# 図版Ⅲ部

# 石蔵貝塚・土井崎遺跡

## 図 版 も く じ

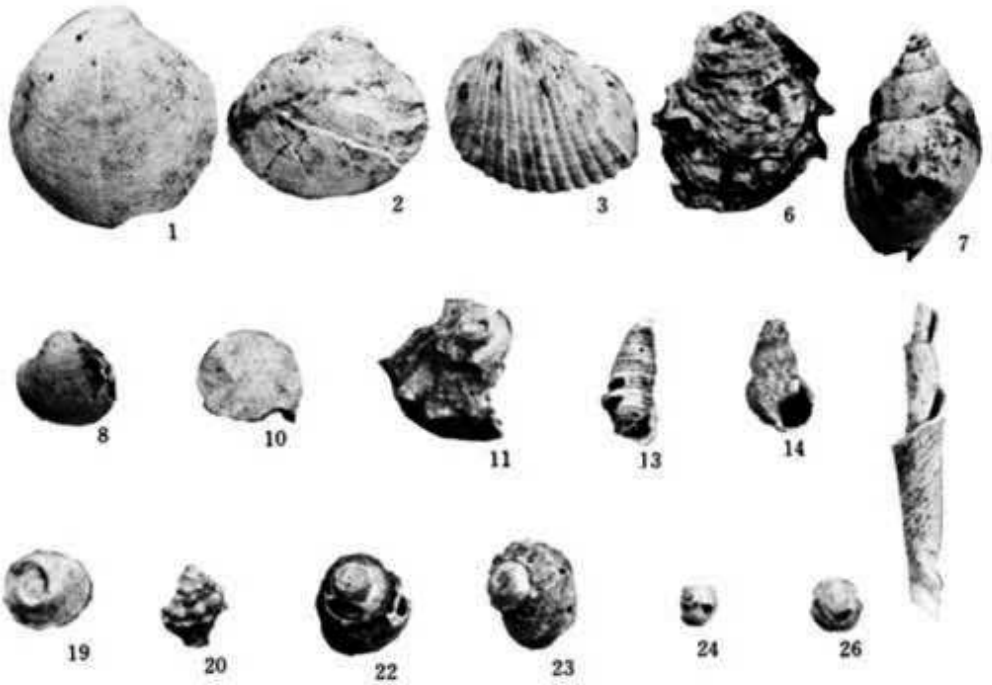

図版1－1　石蔵貝塚貝層断面……154
図版1－2　石蔵貝塚出土石器……154
図版2－1　石蔵貝塚出土貝類……155
図版2－2　石蔵貝塚出土獣骨・魚骨類……155
図版3　土師器……156

図版１－１　石蔵貝塚貝層断面



図版１－２　石蔵貝塚出土石器

図版２－１　石蔵貝塚出土貝類




図版２－２　石蔵貝塚出土獣骨・魚骨類

図版 3　　土師器

6020

6021

6022

6032

6030

6035

6031

6036

6038

6100

6101

6102

佐賀県文化財調査報告書第53集

# 柏崎遺跡群

発行　佐賀県教育委員会
昭和55年3月31日

編集　佐賀県教育庁文化課

印刷　合資会社 音成印刷所